表１

東日本大震災　津波災害と闘った人々の記録

災害エスノグラフィーシリーズ　32

背幅　12mm

災害エスノグラフィーシリーズ　32　東日本大震災　津波災害と闘った人々の記録

表４

災害エスノグラフィーシリーズ　32

東日本大震災　津波災害と闘った人々の記録

目次

釜石市消防団の活動……4
宮古市田老地区　津波犠牲者のご家族……40
用語解説……243

釜石市消防団の活動

はじめに

重川希志依

東日本大震災時に二五四名（うち公務中一九八名）もの尊い生命が犠牲となってしまった消防団は、日頃から地域住民の生命・財産を守るため多様な活動を担っていました。消防の常備化が進んだ現在、消防団は平常時には常備消防の補完的な役割を果たす場合が多と考えられています。しかし東日本大震災のようにきわめて大規模な災害が起こったときには、常備消防を超える力を発揮し、住民の生命と財産を守り抜いた活動事例が多数確認されています。

本書では、被災地のなかで津波による被害が甚大であり、その後、市内各所で複数の火災が発生した岩手県釜石市消防団のかたたちの活動を紹介させていただきます。釜石市消防団は、消防団本部ならびに第一分団～第八分団で構成されており、このうち沿岸部に位置する第一、三、六、八分団が津波により大きな被害を受け、八名の団員が殉職されました（釜石市消防団の分団位置図→P6）。

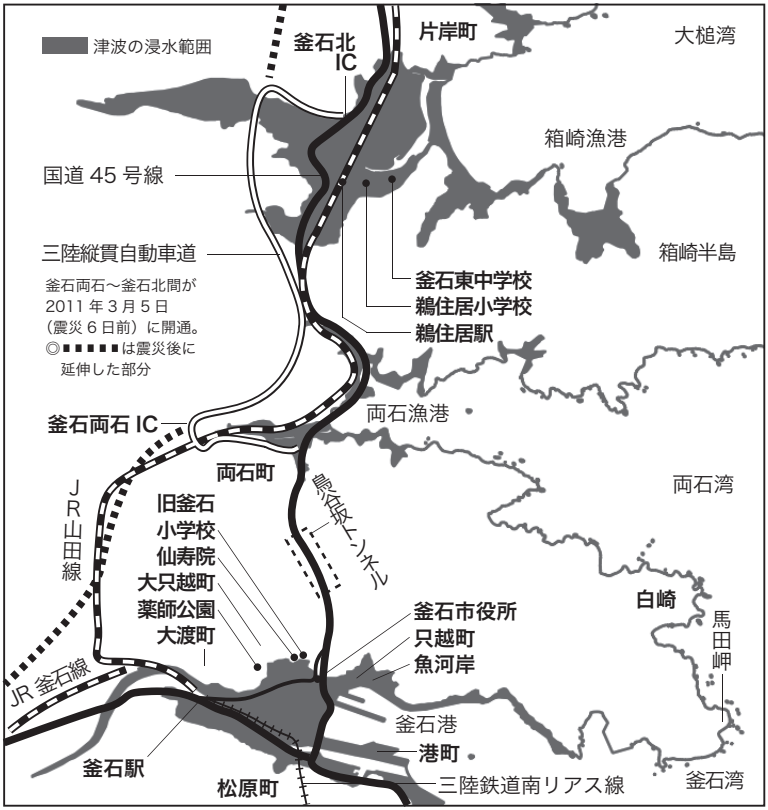
震災当時の消防団の活動状況を記録した報告書等は多数刊行されていますが、これらの報告書にはひとりひと

りの団員が各々の立場で感じていた悩みや葛藤など、個人の思いはほとんど記録されていません。そこで私たちは、公的な記録では残されることのなかった声を集めるために、釜石市消防団幹部を対象にエスノグラフィー調査を行いました。

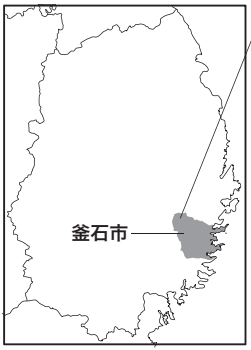
釜石市消防団は、団員のとっさの判断でいち早く消防団のポンプ車を高台に避難させていたことから、消防車両が流されてしまった常備消防に代わり消火活動を成功させていました。また、津波からの避難誘導や消火活動のように、消防団としての本来の任務で大きな役割を果たしていたと同時に、避難所の運営や被災者の困りごと解決などきわめて多様な役割を担い、被災者の生活を支えていたことも明らかとなりました。同時に、自分の命を心配する家族の存在とのはざまで、葛藤を抱え続けている団員の声も紹介させていただきます。

※注　**常備消防と消防団**　常備消防とは、市町村に設置された消防本部と消防署を指し、専任の職員が勤務している。消防団は市町村の非常備の消防機関で、消防団員は本業を持っており平常時にはその仕事に従事している。しかしみずからの地域はみずから守るという精神にもとづき、非常勤特別職の地方公務員として、災害発生時には消防防災活動を行っている。東日本大震災が起こった平成二三年当時、全国の消防職員数は約一六万人、消防団員数は約八八万人であった。このうち、消防職員二七名、消防団員二五四名の尊い命が震災により奪われた。

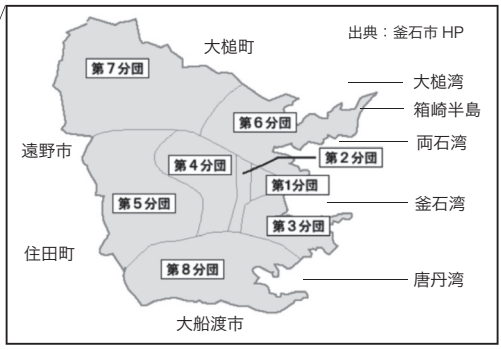
釜石市沿岸地区概略地図（2011 年当時）



岩手県全図



釜石市消防団の分団位置図



釜石市消防団Aさん　震災当時、第一分団本部長
釜石市消防団Bさん　震災当時、第一分団第三部副部長

■震災当時の状況

Aさん　三・一一の当時の津波がきたときの部長が私だったんです。ここにいるBが副部長、私が部長っていうことで、当時この二名で避難誘導する形になったんですが、三・一一は平日でしたので、当然のごとく皆勤務、仕事してたわけです。私もたまたま地震がくる前に、現場から釜石方面に、自分の事務所のほうに向かって走ってたんです。両石（りょういし）町っていうとこを通過して、釜石の鳥谷坂（とやさか）トンネルっていう長いトンネルがあるんですが、その中に入って間もなく地震に遭遇したんです。当時、地震だっていうのは運転してる最中だったから全然わかんなかった。いやにトンネルの壁側に車が寄ってくような感じで走行してたんですが、まったくそのときは地震だってわかんなくって。自分が身体の異常でなんか車を曲げてるのかなぁっていうような錯覚に陥っていたんですが、フッとまた走り出したら路面が波打ってるような感じに見えた。「あっ、これ地震なんだ」ってのをそこでわかって、かなり路面が動いてて、「これはまずいな」ということでトンネルを通過して抜けて市内に入った。

「これはとんでもねぇ地震だ。絶対津波はくるな」という判断で、いったん事務所に車を停めて、事務所から自転車で消防団の屯所まで駆けつけた。やっぱり一名くらい団員がきてたので、すぐ（市街地区の）港町っていう方面に向かって。（震災前にも防波堤水門の）「門扉確認・閉鎖確認しろ」っていう訓練をもともとやってたので、「まずそれをやろう」と消防ポンプ車に乗ってサイレンを鳴らして行ったんです。そうしたらやっぱり閉鎖になってる門扉もあるけども、公共埠頭っていう大きな埠頭があるんですが、そこのいちばん長大な門扉があと五〇セン

チで動かなくなってるところに遭遇した。本来は委託してる業者が閉めるっていうことになってるんだけど、あともう五〇センチくらいのところで止まってるもんだから、「もういい。どうもなんねんだから、とにかくすぐ逃げろ」と。うちらもそこにずっといるわけにいかないので、そういったことをお願いしてそこを去っていったんです。

Bさん　私、たまたまその日は仕事休みで、うちにいました。水門閉鎖確認に行かなきゃと思って屯所に行こうとしたら、女房に手引っ張られて「いま行ったら死ぬ」と。女房も私も「すごい津波がくるな」と、何メーターかわかんないけど、もう直感しました。あの地震はもう生まれて初めて、あんな揺れの地震。「いつまで続くんだろう」っていう長さの地震。私、高台に住んでましたので、そっから屯所まで行ったら、もう部長たちはポンプ（車）で出た後で。私、車にエンジンかけたまま、ポンプが帰ってくるのが早いか津波がくるのが早いか、屯所で待ってたんです。そしたら運よく（ポンプが）早くきたので、いっしょに乗って、あとは広報活動。

■避難をよびかけても反応が鈍かった

Aさん　市内の方に向かって、私どもの管轄っていうのは町方のいちばん繁華街のところなものですから、「とにかく避難させなきゃいけない」ということでグルグルサイレン鳴らしながら（避難を呼びかけて）。日中の町方はほとんどお年寄りばかりで、あとは小さな子どもとか。釜石の津波っていうのは、町方に過去五〇センチぐらい膝かぶるぐらいの津波しかきてなくて、そういった経験してるお年寄りが多いんです。で、避難誘導するものの、「また、そのくらいしかこないんだろう」って、たぶんそういう考えがあって、皆ふつうに歩いてるんです。

それでもわれわれは必死で、とにかくそこばっかりにいられないんで、綺麗な言葉で言っても避難しないと思って、「逃げろー、大津波くる。津波きたぞ」って大きな声を出したらば、「あっ、やっぱりこれは大変なことなんだな」って思った人は走って逃げるんです。とにかく避難させることが第一条件だった。まず、ポンプ車からお

りて避難させるってことが不可能だったので、もう時間でいけば一〇分ぐらいかな、ポンプ車でいろいろ広報していったところ、お年寄りがひとり、家の前で立ったまま動かないおばあちゃんがいた。足腰悪いおばあちゃんで、「これ、だめだ。とにかくポンプ車に乗せて高台に行かなきゃ、これ大変なことになる」ってことで、おばあちゃんをポンプ車に乗せて。近くの仙寿院っていうお寺がいちおう避難場所だったので、そのときB副部長も同席だったんで、最後におばあちゃんを乗せて上にあがった。

（お寺のほうに）あがって間もなくに、釜石の町の中の大きな倉庫がいきなり崩れたんです。「はっ」と思った瞬間にもう砂煙っていうか埃が舞い上がって、どんどん建物が倒壊していくのが見えたんです。「これは大変なことだ」っていうことでいたらば、もう一時もない間に「うわー」って津波がきたわけなんです。当然のごとく、さっき言ったように、われわれ管轄内の住民も助かった人たちはけっこういるんですが、われわれが避難誘導しても歩って避難してた人たちは、やっぱり避難場所にはほとんど見えなかったもんね。

Bさん　津波警報を知らせる放送は鳴ったんです。大津波警報っていうサイレンも鳴った。でも、「だいたい予想される津波の高さ三メートル」って、あんな安易な広報っていうのはやっぱりみずから犠牲にさせた理由でもあると思う。危機感を感じるような広報の仕方が必要じゃないか。行政の広報は限度があるから仕方ない。だけど、その地域地域でいる消防団の避難誘導の仕方は、もうちょっと危機感感じるような言い方で避難させたほうが、俺は気分でねぇかなと。

■消防団も逃げなきゃだめだ

Aさん　やっぱり日中の地震だったので、若い人たちが当然お仕事に出かけてるんで、町方にはほとんどお年寄り、子どもしかいないわけですよね。でも、まず、われわれが消防団として与えられた仕事は、やっぱりやんなきゃなんない。ポンプ車から「避難しなさいよ」って声がけしても、（急ぐことなく）歩いてる人たちを見てるから

不安なわけです。それでも声がけして、ひとりでもふたりでも助けなきゃならないっていう気持ちは私にはあったんだけど、Bがその当時副部長やってたんで、「いや部長、もう限界だ。われわれも逃げましょう」と。どうしてもということで、「じゃあ、そうするべ」っていうことで（高台に）あがって間もなく津波がきた。

もう避難させることしか考えてないので、「自分たちも助かんなきゃね」っていう判断は自分でできるような状況じゃなかったから。このBが「もうわれわれも逃げましょう」ということを言ってくれたので、「そうなんだ。俺も逃げなきゃねんだ」と。ほんとうに、だから私がこのB副部長の言葉を、「いや、だめだ。もう一回（避難誘導）だ」って突っぱねていたら、たぶんわれわれも流されたと思う。「消防団も逃げて助からなきゃだめだ」っていうのをうちのBが教えてくれたっていうのが俺の大きな財産っていうか、自分がいまここでこうやっていられるのもそのおかげだったのかなって、あらためてそう思った。

Bさん　これはたまたま運がよかっただけです。津波の到達時間とうちらが「避難しなければ」と思った時間が、いくらか余裕があったから助かっただけの話で、これはもう運しかないと思います。毎年三月三日、昭和三陸大津波（↓巻末用語解説「昭和三陸地震」）の日にうちらは避難訓練をやってるんで、水門閉鎖の確認を終えて仙寿院にあがってくるという、いちおう訓練通りの筋書きで動けたかなというとこはあるんです。あとはここの部の部長の判断。すべてがやっぱり部長が責任ですからね。部長が冷静な判断をできるかどうか、その差でもって「命なくす・なくさない」っていうのはあるのかなって思う。

■仙寿院への避難直後に火災発生

Aさん　避難して間もなく仙寿院のすぐ下のとこから出火、火が出たんです。だんだん煙が大きくなってきたので、うちの副団長と話して、消すって言ってもなかなか、消火栓に水がほんとうにあるのかないのかわからない。結局そのポンプが停止してるもんだから。でも火はどんどん出てくるし、そのときに団員が四、五名ぐらい仙寿

院にいたもんだから、「まず、なんとか近くに消火栓があるから、いったんやってみましょう」っていうことでポンプ作動したら、水があがってきたんです。ただ、その火点まで瓦礫がすごいんで、その瓦礫の山をホースを延長して乗り越えて。そうして水があがってきたので、なんとか仙寿院の真下の火災は止めたんです。隣町の大槌なんていうのは火災でほとんど建物がないっていうような状況だったので、火を見逃してしまうと当然のごとくここもそうなってしまう可能性もあったので、四、五名の団員でそこ消して安堵した。

あと、やるべきことっていうのは寒さ対策。仙寿院には家流された人たちがほとんど避難してるんで、今夜のこの寒いなかのしのぎが大変だなぁっていうことで。仙寿院の上のほうの人たちは仙寿院に避難しているけれど津波で家流されない人たちが多い。そこで、そうしたかたたちに「毛布や反射板のストーブがあったらもってきて」と、とにかく声がけしたら、快くもってくる人たちがけっこういて、あっという間にけっこうな数が集まった。仙寿院さんも当初、境内は避難場所だよって設定してあったんですけども、ほとんど全部の寺域を提供してもらって。当時たぶん五〇〇名以上あそこに避難したと思うんだけど、もう本堂に入りきれないくらいの人が入ってきたったのでね。

■ポンプ車一台での消火活動

Aさん　夕刻になって遠くのほうで火の粉が見えるようになってきた。その火の粉がどんどん大きくなってくるんです。聞いたらば、流された車が山積みになって、その車から発火したっていうようなことを聞いたわけです。うちら消防団はポンプ車行かしたもんだから、消防署の無線がけっこう使えるような状況だったので、消防署から「火を消してくれ」というお願いが無線で入ったわけなんです。無線交信、うちのB副部長がやってて。

大只越（おおただこえ）地区に行く道路は通れて、その沢の奥に防火水槽が二個あるんです。ただ、そこからは火点、燃えてるとこまでかなりの距離になる。とにかくうちでポンプ車に積んでるホース全部使って、まずそこまで行けるかど

うかっていうことだった。消火のために稼働できるのは、そのときうちの消防団のポンプ車一台だけだったんで、消防署からは「とにかくホースは消防署員がその火点まで担いでもっていくから、なんとか火を消してくれ」っていう指令・命令・お願いがされたもんだから、「じゃあ、まずやるだけやりましょう」と、防火水槽までポンプ車をもっていって、そっからあるだけのホースを延長して。

防火水槽から火点まで四〇〇メートルくらい。ポンプ車のホース延ばして、一〇〇メートルちょっとくらい足りなかったんです。いや、もっとあるのか。うちのホースは一本二〇メートルくらい。それが一〇本くらいが足りなかったと。火点まで二〇〇メートルほど足りなかったぶんのホースを消防署員が担いでもってきてくれたので、なんとかかんとか水あげる段取りはできたんです。防火水槽っていうのは限りがあるんで、そこの水量のぶんしかあげれない。その裏がもう山なので、薬師公園っていう避難者がいるほうの山だったので、「まずその火消さないと」っていうことで、ほとんど一昼夜、朝方までかかってその火を鎮火させたんです。だから釜石の消防団で水をあげて火を消したっていうのは一分団三部、一台だけのポンプ車でこの町の火を消したんです。

三分団団員すべての人間が「よかった。火を消せてよかった。あの火を見逃してしまうと、残った食べ物も当然油も浮いてるんで、どんどん火が炎上していってたら釜石の残った建物もたぶん全部いったろうかな」って。たった四、五名で火を消した。ただ防火水槽・消火栓の場所はある程度把握してないとできない。その知識やこうした大火に対処したっていう経験はやっぱり必要になる。消火栓ばかりじゃなく防火水槽っていうのは町方にもあるべきものなのかなぁって。「これ、だいじなことなんだな」ってのは、あらためて思ったけどね。

その防火水槽は一基四〇トンくらいあって、それがなくなって足りなくて、そっから二〇〇メートルくらい下のお寺の裏の同じ道路沿いに小さな貯水槽とか防火水槽があったんで、そこにポンプ車を移動してもう一度入れ直して、そこがもうほとんど空になるくらいまででなんとか鎮火させた。ぎりぎりですね。消防署員のほうも「ホー

スをもってきます」とは言ったんですが、そこの火災現場から消防署までけっこう距離があるんです。すると瓦礫の山なわけです。その山が三メートルか四メートルくらいの高さ。そこを乗り越えてホースを消防署からもってきた。

Bさん　そういった形で鎮火させたっていうのが、地元でやってる避難した団員だけで消せたっていうのが、大きな役目を果たしたなぁとは自負したんだけどもね。その防火水槽っていうのは、なくなれば消火栓からまた補給しておく。溜めておくものなんでね。もう自然に湧いてくるものじゃないので、限りがあるわけなんです。でもやってみないと、これわかんないので。ただ、横道に抜ける道路が使えたからその防火水槽までは辿り着いたけども、（その間道が）なければ大変なことになった。たまたまわれわれ管轄してるところが、そういったその沢、高台と近いところに部落があるんで、その部落に抜ける道路が使えたのでそういった活動ができる。

■仙寿院避難所における消防団の活動

Aさん　仙寿院での活動は二か月くらいですかね。その間、当然家族とも私は離れてました。家族は避難所には何日かいたったんですよね。たまたま被災を受けない地域にうちの叔母がいたので、そこに全部避難させたので。

Bさん　ただ、女房の実家が全部家流されてなくなって。私の家は大丈夫だったので、そこに家族が全部あとから避難してきて、私は仙寿院のほうにいた。ちょっと家に帰ったりはしましたけれども、基本的には仙寿院で活動はしてました。

　毎日朝は瓦礫を焚き火に。仙寿院に避難した消防団員はじめ有志一同が、学校にあったリヤカーの小さいやつを拾ってきて、それに瓦礫を積んで仙寿院までもってきて、毎日ドラム缶に入れて火を焚いた。毎朝その焚き火から始まって、ラジオ体操やってっていう一日。まして「自衛隊がくるまでもちこたえるわ」みたいな。「自衛隊がくるまでだいたい何日だ？　二日でこれるのか？　三日でこれるのか？」って。それまではなんとか歯食い

しばって、食料・水関連をなんとかしなきゃねぇなっていうことで、皆でいろいろ知恵を出し合ったり。あとは車が通れるようになってからは、うちの団本部の人とか他の消防団の人がいろんなものをもってきてくれたりして、食べつないで生き延びれたっていうことなんですけどね。

食べるものだけで大変なんですよ。そのなかでだいたい五〇〇人のうちの二割くらいの人たちは、俺あとから思ったんだけど、被災してない人。家が流されない人たちもそこで避難してる。やっぱり余震とかいろいろ怖かったり、電気つかなかったりということなんでしょうけど。市役所の職員も三人くらいいたかな。その職員とわれわれ消防団と考えをすりあわせて、いろんなこと決めたりやってます。

ラジオ体操もさせました。ご老人たちにエコノミー症候群ってありますよね。車ん中とかって同じ状態で閉じこもってると命を落とすっていう。何日かたって「これじゃだめだ」って言って、毎朝ラジオ体操の放送を消防ポンプのラジオからスピーカーから流して。

■無線があってほんとうに助かった

Bさん　妊婦がふたりいました。臨月の人と四か月くらいの人が貧血起こしたって、ふたり搬送したんです。仙寿院の裏側、いまの天神町に仮設が建ってるんですけど、そこは学校の跡地なんです。そこに避難拠点みたいなのが設けられて、市役所の人が仙寿院にきてて、無線もってたんで担架用意してもらって。そして、山のところからおりる避難路みたいなところまでは、車で妊婦さん運んで。そっちからはもう、市役所の人たちに担架で運んでもらって。こっちの大渡（おおわたり）町に抜けて病院の近くに抜ける昔の旧道があるんです。その道路があったから結局搬送ができて、妊婦さんも無事に出産できた。

あと糖尿病の患者のかたがいらっしゃった。「明日打つインシュリンの薬がない」とか、低血糖とかそんなん起こされたらとんでもねぇことになるなと思って。やっぱりそういう医薬品ですよね。ちゃんと決められて飲ま

ないと大変なことになる人と、一日二日飲まなくても大丈夫だみたいな人と、いろいろ。それもポンプ車の無線があったから連絡して、消防署員の若い人が、夜、何時間かかけて山を越えて仙寿院まで薬をもってきてくれた。

Aさん　だからやっぱりポンプ車を活かすことのだいじさっていうのはある。なにかあったときに、いま言ったように携帯電話・固定電話はつながらない。とにかく署と連絡や情報を得るために、やっぱり必要なのは無線。今回私どもポンプ車を活かしたがために、そういったことの交信もできるけど、これ流されてしまったらもう連絡しようもない。たとえば、「いま医者が必要なんだ」っていう連絡すらできない。

みずから助かっても、そこでいろんな状況がうまれてくるっていう危機感がだいじなんだ。だから無線の電源装置のバックアップや、あるいは災害になったときに交信機器をバックアップできるもの。いま、こういったトランジスター型の無線ももってはいるけども、なかなか交信できないっていうのはあるからね。通信手段の見直しっていうのもこれからだいじなことなんだなって、今回は思ったね。今度は関東のほうで、いつくるかわかんねぇような地震考えたらば、早くそこを考えねばだめだね。

■その場その場で対応する

Aさん　仙寿院が本堂を開放してくれて、なんとか避難した人たちに寒さはしのいでもらえたんだけど、われわれが暖とるにはエンジンかけて暖とるしかない。そこの住職、友だちだったので、「Aさん、暖なんもねぇんでか？」って言って、「いやいや、(仙寿院には)あるよ」って。「なにあるの？」って言ったら、「塔婆」。供養した塔婆が何百本ってあったわけ。仙寿院さんの住職が何百本って塔婆をもってきて、「それ焼きなさい。それで暖とりなさい」と言われたの。「いや、住職。塔婆だよ。そんなの使っていいの？」って。「それも供養だ。いいから気にしないで暖とりなさい」って言われて、塔婆を立てて火つけて、それで消防団は暖をとったんです。それで二日、三日暖とらせてもらった。

幸いのごとくに、津波きた直後にタンクローリー車が上の沢のほう、うちのBの部落のほうから灯油配達する二トントラックのタンクローリー車がおりてきた。そしてちょうど第一回目の火を消したあたりに、そのタンクローリー車が入ってきたわけ。運転手が「町におりたいんだけど、どこ行けばいいんだ?」「馬鹿言うな。津波でどこ行けるのよ」と。配達してる途中に地震に遭遇したわけです。で、津波が起きたと。先ほど言った防火水槽がある側のほうから灯油配達しておりてきたわけ。「中身なんだ?」って言ったら、「灯油だ」って言うわけ。「よしっ。いいとこさきた。このまま行って仙寿院にあがってろ。もう町にも行けないから。事務所になんか戻ることすらできないんだから」って。「わかりました」って「おめえ、とにかく全部俺が使うからそこさあがってろ」ってお願いして、あがってもらったんです。

ポンプ車は軽油があるうちは動けるけど、灯油と聞いてとっさに思ったのは、「あっ、これでエンジンかかる。暖もとれる」。もう神さまのように思ったね。「これをわれわれさ、与えてくれたのかな」と。ディーゼルエンジンは軽油がなくなる前に灯油を混ぜるとエンジンかかるんですよ。(タンクローリーの灯油があるから、これで)油が切れることはない。(軽油を)使い切っても、ディーゼル車は最後は灯油だけでもポンプが動く。だから一昼夜エンジンかけて消火活動しても、油はなくならないと。

ローリーがかなり生き延びる手立てになったんです。もうずっと一か月くらいか、そのローリーの灯油が空になるまで。その間にはだんだん瓦礫も整理して、道路も車も走れるようになったので、ローリーは帰ったけども。そのかたの会社も海の浜のほうにあった会社なんです。当然戻れない。瓦礫でもう走れない。いま言ったように、高台で逃げれば、残されれば、なんとかそういった活動ができる。だから被災時にポンプ車を津波とかから守れるように、対処の仕方を考えたほうがいい。結局、逃げたからポンプ車が助かったんです。灯油だから、反射板のストーブをもってきてもらえれば暖もとれる。たまたまそのときタイミングがよかったのも運だね、巡り合わせ。

Bさん　運転手も同じ釜石出身だからね。いい人でね、昔からちょっと知ってる人。

Aさん　やっぱり、そういった顔も見たことある。そんときはもう消防団がやっぱりトップだから。「おめぇ黙って仙寿院に待ってれば、おめぇはおめぇの役に立つことがあるから、黙ってそこにいてくれ。あとの責任は俺がとる」ってことで、そのためにエンジンかけて暖もとることもできる。そういったことがあったがために、エンジンもちゃんと動かして、消火活動もできた。

仙寿院も停電になったわけです。ここに数日後にそっちの沢のほうの電気がついて。だけど仙寿院はまだ線路が違うので、「下まで電気ついたよ。なんでここは電気こないんだべ？」って。そしたら仙寿院さんの住職が、「わかった。そこまでくるんなら、俺なんとかする。うちは電気工事屋だから」って。事務所はすぐそばにあるからそっから電線担がせてもってきて、電気がくる側からあるだけの電線もってって、本堂さ電気流してくれた。だからたまたま私が電気屋だから、電線もあるから、電気も引っ張ってきて、本堂も電気つけてやって。今度は「テレビが見たい。情報を見たい」って事務所からテレビもってきて、テレビを映してやって。他の避難場所とはちょっと違って、すぐ対処できる。他の地域よりも早く電気を通電してやる。たまたま私、電気工事屋経営してるもんだから、そういったこともあるし、（仙寿院に）避難したのは私の社員が多いので。

■人さまの財産守るのも消防団の役割

Aさん　道路の瓦礫が片づけられるまでには、一週間ちょっとかかったかもしれない。一〇日間くらいか、水が引いてからだもんな。水が引いて三日ぐらい。それからだからな。

道路警戒の作業は自分たちが中心となってやりました。道路が走れるようになったら、今度はなにか盗難が起きているということでね。結局、治安がいろいろ悪くなって、変な人が立ち寄って物色してるっていうことも聞いたし、周りに警察がいるわけでない。「じゃあ、なにやる？」っていえば、「（見回りするのも）消防団しかい

ないから」って。今度は毎晩巡回する。ゴーストタウンですよ。電気もなにもまだ通ってない真っ暗なところを、自分の身を守るものをもちながら、サーチライトで照らしながら。

Bさん　ほんとうに金属バットやゴルフクラブを拾ってきて、消防ポンプ車に積んでね。攻撃される覚悟しないとね。治安悪いだから。「あっちがそういうのがなくなると、場所を変えて今度こっちにくるんじゃねぇか」っていうふうに判断して、「じゃあ、行きましょう」と。管轄の三部地区を中心に、毎晩、夜の見回りに。治安を守るっていうわけでもねぇし、ただそういった情報が入ったので、人さまの財産だから、財産守るのも当然消防団の役割だから。活動でなくてな。もうほんとう最小限の団員の現場対応で一～二か月を乗り切ったっていう感じだね。もう手回んない。自分らのことで精いっぱいです。

（二〇一六年八月一七日）

釜石市消防団Cさん　震災当時、本部副団長（インタビュー時は、消防団長）

■震災当時の状況

私は公明党の釜石市議会議員やってまして、地震でほんとに議場はもう潰れるなと。耐震診断をして、「震度6強がくれば倒壊します」っていう診断結果が出てたんです。あまりの大きな地震で、議長が休憩宣言もしなかったんですよ。あのとき議場には、公明党の議員の私と、前の席に座る同じ公明党の女性議員がいたんです。その同僚の買ったばっかしの車を、市役所の後ろの駐車場から旧釜石小学校の校庭に移動させたんです。まさかあそこまでこないと思ってたんですが、大きな津波だということで。同僚の彼女には車を移動さした後、「ここ絶対動くな」と言ったら、彼女は「四人いる子どもが心配なんでうちに帰ります」って言って。私が「いま帰ったら

死んじゃうよ」って言って。いつも私の言うことはあまり聞かないんですが、その日だけはあまりのすごい形相だったんだそうです。「Cさんに『絶対離れるなよと、離れたら死んじゃう、死んでしまうよ』って言われたのが耳朶に残って離れなかった。その後まもなく津波が、すぐ手前まで津波がきた。あんときにもし家に帰ろうとしたら津波と遭遇して死んでたな」と言ってました。

■大槌湾の水門閉鎖に車を走らせた

その後私は災害対策本部の設置前に、私の住んでいる地元の大槌湾に面した堤防の水門四か所を閉めようと車を走らせました。昼は団員の皆さんが勤務に出ていますから、水門閉鎖に戻るのはたぶん私がいちばん早いだろうと思いまして。市役所のすぐ脇のトンネルをくぐって、鵜住居（うのすまい）方面、大槌町方面に走ったんですが、途中で六日前にできたばっかしの縦貫道を通って行こうか、両石町を通っていこうか迷いまして。縦貫道を通って行きますと、自分の町内会、片岸町っていうところなんです、そこにすぐ降りられるんですが、その前に両石町の消防団も見ながら自分の地元に行こうかなと思ったんです。でも両石は両石の、地元の消防団を信じようと思って。一瞬通ろうか迷ったんですが結局縦貫道のほうを通ったんですよ。縦貫道をさがっていったら、車も全然もうストップしてしまっていて、もう堤防を越えてくる津波が見えました。ああ、水門閉鎖は間に合わなかったなと。あのときの一瞬の判断で、両石町、四五号国道を走っていったら完全に死んでました。

■やっとの思いで逃げ込んだ沢の道

あんな大きな津波が、二回。二波、三波、四波が大きかったですね、すごい音ですよ。映画館で耳がカーッてなるような、すんごい音ですよ。それで歩道に車をあげて、歩道走って沢に逃げ込んだんです。いちおう市道には市道なんですが、相互通行ができない細い道なんです。車を鉄製のごみ箱にぶつけながらやっとの思いで高台に逃げ込んだ。逃げ込む途中で寝たきりなおじさんの家があるもんですから、どうしようかと思って車を停めて

行ったら、もう津波がきたんで、もうそのおじさんの家にも入れないで。津波で車流したくないもんですから、車もっと上にあげて。そしたらもう第二波でおじさんのうちも一階部分がやられて。おじさんはあとでわかったんですが、ベッドが水で浮いて、津波が引いたらまたドーンと落ちた。そのときは助かったんです、でも一時的に。胃に穴を開けてしまって亡くなったんです。

この沢にいっしょに逃げ込んだ人は、たまたま消防署の知ってる友人の息子なんです。ふたりでこの沢に何人逃げ込んだかと数える。いまやれるのは、われわれにできるのは、まずそれだなと。名前まではもうむりだと。せめて男女ぐらいで、だいたい感じとして、年寄りが多いのか、世代はだいたいどういう層が逃げ込んだのかと。寒くて寒くて暖房をどうするかと。それから津波でやっとずぶ濡れではいあがってきたお年寄りもいましたし、そういったかたがたの手当てとかもありました。それから日が落ちてきて、山火事は怖いけども、焚き火をせざるをえませんでした。じゃなかったらもう寒さで死んじゃうなと思うぐらい。

そういうなかで、何軒か残った家から白米を提供していただいて、ご飯をつくっておにぎりをつくって。町内会の自主防災会でつくって。逃げ込んだ、助かったかたがたは一七六名だったか、ちょっと忘れましたけど、そのかたがたに配ったら、朝食べるものなんにもなくて。ただ田んぼで米をつくってる人がありましたんで、もみのついた米だったんですが、電気はなくてモーターは回んないんで精米機がアウト。ほんで年寄りの人が、戦時中一升びんに入れて突っついてやったと。とってもそれではどうにもなんねえと。まあほんとに、食べれるものと、たまたま乾麺があったりとか、じゃがいもがあったりとか。三日間、そこでその残った家のかたがたの食べるものを、食べられるものをすべて出してもらいました。

あんときあとびっくりしたったのは、うちの親戚のおばさんが家の中で飼っている犬を抱いて逃げたんですが、犬も避難をして。いつもドッグフード食べてるんですよ、犬は。ドッグフード以外は絶対食べないって犬が、二

日目になって、おかゆじゃなくて重湯っていうのかそれに近いようなのを、ぺろぺろぺろってなめだしたんですよ。やっぱり食うものがなかったら、犬でも腹減ったら食べるんだなと思いましたね。

■心臓に抱えた爆弾とのたたかい

私は当時冠動脈が二本詰まってまして、狭心症で。津波がこなかったらば、三月一七日に盛岡市にあります中央病院っていう大きな病院で手術の予定だったんです。ちょっと歩くと、三〇メートル歩くと胸が苦しくなって、立ち止まるとすぐ治って、また歩くとまた苦しくなって、そういう状況を繰り返していて。でもそれができなくなってしまって、連絡のとりようもなくて。いつも行ってる主治医は大槌町で、その主治医の医院も流されて、先生は助かったんですが連携がとれなくて。何日か後に会いに行ったら「安静にしてなきゃだめだ、死んじゃうよ」って言われて、しゅっしゅってするニトロをもたせられてまして、なんとかそれでしのぎました。自衛隊機が夜にくるんですよ。自衛隊機でもう盛岡に運んでもらおうかなと思うぐらい、ほんとに迷いましたった。助けてちょうだいって引き上げてもらおうかなと思うぐらい、まあ、あのときよくやったなと思ってます。

■いつも飲んでる薬がない……被災時の薬をめぐる混乱

やっと瓦礫を機械でどけていただいて、逃げ込んだ沢から出れるようになって。当時、糖尿病でインスリンを三日打ってないっていう人がいました。死んじゃう死んじゃうって、もう死んじゃう死んじゃうっていたったんですよ。そのかたとか、それから私もそうだったんですが、薬を飲んでるかたがたがいたんです。慢性病、血圧の薬とか。いま薬必要な人に、いつも薬飲んでる人に、薬の名前聞いたって、全然わからない。俺だって全然、自分が飲んでる薬の名前も全然。ただ、なんの病の薬とか知ってます、それだけを聞いて。それからインスリンを打たなけりゃならないっていう人を車に乗っけて、病院に向かいました。車も自分のだけだったんですが、すっかりずぶ濡れになってきた人を、車でヒーターかけたまんま乗っけて。ガソリンがわずかだったんですよ。

いやいや。まあ大変でした。病院に連れていったら薬は出せませんと。あんときに衛星電話が県立病院にあって、岩手県の医療局に電話でかけあって、協議してから出しますからと。協議もへったくれも、いまそこに薬を飲まなきゃだめだっていう人がいるのに。そしたら二日ぶんだけ出しますと、ただし現金で払ってってくださいと。私は一七人ぶんの薬を、なんとかさんはなんの薬を飲んでますと、書き取ってから行ったんです。たまたま議場から背広着たまんま、ポケットに財布が入ってたったんですよ。現金、四、五万はもってましたから、それで二日ぶんであれば薬はたいした金額じゃなかったんですよ。ただ保険証がないんで、保険が適用しないから原価で払っていけと。県立病院ですよ。

一七人ぶんの薬代を払って、薬もらって、そして皆さんに渡しました。みんなが着のみ着のままで、お金もなかったもんですから。プレゼントだって言って渡しました。ただ二日後にはもう薬がないんですよ。まあほんとにもう。こんなことは新聞には出ないですよね。頭にきましたね。金払っとけっつうんですか、じゃあ金がない人はどうしたんですかね。たまたま私はもってましたったんで。いろんなことがありましたね。二日目に行ったら、お金はいいですって。あたりめえだっつったんですよ。しかし、ただね、彼ら彼女らは使われ人ではあるんです。上の指示がなければね。

私も自分の薬を確保しました。たまたま中央病院に、大槌町U医院から紹介をもらってから診察をして、三月の一七日に手術の予定がありましたんで。中央病院っていうのは岩手県立中央病院で、釜石のも県立病院で、全部情報がパソコンできちっと出てくんじゃないですか。それで私は正確な薬が出してもらえたんです。最初のときには心臓の薬、よくなる薬と言ったら、薬の名前と、書いたやつと、ああこれですこれですっていうような感じで。

沢に逃げ込んだ一七人はほとんど高齢者。でもね、薬を一七人ぶんもっていったら、ほんとにもう神さま扱い。

それからどこの医院、病院に通院していたったのかも聞いてきましたね。それから朝昼晩飲んでいるのかどうかもたしか聞いてったような気がすんなあ。で、二日目のやつは、三日目まではその片岸っちゅうとこにいましたったから、二日目になったらあとは一七人よりもっと減りましたった、もらってくる人のぶんが。四日目に避難所に移りました、栗林町っていうところに。そこでその一回、最初にもらった人で、そっちに移ったかたがたのぶんの薬をもらってきました。今度は無料で。

■緊急車両扱いでガソリンを確保

遠野市の笛吹峠ってあるんですが、そこ経由して遠野に行って。あんときにはガソリンがなくてね。津波被害がないからガソリンが入れられるだろうと、安易に考えて行ったんですよ。そしたら緊急車両以外はだめですって言うんですよ。一軒目でどんなにしゃべってもだめ、二つ目のスタンドに行ったら、やっぱ緊急車両じゃなきゃだめですってって、そういうように市役所から言われてますと。そこで考えたんです、いや、おれ消防団だと。たまたまそこに釜石市から通勤してたというスタンドの従業員がいて、「あっ、釜石の市会議員さんですよね」っつうから、そうですって。あっCさんですよって、覚えていただく人がいて、「消防団だったら緊急車両になるべ。もしあれだったら遠野の市長に電話入れてみてちょうだい。Cって言えばすぐわかるから」って。そこでガソリンを満タンに入れて、県立病院に薬を貰いにいきました。

■二次避難所へ

（さっきも言ったように）四日目に避難所に移りました、栗林町の上栗林集会所っていうところに。そこに片岸町内会のほとんどのかたがたがあっちに移って。ただ全員がちょっと収容できなかった。それで親戚や知人友人、とにかくよそに行ってお世話になれる人はそっちに行ってお世話になろうと。とにかくここに入れる人の数が限りがあるということで、ほんとはみんないっしょにいたかったんですが、全部はここに入れないと。ほんで

ちょうど部屋がふたつに、男女に分けて入りましょうと。あとは電気がなかったんで、ろうそくをなんかどっさりもらったような。ろうそくもってきましたね、それから灯油だとか。でもちょっと動けば胸が苦しくなる、それをがまんしながらやってましたね。

■住民主体で遺体捜索隊を結成

たまたま友人が訪ねてきて、「このまま瓦礫、あのままでええんか」「あの中に遺体があんじゃねえか」「まだ片岸でも何人もまだ行方不明だ」「このまま腐らかしていいか」と、相談にきたんですよ。「自衛隊、警察くるの待ってていいか」と。機械はK君っていう土建業やってるやつが、「機械は内陸部から俺が借りてくるから、金だけなんとかしてくれねえか」「オペレーターは俺らがやる」と言ってくれて。

当初は山の竹を切ってきて、瓦礫をどけてみました。あんなんじゃどうにもなんねえ。でもないと遺体捜索できないんですよ。何日目かなあ、それで、友人ふたりと三人で連れて、最初に市の担当者のところに行って、いやそんなのむりだと。今度は直接市長に、「市長このまんま自衛隊、警察、それからよその消防隊の応援待ってても手が回んねえ」「われわれ住民で捜索隊を結成すっから、リース代、それから必要経費出してもらえますか」ったら、市長は「それはその通りだ、やれるんだったらやってほしい。わかった、あとで請求書だけもって」っつうんで、機械をあのとき二機かな借りて、一か月以上番割りをつくって、毎日やって、いろいろ機械を壊したり、何回もいろいろ割ったりしながらやりました。

いろいろありました。Rさんもね、高齢なのに苦労したと思います。でもよく統率がとって、みんなも協力して。とくにご婦人がたがえらかったと思います。Y先生ってのが親戚いたんですが、奥さんがちょっと病気で放射線治療したりなんかしていま大変ですけれど、奥さんたちがほんとにえらかったと思いますね。それで機械のリース代とかオペレーター代、ですから毎日捜索で出たかたがたに日当をいささかでも払えることができたんで

すよ。けっこう助かったと思います、それで。遺体をふたつ見っけたね。残念ながら地元の人じゃなかったんですが。あれが自衛隊のこと待ってたんじゃ、半年もむりだと思いますよ。ですからそんなに傷まないうちに、白浜のほうだったと思ったんですが、あそこで見つけることができたんですよ。

■消防団の幹部として、釜石市議会議員として

あの当時、俺はいまから消防団の幹部、議員、自分の町内会の副会長・幹部として、いの一番になにをしなきゃなんねえのかって考えた。私は、親父もおじいさんも消防団だったんですよ。昔はそういう消防団員になる家が決まってたったんですよ、田舎は。その消防団員になるというのは、ひとつの名誉みたいなもんだったんですよ。当然のように私も消防団に入って。私のいとこが、ここの片岸町の部長だったんですが、自分の女房も死んじゃった、父親も死んじゃった、でも自分は部長だ。部長として消防ポンプ車といっしょにいなきゃなんないですから、彼は彼でつらさがありました。

議員の活動のほうが多かったかな。国会の支援物資配送とか、国会議員団と被災地をとにかく回って。いっしょに回って、いま必要なものとか災害弔慰金の話をしました。兄弟姉妹は（災害弔意金の支給対象にならない。）だめだと。それをうちの公明党議員七、八人は国会議員団とけんかをして。そんときに、大船渡市の津波で残ったホテルで、会議を八日目にしました。そのときに四五号線を通りましたかね。いま国交大臣やってる石井（啓一）さんが政調会長できたのかな、井上（義久）さんが政調会長かな？　災害弔慰金がもらえないってかた何人かから相談を受けましたったので。手続きに行ったら、「あなたはだめです」って言われたと。そのこと訴えて、すごいけんかしました。いまの公明党の幹事長やってる井上さんと、それからいま国交大臣やってる石井さんと、脇のほうにいた九州福岡の出身の遠山（清彦）さんっていうかたが、あとで内閣府の職員と総務省の職員とで法案をつくって。もともと彼は外交官なんですが、自民党さんと協力して法案をつくって。民主党にもこれを出し

たいということで。それで（兄弟姉妹も）弔慰金がもらえるようになりましたんで。

■消防団長がやめた理由

震災の三、四日の間に当時の消防団長がやめることにいろいろなりまして。当時はちょうど関西のほうの消防隊員が入ってきまして。大槌町から山林火災が山を越えて、隣接する私の町内会のほうに迫ってきたんです。わが家は流されてなかったんですけど、上に石屋さんがあって、山林火災を消さなきゃ家が焼けてしまうっつうんで、やっとの思いで火を消していたんです。そこに消防隊員がきて、「消防団、なんで火を消してんだ」と。「火災にはいっさい手を出すな」と。「それが消防団の命令だと指示をしたはずだ」と。

その指示なんか全然どこにも通んないんですよ、通信手段が全然だめでしたから。消防ポンプ車についている無線も場所によって届くところと全然だめな場所とあったものですから。建物に火がつきそうだって一所懸命やってたんですよ。消防団が火を消してなにが悪いと、いまあの建物火がつきそうになってんだ、と大げんかになって。それが原因。いろいろありまして、当時の団長、まだやめたくなかったんですが、あのなかでまあさまざまあって、自分自身のこともありましたし。そういうなかでいろんな役所の対応のまずさ、ああいろいろ。あの震災のなかで、人の心の醜さといいますか、さまざまなものが、見なくていいものがさまざま見えましたね。それから人の情けも。

■「津波三メートル」の情報が犠牲者を増やした

ほんとにいまでも、「気象庁なんで頭さげねえんだ」と思ってますよ。

「予想される津波の高さは三メートル以上」……あれでどんだけの人が死んだか。さっき先生がおっしゃったように、なぜ避難しなかったのかっていう、そんな話をする。避難しようといっても、「三メートルだって言うから、ここは大丈夫だ」と、それで逃げない人がたくさんいたんです、消防団が回っても。あれが津波の高さを

言わないで、「大津波がくる」って言えば、みんな逃げたんですよ。

あの震災がくる前に、寺田寅彦の書かれた本を読んでまして、科学文明の発達が被害を大きくするっていう部分も、あの津波を見ながら思い出したんです。大槌湾はチリ地震津波（↓巻末用語解説）で被害が出たもんですから、チリ地震津波のあとに六・四メートルで堤防が整備されたんですよ。土の堤防が流されてしまったもんですから。その堤防があるんで大丈夫だって人もいたんですよ。それから防災無線やテレビで、「津波の高さは三メートル」という発表。まさに科学文明の発達が……。

あれほどの地震だったら、昔の人はひとり残らず逃げたと思いますよ、沿岸部のかたがたは。そのあとに六メートルって言い出したころまでは、防災無線の鉄塔がまだ残ってましたけど、その後の三波四波でもうやられてしまって。逃げなかった住民がいちばん悪いですが、逃げなくさしたそういう公共機関といいますか、その責任も大きいもんがあるなと。しかし、だれも「ごめんなさい」って言ってないですよ。それにひじょうに腹がたつんですよ。消防団もそれ信じて、津波は三メートルだけれども水門閉めなきゃ被害が出る、最後まで住民が逃げないもんですから。悪い癖で、津波警報が出ますとなると、海岸に住民が見学にくるんですよ。「あ、潮が引いた」あるいは「潮引かない」と。これもほんとに悪い癖ですね。

釜石市で（犠牲になったかたは）一〇四八名だったですかね。その住民だけが悪いんじゃない、そういう公共に携わるかたがたの責任もあんじゃないのかなと。それを言いたいですね。こういう三陸沿岸は、宮城県福島県まで含めて、津波の常襲地帯。とくにリアス式海岸の三陸は、もうたぶん有史以来常襲地帯だと思うんですよ。それでも海の恵みといいますか、海といっしょに生きてきた、そういう海の怖さもよさも知ったうえで住んできたと思うんですが、昔はこんなにたぶん犠牲が出なかったんだろうなって思います。なんの情報もないころのほうが。

■津波からの退避ルールは簡単につくれるもんじゃない

消防団は津波のあとに退避ルールをつくりました。釜石市消防団は時間を入れませんでした。ちなみに釜石市消防署は津波到達三〇分前には海岸から引き上げろっていうこと決めています。住民にもっとも身近な消防団が逃げることによって、住民も逃げると。消防団はそれを、何度も何度も議論しました。

消防団はふだんの職業じゃないですから。昼間ですと、大地震があって津波警報が出て、それぞれの職場から自分の所属する消防団・屯所にまず集合するのに、仮に私だとすると、津波前に住んでいた地元であれば、こっからおよそ三〇分かかり、屯所に行くだけで津波がきてしまいます。夜間地元にいれば、もう少し活動する時間はありますが。いま助けられる命がそこにあるのに、三〇分経ちましたと、だからもうその人は置いて、われわれは先に避難しましょうって言うわけにいくかと。それはむりでしょうと。そんなことは人としてできるかと。

大槌町の消防団はそれで六人、寝たきりの高齢者を最後まで助けようとして、全員が犠牲になりました。私は、その寝たきりの人を置いて果たして逃げれるかって、たぶんできないですよ。よくマスコミのかたがたが、「ルールはつくりましたかっ？」て聞きます。簡単につくれるもんじゃないですね。われわれ釜石の消防団は、現場の責任者に任せることにしました。まずは危険を察したら逃げろと。簡単に言いますと、あとは現場で判断しろということです。他では一五分ルール、退避ルールを決めたところもあります。でもそれ、ナンセンスだって私は思いました。

こんな事例もありました。三月の初めに高校を卒業して、介護施設に勤めた新卒の女の子が、私の町内会で高齢者のところに訪問介護で行っていたんです。そこで大地震がきて。市営アパートの三階にふたりで訪問していたったんだそうです。先輩のほうは逃げたんだそうです。でもその高校卒業したばっかしの子は逃げないで、そのお年寄りといっしょに犠牲になったんですよ。逃げないほうが悪かったって言う人もいますが、簡単に逃げら

れるもんじゃないですよ。私はそう思います。そういう集団が、たぶん、家族の反対があっても消防団やってるやつらなのかなって思いますね。釜石の消防団、この震災のあとに四〇人近い団員がいっきょに退団したんですよ、家族の反対で。いま残ってんのは、家族の反対があってもやる気のあるやつらです。

■いまは消防団の再編成中

いま消防団を一〇八人体制でやってます。基準からいったら一七〇人ぐらいなんですよ。それでも役所は、「減らせ減らせ、経費削減だ」って言います。四〇人近い消防団員がやめていきましたが、幸いに震災の年から毎年これまで、一〇人前後ずつ入団するのもいるんですよ。毎年、私も高齢者ですが、やめていく人もなんとか補充。ただいっぺんに四〇人やめられたのが大きくて。ですから訓練されてない団員もいて、弊害が出てきてたんですよ。火災に行ってホースを延長するのに、オスとメスがあって、逆に引っ張ったりして。それで訓練しなきゃもうどうにもなんないと。火災現場に行ってもかえって邪魔になる。そのために操法の訓練をしなきゃだめだということで競技会をやった。やっと五年目で市内の操法競技大会を開催することができました。

財源がないっていって、やっと五年かかってここの脇の駐車場を舗装してもらいまして。ここで番割りを組んで、操法の練習のできない部はここにきてやれと。震災前の消防団に戻すにはまだまだ時間がかかるんですよ。規律訓練もまだまだ。たとえば小隊訓練とかさまざまな訓練をされて、消防訓練があっての消防団ですから。訓練されなきゃただの烏合の集団ですから。やっと今年から訓練ができるようになってきた。纏をいま注文したところです。そんなわけで元の消防団に戻すにはまだまだ時間がかかるなと、そういう思いでいま取り組んでいます。

■議員が消防団幹部を兼任することの意味

いろいろあります。議員が消防団やってんのが悪いって言う某政党がいますし。たまたま議会中に火災が起き

て、消防団の議員が火災出動する。そりゃなにごとだと。議会と消防団どっちがだいじだって話をする。なに言ってんだと。議会より住民の命がだいじだ。議会には規則があるんです。そのなかにはなにも書いてないって。書いていようがいまいが、消防団は市民の生命財産を守る責務があると、それに勝るものがあるかって、けんかしてるんですけど。なかにはそういう政党もおります。その政党の支持されるかたがたで消防団に入っている人はいないですけれどね。

議員と消防団員を兼務している人はいます。たとえば、お隣の遠野市。議長は分団長ですし、うちの公明党の議員も消防団員です。それから県内では岩手県消防協会の会長。一関市の消防団長ですが、もともとは一関市の市議を三期やってます。それから岩手町の消防団長。いまおととし退団しましたが岩手町の議員でした。同じ公明党では矢巾町ってのがあるんですが、消防学校のあるところ、そこの団長も公明党の議員を六期ぐらいやってました。けっこういます。でも議員が消防団やって、初めて当局が協力するっていう部分もあるんですよね、残念ながら。純粋に消防団だけでは、行政側はこれまで果たしていろんなことやってくれたかなと。ていうことを考えれば、やっぱり消防団員が議員にならざるをえないっていう部分も。

■全国の消防団が機能を維持していくために

消防団の団長としても、団員が仮設で活動してますから、早く日常っていいますか、津波前の日常を取り戻してほしいなって。五年やってますから交代してつぎにバトンタッチしたいんですが、なかなかきびしいなって思いつつも。引き際をいま考えてるんですけども、きびしいですね。ですからなんとか消防団ががんばれるような応援をしていただければなと。

わが公明党もやってるんですが、こないだ花巻の女性の市会議員一年生が、消防団が買物すっとき一〇パーセント引きになるってことやったんですね。一生懸命消防団応援したいっていうことで。うちの同僚議員も、どこ

で火災があっても夜中だろうがなんだろうが必ず消防団といっしょに出ろって言ってますから、出るんですよ。ほんで現場に行って、焼け出された人をすぐ、たとえば公営住宅にすぐ入れるような手を打ったりということをやってんです。市長が花巻の事例に感動して、「やりましょう」と。買物、一〇パーセントか五パーセント安くする、飲み屋さんも安くなるところですね。全国のどっかでやってるんですよ。じゃないと、このまま推移していったら、どんどん消防団はきっと全国的に活動できなくなる。大変なことになりますよね、どこの地域でも。

まだまだ法律をつくっただけではだめですね。このままではあまりにも消防団員なんか、悪くとれば、国が「地域防災の要だ中核だ」っておだてさせて、ひとたび災害があれば犠牲者がたくさん出たんで、「弔慰金は三分の一だ」って、平然と言われましたからね。愕然としましたよ、三分の一だって言いましたからね。考えようによっては、常備消防で働いている人間（＝消防署員）よりも、ボランティアでやってんですから、もっと残された家族を支援したっていいと思うんですよ。なんかほんとに利用するだけ、おだてて利用するだけ利用して……。もう少し団員の処遇も考えなければ、あとに続いていきませんよ。消防の御旗にみんなついてこいったって、いつまでも。

いま、きっとだいじな時期にあるんだろうと思いますよ。われわれも、女性消防団どうしたら入ってもらえるか、入ったら女性消防団になにをしてもらうか、いろいろ試行錯誤してんですが。それから、せっかく消防団入っても全然活動しない団員もなかにはいますから。機能別制度つくって、機能別で出動しただけ、年報酬は差し上げないで、出動したら一二〇〇円あげますと。ただし退職報償金は入りませんよと、でも訓練には参加しなくていいです、いろんな行事にも参加しなくてもいいです……てことやってんですが、これはこれでやっぱり問題が出てきまして。ですからいま、いろんなことをそれぞれ地方地方で考えさせるのもいいんですが、基本的なことは国がきちっとした骨格をつくってやっていくべきじゃないのかなと、そんなふうに思います。そして命を削り

ながら、この寒い日、冬の夜、放水した水がすぐ凍っていくなかでやって、転びながら火事消すときもあるんですよ。仮設に帰って、あんな濡れて、すっかりパンツまでぱりぱりこんです。私もそうですけれども、ほんとに大変な思いをしながら消防団やってんですよ。ですからせめて退職報償金ぐらい、三〇年で打ち切りじゃなくて、五〇年過ぎてもまだやってる人もいるんですから、五〇年まであげたらいかがですかって。でも全然聞く耳をもってません。

（二〇一六年八月一六日）

釜石市消防団Dさん　震災当時、本部分団長
釜石市消防団Eさん　震災当時、本部副分団長

■震災当時の状況

Dさん　私は八百屋をやっていて、そのときは店にいた。地震が起きたときは地球が割れると思ったもん。そんなくらいに大きかったんですよ。「あー、これだめだ。消防行かねばね」って言って海岸に行った。行ったら団員が門扉を閉めていた。「お前ら絶対（津波）くっから逃げろよ。ポンプ（消防ポンプ車）は高台にあげろ」って自分の車で回って行って、門扉閉めたら「すぐ逃げろ」と。消防（団）に戻ったら、「副団長のFいなくなったから見ててけろ」って前の団長に言われて、それでしばらく待機していたのさ。乗ってきた車がじゃまになるなと思ったから、保育園の向かいあたりに置いた。そしたら「Dさん見てくれ」って大渡の川があふれてきて。して待機してたら津波がもうきたんです。釜石小学校の裏の駐車場に逃げていった。うまく逃げれた。

家も川沿いだったから津波で一階をやられて。軽トラックの中で一週間を過ごしたけども、寒くなったらエン

ジンかけて暖めてってやってたらガソリンなくなって、新聞紙かけて暖とった。毎日朝一番で消防団の屯所にきてドラム缶で火を焚いて。

それから自宅が三階建てだったから、二階で住めるようになった。水とか電気はまだこないけども。そして皿にラップ引いてそれで食った。食べたらラップを捨て、水使わないようにした。トイレは川の水汲んできた（笑）。

停電になったとき、ロウソクがあったから助かった。ガラスのコップにロウ入れて売ってるやつを、妻の趣味でもってて。あれ、一家にひとつふたつあったほうがいいよ。停電になったとき長時間もつから、あれで助かったなぁ。仏さんにあげる、こんな大きいロウソクではすぐなくなるから。

Eさん　揺れた時は自宅です。自宅は奥のほうなんです。だから津波には関係ないんだけど、もう激しい揺れで家が潰れそうでした。それくらい。あとは一服してのんびり。家自体も中は無事で片づけとかもいっさいないです。でも自宅に電気はきませんでした。一一日に地震に遭って、その夜から仕事で。まず仕事が目の前だから、入ってったらそういう状態なわけ。あとは戻ってって感じだと思った。こっちは直接的には見てないって感じなの。あと一四日から要望、現地本部に行って実際に動き始めた。なにもないんで、自分たちの生活を守る。そっちが優先的。地震から一か月は会社で寝泊まりしていました。

■津波がくるのに逃げない住民たち

Dさん　自分たちは、昔、子どものころ海岸に住んでたんで、「もう津波だ」って言えばすぐに山にあがってますよ。いまでこそ、「てんでんこ」がなんだか言うけども、昔ほんとうにかってに（われさきに）山さあがったもんですよ。でも町のほうの内陸に住む人たちは、津波がくることいままでなかったから。だから、だれも逃げないんです。まさかここまでくると思わないから。でも、一九六〇年のチリ地震津波（→巻末用語解説）とか一九六八年の十勝沖地震（→巻末用語解説）とかできたのは、ほんとうに海岸のほうの表通りというか。海から魚市場の

あたりの通りの人までは逃げるのさ。それよりも上の高いところの人は、憶測だけど高みの見物。でも今回の津波は大きかった。東部地区は全滅だった。

あとは「大丈夫だ。俺はもうこのまま死んでもいい」ってそのまま（家に）居残りしたり。それをむりやり助けようとして消防隊が津波にもってかれたりっていう。ほんとうに言葉悪いんだけど、身体障がい者・車椅子とかを助けようとして、逆に言えば健常者がもってかれたりっていう。要するに町のこっちのほうの分団は、津波っていう頭さないから、「きても俺たちは関係ねぇ」ってそういう感じだから、「べつに門扉閉めに行くわけでもねぇ」ってことを言うわけです。だから、浜のほうの分団でいけば、一分団・鵜住居（うのすまい）の六分団・唐丹（とうに）の八分団・松原の三分団、海岸のほうがやっぱ地震・津波警報出たって言えば、すぐ門扉閉める。そうすると、解除するまでずっと屯所で待機だよ。ぼーっとして。若ぇころはね、ほんとうにさ。だって解除なんないと帰れねぇんだ、海岸のほうの分団は。津波に遭ったときは、活動って言えば、被害に遭った分団は一分団・三分団・八分団・六分団。現地で対応してる。

■遺体の捜索と安置、輸送

Dさん　被災しない部隊については団長の指示、被災した分団は各分団長指示ということだった。その当時は無線も携帯もなしでの活動。一切合切を自分の上のそれぞれの長の判断で動く、それしかない。だから生きるも死ぬのもさっぱりわかりませんと。ただ、目の前にいま見えてる人たちが、生きてるだけ動いてるだけっていう。三月一一日から四月二日に解散するまで、活動した消防団員の延べ人数が、こっちでつかんでいるぶんで一三五九人なんだけども、見えないぶんについてはなんぼになるか、数字的にはもうつかまえらんない。ほんとうに見えないぶんと山火事含めて遺体捜索。あとは自衛隊・警察とか協力するしかないわけです。あと依頼があれば、それこそ、のぞみあたりは地元なんで、死んだ人の顔を知ってるわけだから、それこそ隣近所の。だから

遺体の確認をする。身元がわかった遺体については火葬にして遺族に返すっていう仕事をする。

（釜石）第二中学校の体育館に、先に遺体をもってった。体育館だけでは足りなくて校舎内にも。釜石で火葬しきれないわけ。一日に一〇体もできなかった。ほんで秋田のほうさもっていった。秋田に向けて毎日運び屋が、何か所も回ってる運送会社が、朝方三時ごろ遺体を積んで、秋田とか内陸にはかわりばんこに四分団、五分団、七分団で順番に行かせて。遺体をその業者のトレーラーに積んでね。トレーラーを先導する感じでポンプ車が先頭に立って赤灯を点けて。緊急車両としてね、サイレン鳴らしてさ。ほんとうはだめなんだともさ。そのトレーラーの後ろに今度は家族の車がついてきたりしてさ。そして県外へ出て行ったの。そのときは常備消防はこず、釜石の消防団だけ。遺体積んで大仙市大曲、そういうとこに運んで行って火葬してもらった。友引になればあっちのほうが火葬しないって言う。

かわいそうなのが四分団一部って小佐野のほうの消防団なんだけども、そこにはポンプ車がある。だけど釜石消防署の小佐野出張所っていうのがあって、そこにはポンプ車がないわけ。自分のとこでポンプ車がないから、収容した遺体を四分団に搬送させたの。一日交代でね。あれはひどかったな、気の毒で。だけど気の毒でもしょうがないもんな、仕方ないんだもんな、団員に指示する立場では。

先ほど言った遺体の搬送とか運搬ってのはもともと計画にはないわけですよね。俺たちの仕事でねぇのさ。団長が役所の人間から言われてきたんです。災害対策本部のなかで、そういう話が出たんじゃないかな。まずは捜索、それから見つけた遺体を収容する。捜索とかっていうのは、海に人が落ちたり山に入っていなくなったりしたときに、ふだんうちらがやってることだけれど、亡くなった人、遺体の搬送とかそういうのは俺らの範囲でねぇんだもの。だれもやる人がいないから自然とそういうね、かなりもろもろの仕事が全部回ってきちゃって。でも、やるしかないっていうか。上の団長の指示命令だから。もう団長がそれ受けてきて、団としてこれをやると決まっ

たら「それはやるんだ」と。「俺の仕事じゃねぇ」って文句言う人もいるけども、だけどそれでも結果としてはやるしかない。やっぱり消防（団）って組織は縦割りだから、暗黙のうちに皆わかって了解してる。身体に染みついてるんだね。上から言われれば動かねばねっていうことで。

津波に遭った海のほうの分団は、もうてんでで、山火事被災者対応。自分の家もなくなって気の毒なんだけどなぁ。でもこうやって、やっぱりある程度、海と山の分団があるから動きがとれたんでしょうけどね

そして直接津波に遭わない分団、山の手側。その人たちがメインとなって遺体運搬、遺体捜索、遺体火葬、石油の抜き取りの作業とか、待機含めてそんな感じ。三月一一日から四月二日まで、解散するまでに、遺体運搬・捜索とかの延べ人数が三八三人。火葬運搬の延べ人数が二一〇人。石油抜き取りで二一五人。そんな感じで山火事も出てるんで、それの応援で一三三人とかっていう。これがあくまでこっちでつかんでる数字だけ。あとはそれぞれのほうから現場で動いてるから、それはもう見えない数字。あとは物資の仕分けとか。それもけっこう海のほうで被災した分団でまかなったね。仕分けして、それぞれの浜辺のほうの食事にきて、それに盛って、あとは被災した人たちに、避難所に運んで支給する。そういうのもやった。要するに町のほうの一分団一分団の管轄の避難所が何か所かある。そこに食事や物資を運ぶ。

四月二日が現地本部解散で、あとは各分団またそれぞれ継続活動はしてる。だから最終集約はいつなのかね。遺体がごろごろっているから安置所に運ぶ、安置所から今度火葬場にもっていく。そういう仕事だった。

■遺体捜索する団員の精神的負担は重かった

Dさん　毎日遺体を探したり安置したりするのはトラウマっていうか。地震が起きてから二日目、三日目あたりから、道路に車だけ通れるようになった。あとはとっても。消防署に行くかと思っても、歩かれなかった。瓦礫の中にも人が入ってたんですよ、けっこう。駅前でも死んでたもん。だからそれをもう関係なくバッと片づける

わけだ。そうしたら瓦礫ん中から遺体がごろっと出てきたりした。そこ駅前歩いて行ったらけっこう、近所で飼ってるチョウザメも流されてきてるわけだ。二メーター以上のでかいチョウザメ。そんなの踏んで歩っちゃうんだもんなぁ。そういう感じでした。三月一一日からずっとさ、実際動いたのが一四日からな。

やっぱり身体にもあの遺体の臭いが染みてるから……せつねぇんだ。最初のころはまだ腐敗してないからいいんだけど、何日から経つとやっぱり臭いが強くなる。そして窓もほとんどなかったりとかさ。それを毎日毎日やらせられるんだもん。地図を脇に入れて、一日いっぱい。遺体搬送も気の毒だから、遺体行ったなら、つぎの日休ませる。交代しながらやらんと。皆無口になるな。御棺入ってれば見えねえでいいけども、ごろごろって積まれてくから。車やトラックに積んで、遺体安置所、学校にもってくんだもんね。やっぱ精神的にまいったのあるっぺ。だから、なまじっか感情移入したらだめなのさ。やっぱりあくまで業務として淡々と処理してきたから、とりあえずなんとかいまがあると思うんだけど。

■留守宅に盗人が入る

Dさん　あとは泥棒に入られたってのがあった。防犯警備も、被災に遭った分団はやったと思う。街中も沿岸部も被災に遭ったほう。一分団、三分団とか。鵜住居の六分団とかはそういう夜回りもしたことある。表に出ないけど泥棒はけっこう多かった。警察は泥棒を捕まえてるけど、消防団の見回り中に捕まえたことはない。夜回りして歩ったっていうこと。要するに夜警だね。どこでも同じだけど、人がいなくなれば泥棒が入るっていう。近場の人が入ってるてさ。町がずっと暗いから防犯はやっぱり強化したほうが。Yさんの自宅なんかそれこそ三階建てなんだけど、最初はものが皆あったんだって。三日か四日間したらなにもなかったってさ。

泥棒がいろいろ背負ってったんだ。虎視眈々と狙ってくっていう人も多かった。気をつけねばいけない。緊急で逃げれば必ず金目のものは家に置いていくから、泥棒にとってはいい稼ぎになってる。不謹慎だけど。

■やっぱり火消しがいちばんの仕事

Eさん　あと当然火事が出るので、それの消火作業はもちろんやる。もう火が出たとこの分団がメインとしてやる。もしくは周辺の分団で動くっていう。だから震災後は各分団の出動って決まってる。一分団管轄で火事になれば、一分団、二分団、三分団で集まるとかって。それを今度震災後に広くした。人が足りないから隣と協力して。

釜石の火事が少なかったのは、一分団が山の中のタンクから水引っ張ったり、そういう初期消火が早かったっていうから。そういうのがここの担当だったんです。それがなければ釜石も大火、間違いなく。やっぱり二、三か所で火の手があがっていくからね。それがすべて初期消火で対応できた。助かった。あれ燃えたら終わりだもんな。津波火災なんですね。あれどうやって火事になるんだかな。海水とバッテリーと自然発火。それに油なんか出たり。あと、そこにプロパンガスのボンベが流れついてそのガスに引火して。

■消防ポンプ車のいち早い避難がカギだった

Dさん　まず最初に言ったように、（消防）ポンプ車をいかにして早く避難させたかっていうのが今回の教訓。逆に言っちゃ悪いけど、消防署のほうはそんときに車をすべて一か所に集中させたわけだ。消防署に人たち集まっちゃったから。出払っている車をすべて一回集めて、それから。だから消防団と動きが逆だっていうか。なんで消防団は皆ポンプ車をわざわざ山にあげてるのに、消防署はそっちに車を集めたんだろうか。やっぱり、つぎの対策っていうか、行動等を統括するっていうか、そういうときの動きじゃないのかね。それで体制を立て直して、「じゃあ、どうするか?」っていう動きを考えたんでしょう。それがまさか津波が川からきたべしさ。私だって絶対、消防署のあたりまでくると思わないから。浜のほうはやられると思ったけど。たしかにくるのはわかったけど、でもあんな津波くると思わなかった。あの揺れであんなのくるんだからなぁ。

ガソリンはとりあえず優先的に提供してもらった、緊急車両はね。なんたって緊急車両だから油が手に入るわ

け。他の一般車両が油がないんで動けないんですよね。そういうときに利便性があるっていうか。ガソリンをいれることができるのが消防署のところのスタンドって決められてたからOKだったけどね、ポンプ車だけ。ガソリンがないからって、流れた車からガソリン抜いて使ったら終わり。潮水入ってるから。これは絶対だめ（笑）。

■保育園で起きた奇跡

Dさん　ここさ、保育園あるでしょ、保育園だから子どもいっぱいいるわけだ。でも津波でだれも死なねぇ。皆逃がした。たいしたもんだ。でも、保育園に避難した後におばあさんがきて、家さ連れていった子どもがいた。町のほうはこねぇと思って連れていったわけだ。それでやられたんです。行かねば助かったんです。学校に任せてれば生きてた。ここは保育士さんたちが一生懸命逃がしてやった。あとは、消防署の人たちもおぶったり抱いたりして逃げた。消防署の前だから。あとはやっぱり県立病院には救急患者が多いのかなって思った。ところが皆津波で亡くなったから、（救急患者は）さっぱりいなかったっていう。地震と違ってみんなスッーてもってかれたから…。

■震災後に去って行った団の仲間たち

Dさん　震災後、やっぱり団の人が減った。津波で被害を受けた人はもう地元にいねぇもの。内陸の仮設に入ったり、ほかの場所に家建てたり。人が戻ってこないんだもん。家族から「消防団やめろ」って言われてさ。言っちゃ悪いけど、そりゃそうだ。こっちもやめてぇと思ってるんだもん。「そんな危険な仕事するな」ってな。でも、周りがやめさされねぇもん。「俺あと一年でやめる」って言ったけど、「だめだ。あと二年やってけれ」って言われてて。やっぱり最大のボランティアだ、消防団ってのは。年俸数百円かそこらでやってる。火事が起きてひとたびサイレン鳴ればハッとすぐ行くもんね。

（二〇一六年八月一六日）

宮古市田老地区　津波犠牲者のご家族

重川希志依

はじめに

三陸地方は津波の常襲地帯として知られ、明治二九年三陸津波、昭和八年昭和三陸地震津波、昭和三五年チリ地震津波、昭和四三年十勝沖地震津波など、明治以降だけでも四回の大きな津波被害を受けています（→巻末用語解説）。岩手県下閉伊郡田老町は、平成一七年に宮古市と合併し、宮古市田老となっていました。田老地区はこれまで津波により大きな被害を受けた経験を持ち、昭和八年三月三日に起きた地震津波では、全犠牲者三〇六四人の三分の一にあたる九一一人が田老町で犠牲となりました。

繰り返し地震津波により住民の命と財産を奪われてきた旧田老町では、昭和九年に長大な津波防潮堤（第一防潮堤）の築堤に着工しました。着工から二四年という長い年月を費やし昭和三三年三月、万里の長城ともよばれる高さ一〇メートル、延長一六五〇メートルの長大な防潮堤が完成しました。

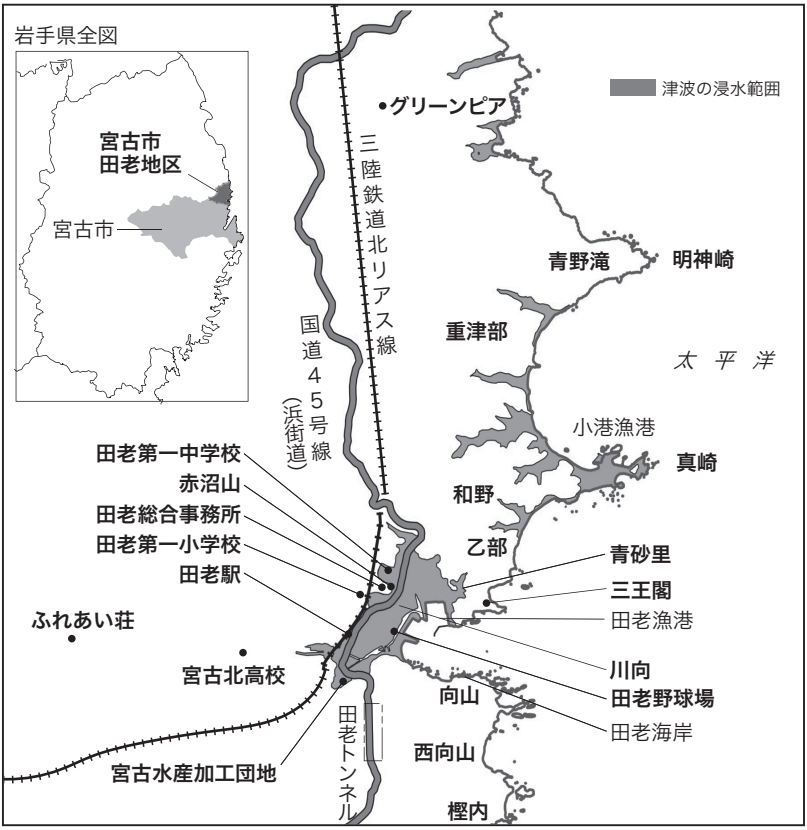
また第一防潮堤よりさらに海側に住居地域を拡大するために、昭和三七年～昭和五四年にかけて第二防潮堤が築かれました。田老町では世界でも類を見ない規模の津波防潮堤が築かれましたが、田老町の人々は防潮堤の存

在だけに依存することはありませんでした。田老町にはハード対策に加え、ソフト面での津波避難対策や防災教育に取り組んできた歴史がありました。月に一回は地域ぐるみで津波避難訓練を実施し、また地域内のいたるところに津波注意を喚起する看板を見かけたものでした。ハード・ソフトの両面から長年にわたり努力を続けてきた田老町は「津波防災のまち」として、世界中に知られるようになっていました。

東日本大震災発生当時、宮古市全体の人口は六万〇一二四人、うち田老地区の人口は四四三四人でした。また宮古市の死者・行方不明者は五一七人、うち田老地区の死者・行方不明者数は一八一人に及び、宮古市内でもっとも高い犠牲者発生率となりました。東大地震研究所の調査によると、東日本大震災による津波の第一波は、宮古市では一四時四八分に到達し、一五時二六分に高さ八・五メートル以上の最大波が到達したと発表されています。また田老地区では、到達した津波の最高遡上高が三七・九メートルにも達したことが観測されています。地域をあげて津波防災に力を注いできた田老地区で、誠に残念なことにふたたび大勢の犠牲者が出てしまうこととなりました。高さ一〇メートルの防潮堤をも越える大津波が町を襲ったことも、犠牲者発生の大きな要因かもしれませんが、一方で、津波防災意識がひじょうに高い住民のかたたちは、皆、地震発生直後から「高台避難」のための準備と行動を開始しています。

本書では、この震災によりたいせつな御家族の命が奪われてしまった一四世帯一八名のかたを対象に行った災害エスノグラフィー調査の結果を紹介させていただきます。長い津波防災の歴史のなかで暮らしてきた住民の皆さまの、災害に対する備えや地域への思いを読み取っていただければ幸いです。

宮古市田老地区概略地図（2011 年当時）



田老地区の津波防災史

1889 年（明治 22）4 月 1 日	田老、乙部、摂侍、末前の 4 村が合併し、田老村に
1896 年（明治 29）6 月 15 日	明治三陸地震津波で犠牲者 1859 人（全犠牲者 2 万 2072 人）
1933 年（昭和 8） 3 月 3 日	昭和三陸地震津波で犠牲者 911 人（全犠牲者 3064 人）
1934 年（昭和 9）	津波防潮堤（第 1 堤）着工
1958 年（昭和 33）	津波防潮堤（第 1 堤）完成、総延長 1650m
1960 年（昭和 35）5 月 24 日	チリ地震津波で小型漁船被害
1962 年（昭和 37）	二重目の津波防潮堤（第 2 堤）着工
1968 年（昭和 43）5 月 16 日	十勝沖地震津波で漁船被害
1979 年（昭和 54）	津波防潮堤（第 2 堤）完成、第 1 堤と併せ総延長 2433m
2005 年（平成 17）6 月 6 日	宮古市、田老町、新里村が合併し、宮古市に
2011 年（平成 23）3 月 11 日	東日本大震災で田老地区犠牲者 181 人

●世帯T・A　話者一名……女性（七十歳代）

■震災前のくらし

嫁いできて住んでいた家は、いまちょうど球場（田老野球場）が建ってる駐車場のあたりだったんです。ほんとの街中でしたよね。だから危ないっていうことはずっと言われていて。田老には川があるのでね。だから川沿いはくるな、山手の方向に逃げろって。赤沼山、そこに見えますけどもね、そこの赤沼山に逃げたんですけどね。

嫁いできたのはもう四〇年も前（笑）。ちょうど昭和八年（一九三三年）の昭和三陸地震（→巻末用語解説）の津波がきたのが、その三〇年以上前だったのかな。そのぐらいでした。

主人の仕事は漁業関係です。自分もね、浜に出てるもんで。二〜三年前から刺し網してましたからね。「網にかかってくる魚が違う」って、「この辺で獲れるような魚ではない」って、「南の魚だ」って、主人は言ってましたもんね。「だから海がおかしい」って。「津波がくんでないか」って言ってましたったけどもね。地震のもう二年三年前から自分で予想はしていたったんです。「魚がおかしい」って。それは常日頃言ってましたった。「だから気をつけろ、気をつけろ」って、子どもたちにも言ってましたったけどね。（主人は）五五歳〜五六歳まで遠洋漁業。それからは船をもって、この近辺で漁師をしてましたった。息子は加工場で稼いでますけども。魚のほう専門で。

家の裏にね、柿の木がありました。それが目印なの。堤防寄りでしたからね。十字路の角場でしたの、うちは。二階建てで、小屋があったり、いろいろけっこう広かったんです。住んでいた家は昭和三陸地震の津波過ぎに、土地計画で買った土地だったと聞きました。先祖は明治二九年（一八九六年）の明治三陸地震（→巻末用語解説）

の津波後に田老にきたとか。何年だかわかりません。もともとは街中に家があったみたいですけどもね。だけども広い土地求めてきたみたい。

津波前、住所は川向六五になってました。いまの球場が建ってるあたりなんですよ。ちょうどね、堤防のところに階段があるんですよね。そこの工場があったとこですね。堤防の内側の白い屋根の家でした。たまたま地震保険には入っていました。水害もしょっちゅうでしたからね、水害も入ってて、たまたまね、家財道具も入ってたんですよ。そのためにある程度保険がおりました。保険はだいじです。

■三月一一日のこと

震災が起きたときは、うちで夕飯の支度してたんですよ。だんだん夕飯なるなーと思って、早めに準備をしておこうと思って台所に立ったらば、大きな地震がきたんですよ。一回棚から物が落ちて、片づけたんですよね。で、また地震がきた。ほいで、こうしてはいられないと思って、二〜三日前に用意しておいたものをみんな風呂敷に包んで、玄関にもってきて、そしてちょうど二時半過ぎでしたからね、主人が午後に外に出てたんですよ。そのために、帰ってくるのを待って。で、主人が帰ってこなくても逃げようとは思って、それでもいちおう準備はしておきましたけどもね。

で、主人もすぐ戻ってきて、親子三人皆いっしょに逃げたんです。娘がちょうど嫁ぎ先から遊びにきてましたったので、いっしょに赤沼山に逃げたんです。道路伝いにね。皆に「逃げろ逃げろ」って言いながら。皆街中は静かでしたもんね。そしてちょうど信号の車が通るたび、（国道）四五号線に出ないとならないから、そこの歩道のとこで知り合いのお店の人に会って、その人は野原のほうにうちがあったんですよね。そのために、「うちには逃げないでまっすぐに国道に逃げていけ」ってしゃべって、私らはべつべつに別れたんです。そのとき、そのかたは息子さんがうちにいましたったでね、車で逃げて。で、私らは逃げたんです。で、ちょうど逃げる途中に

津波が三メートルとかっていう放送があったんですよ。二回目の放送が鳴ったときにはもう、大きな地震で電気消えて放送は聞こえなかったんですけどね。あのときは津波も見ましたしね、もう田老は終わりだと思ったんですけどね、私は。

■地震五分後に避難に動く

私らが家を出たのは、一回目の地震の揺れが収まって五分ぐらい経ってから。収まって五分後ぐらいにはもう山に逃げました。山にあがっても、すごい地震でしたからね。下から突き上げるような感じで、立っていられない地震でしたね。ほんとにここら辺のかたは避難早かったですね。一年に一回避難訓練がありましたからね、街の人たちはね。それがあたりまえのような感じでした。

逃げるときは自宅からまっすぐ、国道渡って逃げた。一直線。家を飛び出したとき、周りはほとんど逃げてました。ほとんど皆逃げる。どこさ逃げるの、あっちさ逃げるの、こっちさ逃げるのって、ほら、車準備してたりね。だったけども近所の人で、私らが逃げるときにちょうど車に乗ってたかたがいたんですよね。その人たちはね、どう逃げたんだか、やっぱりご夫婦で亡くなりましたもんね。なにか戻ったっていう話を聞いたけれどもね。はっきりはわからない。

当時はね（家は）中町でしたから、中町三、四人ぐらい亡くなりましたね。T・Fさんっていうかたは床屋さんしてて、国道沿いに家がありましたのね。その人、お婆さんを置いて逃げてきたってね、それを悔やんでね。お婆さん二階にあがっててって、二階さいて、置いて逃げてきたって。ずーっとそれ言ってましたもんね。私ら毎日会うんです。「見つかった?見つかった?」っておたがいにしゃべって、「見つかんない見つかんない」って。津波がなければ一〇〇歳まで生きたのになって言ってましたね。ほんとにかわいそうでした。しばらくは落ち込んでましたもんね。

で、私らは津波が終わって逃げたときは、赤沼山のところからお墓に出て、そしてお寺に行ったんですよ。で、お寺に行ったら、火事でこの辺も大変だから危ないからって、小学校（田老第一小学校）の体育館で一晩過ごしましたね。その夜は小学校に一晩いたんです。その日の夜は電気もつかない真っ暗で、ローソクの灯りが頼りで、炊き出しがあったのが一〇時半過ぎかそのぐらいだったですもんね。最初、子どもとお年寄りさんたちって決まっていました。何時ぐらいから炊き出しがあったのかね。おにぎり運んできてくれましたけどね。津波に遭わないところの部落の人たちが、おにぎりをつくったようです。たぶん、私らのとこにきたのは神田とかあっちのほうの人たちだったと思います。皆山道を歩いてきたとのことでした。

■夫は忘れものを取りに家に戻った

最初、主人は皆と一回逃げて、車椅子の叔母が途中にいましたので、それも（山に）あげて。そうしてからね、もの忘れたからって戻ったんですよ。「戻んな」って言ったんですけどもね、「大丈夫だ大丈夫だ」って。「ここまでくるに三〇分、いまの地震でまだこないからまだ大丈夫だ」って言って。「戻んな戻んな」ってね、騒いだんですけどもね、黙って戻ってったんですよ。で、そのままでした。

主人が取りに戻ったのは懐中電灯でした。それ、前の日まで包んどいたんですけど、（二日前の地震の津波が）こなくなったから荷物広げて私が置いたんで、もってこなかったんですよ。でも、あのとき、もってきたって嘘でもいいから言えばよかったのかなあと思ったりもしますけどね。たったひとつの忘れもののためにね。そう思ってます。だから昔の人から、「忘れものしたからっていって絶対戻んな」ってしゃべられたのはね、脳裏にはあったんですよ。自分もね、皆が言ってましたったけどもね。でも戻ったの、「大丈夫だ、大丈夫だ」って。まだ時間がちょっとあるって。で、うちに着いたか着かないかあたりに第一波がきたような気がしますね。だから、うちに着いてれば二階に逃げたのかなあっていう気持ちはありましたったけどもね。

（主人のほかにも）一回逃げてから、落ち着いてから安心して、まだこないっていうあれで戻った人がいましたね。堤防があるっていうのがあったと思います。堤防があるから大丈夫、こないっていうような感じ。きても水浸しになる程度っていうような感じでね。そう思ってた。まさかあんな大きいのがね、くるとはだれも思ってなかった。でも何十年も経ってるから結局大きいのがくるよって言われてたのを、「まさか」ってだれもね、思ってなかったんじゃない？　自分の判断ですよね。

■震災翌日……線路を歩いて、ふれあい荘へ

つぎの日、息子が小学校に迎えにきて。ちょうど息子の職場は田老のトンネル出てすぐのとこの、加工団地ってありますよね。あそこの奥のほうで働いてましたったので、そこから探してきたったのですよ。で、「自分はどこにいたの？」って言ったらば、ふれあい荘（特別養護老人ホーム）。たまたま、ほらあっちのほうは通るところがあるので、従業員を送っていったそうです。そして帰りに同級生がいて呼び止められて、「田老に行ってはダメだよ」って言われて、それでふれあい荘で一晩過ごしたって言ってましたね。で、私らを迎えにきて、ふれあい荘は暖かいからって言われて、で、娘とふたりでふれあい荘に行ったんです。でもほら、なかなか行けなかったんで。田老一小の体育館から出たら（余震が）くる、津波警報だってサイレンは鳴る、つぎの日大変でした。生きた心地がなかったですもんね（笑）。

息子と娘といっしょにふれあい荘まで歩いていったんです。遠かったですね。でも北高（県立宮古北高等学校）を過ぎたあたりで、ちょうどふれあい荘に行く職員のかたが車を停めて乗せてくれましたったもんね。ふれあい荘までは鉄道を歩って。線路伝いに行って、さがってね、おりるの大変でした。道路がないからね。皆さん線路の上を連なって歩いてる感じでした。宮古から歩いてきてるって言ってた人もいましたもんね。いろいろな人すれ違って。名前はわからなくても顔見知りなんで、「どこからきたの？」っておたがいに聞いて、安否を分かち合っ

て、そんな感じでしたね。娘の夫がふれあい荘に勤めていたので、ふれあい荘まで娘もいっしょに行きました。で、夜は家に帰っていきました。たまたま崎山のアパートに住んでいたので、家は大丈夫でしたから。

ふれあい荘は人がたくさんいました。大平地区の人たちとかね、いっぱいいましたね。でも暖かくて、ちょうど私らたちが着いたのは午前九時半か一〇時半ぐらいだったと思いますね。まだそのとき朝の食事もなにもないんですけどもね、おにぎりを出されたときは涙がでましたった、ほんとに。娘と私と息子と三人に二個ずつ出ましたったもんね。なにも食べてなかったから、おにぎりもってきてくれました。前の晩は、おにぎりは二人で一個でしたもんね。

■ふれあい荘での避難生活

とにかくつぎの日は安否を気遣う人たちで大変でしたもんね。名前呼んだりね、皆探しにきたり。もういろんな噂が飛び交って、生きてたの死んでたのってね。あっちさ避難した、こっちさ避難したっていうあれもあって、結局一週間後、落ち着いてきたらば、やっぱりあの人はいなくなったとかってね。結局田老の人たちは、皆高台に避難所って思ってたんでそこにね。でもそういうの建てても、ほら、いまの時代、車ですからね、行かなかったのかな？　で、知り合いの人も亡くなったしね。私の弟も亡くなったしね。

ふれあい荘では大広間みたいなとこがあって、避難してきた人たちはそこで寝起きしました。結局ふれあい荘に入所している人たちが、いろんな行事があったときに、そこでやってたんじゃないですか？　私は初めて見ましたったからね、ふれあい荘の中を。そこに皆雑魚寝ですよね。床暖でしたから暖かかったです。停電はしていませんでしたね。だからよかったですね。

いちおう私は毛布一枚と、この辺では寝んねこっていうんですけどね、そんなのをもって逃げましたったんで、掛けて寝るのは困らなかったです。そのほかに、何日か経って街に出ていろんなもの探して歩いて、そして

こたつ布団なんかを見つけたんですよね。それをもってきて敷いて。でも津波って結局、ものがすごいんですよね。濡れてるもの濡れてないもの。家が壊れて、そういうものとか。で、私らも結局濡れていない布団があったんですよね。自宅のものものが流れてたまたま見つかったんです。何日も、三日、四日、一週間は経たないのかな。五日か六日ぐらい経ったころだったかな？　そのときに見つかって、自分の布団はわかりますよね。で、そのときは夕方だったんで、それをもってふれあい荘まではちょっとなあって思って、屋根がかかってるとこの下に入れて置いたらば、つぎの日の朝になって行ったらなかったですもん。皆泥棒ですよね、結局ね。そこらに家のものがあったんです。名前書いとけばよかったんじゃないかなって皆が言ってましたけどね。

でもまさかね、こんな大きいのがくるとだれも思ってなかった。でも明治二九年、昭和八年、昭和三五年、津波がだいたい三〇年おきにきてたのに最近こないから、今度はおっきいのがくるよって親に言われましたったけどね。今度くる津波はおっきいかもしれないって。（前の津波から）年数が経ってるからって言われました。

■夫の遺体が見つかる

主人が見つかったのは一週間後でしたね。携帯とか、漁船の免許証とかそういうのが入ってたためにわかったようです。結局上に防寒着てましたったから、濡れてなかったんです。で、財布とか全部あったの。結局田老の病院に通ってましたったから、K先生がね、その当時はK先生でしたからね、「お父さん見つかったよ」ってふれあい荘で言われて。

■グリーンピアでの避難生活

私たちはずっとふれあい荘で暖かい思いをしたんですけどもね。三週間ぐらいふれあい荘にいましたね。四月一日からグリーンピア三陸みやこ（リゾート施設）の避難所に皆集まって避難するようにって言われましたけどもね。田老の人たちは全部アリーナ（グリーンピア内の施設）にっていうあれでしたからね。樫内部落に避難し

た人たちも全部、アリーナに集められましたもんね。

グリーンピアでは自衛隊が炊き出ししてくれたったね。朝昼夜ってね、温かいもの食べられました。まあ食べ物には、そんなこと言ってられないですもんね、皆必死ですからね。どこに行っても物は買えないしね。行くまでの道のりが大変でしたからね、ガソリンはないって言うしね。だから、あそこがあったおかげで私らは助かったんですよね。そんなもんですかね（笑）。

■仮設住宅での生活

そのあとはグリーンピアの仮設住宅ですね（注・グリーンピアの敷地内に仮設住宅が建設された）。仮設住宅に移ったのが、私らは六月でした。五月あたりから引越しが何件、何件ってこうありましたったけどね。結局部落ごとに割り当てになってね。だから私らは六月ごろでした。入居は息子と私だけで。娘は嫁いでましたから。息子と二人世帯だったので、二間あるおうちですね。

仮設住宅では、たまたま私は隣同士が知ってる人で、そんなに問題はなかったですけどもね。他ではやっぱりいろいろありましたね。聞こえてきましたね。私らがいた棟はよかったんですよね。元部落の人たちとかあって、そうでない人たちはやっぱいざこざがね、酔っ払って歩いたりとかいろいろあったみたいで。お巡りさんがしょっちゅうきてましたもんね。「なにかあったの？」って聞くと、「夕べ、こんな、こんなんがあったんだよ」ってしゃべられました。結局皆ストレスですよね。そうだと思います。

■高台に自宅を再建

家どうしようかって考え始めたのは、一年過ぎてからですかね。津波があって一年ぐらい経ってから、さあどこに住んだらいいか、だんだん皆があっちにうち建てるとか、こっちにうち建てるとかって言い始めて、それからですかね。どこに行くかとか、そのころはまだここ決まってなかったから。まだ山だったからね（笑）。だから、

どうなんのかなっていろいろね、一年が経ってから説明があったりなんかして。

あっちこっち探して、やっぱり息子は地元のほうがいいって言って。で、高台が決まって、ここにするっていう。息子といっしょだからうちも建てたんですけどね。そうでなければ公営住宅ですよね、年も年だし（笑）。

ここに引っ越してきたのは、去年（二〇一六年）の五月一四日。早いほうでもないですね。もう何十軒か建ってましたからね。公営住宅の人たちが早かったですもんね。公営住宅の人たちは一昨年（二〇一五年）の一一月あたりに先に越してきましたからね。一戸建ての人たちは後回しっていうか、遅くなったみたいです。

だいたい高台に、うちを田老に建てるって決まったときに、たまたまうちのいとこがハウスメーカーに勤めて、そこを紹介してもらって、建てるときはお願いしますって先に申し込んで。地元の大工さんに頼むと、何軒待ち何軒待ちって順番待ちだからね。そのために大工さんはあてにしない、ハウスメーカーを頼むっていうことにして、少し高くなるけどもそのほうがいいんじゃないかって決めて。

たまたま隣の人がね、下にいるときの近所だったの。だからおたがいにね、いろいろ話したりとかね。宅地の抽選会があったとき、たまたまその人が、私らは先に角決めていたんですよね。ここかそっちか角ね。その人たちは別のほうでしたけども、結局そこが多かったために何回も抽選して、結局そこが空いてたったんです。たまたま、そこで近所の人。

■新居での生活

地震がきたらやっぱり、いまのとこは、ここは逃げなくても大丈夫だからね、安心なんですよ。うちの息子がね「広い部屋があればそれでいい」って、「自分の部屋が広ければそれでいい」って（笑）。いとこがしょっちゅううちにも遊びにきて、だから、だいたいこのぐらいがいいかなって。だいたい前の間取りに近くして。で、狭くしたわけです。家族も少なくなったしね。昔の間取りとだいたい同じです。で、一部屋あたりが小さくなって。

仮設は狭かったですからね、広い部屋があればなにも文句言わない、自分の部屋が広ければって言ってました。いまは下の娘が仙台から帰ってきて、去年からいっしょに住んでいます。

保険は漁協では何割かしかおりなかったんですけども、他の保険がおりて、おかげさんで保険かけたおかげでね。そうでもないと、とてもうちは建てれないです。何十年先になにが起きるかわからないしね。だからやっぱり保険は入っておくべきだったなと思いますね。だから、保険が少ないっていうか、入ってなかったんで、うちが建てれるとか建てれないとか言ってる人たちがいるって聞きましたけどね。まあなにも災害がないとこはそうですよね。私らみたいに水害だなんだってあると、やっぱり保険に入ってたほうがいいねってしゃべって。

下の娘が去年仙台から戻ってきて、いま地元で仕事をしています。慣れ親しんだところから、きれいな団地に移ってきて、ちょっと落ち着かないっていうかね、そんな感じもしますけど。でもやっぱり仮設住宅にいるよりはいいなあと思いますよね。ものにぶつからなくていいからね。ものがあったりなんかするとね、やっぱりね。「仮設病」になるってほんとそう思いましたもんね。天井は低いしね、窓はね、高いし。仮設にいるときは大変だなと思いました。

結局、仮設にいたのは五年。長かったですねー。もっと早く（高台の住宅が）建つのかなあと思ってたけどね。だから皆、やっぱりお年寄りさんたちがいる人たちは待ちきれなくて、あっちこっち家建てて。田老にいなくなった人もいればね、いろいろですよね。

■母の教え……昭和三陸津波の教訓

私の実家の母親からね、小さいころから昭和八年の津波のことを言って聞かされてましたったの、ずーっと。嫁ぎ先が街なもんで、私の実家は長内の川のずっと向こうにあるんですよね。昭和八年の津波のときは、そこには津波がこなかったって親が家建ててくれたって言ってましたったのね。そうやって、私は街中に行くたびに、

津波がくるから地震がきたら逃げろって、それだけは言われましたった、常日頃。

で、うちには戻ってくんなって。津波は川伝いをくるから、長内の川が危ないから、だからうちには戻ってこないで、赤沼山に逃げろって、ずーっと言われてました。で、嫁いできてからもたまに仕事の手伝いに行くと、地震があったら逃げろとかって、そういうことはずーっと言われてましたったの。で、それが頭にあったんで。(三・一一の)二、三日前に大きな地震があったんですよね。そのときにある程度の持ち物は用意しといたんです。で、(それから)三日目でしたか、津波がきてね。で、そのときはそのもの、半分もって逃げたんです。親に言われて、ずーっと暮らしてきたからよかったのかなって、私はそう思うんですけどね。そのぐらいですね。

昭和八年の津波のときは、結局高いところに親戚の家がある人たちは、皆そこを頼って行ったみたいですけどね。だけども今度の場合は、やっぱり頼ってはいけないなと思ったもんね。結局電気も消える、なにも消えるからね。だからやっぱり避難所にいたほうがよかったのかなと思います。

道路を十字路にしたのは、昔、昭和八年の津波のとき、逃げるときに垣根だのなんだのいろいろあって、そこに引っかかってる人が亡くなったりとか、そのために田老では十字路のとこでも見渡せるようにって、区画整理をしたって聞いてました、私は。だからもう、ここからこうやって国道渡って、そのままっすぐに。そういうあれでした。だから道路どこも見渡せるわけですよね。

■田老は水害に敏感な土地柄だった

私たちのとこはね、土地が低いために水害とかしょっちゅうでしたもんね。雨が降ると水害。結局地震がくると逃げるような感じだからね、あそこら辺の人たちはね。水害もありましたから、災害に関しては敏感なんですよ、私ら。雨が降ると、もの(を高いところに)あげるとかね、いろいろそういうのは。だから雨が降ると寝られないんですよね。どのぐらい降るかなってね。だいたい四〇〇ミリ。いまはミリでないですけどね。四〇〇ミリ以

上降れば、ここは水害になるとかってだいたい把握して。おたがいにね、ここらへん近所に住んでる人たちはね。今夜一晩降ると大変だから、ものあげるだとか、そんな感じでしたもんね。結局近所づきあいにしてて、あそこの川があふれればこっちさくるとかね、いろいろ。

宮城のほうでも、皆サッとまず逃げないので、「こないと思ってた」。そいで、（地震では）おうちがほとんど壊れなかった。で、こういう家財が皆落ちたからそれを一生懸命直してるうちに、消防団が逃げろって言ってきたから逃げたとか。けっこう逃げるまでに時間がかかってるんですよ。だいたい、もう津波を見てから逃げ始めてる人が多い。それか、もうしょうがないから二階にあがって、家といっしょに流されちゃったとか。そしたら、たまたまどっかにたどり着いて、そこで一晩過ごしたとか。これだけ準備をしてサッと逃げたっていうのはあんまりないですよね。やっぱりそのへんが田老の人たちは違うんですかね。

私らは高台で津波を見たんですけどね。やっぱりね、それも二〜三日前に地震があったから。それに昼だったからよかったんですよね。夜だったらね、もっと被害があったと思う。亡くなった人がいたと思うけどね。いや、だけど、やっぱりちっちゃいころ、親から、あるいはじいちゃんばあちゃんから言われてるのがいちばんだいじみたいですね。大人になって言ってももう間に合わないみたいです。しつけみたいなところがあるからね。

子どものときにしっかり言われてるってのはだいじなんですね。頭でわかるのと行動できるのと違いますもんね。一日三リットルの水なんかよりやっぱりね、ほんととりあえずの下着の着替えとかね。他のものはもたなくても下着はね、救助や援助があってもやっぱり何日かはね。上着は何日着てもね、あれですけど、下着だけはやっぱりね、替えないとね。

■用意していた備え

なんかあったら持ち出そうというものは、いちおうね風呂敷に包んで。そして夏になれば別なのとか、一年二

回取り替えて。親に言わせれば、いまの時代なにももって逃げなくていいから大丈夫だからって言ってたけども、やっぱりどこに逃げるのかわかんないから、最小限度のものは。一日ぶんの子どもたちの下着、自分たちの下着とかね。下着とあとは上さ着るもの。

田老地区でも、ものもたないで逃げた人もいましたけどね。私はね、子どもがちっちゃいとき、ほら地震で逃げたりなんかりしてだったから、寒いときにやっぱり上に羽織るのがないと大変だと思って、結局冬、秋口になれば冬物の準備、春になれば結局長袖とかね、薄いものにして準備をしておきました。いつも風呂敷に包んで印をつけて。黄色い風呂敷でね、この風呂敷をもって逃げれば大丈夫って、だれでもわかるように。たまたま黄色い風呂敷があったんでね。

もち出したものにホッカイロ入ってましたった、たまたま。災害が起きた日は寒くなるって言いましたったもんで、親がね。昭和八年の津波のときもそうだった。つぎの日雪が降ったからって。だからまさか三月にはだれもくるとは思ってなかったけども、やっぱり寒いときにきたら、子どもたちが大変だなあと思って。なんぼ暖房施設があるところにいたってね、電気が使えなければね、それまでですから。そのために、ホッカイロができて、ホッカイロ入れるようになったとか、そういうふうにしてました。それは考えて。皆はそうでない人いっぱいいると思います。

たまたま私、それ綿入れて、この辺では「はんちゃ」って言うんですけどもね、それをもって逃げて。そして津波が終わって逃げてたらちょうど雪がパラパラって降ってきまして、寒くなってきましたもんね。そしたら知り合いの人が「寒い」って言って、その人にそのもってたもの着せて「貸してやるから」ってしゃべって、「返さなくてもいいから」って言ってべつべつに別れたんですよ。おたがいに家族の……その人は学校に孫迎えにって。で、そのまま。だから結局着の身着のままですよね。寒い。で、そのときちょうどホッカイロもってたんで、

子どもにホッカイロ開けてやって。

水だとか食べものだとかはもってなかったんです。飴だけはもってたんです（笑）。飲みものっていうのは頭になかったんですよね。でもたまたま飴はあったったんですよ。そのぐらいですね、もって逃げたのは。あとは通帳とハンコとそれだけ。ま、通帳はなくてもね、ハンコだけはだいじだと思ったんですよね。なにがあってもハンコがないとダメって。結局書類つくってハンコもってきなさいって言われても、皆が災害になってるからないんですよね。だから「（ハンコ）つくるまでに何日かかります」ってしゃべられると、やっぱり書類が遅くなるっていうかね。だからやっぱりハンコはだいじだったんです、その当時はね。で、ハンコはちょうどもってましたったんでね。どこに行ってもお金さげられるって、二〜三日は銀行下ろせなかったみたいですね。やっぱりハンコあったので、手続きが助かりましたね。そのぐらいですね。

■防潮堤に頼らず逃げる

結局（長い間）津波がこなくなったからね、堤防（防潮堤）の外側にもうちが建ちましたったもんね。空き地もほとんどなくなるっていうくらいにね。堤防の外側のうちは、堤防より後から建ちましたね。後からですけど、外側のうちにももうひとつ堤防つくったじゃないですか。外側の堤防はちょうど（昭和）五十何年あたりかな？

外側の堤防よりは、家のほうが先にちりちりと建ったね。家が建ち始めて、守んなきゃいけないから外側の堤防をつくったって話を役場の人から聞いてるけどね。うちが建ち始めたときね、結局高度成長で皆がうち建ててね。堤防の外側に家建てた人もやっぱり田老の人ですね、結局。そういう人たちがどんどん建てて。観光ホテルが建ったからね、周りにほんと建つ。

懐かしい、昔の写真見るとね、懐かしい。昔はね、堤防もマラソンとかねいろいろありましたったからね。やっぱり津波が三メートルではこないなと思ったけども、水浸しで夕方は帰りにいいんでないかなあと思った。やっ

ぱり間違いでしたね。やっぱり想像以上の津波でしたからね。だれも計ることはできないですもんね、こればっかりはね。だからやっぱり逃げないとね。

娘やら息子やら、その孫ができたら津波のことはさんざん伝えてかないとね。ずーっとね、子どもたちにもね、出るときはちゃんとして、着替えはここ、ちゃんと、それは思ってましたね。だいじなのはここっていうようにね。

でも、ランドセルは背負って逃げなくても大丈夫だよってしゃべってね。結局ランドセルっていうのは、学校の道具っていうのは、学校になにかね配布されるとね、だからそのまま逃げてもいいから。学校からくる途中に地震だ津波だって言ったらば、役場に向かって逃げろって。結局役場に逃げればいろんな道路がね、山道がありますから。そうすればどこかで家族と会うから、結局逃げる場所はだいたい赤沼山って皆で決めてましたったからね。だからそこさ行けば会えるっていうね。それは常日頃言ってましたね。いつ起きるかわかんないですもんね。天災は忘れた頃にやってくる。命はでんてんこ、自分の命は自分で守る。先人の言い伝えです。

（二〇一七年三月三〇日）

●世帯T・B　話者二名……祖母（八十歳代）、孫（高校生）

■震災前のくらし

祖母　おじいさんが昆布をやっていて、それを代々継いでいたの。じいちゃん（夫）も田老生まれの田老育ち。じいちゃんは大洋漁業に、船に乗って遠洋に行っていた。娘は同じところにいるからね、それでもふたり、娘と息子。孫は中学校まで娘のところに置いて、高校になってから私のとこにきたんです。

住んでいた家はけっこう大きな家だった。そこに三人で暮らして。その家は結婚したときから住んでいたので、じいちゃんのお父さんの代から住んでいたんです。建ってから五〇年、六〇年ぐらいになるでしょう。娘がやっぱりその家と同じ年ぐらいだからね。それこそサッシでない、昔のガラスね。だんだんと、こんな風に隙間ができてね。だからサッシにして、トイレを水洗にした。だれもいるわけでもない、三人で住んでいたね。

私は地震直前の三月八日に退院したばかりだったんです。兄嫁さんのお墓参りに行ってたときに転んで、腰を痛めてしまって。二〇日ぐらいだったか田老診療所に入院していてね。九日のときも、お昼に地震がありましたがね。なんとかかんとか、だれもしてくれる人もないし。この人（孫）、学校だからね。九日に地震がきた後、津波の警報が出たって走ったんだったっけね。（九日は）三時半に警報も解除になっても（息子が）帰ってこないなと思っていたの。家はほんとうに三王閣（注・震災前に廃業、解体された国民宿舎）さんがあるところだったんです。海岸端で。私は浜に行って、船がきたんだろうか行ったんだろうかっていうような感じで、行ったりきたりして、見てもねえ。そうしたら三時半、四時ごろ（帰って）きたったんで、なにしてでてきたのって言ったんです。いつに解除になったっても（帰って）こないしって言ったら、津波のようなあれがあったんだと。そして、網が破れたって。鮭の網、稚魚を入れてる網が。それを直して手伝ってきたって。姉の旦那とS君としてやっていたのを、手伝ってきたっつうことだったんです。あぁ、そうか。それではいいっていうことで、そしたらそのまんま、そして「ご飯食べよう」って。

■三月一一日のこと

祖母　「ばあちゃんっな、一四日からワカメ採るから」って。「ばあちゃんは岸壁にこなくてもいいから」って。「退院したばかりだし、こなくてもいいから。おにぎりつくって、もってきてちょうだい、岸壁に」って、（息子が）そう言うんで、うんって、つくっていたんです。

そしたらあんなことなって。さあこれで大変だ、いやいやあの地震ではね。「ばあちゃん早く逃げねば、これは津波がくるから早く逃げろ逃げろ」って。（私は自分ひとりじゃ）車にも乗れなかったんです。トラックにもね。そしてば、（車に）押し上げてもらって、そして乗って、娘のとこさ、ホッチョ（地名）っていうところにね、逃げて。津波がきたって言ったって、それのストレスでほんとうにひどい目にあったんです。下痢がすごくなって、ほんとうに恥ずかしい話ですけどね。なにも聞けば私ばかりでない、下痢になった人たちがたくさんいるみたいだね。それが治らない、治らない。診療所に行ったって、薬いただいて飲んでも治んなかったんだ。二年も三年もね。

孫　ぼくは小学校（宮古市立田老第一小学校、当時五年生）にいました。ちょうど体育館で、六年生の卒業式の準備だったかな。五時間目ぐらいで、皆で「卒業式の準備がんばるぞ、おー」みたいになって。そのときにちょうどグランときて。体育館のすぐ近くに、たしか図工室っていうか、図工やるような教室があって、そこの机の下に隠れました。

揺れが収まったら収まったで、校庭に行って、逃げて、皆で集まって。校庭集まって、また余震とかでふつうに震度六とかっていうぐらいの地震が。ほんとうに五強とか六とかっていうのが頻繁に揺れてたんで。そのときは津波がくるとかどうとかっていうのはなくて。それで津波がきたっていう知らせが学校に届いて、ここは逃げなきゃ危ないって。校庭に集まっていたのは地震が始まってからはけっこう経ってます。そこにいた時間は、余震とかもふつうにきてたんで、けっこうあったのかも。たぶん三時半ぐらいになって、（津波が）きてるのが見えて。地震から三〇分、四〇分経ってから（山のほうへの避難に）動いたのかな。砂煙あがって、電柱倒れたってなって。間一髪な感じですね。

小学校の裏のほうが山なんですけど、その山のほうに逃げて。最初は、津波きたってなったら、皆が「津波きた」ってだれかが騒げば、「うわー」って走って逃げてるんですよ。先生たち、まだそのときは「皆落ち着け」とかっ

て騒いでるんですけど、皆それでも走って逃げてくし、皆バラバラに逃げて行くんですけど。それで、ここ落ち着かなきゃダメなんだよなって思って、周り見渡してみて、まだバラバラに行ってるし、先生たちもまだ「落ち着け」って言ってるから、いいかなっていう。それで、ちょうど砂煙があがってまして。その砂煙があがったのが見えて、これはいよいよやばいってなって、先生たちもいよいよ「逃げろ」って騒いで。

裏のほうの山に、皆で逃げて、逃げて。皆で点呼をとって。たしかそのときひとり家に帰ったとかで、地震が起きる前に家に帰ったかなにかで、津波にのまれて亡くなったっていう人が、たしかひとりかふたり聞いた覚えがあるんですけど。山に逃げて、その山のほうにまでは津波こなくて、それで収まるの待ったんですけど。戻って見ると、校庭が「こんなに水浸しだっけか」ってなって。校庭に戻る前に、たしか防潮堤って、津波越えたっけっていう情報が入って、それで家が防潮堤のすぐ近くだったんで「終わったじゃん」ってなって、「のまれたのまれた」ってなって、もうそのとき笑うしかなかったですけど。後から知ったのが、その山の反対側にまた海岸があったらしくて、その反対側からもまた津波がきてるっていうのを聞いて、ほんとうに危なかったんだなって思いました。三王閣っていう展望台があるんですけど、その高いとこに逃げたっていう人もいて。けっこう急な坂なんですけど、危なく足のまれたっていう人も。あとは出羽神社っていって、青砂里(あおざり)地区に神社があるんですけど。そこにあがって、神社まで浸水してきたっていうのを聞いて、波が相当高かったんだなみたいな。

小学校は校庭は水浸しだったけど、体育館は大丈夫だった。水浸しっては言っても、「ほんとうにこれ、津波きたのかな」っていうふうな感じで。でもヒトデとか、ここ転がってるし。津波、いちおうきてるのかな、みたいな。近くに川が流れてるので、ただそこをどっかからきたのかっていう。

その後、体育館に戻って。体育館ではたしか皆で集まって、何人か家族がきて、それで家に戻ったりとか。自分もその従兄弟も、おばちゃんの家に行って、その一晩過ごして。それからたしか二晩いたかな。おばあちゃん(の

避難）は、ちょっと早めだった。話にしか聞いてないんですけど。たしか、まずお父さんが、おばあちゃんを車で従兄弟の家まで送って、それから消防団に行ったっていう話だったんで。おばあちゃんはよっぽど早いうちから逃げていたと思います。

■翌日からの避難生活

祖母　息子に車で娘の家に送ってもらって、その後グリーンピアに避難しました。だけどグリーンピアに私がいられなくなったの。下痢がすごくなって、トイレが大変で、だだ漏れだったの。グリーンピアのトイレの水を流されないの、どうのかこうとかって言って。水は流れない、電気は止まる、電気は消える、やっぱりどこもねえ。そのためにどこにもグリーンピアにもいられなくなったわけ。グリーンピアに二日、三日くらいいてから、ばあちゃん、青野滝っていうとこ一か月ぐらい行ってきたな。青野滝っていう、グリーンピアからちょっと離れたところに車で移動しました。連れてっていただいたんです。娘の旦那の実家なの。そこに行って、娘が孫さんが看護師してて、あそこに行けっていうことで。

■父（息子）の遺体が見つかる

孫　青野滝に行って、しばらく経ってから、お父さんらしい人が遺体で見つかったっていうのを聞いて。昔のローソンのあたりから、たしか南だっけ。三〇〇メートルくらい離れたところにあったって言って。

祖母　息子には、「消防団には入るな、入るな」って、私は言ったんです。私が年とってるから、やめてって言ったの。そしたら「ばあちゃん、やめてったって、人も足りないって言うし、名前だけでもいいから入ってくれって言われた」って言うわけ。そして入ったらば、火事が出たってば、サイレンが鳴ってば、（息子は仕事で）沖に行ってたのが、また（消防団の作業で陸に）戻ってきて。仕事もしないで。「大丈夫、火事はこの辺でないから」って言って、また沖に行って仕事をする。そうしていたんです。

入るなって言うのを入って、ほんとうになんともならないし、あのときも結局なんだか話を聞くに、（防潮堤の水）門を閉めに行くに、青砂里のほうの門は閉めやすく閉めたって。ただ、ここの漁協のとこの門は閉まりがたかったっていうようでした。それを閉めあげて、閉めたらば初めて走って漁協（の建物）にあがる人たちは四人ぐらい、いっしょに行った人たちが、四人ぐらいいたそうです。

Sさんと、お父さん（息子）が流れたんだな。二人は助かって、四人のうち二人ずつ、お父さんも門を閉めたって。門を閉めたのに、くるわけ、車が。ここは門は閉まったからと、合図しながら（息子は）堤防を走っていたようだった。門が閉まったからダメだから、こっちに行けっていう意味で走ってたようだった。ここはダメだからと手招きして走っていたって。そうしてるうちに津波がきて、あの堤防越えたからね。そう聞いて。あとの人たちは、それこそ高いところに逃げた人があれば、また漁協にあがった人は助かったとかね。（息子は）なんて運がなかったなと、そう思う。やっぱりね。

■娘の家での生活から仮設住宅へ

祖母　孫は娘のところに置いて、そこに私も行ったの。娘のところには孫が四人あって、それに父さん母さんって六人いたな。そして二人加わって、八人になったわけだ。ひとつの部屋をあれされて。なんぼ娘でも、やっぱりよその家ですもんね。そしてそのまま一年四か月ぐらいだか、娘のところに世話になっていたんです、孫と。そしたけども、ひとつのテレビを皆で見るったってこれも大変なんです。それならば仮設でも空いたところがあったら、そこに入るっていうことで。そして仮設に申し込んで入れていただいていたんですの、一年四か月前だったかな。グリーンピアの仮設住宅で。

■地元のみんなで瓦礫を片づける

孫　小学校五年生の三学期で地震が起きて、学校に行くまでに三か月、四か月空いて。それまで皆バラバラで避

難所いたり、その間はただ安否を確認したりとか、情報を回すとか。学校っていう雰囲気じゃないし。まずは勉強よりも安否の確認と、そういう情報の共有とっていうことで。

震災から四か月ぐらい、七月までぐらいかなあ。それまでは残った家の人たちで、生きてるっていうか残ってる人たちで、自分たちでなんとかしようって。瓦礫とかもほんとうに家のすぐそこまできてたんで。それを自分たちで片づけて、道をつくろうってなって。そういうのには、まだ小学生だったけど、ずっと手伝ってやってました。従兄弟の家にいるときだったんですけど、自治体っていうんですか、そこの人たちはもうほとんどの人が参加して。小学生でも高校生でも、皆で片づけて回った。人が足りないんで、だれでもふつうに（手伝って）。このぐらいの木の板とか重いものとかは大人に任せて。あとは釘とか転がってても、それ刺さると破傷風になるって言われるんで、それをひとつひとつとっていったりとか。

ただ家の前に瓦礫がある、とりあえず目の前に瓦礫があったから片づけて、みたいな。近くに川があって、その川のほうに（瓦礫を）落としてみたり、まとめてみたり。あとはちょっと広場みたいなとこがあって、そこにまとめてみたり。なんとか国道のあたりまでそうした作業が終わったぐらいのときに、やっと町全体っていうか、町のこの防潮堤の奥のほうの野原地区っていう、そっちのほうの瓦礫が全体的に見えて。こんなふうになってたんだって、そこでやっと理解する。それまでは全体見渡せないぐらいだった。

そのときに見たのが、近くの山で火事が起きてて、「これ家までこないよね？」っていう不安とか。こっちには瓦礫しかない。ちょっと暗くなってくる時間帯にそういう景色だったので。それで余震とかくる、電気も点かない、水もこない。心がつぶれちゃいそうだった。それでも意外と平気で、大丈夫で。そのときにもうすでに（気持ちのうえで）「地震が起きたわ、地震か」くらいの感覚で処理できてたのかなって思うんですけど。「津波、きたわ、瓦礫だ」「火事起きてる、なんだろう」っていう感じで。

■学校生活が再開する

孫　小学校まで行くと瓦礫なんかはなにもなかったんです。小学校は学校始まったら、校舎は全然使える感じだった。中学校はもうほんとうに一階とかは浸水して、ひどくて使えなかったんで、中学一年生とかが小学校の余ってる教室を使って、ここ中学生いるからねみたいに。その隣で六年生、五年生っていうふうに。北高（県立宮古北高等学校）も川のほうはあがって、瓦礫とかもけっこう奥まで行ったんですけど。

（小学校に）集まって、先生や友だちと顔合わせたのは、具体的には覚えてないですけど、けっこう後だった。先生も一回訪問しにきたっていうことはあります。そのときは、「ああ地震」「津波」「火事」って、淡々と客観的に見てるみたいな気持ちだったけど。どっちかって言うといまのほうが「もう昔の景色って見れないんだな」「前の家があったら、たぶんこんなことしてるんだろうな」って感じたりして、ちょっとつらいかな。

勉強の遅れとかっていうのは、おそらく大丈夫だったとは思います。とくにはそんなに影響ない感じ。少なくとも高校の受験勉強とか内容には差し支えなかった。たぶん大丈夫だったと思う。

■祖母と孫、災害公営住宅でふたりの生活

祖母　孫は小学六年生・中学校が終わるまで娘のところにいた。そして高校になって、どうするって相談に。高校になってこっちに、ばあちゃんのほうにくるって。きてもいい、ただ、ばあば、宮古高校っていえば早く準備しなければならないし、北高ってば歩いても行ける。お父さん（息子）がいれば、あれだったと。お父さんもいなくなったから、どこに行きたいって言ったって行くことができないんです。少しぐらいはこうして歩いているけど、お家の中では歩くけど、外では歩けない。そして、そのままここ（災害公営住宅）に入ることに。

なにもこんな年をとってから、こんな思いするのかなと思ってね。この人は北高でいいって、北高に入る。そうすれば、ばあちゃんが遅くでもまずいいっていうことで、北高に入ったんです。北高で（進路は）どこに行く

のっていう気持ちは、私にはあったんだけど。やっぱりここにくるって言えば、いっしょに住んでれば、支度して食べさせたいなと思って。

北高に入ったおかげで、生徒会長だなんだ、それで忙しいって。ほんとうにまあ。ほんとうに皆さんにはほめられるようなことしております。勉強はもう北高では一番だから。それこそ生徒会長してるって。そうすれば夜遅くまで。

（孫は）八時ぐらいに学校から帰ってきて、そこでしゃべるんです。私が待ってて。今日はこうだとかああだとかって、話を聞かせるんです。教えるって、この年寄りさ。学校のことも、先生がこうだとかああだとか皆聞かせるの。そうして笑ってね。年金より、その日のこと話してくれんのが楽しみっていうか。いまどきなかなか見かけないぐらい、りっぱに育ったって、私もそう思う。私でもりっぱだと思っております。自分の孫ほめるわけでないけど。なんだってこの人、赤ちゃんから育てたもの。

孫がすっかりじいちゃん（夫）に似てんの。皆さんに人がいい、じじいの孫だって言われる。ほんとうにね、話をすることも、やっぱりそんなふうに見える。どんなふうにしたときか、じいちゃんを思い出すがね。じいちゃんに似てきて、しっかり者だ。しっかり者、ほんとうに。そして高校に入学するときも、生徒の代表で読んで。そしたら私の手を取って、泣いた人もあれしたったの、漁協の組合長さんの。まるで上手だったって、泣いて。私の手取って。そしたら今度は、今年、卒業するときに答辞読んだって。生徒会長だから。

この孫は盛岡に行くことにしたと。受かるか受からないかな。岩手県立大学。総合政策学部があっから。北高で受かるかどうか。それこそ、どこに行っても恥ねえような孫だよって。お父さんが見守ってるんだよって、そっと言っておりますの。お父さんが今日はどうだったか見守ってんだからって、そして私は言うし。目には見えなくても、お父さんが見てるっからって、そう言って。

孫　お父さんにはまだまだちょっと届かない。

祖母　お父さん（息子）もやっぱり北高に入ったんです。お父さんが入ったときは二〇〇人ぐらいの生徒数だったんです。先生からは大学に入れるって言われたけど、その当時はまだあんまり北高から大学はいなかったようだね。北高で大学っていったらそうとうトップぐらいの成績じゃないと入れない。北高はちょっと周りの学校よりも少しゆっくりの授業やってるんで。

孫　大学でとくにやりたいってことはないんですけど、とりあえず学ぶだけ学んで、また戻ってきたいなって。いまのところ市役所とか目標にしてがんばってます。

■息子が亡くなって

祖母　こうしてみれば、こんな思い。他の人たちからは、「消防で死んだんで金はいっぱいもらってるべ」って言われるけど、いやー。いろんな賞状とかがきたけど、なにになっても死んではダメ。

息子は消防団に入って一年経つか経たないかだったの。これは総理大臣からの叙勲。こちらが知事さんから。これは水防管理、国土交通省だな、水門管理のお礼ですね。役所は縦割りだからいろんな役所からくるね。全部、平成二三年三月一一日の日付になってんです。第三〇分団でした。お父さんの場合はほんとうに保険もかけてだったし、船も、消防で死んだために金がおりたべって言われる。後見人がね、いまはHさん、弁護士さんなってる。金額が大きいから、孫の後見人になって。お金のことは親戚の人とかではなく、他人が言うんですよ。だからあんまりいいもんでないですよ。学校の友だちはそんなこと言わない。

■震災前の防災教育

孫　田老には津波が昔にもきてたっていう町なので、学校ではけっこう津波の話とか地震の話を教えてもらったりというのはありました。訓練もやってました。毎回毎回（避難するまで）三分くらいっていう記録出て。それ

で後は、もし皆学校にいなかったらみたいな（想定で）。

田老ではたしか「津波てんでんこ」っていうのがあるんで、言い伝えが。バラバラに逃げてでも生き残れっていう教えなんで。てんでんこのことは、生まれて物心ついたぐらいから、皆からもう言われて記憶があったっていうか覚えてる。

祖母　昭和三五年（一九六〇年）のチリ津波（→巻末用語解説「チリ地震津波」）はこの眼で見てました。けど、防潮堤があるおかげで助かったって報道されたって。チリと昭和四三年（一九六八年）の十勝沖（→巻末用語解説「十勝沖地震」）ぐらいですね。間にあった。

■いまは「復興」のその先を見ている

孫　僕には、田老はかなり復興進んでるんじゃないかなっていうふうに見えます。むしろいまは震災っていうより、この間の宮古の台風の被害のかたのほうが、そっちのほうが（被災の印象が）強いかな。もう震災だって騒いだり言ってるのは、宮古だとほとんどないのかな。あそこと、鍬ヶ崎、金浜。金浜って津軽石と磯鶏（そけい）の間ぐらいなんですけど、あそこだけ防潮堤が壊れたんです。隣の高浜は防潮堤が残ってたから家も流されてない。

友だち同士でも、もうこの復興っていうか、そういう話はあんまりない。（するのは）町の話とか。田老、将来どうしていきたいみたいな。最近だと総合事務所のほうから、新しくできる道の駅の愛称はなにがいいかっていうアンケートがでてきてみたり。宮古市だと、「まちづくり市民ワークショップ」っていうの、ずっと行ってたんですけど。それで町づくりの、なにがあったほうがいい、これがあったほうがいいっていう話し合いをしてきてたりするんで。そういうのに参加するのは楽しいです。面白い。いろんな人がこの先どうしようかって、ある意味ではワイワイ考えてるっていうところが。こんな町になるのかなっていうのが、想像してると楽しいな。これから町をつくっていかなきゃいけないから。

■将来のこと

孫　友だちでは、将来は地元に戻ってきて働こうっていう人たちはいないです（笑）。そんなに聞かない。大学に行こうと思った瞬間に地元を離れないと。この辺の地域は宮古の短大しかないので、大学行こうと思ったら（そうなる）。友だちの間でも「宮古になにがある」「なにもないでしょ」っていう話になって。だったら盛岡とか仙台とか。東京は人が多すぎるからとかなんとかっていう理由。だから皆、仙台に行くんです。海とか自然もあるし、人もいいし、食べ物もおいしいって言うし。

僕が田老に戻ってきたいと思うのは、なんとなく田老に愛着があるから。そんなに嫌いじゃないっていうか。純粋に、なんとなく純粋に田老がいいなって。あとは人さえいれば、どうにでもなるような。故郷っていうのもあるし、単純に好きなんだ、きっと。他の場所に行くよりは、田老のほうがいいかな。落ち着くし。

（二〇一七年三月二九日）

●世帯T・C　話者一名……男性（四十歳代）

■震災前のくらし

両親が店をしていたのは新しく球場（田老野球場）ができた、あそこの三塁ベンチのあたりです。この赤い屋根。住まいと店がいっしょでしたね。両親はそこに住んでいて、私たち一家もいっしょでした。実家の商売は米屋をやっていました。あと雑貨とか、煙草売ったりとか。だから地元では顔が広いですよね。

親父の代もそこなので代々です。うちの母親のおじいちゃん、その前から田老のあの場所で米屋をやっていま

した。岩泉町の浅内っていう、ちょっと山手のほうなんですけど、初代のおじいちゃんはそっちから田老にきて米屋を始めたようですね。戦前のことですね。

私はその場所で生まれ育ちました。三人きょうだいの真ん中です。姉、私、妹。歳も二つ違いで。親父も消防団員でしたので、やっぱり火事だなんだっていえばすぐ出て行ってやってました。俺がちっちゃいときから。もう皆、名前と家族構成まで地域のことわかりますよね。米屋は私が継ぐ予定というか、まだ親父が元気でしたし、私も会社に勤めてましたので、ゆくゆくはっていう感じではあったんです。うちを継ぐために、私も東京で勤めてたのを戻ってきて、こっちに勤めてってやってたんで。ただ津波でこんなことになって。嫁は生まれ育ちは宮古の市内ですね。市内にいて鍬ヶ崎のほうに引っ越して電気屋をやっていました。

■三月一一日のこと

震災が起きたときは会社の事務所にいましたね。宮古の藤原埠頭というとこにある運送会社なんですけど、震災前も勤めていた会社です。そこで、事務職なもんですから事務所のほうにいまして。ずっともう止まらない地震でした。

これはちょっとふつうじゃないっていうか、「これ津波がくるな」ってすぐ感じて、何人か会社の上司とか同僚とかにも声かけて飛び出して。あと現場のほう、仕事してる社員とかにも伝えに行ったんですけども、やっぱり六分ぐらい揺れましたから、なんともこれ尋常じゃないっていうことで、すぐ戻って「もう逃げましょう」と。車のラジオで最初三メートルという情報も聞いたんで、ほんとうに津波くるんだなということでですね、皆に声かけて会社の車で避難行動に出たんですけど。

宮古に逃げたんですけど、やっぱり田老が心配。両親がいて、商売も気になって田老に行こうかって。私の子ども、ちっちゃかったんですよね、まだ小学校前の女の子ふたりいたんですけど。嫁の実家が宮古の鍬ヶ崎って

いうとこにありまして、まだ子どもがちっちゃかったんで、あちらのお義母さんに見てもらってました。そのときもそちらにいたんで、そっちも気になって、そっちも心配になって、「あー、これは早く逃がせなきゃ」と思って走りながら「あー、どうしよう、どうしよう」って。

■子どもたちを高台に避難させる

でもやっぱり子ども心配になって、子どものとこに駆けつけたのね。したら、やはりおりまして。あちらのお義母さん、電気屋やってたんで従業員さんと四人で、なんかもう「どうしよう、どうしよう」って感じだった。もう大津波くるから、早く高台に逃げなきゃなんないって思ってて、子どもふたりは私の車に乗せてあがってったんですよね、高台。向こうの親戚のおばあちゃんが熊野っていうところにいたんです。鍬ヶ崎の山の地区なんですけど、そっちにいたんで、なにかあったときはそっち逃げようって、あちらのお義母さんに言われてたんで、そちらに子どもたち連れていって。で、お義母さんたちはあとからやっぱり逃げて。

従業員さんとお義母さんは、別に。もう声かけて、「早く行きましょうね」って、私は子どもふたりを車に乗せて。で、その熊野のおばあちゃんのとこに降ろして、で、それから田老、今度は家に向かったんですよね。まあ、ただ、もう田老行ったときは津波きてるだろうなと思いながら。そうしたら、やはり田老のトンネル出たら、もう津波入ってきて大変だった。前の車も止まってて。だから、そこで時間使ったんで、逆に田老に入ってこれなかった。むしろ、これ早かったら町に入れて、親が心配とか家に向かったりとかで私も巻き込まれた可能性もあるんですけども。その感じできて。ただ、もうそのときから「親たち逃げてりゃいいな」っていう、そればっかり心配だった。

子どもを避難させたときは、まだ津波はきてなかったと思うんですけど、そこから国道までまたあがっていくような道路ですから、全然もう津波の見えない感じで。あがって四五号線出て、田老向かって田老おりるまでわかんなかったですね、津波はきてるかどうか。

津波がきてから、前も車止まって渋滞しましたんで、入っていける状態じゃなかったんですね。それで、一時間ぐらいして収まったんですけど悲惨な状態。そこにずっといるわけじゃない。（私は）消防団員ですし、消防団で皆集まって活動してるなと思って、歩いて帰ってきたんですよね。ただ、もうふつうには歩けないんで、線路にあがって、線路から田老の小学校の避難所に向かいました。親が心配だったんですが、小学校のところでは見た人がいない。で、お寺にきて、お寺にも（いない）。して、ここ（現在の自宅）に。

■家族の安否

T・C家の先祖が避難所としてつくってたとこなんですよ、ここは。これ、震災後直したんで、きれいなんですけど、もっと古かったんです。女性のかたに貸してたんですけどね、ここ。で、なにかのときはここへきて、ここ避難所だからっていうことで、ちっちゃいときから言われてたんですけど。ここに避難したっていう経験はないです。いまいろんなとこに避難所ができたからね。で、ここにきてもきてる痕跡もないし。この辺は赤沼山っていうんですけど、ここも避難場所になって、皆あがってくるんですけど、だれも（親を）見てもいないし。「あれ？あれ？」って思いながら、あとはもう消防団の人たちといっしょになって、捜索活動とかの活動に入ったんですけどね。

嫁は宮古の図書館に勤めてましたんで、ずっと内陸のほうに入ってるんで大丈夫だなと。で、大丈夫だったんです。あとから、音信不通になったんで、ちょっとなかなかだったんですけど、ちょうど市の施設なんで、市の職員の人から「奥さん大丈夫ですよ」って聞きましたんで。そこにいれば全然問題ないなっていうのはずっとわかってたんですけどね。

あとは嫁の両親。お義母さんは大丈夫だった。お義父さんも、電気屋で配達かなんか行ってて、戻ったのかな？戻って、津波きたときには家にいて、二階の部屋の電灯につかまってですね、津波かぶっちゃったんですね。で

も大丈夫だったんですけどね。そんなこともある。あとから聞くと向こうのお義父さんも大変だったっていうことでした。

■消防団としての活動

当日の夜は総合事務所に集まって。そこの二階か三階か、そこで寝泊まりするように分団長とか幹部が市の人たちに話して。山火事も起きましたので、その消火とかもあるし。とにかく夜中こうやってもっと休んだりして、朝から消火活動だよということになりましたですね。でも、子どもだけはとりあえず安全な場所に移してたから、それだけは大丈夫だな、子どもだけは自分の手でやったから大丈夫だなっていうのは確信してました。

震災の日当日も消防団活動を始めましたね。もう暗くなってくる時間ですけども、まだ真っ暗じゃないですから。皆でいろいろ声かけたり。下で津波きた家の二階に取り残された奥さんがいたんです。その人をあげたりとか、そんな。あと、もう水浸しでしたから入っていくことできないんで、つぎの日だなっていう感じで。（消防団の）屯所、この下だったんですけども、もう屯所もやられまして。ただ建物自体はある程度残って、三階建てでしたんで三階のものは大丈夫だったのもあるんですけどね。

翌日からはもう消防団活動、時間関係なくですね。最初はやっぱり捜索活動。自衛隊さんがつぎの日ぐらいからもう入ってきたんで、いっしょに捜索活動ですね。初日はやっぱり地元の消防団で見て回って、あと山火事だったからそっちのほうに時間費やしたですかね。

常備消防（＝消防署）もやられまして、消防ポンプ車もやられて。乗っていた若い三人で見回りをしていたんですが、津波かぶって亡くなられたんですよね、その若い署員のかた。なので、そっちも大変だったんですね。田老分署ですかね。ですから、もう分団しかいないわけですね。分団のポンプ車とかは他の団員が気をきかせて総合事務所にあげて。それで、なんとかうちのは残ったんで、分署もやられちゃったんで、うちのポンプ車使っ

て。無線とか全部やってましたね、残った署員さんも。

山火事の消火の水は、川が流れてるんですよね。川からとって、ずっと山のほうまでホース延ばして上まであげて。相当つながないと、かなりの本数もってあがりましたね。そうしてるうちに宮古のほうからの消防団の人たちも応援にきてくれて、それでもうなんとか消せたような感じでした。鎮火までに四日とか五日ぐらいかかったはず。ヘリで上から消火もやったりとか。それでなんとか消したっていう感じでした。

■家族との再会

家族で避難所とかは経験してないんです。私だけ、消防の人たちと一か月ぐらい田老総合事務所で寝泊まりしましたから。子どもたちは高台の熊野町のおばあちゃんちにお世話になって、もう田老にはこなかったんですね。私だけこっちの消防活動を、震災から一週間ぐらいしてから、私が宮古行って、嫁、子どもたちに会ったって感じでしたね。車もガソリンがないとか、そんなことがありましたもんね。だから、あんまり車使えなくて。

■両親が遺体で見つかる

うちの両親が見つかったのは、三月二九日ですから、三週間後です。両親は、うちの配達する軽ワゴンボックスの車があるんですけど、いっしょに乗っていました。避難の最中だったんだと思います。避難して、また戻ったんじゃないかっていう、それを見たって言う人もいるんですけど、ちょっとわかんないですね。とにかく、うちに戻ったりして、そこから逃げるときに遅くなって、津波に追いつかれてのまれました。

■宮園団地（借上げ仮設住宅）での生活

嫁の実家も被災して、もう家も津波かぶって傾いて取り壊しちゃったんで、向こうのお義父さんが、宮古の市内から山のほうにある宮園団地ってところの空き家を、一戸建ての家を見つけてきました。そっち見つけて、そっちへ行くっていうことになって、いっしょに生活するっていうことになったんですよね。

嫁のお義父さんは段取りが早かったですね。避難所も行かず、仮設住宅も行かず。お義父さんも宮古では商売して顔が広かったと思うので、知り合い頼ってその家見つけたと思うんですよね。子どもを避難させたのが熊野町なのですが、宮園団地はさらに海から遠ざかった山側です。全然津波が心配ない場所。

その家見つかって家族がそっち移ったのが、四月中頃でした。うちの両親の火葬だとか終わったりしてから移った感じです。嫁も宮古の図書館の仕事は続けていて、宮園団地から出勤していました。私も会社には一か月して戻ったんですけど、そこから通っていました。けっこう大変でしたね、通勤も。宮園団地にはその後二年ぐらいはいたかな。そこは結局、借上げ仮設住宅っていう扱いでしたね。

■会社の被害と仕事の再開

会社もそうですね、事務所もやられまして、もう取り壊しになって。幸い社員は犠牲者がいなくてよかったんですけど。運送会社なんでトラックとか、そっちは何台か津波にやられました。ほんとうもう、会社は会社でお客さんもいるし、復旧でいろんなものがワーっと動きましたよね。運転手さんの確保は大丈夫でしたね。募集出せば、ある程度集まって。

いまはもう会社は平常に戻りましたね。いまも震災のときと同じ職場で仕事をしています。震災後に忙しくなりました。船も入って、宮古の港湾の仕事なんですけど。トンネルとか砂とかです。砕石、砂を運んでます。船でバンバン入ってきて。あと一、二年とかだと思うんですけど、それがなくなっちゃうと、ちょっと今度そこからどうやっていくかっていう問題になりますね。生き残りがね、ここ一、二年で。それで宮古〜室蘭フェリーが通りましたよね。そっちもいま、うちの会社が手がけてるんですけど。船を着けて出すまでのデリバリーっていうか、車の誘導したりとか、車を船内に固定する業務。そういったのも下請けでやって。そんなのやりながらも、ちょっと朝早くなったんで、いま大変なのもあるんですけど。

ちょっとなんやかんや私も、会社も危ないっていうか、精神的にもちょっと大変なときありまして。それでもなんとかやめさせられないで、なんとか残って、いまやってるんですけどね。でも仕事を続けていられてよかったですよ。なんとか、はい、なんとかでもね。やっぱり規則的にね、強制的にでも起きて働いて、食べて飲んでっていうのが、あるほうがいいですよね。

■家族とのすれ違い

あちらのお義父さんが、また別の場所で土地を借りてお店を建てたんですよね。なんかグループ補助金とかあって、四分の三ぐらい補助が出て、そういったのでお店をまた始めて、そこは住宅も兼ね備えていて。前、鍬ヶ崎にあった（義）実家もそういう店でしたので、同じようにつくって。そして、そこ引っ越して。で、私もほんとうは（その家に）入んなきゃならなかったんですけど、今度はこっち（現在の自宅）も直したんですよね。それで、こっちにもってこれるものはもってきて。そうこうしているうちに、ちょっと家族がギクシャクしまして。考え方のすれ違いとか。そうしてるうちに今度別居状態になっちゃいまして。なかなか家族がやっぱ、バラバラっていうか、最後までおたがい認めなかったっていうか、いっしょになれなくなっちゃったっていうのは。で、ずっとひとりでいて、結局ひとりになってしまったんですよ、私は。

震災後七年、今年の四月から、そういったちょっと大変な生活を。ほんとうに震災がなければね。いろんな、ちょっとやっぱり、考えがひとつになんないっていうか。こっちはこっちで「田老にきていっしょに」って考えて高台の土地を取ったりとか、なんかやった。でも、こないってなっちゃって、そっちも手放して。

いま家族は、嫁の実家のお義父さんが再開した電気屋さんのほうに、子どもといっしょにいます。場所は宮古市内の駅からちょっと行ったとこです。上の子、いま六年生だから一二歳なんですけど、小学校入る一年前の震災でしたからね。そして結局、宮古の小学校に行って、下の子も向こうに入れて、もう田老には帰ってこないっ

て感じになっちゃって。

二年、宮園団地に住んでいる間に、嫁の実家のほうはもう宮古市内にお店と家と再建っていうことで話が進んで。でも嫁もたぶん、田老にはこないで向こうの両親と生活していきたかったのかな。そういうことだったんですけど、私はいちおうこっちの長男でもあるんで、こっちなんとしなきゃっていう、そこでもうだめだったです。

自宅は全壊、流失で跡形もなくなって。避難所も行かない。それから仮設は借上げで何年か生活し、そして家を直して、嫁と子どももこっちにきてやりたいなって思っても、結局嫁たちはこないって言うし、そうしてるうちにもうひとりな生活で。

■自宅の再建

ここ（自宅）を直すときは、生活再建支援金みたいなものはもらってないですね。再建で、ここに住むのに修理をしたらもらえるような話だったですね。ですけど高台（三王団地）に建てようかなっていう頭があって、そっち建てれば支援金が五〇〇万とかだった。高台で新築のつもりだったんです。そうしてるうちに、もう向こうもちょっと再建できないなってなって、こっちをそのときやっとけばいかったかなって。

三王団地にはいったん土地を買ったんです。抽選もして、ここだって決まって、いざもう土地代いくらで払い込まなきゃならないってなって。そのときに結局、嫁、子どももこないってなって。いとこ、親戚が「それだったら高台いらないんじゃないのか？」ってなって、それでもうキャンセルして市に返したんですね。だから払い込む前にキャンセルして手放したんです。長男だから、やっぱり責任ありますもんね。あるんですけど、ほんとうに。嫁たちがこないんで、もう力なんてないですよね。

■家業の米屋をどうするか

両親がやってたお店もなくなっちゃって。再建するという考えはあるんですけど、でもこの状態なんで、やっ

ぱりいまの時代、親戚や周りの人からも米屋だけじゃちょっと大変だと言われていて。なので、お店出すにしても、ちょっと違ったやり方を考えていかなきゃなとか思いながらも、やはりいままで先祖につないで、ちょっと途切らすのもまずいなと思ってるんですけど。ゆくゆくはここでなにかをするっていうのも一案としては考えながら。そうですね、あるんですけど、現実は。

親戚の間からも、ちょっとむりだろうっていうような。ただ、やっぱりT・C家がなくなるのがちょっと。私もひとりになっちゃったんで、つぎの代につないでいくのに、またなんとかしなきゃない。このまま行っちゃうと、もう私の代で途切れちゃう。姉と妹は「皆が集まれるような場所つくれ」とまでは言わないけど、まあー、あればいいなぁと思ってるでしょうね。

■消防団での活動をいまも続ける

消防団分団の活動は、とりあえずいまもやっております。あと野球ですね、野球のチーム。休みの日は野球を。仕事を始めると、分団活動のほうは、仕事終わってからまた行ったり。休みの日曜日とかにはやっぱり集まって片づけだとか、今後そういった活動の仕方になりました。あと屯所もやられたんで、その片づけだとか、そういう活動になってきました。だから休みはなかったですね。震災の年はもうずっとそんな感じでしたね。

分団は、宮古市消防団の第二八分団。その下に何班とかはつかないです。このエリアっていうか、旧市街地からここも管轄になって、田老は二八から。元の田老消防団の一分団が二八。で、二九分団っていうのが駅から向こうの大平地区、宮古北高校って樫内地区って、あの辺を管轄して。で、三〇分団が三王団地のとこですね。

いちばんの中心だし、被害も多いとこだったんですね。皆さん家がなくなっちゃったかたばっかりですね。二八分団の団員では犠牲になったかたがいないんですよ。二九分団は亡くなったかたがいるんですけど。いなかったのも幸いだったっていう、いちばん。皆被災したんですけど。

震災後、若い子で何人か、宮古引っ越したりとか、そういった事情で分団活動をやめていったかたはいますけど。逆に、震災後すぐ入った子もふたりぐらいいるかな、いまのとこ。震災後入ったのは。あ、三人か、三人です。震災あってすぐ入ってきた子は、やっぱり「やんなきゃ」と思って志願してきたんです。

■津波防災の意識

ここの自宅を避難所として建てたのは、昭和八年（一九三三年）の昭和三陸地震（→巻末用語解説）の津波のあとだと思うんですけど、初代のおじいさんが建てたって言ってました。初代のおじいさんっていうのは、私のひいおじいさんになるんですね。米屋は昭和八年の津波の前からやってたのかな。だから、やっぱり津波を経験してたと思います。

私自身もちっちゃいころから、もう口酸っぱくして、津波のことばっかり聞いて育ちました。悲惨な写真も見て。ゴロゴロ死体を、ゴザをかけて見えないようにした写真でしたけどね。うちのお墓のすぐ下のとこで、「あ、ここまできたんだ」っていうのがわかる。嫁の地元は宮古なのでやっぱり違うんですよね。いまは合併して同じ宮古市ですけど、前は田老町と宮古市で、別でしたから。

今回こんなことになってしまったんですけど、私の両親も津波防災はしっかりと考えてましたね。母とかは、ちゃんとリュックにものを詰めてましたし。なにかっていえば、そういう体制はできていたと思いますね。

■田老地区のこれから

田老は人口がだいぶ減ってるみたい。やっぱり出て行った割合はいちばんとかって。被災地のなかで田老地区が多いっていうふうに聞いてますもんね。そうだなっていう感じで見てますけど。田老から宮古に移ったとしても、田老地区から出て行ったっていうことですもんね。それで再建している人がいちばん多いという。

このとおり漁業しかないですからね、基本は。そっちがね、なんとか生活できるように、ほんとうなっていけ

ばまた別なんですけどもね。むずかしい選択ですね。仕事をやるにしても、どういう業種かっていうのがね、むずかしいですよね。考えるのが。

（二〇一八年八月二一日）

●世帯T・D　話者一名……男性（七十歳代）

■震災前のくらし

当時住んでいたのは、（田老第一）中学校から北東のほうです。ここが保育園で、ここがローソンで、この赤い色の屋根が自分の家です。国道沿いです。こっちは田老診療所になりますね。代々ここに住んでいたわけではなくて、もとは赤沼山の高台におりました。田老総合事務所の近くです。いまは弟たちがおりますけどね。私が自宅があった場所におりてきたのは結婚がきっかけです。昭和五四年（一九七九年）に土地を購入して、家を建てました。

当時はサケ・マス流し網の全盛期で、昭和五一年（一九七六年）から平成元年（一九八九年）まで北海道の釧路を基地に行ってましたね。操業する海域はアリューシャン列島、ベーリング海です。漁期は五月～七月ですが、漁獲割当が達成しなくても、水産庁の監視船の指示によって漁期終了となり、全船一斉に帰港するんです。そう言えば、乗組員の家族や女房を会社のほうで連れてきてくれました。水揚げが順番なので、終わるまで一週間ぐらいかかりましたから。終わるまで女房と、釧路湿原、阿寒湖、摩周湖、屈斜路湖、風蓮湖ほか、周辺を見て歩きましたね。

サケ・マス流し網漁業が減船になり、マグロ延縄（はえなわ）の専用船に、最初一一九トン、二年後に三一九トンに乗り移

りました。大型船になりましたので、一年に二航海制で（一航海が六か月）、最初の航海が一〇月ごろ出港して、「北バチ（メバチマグロ）」と言いまして東経海域から西経海域を約三か月操業し、燃料、食料、飲料水を補給のため、ハワイ島のホノルル港に入港します。二日くらい休んでから出港、また二か月くらい操業しますが、漁に恵まれ湧船になれば予定より早く帰れます。再度ホノルル港に寄港し、インドネシア船員を下船させ、内地（日本）に帰港します。

二航海目はミナミマグロで、基地はタスマニア島のホバート港、オーストラリアのシドニー港です。四月中旬ごろ出港して、二〜三か月操業して、ホバート港かシドニー港に入港して補給、漁獲検査を受けましたが、何年ころからだったか緊急入域以外に入港できなくなりまして、洋上でタンカー補給をして。漁獲割り当てを達成すれば、南緯三〇度付近まで北上し、二〇〇海里外を操業します。操業が終わってニューカレドニアのヌーメア港に寄港し、インドネシア船員を下船させ、内地に帰港するわけです。

私は中学校を卒業して漁船に乗りました。当時の船は三九トンの小さい船でした。四年間メシ炊きをして、船員に昇格してから独学して二〇歳で通信士、二三歳で船長のライセンスを修得しましたよ。このころから船も中型船六〇トンになりました。三一歳から五九歳まで全責任を任せてもらいました。漁船の場合、船頭（漁労長）がいちばん権限があるんです。船長は位置の確認、書類関係、操船が主です。魚をたくさんとらないことには会社が成り立ちませんから、船頭が権限があるんです。

私の船長時代は、自分の位置を知るにはロランCオメガという計器（天候によって不正確）と天体観測（太陽）のふた通りの方法がありまして、天気のいい日は（毎日）天体観測です（正確なので）。六分儀という計器があって、太陽を水平線上におろしてくるのです。太陽は現在地（海域）が正中（正午）になるまで太陽の高度があがります。その高度の差を一分間に三〜四回水平線上におろして測定するわけで、このときを太陽の下辺高度とい

います。天測略歴、簡易天測表、緯度計算表を使用し、計算し、もう一度正中（正午）になれば太陽は二〜三秒間停止します。この瞬間も測定し、計算して、緯度経度を決定して航海するんです。日中天気が悪くて測定できなければ、夜間北極星を測定します。平成になってＧＰＳという計器が搭載されて、常時位置が表示されて便利になりました。

■二日前の津波警報

東日本大震災、その地震の津波の二日前にやはり津波警報がありましてね。その日の夕御飯のときに女房が、「じいさん、仮に津波がきて、ここ（自宅）までくるんだろうか」と聞かれましたので、「いや、仮に津波がきても堤防が二重になっており、外側の堤防で防げると思うよ」と言いましたら、「そうだよね」と言って笑っていました。まさかあんな大きな津波がくると思いませんでした。

■三月一一日のこと

地震が起きたあのとき、国会の予算委員会かなんかやっていて、私は携帯ラジオで横になって聞いていたんです。突然ラジオから地震警報が発表されて、すぐに地震が起きて、家中がガタガタ、グラグラと音がして大きく揺れました。同時に停電、携帯電話も使用できませんでしたね。以前地震があったとき、家の中のサイドボードの中のものがだいぶ壊れましたが、あの日はあまり壊れませんでした。玄関の花瓶とか飾りものが落ちて壊れたので掃除をしているときに、女房が帰ってきて「あらじいさん、そんなことしてないで早く逃げないとダメだから」と言われまして、最初はズック（靴）を履いたんですが、ズックでダメだから、長靴に履き替えようと言われまして、防寒長靴に履き替えたんです。もちものは、携帯ラジオ、ペットボトル小さいもの（二個）です。宮古のアパートに息子たち孫たちが住んでいて、当日嫁さんから保育園に預けている孫の迎えを頼まれていまして。とりあえず避難でなくて、孫を迎えに行かねばならないなと思いまして。

宮古方面の保育所でしたから、車で女房とふたりで出発したんです。走っている途中、女房がどういうわけか、「じいさん。孫を迎えにいって連れてきても、停電になっていてファンヒーターを使うことができないから、保育園に預けているほうがいいだろう」と言うのです。私は「石油ストーブがあるから大丈夫」と言ったんですが、樫内トンネルの中に入ってから「じいさん、もうむだだから戻ろう」って言うのです。一瞬どうしようかと迷いましたが、そのとき車のラジオでＩＢＣ（岩手放送）だったかＮＨＫだったか、現在陸前高田に六メートルの津波がきていると放送を聞いて、六メートルなら堤防が一〇メートルですから、もう大丈夫だと深く考えないで近くの樫内のバス停がありますから、その場所からＵターンして自宅のある方向に走ってきました。

その時点では通行止めにもなっておらず、平常通り車が通行していました。走行中に女房に、「赤沼山に住んでいる弟夫婦の家に行こう」と言いましたが、「嫌だ」って言うもんですから、仕方なくそのまま家に戻ってきたんです。家の前の駐車場に車を止めましたら、すぐに道路向かいのおばちゃんがきて、女房と会話をしたんです。会話が終わってから、「じいさん、自分は向かいのおばちゃんと同じ五天王という避難所に行くから、じいさんはいつもの熊野神社にもう行ったほうがいいよ」って言われましてね。向かいのおばちゃんが時計を忘れたので取りに行ってくると自宅に向かって歩いて行ったのを見て、「私はいまから熊野神社に行くけれどもお前はどうするんだ」と言いましたら、「私はおしっこが出る」と言って、家の中に入ったんです。それを見届けてから私は避難しました。まさか女房と最後の会話になるとは思いませんでしたね。

歩きながら孫のことが気になって携帯の時間を見ましたら、一五時一六分だったと記憶しています。なにげなく南側の方向を見ましたら、当時の農協近くの堤防付近に黒煙が立ち上がっていたんです。見たときは火事だと思いました。ちょうどそのとき、女房の姉夫婦と隣のおじいさんが歩いていていっしょになり、姉の夫に「Ｓさん、農協付近が火事だよ」と言って振り返って見ましたら、黒煙の炎、白いしぶき、うねりが農協より北側に移

動してきましたから、もうこれは間違いなく津波だなと思い、「あー津波だぞ」と大声で叫んで一生懸命走りました。走りながら一瞬、女房が家の中にいるはず、津波がきているのを知らないでいるはず、戻って知らせに行こうと思いましたが、そばまできているので、戻ってはダメではないかと思い直して走りました。

避難所入口の階段にたどり着いて二〜三段あがった場所に、身体障害者のかたが車椅子で避難中で、階段をふさぐかっこうで通ることができない状況でした。大先輩のKさん（元漁労長）はあきらめたのか、下におりて別の避難口に歩いて行ったのを見ましたが、残念ながら亡くなられました。もう津波がきているので下におりないで、車いすの崖側のほとりを駆け上がりました。階段七〜八段目ぐらいのところまでたどり着いたときでした。突然いままで聞いたことのない音がして、ギリギリ、ギシギシと家がぶつかり木材のきしむ音、目覚まし時計のベルの音、車のクラクションの音、夢を見ているようで呆然としました。四〜五分してわれに返り、ああこれは現実なんだと自分に言い聞かせ、女房はどうなったんだろうか、私の行動から判断するとたぶん助からなかったのではないかと思いましたが、奇跡的にも助かっていればいいなと願いましたね。

当日火事が二か所で起きまして、現在の三王団地の下側付近と下荒谷地区でしたね。荒谷地区から発生した火事はまたたくまに私たちのいる熊野神社の方向に燃え移ってきまして、地区消防団員のかたが「危険なのでお寺か総合事務所に避難してください」と言われまして、中学校の裏側を通り避難しました。お寺かなあと思いましたが、総合事務所には自家発電の装置があるはずと、総合事務所に行きました。宿直室だったらしく何人かの人たちがいて、テレビを観ていました。各地域の津波の情報、映像が放送されていて、あらためて災害の甚大さを知りました。

翌日の朝（四時三〇分）、まだ暗かったですが女房のことが気になっていましたから、総合事務所を出て、熊野神社に行きました。神社に着いて周囲を見ましたら、不思議にも本殿を避けて上のほうに燃え、途中で鎮火し

た後でしたね。

気を取り戻して、自分の家があった場所の裏山付近に行って確認しましたが、自宅の跡形もなく、自宅より南側にあった出光ガソリンスタンド付近から瓦礫の山でした。女房の名前を二〜三回叫んでみましたが返事は返ってくることはなく、この瓦礫の中のどこにいるんだろうかと思いました。昨夜降った雪で周囲は白い景色で、寒いだろうなと思い、涙が出ましてね。付近を探す気力もなく、いったん総合事務所に帰り、朝食におにぎり、飲料水をいただきました。

■息子夫婦と孫に再会

いっしょにいた知人に、「女房はだめだと思う。息子、孫のことが気がかりになるので、これから歩いてでも宮古に行ってくる」と伝えて出発しました。唯一道路のかわりになったのが三鉄（三陸鉄道）の線路でした。田老駅を過ぎて兄形地区の線路をおりまして、瓦礫などを避けながら樫内トンネルの下側に着きまして、休んでいましたね。ちょうどそのとき知っている大工さんがいて、自分のお袋さんを迎えに車できているということで、事情を話しましたら乗せてもらえることになって、宮古病院前まで送ってもらいました。病院より歩いて宮古第二中学校に行って、孫の通っている保育園のようすを聞きましたら、津波の被害はないとの話でした。とりあえず保育園に行くと、先生が「Y君はお母さんが迎えにきて帰りました」と言われまして、中里団地のアパートに行きましたが留守でした。どこに避難したのかと思い、団地の集会所に行ってみましたら、お母さんと孫ふたりがおり安心しました。その夜、息子と会い、女房のことを伝え、明朝田老に行って探すことを話して、横になりました。

■妻の遺体が見つかる

翌日早朝に息子といっしょに田老にきまして、樫内トンネルの下側に車を置いて、瓦礫を避けながら田老駅に、

そこから内側の堤防に向かって歩いていきましたね。堤防の上を歩くことができましたから。自衛隊の人たちが瓦礫を除けながら、道路をつくる作業をしていました。自宅があった付近の堤防からおりて、自宅跡に行ってみましたが、自宅、近隣の家はなく、南側の出光ガソリンスタンド付近に流れ、瓦礫の山でした。何人かの人たちも周辺を探していました。息子と一二日、一三日、一四日の三日間探しましたが見つからず、精神的に疲れまして、一五日は息子が会社に行くと言うので私は田老行きを休みました。夕方弟がきまして、女房に似た人が見つかったので確認に、いまから田老にいっしょに行こうと言われましたが、今日息子は会社に行っていないので、あす早朝息子と行くからと言って帰ってもらいました。

翌朝、遺体安置所になっていた宮古北高校の講堂に、遺体番号一九番確認しました。間違いなく変わり果てた女房の姿でした。申しわけ……ただひとことそれしか言葉が出ませんでしたね。涙があふれ、止まることができませんでした。人生のはかなさ、この年になって初めて自覚しました。

一年間は日々女房に申しわけなく、もっと真剣になって状況を判断していればよかったと悔やまれましたね。考えれば考えるほど自責の念にかられ、当事者にしかわからないと思いますが、この胸がしめつけられて痛くなるんです。自分自身も生きているのか、頭がぼっとして気力なしでした。一年間はほんとうに女房の写真の前で泣いていました。夜は夜で眠ることができませんでしたので、携帯ラジオを購入して毎夜聞いていました。女房に安らかに眠ってもらったら私の気持ちが安らぐのではないかと思いまして、お墓をつくり、お盆前に納骨をすませましたが、私の気持ちが安らぐことはありませんでした。

女房は、私が引退するまで津波避難訓練にも参加していたようで、引退してから、「じいさん、今度はじいさんが参加するように」と言われ、私が参加していました。女房の実家は重津部（おもつべ）という部落で、私の家があった場所から北の方向で、車で一五分ぐらいかかる高台に住んでいました。私と結婚してから、私のお袋から地震の

話を聞いて、大きな地震が起きたらすぐに避難できるように、だいじな書類などをリュックサックに入れておくようにと聞かされていて、その通りに準備をしていたようです。女房とは二五歳で結婚しました。結婚してちょうど四〇年目でした。私が五九歳で体調を悪くして船を引退し、女房といっしょに暮らしたのが六年間だけです。生前、女房に「落ち着いたらもう一度釧路に旅行、あと温泉に連れていってネ」と言われていましたが、かなえてやれず残念です。

何年たってもあの日、平成二三年三月一一日、あのときの光景が胸を突き、恋しさ、寂しさ、あのときの自分の判断が悪かったと思い出し、自責の念にかられます。もう二度と現実に会うことのない女房を思うと、耐えがたい悲しみ、寂しさ、むなしさを感じます。来世で巡り会えたら今度こそ離れずに暮らしたい。

■孫たちの成長が生きがい

思いもよらぬ、まさかの人生最悪の経験でしたね。幸い現在の場所を、昭和五七年に分譲したときに孫にでもと思い、購入しておいたのですが、まさか自分がここにくるとは思いませんでした。家を建てる計画して、ハウスメーカーさんと契約、順番待ちの状況でした。

いまはシルバー人材センターで紹介された仕事をしております。震災があって五月ごろでしたか、人材センターの担当者から問合せの電話がありまして、引き受けて、現在も総合事務所の宿直、日直の仕事をしています。

孫は四人で男の子です。息子に小学校六年生、小学校二年生です。休みの日（土、日）ふたりで県北バスに乗って遊びにきます。泊まるときもあれば、帰るときは息子かお母さんが迎えにきます。東京の娘には中学一年、小学一年のふたりです。孫たちの成長が楽しみであり、生きがいです。

■保険のこと

私は生命保険と火災保険に加入していました。火災保険（漁協）二〇〇〇万に加入していましたが、保証され

たのは二五％でしたね。まったく残念でした。民間保険会社全額、農協さん五〇％支払ってもらったようで納得がいかず、東京にいる長女が東京海上（日動火災保険）関連会社に勤めていましたから、調べてもらいました。保険の契約内容は私の保険は津波は対象外で、他の保険会社が対応して支払ったのは全水協と違う内容の点がありまして、納得してあきらめました。

■過去の災害からの教訓

私のお袋は昭和八年（一九三三年）、昭和三陸地震（→巻末用語解説）の津波のときに九死に一生を得たんです。そのときお袋は赤沼山に逃げて、多少濡れはしたけれども、竹やぶの竹につかまって助かったと言っていました。だから生前、私や女房に大きな地震が起きたらすぐに高台に避難すること、口癖のように言っていましたね。昭和八年当時、お袋は小学校を出て、旅館の丁稚奉公をしていました。たまたま地震の日、奉公先から母親のところに行って、その晩泊れと言われたそうですが、当時のことでしたから、お袋は奉公先に帰ると言って、それで難を逃れたようです。お袋の母親は犠牲になったんです。そういう体験があったせいか、大きな地震があったら必ず、火事、津波がくる、高台に避難する。私も経験して、お袋の言ったこと……「戻らない。施設（堤防）を過信しない。てんでこ」……このことにつきると思います。

自然（気象、災害等）は想像を絶して遙かに豹変します。海上のことしか経験がありませんが、そのときの気象状況によって二、三分のうちに突然吹き荒れ、風速二〇～五〇メートルになります。ほんとうに自然を甘く見てはなりません。「天災は忘れたころにやってくる」。先人たちが教訓として残している言葉、ほんとうにその通りだと思います。

（二〇一七年三月三〇日）

●世帯T・E　話者一名……女性（七十歳代）

■震災前のくらし

主人は漁業もしたり陸働きもしたりね、山の伐採した木を製材所とかに運ぶ仕事だったんですよ。山田に仕事があれば山田に行って。いろんなところには、まず仕事に行きましたね、茂市とか。一生懸命働いたんですけどね、お金も流してしまって。

田老観光ホテルの裏にあった自宅には、結婚してからはずっとそこに住んでいました。私が嫁ぐ前から建っていたらしいんです。いや恋愛結婚なんだか見合いなんだかさっぱり（笑）。まあいちおうお見合いかねえ。

家はけっこう大きかったですね。二階建て。だからすぐ裏がね、竹っていうか笹があって、畑もあって。家からは海が見えるような場所じゃないんです。もう堤防っていうか、この防潮堤でね。しかも目の前に観光ホテルがありますから海が見えないんです。だからお盆に花火をあげても、観光ホテルの屋根で見えなかったんです、うちから見ようと思ってもね。

家は全部リフォームしたばっかりなの。お風呂も直したりトイレも直したりね、外壁も直して屋根も直して。その前の年だかに補助が出ましたよね。エコ住宅。それで皆さんが、この部落のかた以外の人たちも、田老の人たちもけっこう利用してね、リフォームしたんですよ。家建てる人もあって、（建てて）何か月も住まないで流された家もあるしね。こんなことがあるんだったらなにも金かけねえほうがよかったがねって言ったんだけど、やってしまったもの、残ったの借金だったの私は。でも借金も払い終わってないけども。

まさかこんな大きいのがくるとは思わないんだもんね。一〇〇〇年に一回ってはは聞いてますけど一〇〇〇年経ったんでしょうかね（笑）。

■三月一一日のこと

うちの旦那はあの日は、いつも休まずに、日曜日しか休みがなかったんですけども、たまたま山の仕事をしてだったんで、なんかちょっと腕を、漆（うるし）ってわかります、それに焼けちゃって、かぶれちゃった。たまたまその津波の日が治療の日だったんですよ。仕事に出てればこんなふうには津波に遭わなかったのかなと思ったり。治療が終わってうちに帰ってきて、私もあとから宮古に用足しがあったんで出たんですよ。そしてうちにはもうだれもいなかったんです。（旦那が）病院から治療が終わって帰ってきて、地震に遭ったときには。

キャトル宮古っていう宮古駅前に大きいデパートがあるんですけど、私はあそこの中にいたんです。そしたら地震に遭っちゃって。あっ、これは大きいなと思いながら、まずはうちに電話したんですよ、地震が終わると間もなく。もし病院にいたらいっしょに乗って帰ろうかなと思って。そしたらもう電話でうちに帰ってきてだって言うわけ。そして、じゃあ地震が終わったあとどうしてんのかなと思って、その最後の電話の声で終わりでした。

私も帰る方法がなくて、お友だちがちょうど宮古駅の前に、磯鶏（そけい）のほうなんですけど、車できたんですよね。駅前での信号待ちしてだったんです、ちょうど。私も、なんで帰ろう、バスももう通らないっていうわけで、じゃあと思って駅前にきたらば、信号待ちしてるお友だちの車に乗せられて、そして山道を通って乗せられてきて、北高（県立宮古北高等学校）の前で降ろしてもらって。

まずはうちよりは旦那が心配でね、現場に行きたかったんだけども、行かないほうがいいって止められて、役場に一晩泊めていただいて。寒かったねえ、あの晩は。同じ部落のかたに聞いたらば、なんにもない、家もなければ、って言うわけ。じゃ、うちの旦那はって言ったっけ、わかんね、ってなったわけ。濡れたお布団をとりあえず渡されて、ええっ、これ渡されたって、寒くて冷たくて寝られないと思って、それば渡された布団は捨てて、そして役場の二階に一晩泊めてもらって。

■避難所での生活

そして、つぎの日うちのほうに行こうと思ったらば、行かれないって言われて。そして私は二日目は、今度は北高の体育館に行ってくださいっていうことで、そこでまず何日か泊めていただきました。そしてから私の旦那のお姉さんが、特別養護老人ホームふれあい荘にいるから行きましょうって迎えにきていただいて、そしてふれあい荘に今度行って、三月いっぱいそこでお世話になりました。四月一日からは、グリーンピア三陸みやこのアリーナの中で全員集合で、そこでダンボールの中で過ごして。

■グリーンピア第三仮設住宅での生活

ここにくる前はグリーンピアの第三仮設ね。第一、第二、第三ってあったからね。あそこは広かったですね。私らの入ったところは、元はテニスコートでしたもんね。あそこで、おかげさまでまずね、四年間かな、それこそ生活してきたんですけども。それもいろんなことありましたね、仮設にいるときも（笑）。冬になると雪のよけ場所がなくて、通路が狭いからね。朝起きて見るとすごい雪が積もってて、雪よけに出る人もあれば出ないかたもあれば。そして同じ部落のかたで息子のところに行くために道路を、先に起きて二時なんだか三時なんだかに起きて、雪よけをしていくお母さんがいててね。（雪よけに）出ないと騒いで歩くの、いつまで寝てるって（笑）。そんな元気なお母さんがいて。そういうお母さんがいて、張り合いがあってよかったですよ。ムスッとしてやってるよりは、声かけていただけば。すごい元気がいいんですよ。いいときもあれば悪いときもあったりね、ご近所さんとけんかするときもあったり（笑）。

仮設住宅だとやりたいことなかなかできなくて。散歩しかできることがなかったね。それこそ落ち着くまでは、仮設に入っても、私も大変だった。いろんな用事があったりしてね。だから、ほんと苦労したね、ひとりで泣き泣き。

いま住んでるところは、やっぱり仮設とは全然違います。どこかしこ、それこそ広いから。仮設のときは、ひ

とりはひとりの部屋だけでしょ。寝るのも起きるのも食べるのも一部屋。あら昔の掘っ立て小屋思い出すなと思いながら生活してきたけど、ほんと大変でした。野原にいるよりはいいけどもね。寝るとこも食べるとこもいっしょだったからね。四畳半ですもんね。台所もちょこっとついてるだけですもん。だって流しだってほんとにこれぐらいしかないんだもの。

ガスはふたつ、あたりまえのがまずついてはあったけども、魚を処理するところがこれしかないんですもん、仮設の場合はね。流しも狭くて、それこそカツオの刺身も切られたもんじゃない（笑）。だから一生懸命、買って食べ食べしましたよ、調理できないんだもの。むだな金を使ってね（笑）。お買い物は便利がいいです、ただお金がかかるだけで。でも私はあちこちからいろんなのいただくから、それで生活してるんですよ。

■夫を探す

北高の体育館にいるときとか、ふれあい荘にいるとき、死体がどんどん運ばれてくるわけね。あと千徳の学校っていうか体育館かな、あそこにもあがったから行ってみようっていうことで行ってみて。でもわからない。写真もないし。ただわかるのは、ここの腕に治療の痕があるかなと、包帯してだったから、それでわかるのかなと思って見たけども、全然いない。

三日四日経ってからかな、道が通れるようになってから、ふれあい荘から毎日家に通いました。なにひとつ見つけられなくて、情けないもんだね。家もなんにもないんですよ、田老観光ホテルの裏だからうちは。だから両方から、川がこっちで海がこっちでしょ、渦巻きみたいになってね、家は全然ないです。そして観光ホテルの隣にお店があったんですよね。そこのお店のおうちが、うちの裏の大きい木の間に挟まってあったんですよ。人が二階にいたまま流されてきたらしいですよ。うちはリフォームしたばっかりだから、そのリフォームの形もなんにもなし。お皿一枚も見つけれられない。写真もなし。

■夫の遺体が見つかる

やっと遺体が見つかったんですもん。見つからないと思って。どこにだったったろうかな、和尚さんが言うには、骨壷に入ってどっかにいたって言ったね。そしてなんのときだったろうかね、お寺に行ったんですよ。得体の知れない骨壷が三体あるから、もしかしたらT・Eさんのお父さん（夫）のがあるかもしれないから手を合わせてって言われて、手を合わせて帰ったんですよね、仮設に。そしたら警察から電話があって、T・Eさんの遺体がありますよって言われて。そのとき今度は夕方になったんで、旦那のお姉さんところにまた連絡して、ふたりとお寺にきて、そして骨壷見せてもらって、そうしたらたしかにそうですよって言われて、それからまた手続きして。

それの前にちょうど八月になったったの、そろそろお盆ですって。それの前にもうお墓はできていたんで、いつ帰ってきてもいいようにと思って。そしたらばね、明日、お盆だっていうときにそういう連絡をいただいて。もう、どこにいたんですかって警察に聞いたらば、ホテルから三〇〇メートル先の土手で真っ黒焦げになって座った状態でいたよって言われて。それ聞いたらもう、骨壷の中、見るのも見れなくて、渡されたまんまお墓に入れてもらって。真っ黒焦げだって言うんだもの、それでもまあ、いくらか火葬はしたんでしょうね。

うちからすぐの土手ですよね、三〇〇メートル先って言ったらば。何度も私、山にも行ったんですよ。ひとりでもしかして山に行ってんのかなと思って、その山にもあがっていって。だけども見つけれなくてね。そこら辺もずいぶん探したんですよね。でも瓦礫がいっぱいで、見つけれないわけね。うちの屋根らしきものが見えるんだけど、似たのはあるから家ではないなと思って。自衛隊の人たちが「この屋根はどうですか」って聞かれて、「はいたぶんそうだと思います。新しくペンキ塗ってもらっただけだから」って言って、屋根の瓦礫をみんなよけてもらって下を見たんだけど、それらしきものがなかったんですよね。

でもほんと偶然っていうか、和尚さんから拝んでって言われて、まさかね。いい和尚さんがいて、いろいろと

お世話になってますけども。たぶん旦那と同じ年じゃないかな。主人と幼なじみかもしれない。「Ｉのためだもん、Ｉのためだもん」って、主人のことをＩって言うから。そして今度七回忌にもきて、なにかものあげてくれたりとかしてくれたんで、たぶんそうかなと思って。俺もう六〇過ぎだもんなって言ったりしてるから、もう六五かな、五か六ですがね。

■さまざまな手続きが大変だった

これもむずかしかったですよ、いっしょにいないでしょ、私はその日に。だから、「どこでなにをして、何時何分にご主人がどこでどうして」、っていうように聞かれて。ある程度は言いましたけども、けっこうむずかしいです、ほんとに確認のものがなければ。いやほんと大変だっけね。「ほんとにＩであるか、ほんとに家にいたのか、何時何分に病院から帰ってきていだったのか」ていうのも聞かれて、書かせられて、とても大変でね、頭がこうこうなってしまって。

いろんな手続きに行くたびに、近所のかたから、今日も行くのか、どこに行くのって言われて。どこって、男に会いさ行くがって、そして笑ってね、出かけてきたの。役所に行ってみたり、いろんなのあるんだもの。だから若い人たちがいる家族の人たちは、若い人がやるだろうけどもね。私にはいないんだもん。内容わからないから、毎日出かけてるがって言われるし。グリーンピアからじゃ大変でしたよ。県北にただただ貯金した（笑）。

盛岡までは行かないけど、宮古でなるべく手続きをすますようにね。そうすれば税務署にも行ってきなさいって言われたりして税務署にも行ったりね。あと、二台車もってだったから、今度は廃車の手続きもしたり。いやいやまあ、ほんとに番号もわからない。メモしておいたのも流されちゃったから、それもって出ればよかったなと思って。軽ワゴンのナンバーは知ってるんですよ、軽トラがわからないんです。番号は５５７７だったかな、それは頭に入れてるんですよ。あと電話のほうとかね、いろいろ。まだそれこそ携帯電話っていうのももったこ

ともなくて、いちいち足で歩いだから。五月の連休に娘たちがきたんで、携帯電話を買ってもらって、初めてその携帯電話っていうものを使ってるんですよ、いま（笑）。便利ですよ、ほんとにありがたいですがね。

千葉にいる私の兄貴が、「お前ひとりで大変だろうから行くから」って、わざわざきてくれたの。そしてふたりで用足しして。磯鶏の警察にも呼ばれて行って、役所にも呼ばれて行って、心強かった。ひとりでやるよりはね。

兄は震災から間もなく、私たちがふれあい荘に避難して何日か経ってからきたんですよ、わざわざ。バスも通らない、車でくればガソリンも詰められないから、途中途中少しずつ詰めて、そして走ってきたって。で、きてくれましたった。何日かふれあい荘にいっしょにお世話になって、そして現場を何日か見て、そして「もう帰るから」って。心細いけど、「じゃ気をつけて帰って」ってそう言って。遠くからきてくれたからありがたいなと思ってね。警察から電話がきたから行かねばならないっていうことで警察にも乗せられて行って。いろいろと助けてもらって、あとはひとりでやりました。

■夫はなぜ逃げなかったんだろう？

いやあ私がいればなあ、主人連れていっしょに逃げだったのになあと思いながら、そうでなければいっしょに流されたのかなと思ったり、いろいろ考えました。ふだんね、「地震があったら裏山に逃げるんだ逃げるんだ」ってつねに言ってましたの。それが逃げないで、収まったから、まさか堤防があるから堤防越えてくるとは思ってもいない……だったと思うんですよ。だからその辺が、ちょっと抜けてだったのかなと思って。それまでの運命なんだぁと思って、諦めなきゃっていう、その人たちには簡単に言われっけども、そうではないと思うなと思ってね。山がすぐだから山に逃げれば逃げられたんだろうけど。地震が収まったから瀬戸物でも片づけていたんだろうかどうなんだろうかね、そこがわからないですけど。

だからここの、私らのところの部落の人はけっこう亡くなってるのね。ガスの元栓止め忘れたとか。あと、な

あにここまではこねえが堤防があるんだものって、のんびり。地震収まって、家の中に入っていってそのまま流されたご夫婦もいればね。ほとんど亡くなってるね。あとは幼稚園におばあちゃんが孫を迎えにいって、そのまま流されたりね。だから堤防も（新しくつくったほうは）壊れたもんね、だから壊れやすくつくったんでしょうかね。昔の堤防全然びくともしないんだもの、新しくつくったんですってね、向こうは。住宅地つくるからっつって、つくったっていう話は聞きました。それでここがあるんですよね、このエリアがね。こっちに堤防あるからね。住宅地つくるために堤防をつくって、堤防をつくったことによって皆安心してこっちきて。

だから漁協の市場の向かいに、氷をつくる高いところがあるでしょ。あそこに印がついてるんですよ、明治と昭和と平成と、って津波の高さがね。昭和三陸一〇メートル、明治三陸一五メートルって書いてあって、それが崖に貼ってる。黄色いのでね。三回も遭ってるんだもんね、津波にね。昔も、明治のときもけっこう人が亡くなったって。昭和のときもね。あとチリですよね。昭和八年（の昭和三陸津波）と三五年（のチリ地震の津波）とね、二回。私が田老に嫁いできたのは昭和の終わりの前年、六三年。だからその三五年の津波から三〇年後ぐらい。その（嫁いできた）ときはもう全然、津波のツの字もなんにもわからない。田老って言えば、津波に遭って何百人って昔は死んでるよっていうのは聞いてましたけど、そんなもんでした。ああ、いざこうなってみると、やっぱり昔もこうだったんだろうなと思ってね。今回も三〇年後にはまた、昔話で終わらせちゃうようになっちゃうかな（→巻末用語解説「昭和三陸地震」「明治三陸地震」「チリ地震津波」）。

■田老に墓を建てる

主人は田老生まれ。だから、元気なとき、元気ってまあ震災前は、「いや俺は仙台にも行かない、田老がいい」って、「もし俺が死んだらば田老にお墓を建てるように」って、つねに言ってましたの。だから海が見えるいちばん上に墓地を買って、建てたんです。私があがっていくのが大変。あと、和尚さんと石屋さんにまず相談して。和尚

さんが石屋さんに電話してくれて、ほとんど和尚さんがやったのかな、俺が電話するがって、早速電話してくれて。払川にあったお墓はもう解体して返しました。もとはあっちにあって、旦那が運転してくれるうちは行ってたんですよ。近々、田老に墓地買って移動しなきゃって言ってたんですよ。そしたらそうならないうちに逝ってしまったがね、自分で。

お墓を移動するときがいちばん悩みだったね。いろんな役所に行って、いろんな手続きしなきゃなんない。頭では、はいはいって聞いていれても忘れるから、津軽石の和尚さんから書いてもらって、この通り出して。あっちからこっちに移動するのに書類出さなきゃなんないんだけどね。それもただじゃないもんね。お墓解体してもらうにも銭、そうすれば今度はあっちから移動するにも銭、こっちに今度は納骨するのにも銭。いやいやいや(笑)。それはあたりまえのことだけどもね。もう二度とこういうことには遭いたくないね、たくさんだね。まあいまの人たちがいるうちは、あとなにもこないと思うけどね、こんな津波なんてね。

大変でしたほんとに。ひとりでね。だれかもうひとりいればいいんだけど。近くに、豊間根に姉がいるんだけど、「手伝って」って言ったって、「なにひとりでやれ」ってなるから、それよりは声かけないほうがいいと思って。あとは私の親。両親のお墓が津軽石にあったんで、それも今度は移動しなきゃなんないと思って、それにも一生懸命通って。お墓があるのが払川だったから、田老に移動して、それでもただもってくるわけにもいかないね。許可がないとなんないし、大変。それでいま現在いっしょにお墓立てて、いっしょに入れといたんですけど。

ここら辺の人はみんな檀家さんなもんだから、それこそいろいろお金がかかりますね。一年に何回だろうね、封筒もってくのが。正月、春彼岸で、お盆で、秋彼岸でって、四回か五回ですがね。そのたびそのたびだもの、お金が。皆さんはそうです。

私はね、田老にくる前はあんましお墓参りもなかったんですよ、お彼岸にも。それがなぜかこの震災後にけっ

こうお墓参りするし、あとお寺にもくるし。大変だね、とにかく。そのぶん貯めとかなきゃなんないもん。たったそれこそ一万か五〇〇〇円だけどもね、そのたんびそのたんび出すのがね。去年は私の両親の三三回忌をやっていただいて、今年は旦那の七回忌で。けっこう金はかかります。震災の年は和尚さんも補助っていうか国からお金が入ってだったろうから、塔婆代とかそういうのはいっさいもらわなかったけどな。そのときはよかったけどがね。気持ちでいいからって和尚さんは言うけど、いくら震災に遭ったからって一〇〇〇円か二〇〇〇円でもないだろうし（笑）。少なくても塔婆料は一万だもんね。拝んでもらうってなれば一万だしね。

みんな背負ってるんです、ひとりで。だから苦労してるから、これからちゃくするようにって見てるかもわかんないし。どうなんだかね、いまんとこ元気でいるけども。毎朝拝むんですけど、今日も無事で一日過ごすようにって拝んでたり、ただ交通事故には気をつけないとなと思ったりしますね。

■いまの住まい（災害公営住宅）での生活

いま住んでいる（災害公営）住宅は、工事する前に役場のほうで、入るかどうかの希望とりましたがね。そのとき私も、最初からここに建つんであれば、ここって決めていました。というのは、役場も近い、郵便局も近い、お墓も近い。そういう関係でここって決めました。高台っていうと、私はこれから若くなるわけじゃない、だんだん年とってくるとお墓にくるのも大変、そういう関係。だから、月命日には毎月お墓参りに行ってます。お寺も近いし、もちろんね。出ていくと和尚さんに必ず会うから。どうだ、って声かけられると悪い気はしないがね（笑）。皆さんに、まあ、和尚さんはね、和尚さんだから、親切で。見た感じは怖いような感じだけどね。

災害公営住宅は、どこに申し込むかは自分で決めましたね。旦那のきょうだいもいるけども、きょうだいさんだって旦那を亡くして、息子娘たちといっしょなんだけども、相談するわけにもいかないわけね。もちろん他人同士だから私は旦那があれば別だけどもね、おたがいに旦那亡くしてるから。そんだもんだから、これこうした

いがって、相談もしたかったけども。まだなあ、お義姉さんだって同じ立場だしなあと思って、皆ひとりで決めた。一言、お墓はつくろうと思ってますって声はかけたけども。あとはもうひとりで。

いろいろねえ、ほんと、この震災で。ここに住んでだった五階の人が認知症になっちゃってね、まだ八〇歳前なんですけど、もう人のおうちでも平気で入ってくるんです。二月の中頃でしたか、いつの間にかここまで入ってきてびっくりした。「おめえさん、だれだい」って言われて（笑）。「だれだあぇって、ここの主だよ、あんたは五階でしょ」って言って、「ああ」って、そして出はっていったんだけど。「部屋はわかる？」って聞いたら、「わかんない」って、「じゃ五階だから、これに乗っていきなさい」って言って。そしたらもうひとり、四階の一番端っこにもいるんですよ。部屋から出てきて散歩して、三階の端っこによく入るんです、戸を開けて。「あらぁ、私の部屋どこだっけ」って言うの、必ず。「あなたは四階なんだよ」って言って。いやこんなになるのかな自分もなと思って。そんな感じのかたがだんだん増えてきたね。

ここの団地は田老のかたなんで、全部が顔見知り。もう三〇年ぐらいになるからね、田老にきて。だいたいは同じ部落のかたがまず入ってるから。あとは同じ田老でも川向ってあったり、あとこの辺のかたがたとかね、ほとんど知ってますけども。

いまここに住み始めて一年ちょっとですがね。一一月がくれば二年になるのかな。あっという間ですね。見た目すっかり町が変わりましたねえ、ほんとに。昔の町ってどこに行ったんでしょうっていうようにね。（津波がなければ）この町もないだろうし家もないだろう。だから、ここに入ると考えなくてもいいものを考えてね、ぼーっと頭がほんとおかしくなるんですよ。お友だちもそう言ってます。とくに夜になると考えるのね。これからどうしていったらいいのかな、だんだん年とっていったら、だれが面倒みてくれるのかな、って言ったりして、そういうの考えるのね。いまは、歩けるうちは元気な証拠だけども、だんだん、ガス使って今度はぼや起こしてみた

り、そうなったらどうなんだろうなと思ったりね。

この前は山田町の大沢っていうところで火事があったでしょ、こういう建物でね。たしか、その人は七十いくつでしたよね。注意はされてましたって言ったって、起きれば、たばこ、酒、それを繰り返してだったらしいもんね。だからそれが危ないんだな。ほんとはここの中ではたばこは吸われないことになってるの。そしてこの建物も傷つけられないの。釘一本も打たれないし、出るときは今度リフォームして出なきゃなんないの、傷つけると。それも大変。カレンダー留めたりとかはいいんだけれど、でもああいう木のとこに釘打ちつけたりはできないの。家具を留めるのがあの板だと思うんですよね。でも打たれないって言われましたよ。打ってもいいと思うんだけどね、それはできないって聞いて。

公営住宅には移ったけど、自分の家のようで自分の家でない、というのがほんとうだね。お金を出したって自分の家にはならないからね。それがいちばんお金のむだ遣い、早い話がね。これが自分の家ならなあと思う。私ね、ひとりで高台の一戸建てを希望していたんですよ。そしたらならば、ひとりの人はだめですって役所のかたに言われて。でもいま現在ひとりの人がけっこう入ってるんですよ。それが、なんでって思うのね。

余ってくるとひとりでもよくなっちゃうんですよね。こういうものってなんでも、空いてたらしょうがないですから。最初はたぶん、こっちもきっと希望者がけっこういらっしゃったんですよね。諦めずに一戸建ての空いてたら入りたいって希望出せば、空いてたら、「わかりました」みたいなあれになるんでしょうかね。

一戸建てのほうがちょっとは高いかもしれないけど、家賃は収入によって決まるから、バカ高くはないんですよ、年金生活だとね。ここもそうですけど、年金生活で一万出せばお釣りがくるけど、だいたい維持費から駐車場からなにからって言えば、一万ぐらいはかかるね。一万ちょっとだもんね。でも、こういうりっぱなとこに一万もかからない家賃ってなかなかないから、ありがたいと思ってるんですね。

住んでいて音はそんなに聞こえないです。夜、寝静まったあとにカタンっていう音、どっかのお宅の戸の閉めてる音。上なんだろうか横なんだろうか、それはわからないけど、なにかものを落とした音、上からくるね。伝わってくるんで、その程度だね。全然静か。でも昼間は工事車がすごいですよ。ダンプが並んで通るんですよ。なぜか、ほんとうに今日は静かだね。でもここ開けるとすごい音。二重ガラスになってるから、そんなに音はないですけどね。そういう意味ではいい造りですね、ほんとに。このストーブひとつでもあったかいですよ。私エアコンはつけてあるけどエアコンいやなの、なぜか。仮設にいるときついてあったのを、もってきてつけてもらったんですけど、買うよりはいいなと思って。

■年金だけでは暮らしていけない

私、糖尿で診療所には定期的には行ってるけども、いちばん食事で困るんですよね。なんでも食べられないものね。糖尿だからといって薬は飲んでないんですよ、食事療法で。あと、まず食事したらば運動するとかそういうことをして、いまのとこ元気でいるけども、ちょっと頭がパニックになって、パーになるときもあるんですよ（笑）。でも、お友だちがしょっちゅう電話くれて、お散歩に行こうったりしてお誘いがあるから。あとは午後に小田代山荘ってお風呂、あそこに行くんですよ。あそこに行けばいろんな人とお話ができるから。そんな感じかね、いまはね。あとはなんにもねえ、楽しみもないし。あと春になると山歩きがあるんですよ、山菜採り。それを楽しみにしてるんですけど（笑）。早く春がこないかなと思ったり。

いとこの家の旦那に遠くまで乗っけられてって、山菜採ったり。あとは散歩がてら近所のかたと行って採ったり、そんな感じですがね。去年もいろんなのを散歩しながら採ってきて。そういうときは、こう、お話をしながら歩くから、過去のことを忘れてるの。もう、おうちに入るとまた思い出しちゃってね。あのあがっている写真を見ると必ず思い出して、早く迎えにきてって言って拝んでるけども（笑）。だから寿命がわかれば大いに好き

なことをしてと思うんだけども、わかんないですもんね、人の寿命は。

朝は四時起きして、そしてワカメの加工場に行くんですよ。二週間か三週間ぐらいで終わるんです、ワカメは。去年もおととしも、ずっと。同じところにお手伝いに行ってるんですよ。そこも震災で被害に遭って、一年か二年は休んだと思いますがね。

すぐそこに水産加工所みたいなのできましたよ。外側に市場があるからね。あそこでワカメを炊いたり加工したりして。それで、岸壁で私たちはお仕事するんですよ。朝ってば寒いですもんね。でもお金のためならと思って、がんばって。食べていかないとね、食べていくために仕事しないと。

声がかかるうちはありがたいですよ。もう役に立たなくなってから、いらないやと思われればおしまいだけども。そういうときもまずね、楽しみもあったり。今年お手伝いができて来年はどうだかわからないけどそれは、一年先は。ワカメは春のこの季節だけですね。あとは七月頃からだと昆布ですがね。昆布は私は行かないから。昆布はやってないんです、私が行ってるところでは。

野菜とかお魚とかお米だって旦那の兄弟が送ってくれるから、だからあんまり買い物はしないです。いただきもので。たまに買うのが、みそ、しょうゆ。あとは、ちょこっと野菜っていうような感じ。皆さん、ここおりるとすぐお店があるでしょ、そこでお買い物するけども。花も大変です、枯れればすぐね。あんまり自分が好きなものも買えないですよ、こういうとこに住んでればね。年金だけの生活ですもの。年金だって私の年金は安いから。遺族年金がプラスされて、まず生活するけど、自分だけの年金ではとてもじゃないけど生活できないですよ、死ぬしかないですもん。

私は厚生年金、いただいてだったんですよね。そしたならば、どちらかを選んでくださいって。遺族年金いくらぐらいですかって聞いたならば、奥さんのよりはちょっといただけますよって言うから、じゃあって。厚生年

金に切り替えて私のは、それにプラスまず遺族年金。なんか年金も減らされて、苦しい毎年（笑）。だからだいじに使わなきゃと思って。むだ遣いできないですよ、家賃も払わなきゃなんないし、維持費は出さなきゃなんないし、駐車料金は払わなきゃなんないしね。私はもってないんですよ、免許は。でも、たまに泊まり客がきたり、そういうとき困るから、家に車がなくても確保してるんです。むだ遣いだけども。でもたまにくると、来客用の駐車場がいっぱいになるんですよ。そうすると置く場所がないんです、遅れてくると。泊まるとなれば、一晩か二晩じゃないからね。そういうとき困るの。それのために。なに車がないのにいいだろうって言われるけども、そうじゃないって言うの。

■白内障の手術をする

仮設住宅にいるとき、三年目だったか、両目が見えなくなってね。そしてSさん（眼科医院）に行ったら白内障だって言われて。だんだん霞んで、テレビの画面が映るのがぼんやり見えて、あいや自分の目はたしかだと思って、テレビが悪いんでないって（笑）。テレビ屋さん、電気屋さんを呼んで、みてもらったらば、なあにそちらさん目が悪いんでない、画面は大丈夫ですよって言われて。色をちょっと濃くしてもらって、それでもぼやけて見えないからと思って病院に行ったら、白内障だって言われて。私が診察に初めて行ったのが二月だったかな、一二月かな。そして八月でないと手術の空きがないって言われて、それまで待てないと思って、それで今度は盛岡に行ったんですよ、医大さ。そしたらばすぐ、じゃあ手術しましょうっていうことになって。そして平成二六年の年だったろうかね、そのとき、片方ずつ、二月と三月、両方手術して。

おかげさんでいまははっきり見えますけど、いちばん目がだいじだね。だからこの震災後で見えなくなりましたって先生に言ったらば、そうじゃねえ、年だからって言われて（笑）。あっそうですか、ただ笑われてきて。でも手術したからったって安心はできないね。なんか疲れるんですよ、だから老眼鏡かけなさいって今度言われてるんですよ。

遠くはまず見えるの。近くのこの小さい文字が見えないんですよ。老眼だから老眼鏡つくりなさいって言われたんです。とにかく疲れるね。目薬は必ず一日六回つけなさいって。でもそれがまともにつけれるわけない、二回つけるときもあれば三回つけるときもあれば（笑）。まじめにつけてるかって言われたって「はい」とは言うけども（笑）。

この六年では目がいちばんドキッとしたことですね。いやいや眼鏡はつけたくないしなと思ったり、まだつくってないんですけど。だから虫眼鏡みたいなので、細かい字は見てるんですよ。いちばん、目がほんと見えるようになって、いちばん嬉しいですね。

■閖上の被害に涙

娘夫婦が住んでいるのは名取です。空港から何分車で走ったところなんでしょうかね、一〇分ぐらいかな、そんなような感じの近くですがね。山を崩して、震災に遭われたかたたちがあちこちから集まって家を建てたり、けっこう町になってましたよ。最初は三軒ぐらいしか建ってなかったんですよ、それが全部埋まっちゃって。いい人もいれば悪い人もいればっていうような感じ。

一度閖上（ゆりあげ）に行ってみました。名取にうちの娘が嫁いでるもんだから、どんなのかなって、行って見せていただきました。とっても涙が出でね。地元もそうなんだけども、もちろん名取は閖上はもう違うねえ、被害が多かったんですよね。たまにテレビでも、まず映って見るんですけど、そうしてあの市場があるんですよね、そこに行ってまずお買い物したりなんだりして。私の両親は、うちは大規模半壊したんですけど、逃げて両方助かって。仮設というか、親戚の空き家の掘っ立て小屋にいま住んでます。山田町はまだ災害公営住宅ができないんですよ。本家は津波は大丈夫でした。

■嫁いできたころの田老を振り返る

嫁いできたときの田老は、海のものがまずおいしいという印象かな。お仕事は大変だっけどもね。いまワカメ

の最中ですので、朝も五時前には行って、お仕事して、九時過ぎっていえば帰ってくるんですけど。四月入るか入らないかな、終わるのが。お魚がいいし、あと鮭とかワカメ、昆布、そういうのがまずいいですもんね。やっぱり海のものでしょうね、おもにね。

あそこの地区は、堤防ができてから住み始めた地区だったんですよね。けっこう家があったんですけど、あの辺にもね。畑があって、裏は山でした。笹やぶがあって、その笹やぶの中を、地震がきたらば逃げるようにって言われていました。根を張ってるから、割れないからっていうことでね。本家のおばあさんが、なんでこういうとこを選んでうち建てたもんだろうと思って、私はそう思ったの。海の近くでね、別のところがあったのになと思って。そうしたらば、ここまでは津波はこないからって言って、ここがいちばんいいんだって、逃げるにも山に逃げやすいから。そういうことでおばあさんが、旦那のお袋、おばあさんっていうのがね。

よそからきた私としては、「海からちょっと離れたところの場所がよかったのにな」と思ったの。でも年寄りの言うこと聞いとかないとね（笑）。それで旦那が、「退職したら違うとこに土地を買って家を建てよう」って言ってもいたの。六〇歳でもう定年して、あとは海のお魚釣りしたり、そういうことをするって言ってたんですよ。ちょうど還暦、その年ですがね、一月の二日だかに還暦祝いしたのね、グリーンピアで。そうして間もなく震災ですもんね。でも震災前にあったとこの土地、道路がなかったんですよ。避難道路だったんです、いちばん山の下だったから。そこに家を建ててあったから、道路もないし車も入れるところでもないから、じゃ別なところに土地買ってうち建てようって言ってだったの。

希望していた土地は、私はわからないけど、親戚の人たちがいる真崎に行く途中、和野っていうとこある。越田ともいうけど。昔、山を越えて津波がきたらしいの。それで地名を越田ってつけたらしいの、そういうたとえがあって。そっちのほうに親戚がいるから、そこら辺がいいなって。ほんといいとこですあっちは、静かで。便

利はちょっと悪いけど、これからはいいんですよ、県北バスが通るから。だから逆に、これからは越田もいいねと思って。道路も高台からずっと越田に行く道路ができてるから、りっぱな道路です。この前お散歩でまず行ってみたんですけど。

津波の前、田老に住んでた町の人は、ほとんどあっちの高台におうちつくるか、ここ（災害公営住宅）入るかですね。田老から出て行かれた人っていうと、盛岡に行ったかたもいるし、あとどこに行ったんでしょうね。あまりわからないですがね。ほとんど第二の田老って、崎山、潮吹グランドっていうか休暇村のほうに行く途中に三王団地があるんですよ。田老だけの人たちが集まって、第二の田老って名前がついて。あそこにほとんど行っちゃったしね。だからほんとの田老って人口が少ないです。けっこうあったんですけども。たまになにかイベントがあれば、第二の田老の人たちが集まるけども。だからおうちを建てて、あら早まっちゃったな、黙って田老にいればよかったなとかっていうかたがいるみたいですよ。やっぱりふるさとがいいですもんね。

■命日に避難訓練があっても……

「津波がきたらまた流されて、お前たちは」って言う人もいるけれども、いやあ四階か五階に行けば大丈夫かなぁって考えたりして。でも避難訓練はあるんですよね。この前もあったけど、ちょうど一一日だから。でも訓練もなにも行かなかったけど。だれも行かないんです。毎年一一日かな、今回も一一日にしたみたいだったから訓練は。それでもねぇ、一一日って言えば、それこそ命日だもん。忙しくて訓練どこじゃない（笑）。ここだっていうから安心感もあって。「なあに三階から上は大丈夫だが逃げなくても」って、言ってくれるお父さんが近所にいるの。黙っていろって言われたりして。

震災前は昭和三陸津波の三月三日に訓練をやってましたね。でもこの震災後、一一日になったんです。朝六時に訓練やるんですもんね。なあに訓練にも出られないんだもの、仕事に行かなきゃなんないんだもの。時期がワ

カメの時期なんで。日曜日ならば訓練もするったって、普通の日にあたるとほんと訓練どころじゃないもんね。訓練のために休むとまた給料ももらえないから（笑）。ちょうど六時っていえばご飯どきだもんね。だから訓練しなかったから、こういう目に遭ったのかなと思ったりするけどね。

■これからのこと

ここに入って、あんまり思い出したくもないし、けっして忘れてるっていうわけでもないんだけど、もう六年も経てばね。あまり、記憶が薄れて、もうね。まあとにかくつらいですね。いちばんの、それこそ大黒柱を失ったからね。

大変だね、とにかくね。これから自分ひとりでどんな生活していったらいいのか、だんだん年とっていくしね。娘たちのところに行きたいと思っても、やっぱり旦那が他人だから気は遣うと思うのね。自分でやれる範囲まではここでお世話になって、あとは施設に入れてもらったらいいか（笑）。そうは考えてるけども。たまに娘の家に行くけれども、やっぱり気を遣うもん。だからどうしたらいいのかね、ぼけてもうどこへどう行くかわからないし（笑）。

これからはどういうふうに変わるか、そりゃわからないけども。なんにも楽しいことはないですね、震災後に。やっぱりひとりだからね。よその人たちは、旦那が亡くなってけっこう金もらったべって、そう皮肉を言われるけども、金じゃないって言うの。やっぱり命ですもんね。そういう皮肉もいくらか言われましたよ。でも、それを言われてくじけるわけにもいかないし。何度か涙は流しました。いろんなことひとりでやっちゃって、もうあとをついてこうかなと思った日もあったしね。つらかったねえ。

やっぱり家族がある人たちは感じないと思う。ひとりになってなに、夢のようにしか聞こえないと思うけどね、家があって家族がある人たちにはわかんないと思う。もうこれからは自分で身を守って生きていくしかないな、

寿命はどのくらいあるんだかわかんないけどって、お友だち同士で言ってるの。だから行ったりきたり、いろんなお話をしたり、そうしてるんだけどね。こないだ七回忌をすましたんだけども、親戚たちは呼ばないで、娘たちだけを呼んで、自分たちだけでもうやっちゃって。またお金がかかるんだもの、親戚を呼ぶとね。きていただけたら、ただでもないしね。そのときもまず思い出して、涙も出たけども。あとは一三回忌かなと思ったり、それまで私は元気でいるのかなと思って（笑）。

でももう思い出したくはないですよ。これから新しい生活に向かっていきたいなって。けっして忘れる、ほんとに忘れるっていうことじゃなくて、いつも心には思ってるけども、くじけて生活はできないなと思っているけどね。思ったって、思ったって、帰ってくるわけでもない。いつになったって帰ってもこないだろうし。

ああこれで一段落ついたっていうのはない。ないです。これからなんですもん。でも自分の家っていうのに住んでれば、ああこれで安心って思うけども、どのくらいまでここに入って生活ができるかっていう不安はあるね、いちばんそれ。健康、金銭面。それがだいじだと思うね。

やっぱりなにがしかの蓄えはとっとかないと不安だしね。でもいまはあと一年、医療費もまず免除になっているけども、来年からはあたりまえに支払わなきゃなんないし。そのぶんとして貯めればいいんだけど、貯まんないんですもん。いろんなおつきあいやら、最低限とはいいながら、でますよ。だからけっこうかかるんですよ。いちばんお盆がかかるんです。お盆には親戚のところに出向けば線香一本でもないからね。少なくても、もうものではなくて、私、お金であげてくるの。そのほうがいいかなと思って。私がお金がいいと思うから、ほかのかたもそうかなと思って。そうすれば好きなの買ってあげてもいいだろうし。（お金だと）身軽でもいいし、歩くっていっても軽くて（笑）。震災前だとものを買って、わずかなものでも買っていってあげあげしたけども、いまは私の時代になってからはお金であげてるんですよ。皆さんはどうだろうか。

（二〇一七年三月二七日）

●世帯T・F　話者一名……男性（七十歳代）

■震災前のくらし

明治二九年の大津波（→巻末用語解説「明治三陸地震」）で、この私たちが住んでるところでは、死者が約二千人かな？。ほとんどのうちがなくなったわけです。明治の天皇制の時代だから、「一軒のうちを立てなきゃならないよ」っていうことで。生きている人たちがそこのうちを継いでって。わが家は、おじいさんが、家主が亡くなったうちに入ったから、おじいさん、親父、俺、三代目になるわけだな。そうでなくて、もう大昔から見るとそれが何代だかわかんない。

明治の津波のときは全滅したわけだから。生き残った人も少ないわけだから。そして残ったうちに、ちょっと血筋の人を呼んで、そのうちを再興させたんじゃないですか？　それで再度、また津波がきたわけだから。血縁ではないけれども、先代の人とかも。俺のおじいさんは血縁だけど、その前に亡くなったうち、明治二九年で流れた人たちというのは、全然関係ない人たちだからね。それでも何代目っていえば、たぶん七代か八代ぐらいになってんのかなと思って。

全部どこの人も、ガラッと変わったの。血のつながらないうちになったわけ。だからもう旧田老村の人たちがそこに住んだんでなくて。この田老村は明治二二年だったかな？　四か村が合併して、田老村になったんだよね。それまでは四か村だったから。だからそちらのほうから人を連れてきて、「とにかく村をつぶすわけにはいかないから」って、うちを維持させるような、それは行政が主導したんでしょうね？　たぶん。

でもほかの災害でも、やっぱり役所っていうよりはもう村の存続そのものに、やっぱりいろんな遠縁だなんだっていってきて、「家を継ぐ」っていうんですかね？　「家を継ぐ」というのは、軍国主義だから家を継がないと兵

隊が生まれないわけだから。だから、国が主導してんでないの？　そうでなかったら、こんな恐ろしいとこに住む人はいないわけだから。どうしてもそういう雰囲気をつくってあったんじゃないですか？

三代前の俺のおじいさんは、ここの平坦地のうちなんですけど。地区でいえば、田老の駅から向こうのほうなんです。対岸のところの駅の裏側。だから、そういうつながりのことが、どういうふうにしてやったのかなあ？　当時の資料だと約二千人が死んでんだよね。当時は人口もそれほど多くはなかったわけだから。だから、ちゃんと初代から血がつながっているというようなのは、こういう津波のような被害地にはないよね、どこでも。

とくに田老なんか明治二九年に全滅したぐらいだから、「それらの人々がどこからきたか」っていうのは、津波に遭わなかったこの高いほうの人たちがきたと思うんですよ。わが家のおじいさんは大平地区だし、おばあさんはそっちの青砂里（あおざり）地区ってこの高台のそっちのほうね。そっちこっちからいい加減に連れてきて、みんないっしょにしてうちをつくらせたんじゃないですか？　そうしなければ、村が存続できないからか。明治から大正、とくに昭和になるとね、兵隊をつくるんだもんね。で、独身の人は小バカにされるんだもん、日本中で。でも、招集はされたんでしょうね？　独身だってね、当然ね。

俺は昭和二〇年生まれ。二〇年っていうのは、終戦の年。そして、わが家のお袋はね、太平洋戦争が開戦した昭和一六年には産婆だったんですよね。いまの助産師ね。戦争が始まる昭和一六年に、細菌戦争に対応するためにインスタントの保健師を養成しなくちゃということで、応急で日本全国の助産師に、短期間の講習で保健師の資格をとらせるようなことをやったわけ、開戦の四か月ぐらい前に。

で、わが家のお袋も、四月に子どもを産んで、その講習は六月から始まっから、二か月でまだ身体が安定しないけれども、盛岡に行って日赤病院かなんかで、全寮制のようなところで、助産師が保健師の勉強をさせられたわけ。たぶん、それは全国でやったと思うんですよね。結局そういうふうにすべて国が主導してたよね、本人の

意見はなにも聞かないで。私のお袋は、保健師になるための最後の難問が自転車乗りで、それができず途中でやめて帰ってきたので保健師にはなれなかった。

床屋は俺の代からです。親父は漁船の乗組員でした。それから、そのおじいさんが、馬方か牛方か、そういうのやったと思う。床屋と住まいはいっしょの建物でした。自宅は国道四五号線沿いでした。役場のところからきた国道四五号線沿いの、赤い屋根の二階建ての建物です。わが家の近くは地面が低いから、総雨量で一七〇ミリぐらい降ると床上浸水とか床下になるぐらいだったの。設計が悪かったから。昭和八年に区画整理したわけ（昭和八年の津波でたくさんの人命が失われたので、区画整理によってどこからでも高台に避難できる道路をつくった）。区画整理したけど、技術者がそんなうまい人でなかったら、ここラウンド状になった。

ちょうどわが家の建ってるところの下のほうは、もともと川底だったわけ。昭和八年の津波（↓巻末用語解説「昭和三陸地震」）の前ね。うちの向かいのうちの裏のほうになると、橋げたが残ってるままだったから。そういうふうな状態で、ここがいちばん低い状態。だから津波とかで、つねにもう水害には恐れてたった。そしてわが家は昭和四二、三年に建てたうちだから、その後に建てたうちはみんな基礎高くすっから、ますます低くなってだった。

区画整理によって、土地はここになったわけ。で、津波の時点のときの土地の面積は一〇〇坪。区画整理をして二〇何パーセントとられたから、七五・何坪（各自が土地を出し合って津波の避難路をつくった。国策）。この津波で全部山に逃げれるように道路をつくってしまったから。だから、土地を出すのが多かったわけね。減歩されてるわけ。だって津波前、昭和八年のころは、国道とかこういう道路は整然としてなくて、路地のようなのが雑然となってたわけだから。国道だってそのころは車の時代ではないから。私たちが小学校のころは、製材所に丸太を配る仕事を同級生のうちのお父さんが馬車でやってらったわけ。で、車の社会になったのは、昭和

三五、六年からあとなんだよね。

その前まではなんでもそうだけど、漁業だって船外機じゃなくて人間がこいで、魚でなくてウニなんかをとりにいってたわけだから、小舟で。昭和三五、六年ごろからだね、機械化とかそういうのが出てきたのは、各産業で。それ前までは、もう原始的だから。当然昭和八年のころは、たぶんラジオもってるうちも少なかったと思うから、そういう津波の情報なんかもラジオで流しはしなかったと思うんだよね。つねに、「地震があったら山へ逃げろ」ってのが、もうこれだけで。

母親は岩泉町の安家（あっか）っていうところの出身。お袋は毛虫が怖いので、あの安家にいると畑の仕事なんか手伝わされて。それで盛岡は都会だと思って、毛虫がいないだろうなと思ったわけ。そして当時は、産婆学校っていうのが開設されて、そして各無医村、市町村で助産師がとりあげてくれない村があったわけね。そこら各何人いて、総人口にあわせて選抜して養成したの。というのは、ひとりでも乳児を死亡させたくないから。乳児がひとり死亡すると、戦力が弱くなるから。もう軍国主義だから、子どもを増やさなきゃなんねえ、戦争が始まる前から。

だから、親父と結婚したときはもう、助産師の学校終わって、もう仕事を始めていました。田老にきたのも、田老には毛虫がいないということで。海のとこがあればいいから、お見合い結婚だから、言われたとおりに。「毛虫がいないからいいから」って。ところが毛虫がいたってね。怖がってもう、死ぬまで毛虫は怖がってた。

修業に行ったところ、学校に通うのにお袋が下宿したところは、県庁の厚生部の先生のうちだったの。お医者さん。で、そこは南部藩のお抱えの藩士だったから、医者だったから、りっぱなお庭があったわけ。そこの草とりなんかをすると毛虫がいるために、もう助産師の免許とる前に、「帰りますから帰してください」って言ったそうですよ。そしたら「Oさん（母の旧姓）、あなたには草とりはさせないで、炊事のほうだけやらせるから」って言われたわけ。当時はそういうところから通わせるようにやってたのね。助産師の養成の費用は、もちろん

国で出してあったから。それもこれもみんな、死亡率をね、高くしないように。そしてさらにそれが進んでって、保健師さんもどんどん養成して、死亡率ゼロを目ざして、しばらくやってたわけだから。

私たちが小さいころは、たまにお産で亡くなるときがあったから。もう、宮古まで行かなきゃなんないから、当時そういうお医者さんを頼むというのはなかなかむずかしいわけだから。タクシーもないわけだから、昭和三五、六年までは。で、宮古まで行くのも、国道は舗装でないから。この二級国道って、グニャグニャ曲がった道路だったから大変だったの。

お袋は、最初は開業の助産師をやって、そして母子健康センターを田老町でつくって。もうひとり田老にいた助産師さんを雇って、そこで。そうすると、妊婦さんのうちに行かなくても、母子センターに入所した人が産むから、宿直の日に行けばいいわけだから。公務員の定年六〇歳だから、六〇歳までやってた。途中から、開業の助産師から田老町の職員になったから、そのために。当時はあれだもんね、盛岡あたりでもお医者さんが赤ちゃんをとりあげるようなのは、ケースは少ないわけ。ほとんど助産師、産婆がやったね。当時の免許証を見ると、免許証に「産婆」って書いてあってから。そして、そのつぎが助産婦。いまは助産師。毛虫を嫌がって助産師だか産婆になったのは天職だったけど。最後はもう、津波で亡くなってしまったから、それは俺の責任だからもうどうしようもなく。

床屋は、一五歳で理容学校に入ったから、六五歳までやったから正味五〇年か。四人兄弟で、ほかの兄弟はみんな遠くに行ってます。ひとりは漁船に乗って、事故で死んだしね。

当時は「お墓を守る」とか、そういうののために、お婿さんに行ったり、知らない同士がいっしょになって、そのうちを継ぐとか。それがなければ、存続しないわけだからね、こんな小さなところは。ところが、これがもう新憲法の下ではそんなのはなくなった。

■三月一一日のこと

わが家のお袋は九五歳で、俺とふたり暮らしだったの。地震があったときに、俺は床屋だからお店で仕事をしてたら、もうお客さんも震えて帰れないでいる状態で。お袋が奥のほうから出てきて、「これは必ず津波がくるから逃げよう」ったんで、「あ、大丈夫。あわてなくても放送では三メートルって言ったから、逃げなくてもいいから」って。で、お袋はうちに置いて。うちに置いて二階に避難したわけね。そしたら親（お袋）が、津波の一〇分前に「この地震だったら絶対くるから、お前だけでもいいから逃げろ」って言われたんで、避難の指定場所に逃げていきました。そうしたら、指定の場所に、一〇分前に行って海のほう見たら、海面が高くなってくんのがもうわかるわけ。灯台のふもとの岸壁に、どんどんどんどん水があがってきたから。で、「あれ？　水があがってくる」と思ったら、向こうから大きい波がグワーッって。波ったってあれ、あの体積の水が押し寄せるわけやからね。

だから津波をこの目で見たけども、実感というかあれだがね、なんつーのかな？　一度も本物の津波見たことがないから、「これが津波だ」とは思わなかったね。あとで目の前に、山で見てたら、わが家が壊れて流れていくのを見ても、「これは津波ではないな。夢だな」と思って見てたから。

「津波が恐怖」というようなのはもう、小学校だか小さいころから聞いてるため、あまりにも耳にタコがでて、本気にならなくて。放送とか、防災無線の放送なんかだけを頼りにしておったから。で、「地震があると津波がくる」っていうのを、七八年間もこないから、もう本気にしてなかったわけ。たしかこの間の地震は、震度は大きかったような気がするね？　いつもより、ものすごくってなんなくて。お袋が「二階に逃げましょう」って言ったって、いちおう二階には。ほんとは親は避難所へ逃げたかったけど、九五歳で車いすでなければむりだったんで。でも足は動いてあったけども、自力では行けないし、第一俺が「このぐらいの津波では大丈夫だよ」って引

き止めたのがね。そうだったわけだから、たいていそういう体験で、みんな亡くしてますよね、人を、家族を。

津波の警報で「三メートル」っていうのは放送で聞きました。それにラジオでも聞いた。テレビでも言ってた。それが、だって随時気象庁で津波の予測を出すわけだから。そうすると「三メートル」って安心するわけ、堤防が一〇メートルだったから。

いままで俺は（津波を）体験してないから。でもお袋はすごく恐怖心をもってだったの、つねに。で、俺が引き止めたの。「この波がくるから、早く逃げよう」って言ったのに。「大丈夫だから二階にあがって」ってしゃにむに二階にあげた。というのは、気温見たら一一度なかったので、寒くなるなあと思ったんで。ほんとはそんとき私がいっしょに逃げるのが、この津波の地区で生きる正しい生き方なんですよ。

そして最後に、あと一〇分で津波がくるときにお袋が言った。「お前だけでもいいから助かって、もし津波の警報が解除になったらすぐ迎えにこいよ」って。で、「ああ、大丈夫ですから」って。もうそのつもりだったために、お袋をしゃにむに二階にあげて布団に寝せて帰ってきた。だってお袋はあれだもん、デイサービスに通ってだったのね。デイサービスは土曜日だったから、津波のあった日は金曜日だから。

お袋はデイサービスに行ってせっかく風呂に入るのに、お風呂に必ず自分で入ってから行くんだよね。で、その日は二時半ごろ、風呂にお湯を入れて入ろうと思ったけど、地震があったんで、ガスを切ってふたをして、「早く逃げよう」って私が働いている理容店にきたの。それを俺が、「大丈夫だ。三メートルだから大騒ぎする必要はないよ」。でもよく外なんか見ると、みんなが逃げていったようだっけ。だって今度津波の遭った人は一八〇人（※実際の死者・行方不明者数は一八五人）だから、人口に占める割合は少ないんだよね、昭和とか明治より。

■避難所での生活

津波がきて、その裏山の近くにおばさんのうちがあったわけ。その日はそこに泊まって。「あ、迷惑がかかるなあ」

と思って避難所に行った。俺が行った避難所は総合事務所。総合事務所と、あとはお寺さんと北高（県立宮古北高等学校）とか、全部で七か所あったのかな、応急の避難所が。それは三月三一日までね、月末まで。

そしてつぎの四月からはもう、指定の避難所にみんな行ったわけだから。集約して、二か所に決まったのかな、避難所が。グリーンピア三陸みやこのホテルとアリーナ、それから樫内だったかな。二か所だな、避難所は。樫内地区って宮古に行く途中にあるんですよ。もう六年も前のことなんで忘れてしまった。それ前までは鮮明に覚えでだったけど。

その前までは応急でバラバラにいたわけだからね。そうすっと大変だから、「早くやれよー」って。そのころはもう、自衛隊のかたがきて面倒みてくれたわけだから、一生懸命になって炊き出しとか、そういうのはね。そして四月一日から、もう全部を避難所っていうのを設けたところへ派遣して。その後、六月ごろから仮設住宅ができたようだったから。俺もグリーンピアのほうに行きました。

津波の避難所に行ったら、ものすごく手が荒れて。そしたらグリーンピアの従業員のかたが、この手を見るに見兼ねて、手袋買ってきてくれたのね。そして、「こんな指を見たことないなあ」って言ったんで、皮膚科の病院に行ったの。「先生、俺、エイズか梅毒になったようで、こんな荒れてます」って言ったら、「あ、じゃあ皮膚をとって、で、診っから」。そしたらこの病気は、心因性って。心の因子ね。「あー、心因性でもこういうとこなるのかな」って思ったの。「とりあえず、保湿剤を出しておくからね」って。全然なったことがなかったのね。指一〇本全部荒れて。最初は洗剤で負けてるなと思ったけどね。

今日も手がこんなになったのは、洗剤を使ったからだと思う。ファミリー。昨日までは真水でやってたんだけど。だいたい心因性でなるのはおかしいなあと思って。心因性でなるような病気もあるんだよね？　いろんな。だから恐ろしいもんだなあと思ってね。ふつう原因がわかるわけだもんね、皮膚科の先生だと、ある程度。だから原

因がわからないのは、心因性にやるのかなあと思って。津波後に初めてなったもん。津波に遭遇した年が六五歳だから。その前までは、もう仕事で洗剤を使ったって、こんなに荒れることはなかったわけだから。ああ、心因性っていうのは、こういうのが原因でなるんだなあと思って。

■痛恨の思い

わが家のお袋は騒ぐほうだったけど、俺が怠慢だったから避難しなかったの。「大丈夫だから」って、洗脳して。「大丈夫、三メートルは一〇メートルの堤防に対して全然大丈夫だから」。ほんとは逃げたかったけれども、ひとりでも勇気あれば行ったと思うけども、もう地震で腰を抜かしてる状態だから、がまんしてたんだろうから。ちゃんとわが家でも避難用の車いすも買ってあったの、津波の五、六年前に。でも避難する練習しようと思っても、お袋は恥ずかしがって「やめよう」って。いつも乗用車で病院に乗せていってるんだけども、津波の練習のために一回車いすで病院まで行ったら、「途中でみんながあいさつして恥ずかしいから」って、「車いすは乗らない」って言ったの。だから俺も、津波の当日は車いすがあるというのも、すっかり頭から飛んでだったの。

それだけ真剣にとらえてないんだよね、どなたも。「津波ってほんとにくるのかな」と思って。私たちが小さいころは、昭和八年から年数が経ってないから、津波は恐怖感があったわけだから。それから年月が経つともう、あれだね、恐怖もなくなってくるよね。

■母の思い出

当時は全国で助産師が赤ちゃんをとりあげていなかったから。「腹とりばあさん」って出産を経験したおばあさんたちが、とりあげてくれたわけ。で、当時は産院とか、あ、助産院なんかは都市部にはあったけども、皆産むのは自宅でしょ。だから助産婦が出てきても、「家庭分娩」ってうちで産むんですよ。産んでからも、一週間「沐浴」って洗わなきゃなんねえから通うの、助産婦の道具をもって、徒歩で。で、当時の履物は下駄。だから下駄

を履いて歩くと、自分の親の足音わかるので、自然に。

お産があるのはたいてい夜中ごろだから、陣痛が起きたころにそこの家庭の人が迎えにくるんですよね。そうすると、「何分置きにやんでいますか？」と、「一〇分置きです」と。「あ、じゃあそろそろ生まれる時間ですから、家に帰って、たらいにお湯をわかす用意してください」とか言ってね。それから行って、もう早い人は一時間か二時間だけど、難産なるとつぎの朝まで。つぎの朝帰ってくんのね、とりあげてから。

ところがうちの親なんか、足の運びを暗記してるために、子どもらは下駄で帰ってくんのがわかんの。そうすると、疲れ切って帰ってきたときに、われわれのあれは、「ご苦労さん、今日は安産ですか、難産ですか？」って聞くわけ。で「安産」って、「あー、よかったあ」って、これなら疲れないで帰ってくっから。それがもうあれだったね。

家庭分娩をやってるとだんだん死亡率も高くなっから、今度は産院とか母子センターのようなとこでなさせるように、市町村でそういう施設つくったわけ。そうでないと、診察にくるわけね。そうすると、妊娠の証明書発行して。で、「予定日は何日ごろですよ」って、もうわかるわけだから、それをストックしておいて。「あ、そろそろお産があるよ」となるころになると、体制を整えておくわけ。で、当時はいっぱい生まれる時代だったんで、一日にふたりぐらいは。大変だった、こんな小さな町なのに。

俺が小さいころは、お袋が自分の仕事が忙しいから、俺ら四人兄弟を静めさせるために、「お前たちもおっきくなれば、兵隊に行くんだぞ」って、戦後なのにそれを言ってたわけね、脅かすために。「おー、兵隊に行くのか」と思って。そしてちょうど朝鮮戦争が昭和二五年ごろやってて、雑誌の切り抜きなんかが、ふすまの紙がないために、こう大砲のついた軍艦の写真なんか貼られてるんで、「まあだ戦争をやってるな」と思ったの、うん。で、いつもそれでお袋が脅かしていたのね、もう戦争は終わってんのに。で、それがいつも恐怖で、小学四年生まで寝ショ

ンベンたれてだった、兵隊に行くのがやだって。そして四年生のときに、転勤してきた先生が言った、「日本は戦争をしない国になったから」っつうのを聞いて、「あ、新しい憲法で。親はとんでもないの教えてたな」と思って。それを聞いた瞬間、寝ションベンが止まったった、夜尿症が。夜尿症などなければ、あと四センチは身長が伸びたったのに。恐ろしいね、そういう親が教えてるのは。

■マスコミの取材はすべて断った

ぜーんぶインタビューも、ずっと岩手日報も全部断ってる、最初っから。「そんなにしつこいんだったら、もう岩手日報の購読をやめますよ」って言ったの。だってね、こんなもん、どうせあと何年か経つと忘れて、また同じこと繰り返すわけだから。直後は全然もうしゃべりたくなかった。というのは、「あの人はお母さんを助けないで、自分だけ逃げた」とかって、そういう先入観があっから、そういう取材としてはいいネタだもんね。仮設住宅にいたころ、日報社の人が待ってたりしたの、帰ってくるまで。

仮設住宅の近所の人が、「あ、あのかたは何時ごろにはきますから、待っててくださいね」って新聞記者がわざわざ待ってたりして。でも、それ仕事だから、新聞社は。記事をもってかないと給料もらえない。大阪の何新聞だったかな？　朝日じゃないな。その人が登米市に二年ぐらい滞在してて、やっぱり記事をつくって。で、それでそんとき初めて応じたときに、大阪に帰ってから謝礼の手紙がきたりして、「あー、やっぱり仕事はプロだなあ」と思ったの。あれ、記事を取材したの、ほめられたんだがなあと思って。というのは、私はその人に記事を提供しなくても、その人がたまたまいい記事を見つけてね、ヒットして、その帰りにわが家に寄ったの。新聞のかただって、仕事ととらえてやってるわけだから。スクープをとらないと給料もらえない。

■公営住宅の家賃と生活

人それぞれだかもしれませんけども、俺はとくに独身だからもう、自分のことしか考えてねえから。やけくそ

で生きてるようなもんだから。やけで生きてる人もいるかもしれないんだったな。そうしないように一生懸命社会福祉協議会の人たちがきて、励ましてくれんの。あそこの集会所で集まりをもってくれたりね。でもそんな集まりをもってくれても、それさ適合っていうか好きな人と嫌いな人があんのね、出無精とか。俺どっちかっていえば恥ずかしがり屋だから、そういう集まりには行かない。そうすると、あの人たちは仕事としてやってっから、ほんとはもっともっと参加してもらいたいわけね。で、行く人はもうメンバーが決まってしまうの。いくら言われても性格だから、どうしようもないのね。「全部やれ」ったってむりだもん。ほんとです。

床屋は職業だから。お金をいただくのは、自分の性格は関係ないから。関係ないですよ（笑）、ほんと。人見知りとかそういうので、職業には関係ないの、仕事には関係ない。だって演技して仕事してんだもん。で、自分がひとりになったときは本心だよね。

ふだん、このぐるり周囲のかたとはそんなにしゃべったりはしないですね。ただ、いちおう、ここの公営住宅に住んでる人たちは老人が多いから。ここに一戸建て住宅は一七世帯あんのね。そこに、みんな六五歳以上の人が住んでるな。あとは老夫婦になると、もう七五、六ね。そして単身で住んでんのが、俺みたいなんがもうひとりいるから。公営住宅はいまんとこ家賃が安いの。２ＤＫでいま俺六九〇〇円払ってんのね、年金暮らしだけどね。安いね。それが五年後になるとあがっていくの。これはあくまでもね、特例なの、特別の処置。で、それが五年後になると、計算してみたら三万三〇〇〇円か三万七〇〇〇円になるなと。これが正規の値段だから。毎年所得を調べんのね。今度八月三一日までにやらなきゃなんねえだけど。こういうの出して、家賃が決まるの。そして、「今度この手続きを怠った人は最高額をとりますよ」って、最高額が五万八九〇〇円だから。それは怠慢をさせないようにね、市役所がね。「真面目にしなさいよ」という警告。

金額は収入によるんですよ。月収が二五万九〇〇一円の人は、たとえば２ＤＫだと五万八九〇〇円。３ＤＫは

六万八四〇〇円ってなって。で、これが八段階あんの、所得を調べんのがね、収入をね。で、月収ゼロ円の人は、いまのとこ2ＤＫは六九〇〇円。

でも民間アパートからみたら安いんだもん、こういう住宅だからね。東京あたりとか、埼玉の郊外にある都市なんかだって、四万いくらだよ。安いほうだよ。だって公営住宅って元々はお金のない人が入るようなもんだから。大金持ちで入ってんのは、俺とか三人ぐらいしかいない。これは利益をあげるために、市で経営してるわけじゃないよね。計算上はぎりぎりのところだよね、たぶん。最終的には赤字になっちゃうからね。だってね、ここも造成するし、向こうの土地も買い取るし。それがみんな支援金でくるんだよね。

そして、ここは五年後になると売却すんの、一戸建てを。そんとき資本がかかっから、市役所のほうで。欲しい人が買うの。そうでないとね、市のほうも大変になってる、管理。買わないと、ふつうの家賃で借りるの。「高い家賃払うか、買い取るか」のどっちかになるの。「どっちが安いか」ってことだよね。

でも、ものを欲しい人は買うと思うよね。いままではみんな一戸建てで、下のほうで広々と住んでいたのが、こういう2ＤＫとか3ＤＫになって、「うわあ、こういうアパート暮らしって狭いなあ」って実感してるわけだから。皆生まれて初めての生活だよね。こんな狭いのね。でもこれも慣れるとあれだよね。津波と同じようには感じなくなんだよね、住んでればね。

これから家賃はたぶん高くなると思います。三万三〇〇〇円っつったらもう、五倍だもんね。でも入所するときにこの額は決定したんだからね。生活ができないという人はいないと思うよ。俺のようにひとりで住んでる人もあるけど、三人住んでる人もある、働き手がね。そしたら三人分の収入を申告しなきゃなんねえから。

あの家具の突っ張り棒は、津波後に弟の奥さんがもってきてくれたの。娘が東京に住んでたけど、結婚するために、こういう古いのを津波後に東京から配ってくれたの。「捨てる」って言って、「家にもってきて使うから、

どんな傷がついててもいいから」って。地震、心配してね。

■支援金のこと

昨日通帳調べてみたら平成二八年まで義援金が入ってる、われわれの口座に。義援金を集めてるのがあるでしょ？　集まったのが日赤を通じて各市町村に配布されるの。その義援金がまだ入ってるわけね。だから私たちも北九州か、九州の被災地に寄付したりして。それでいただいたぶんをね。ずうっときてんだよね。

年一回くらい、一二月の中旬に入ってる。最初のころはいくらだったかな？　いまは万単位だけど、最初のころは十何万単位なんだよね。だから支援金が集まったのが、貯まってるね。日赤をつうじて各市町村に配布されて、それから罹災者に配られるの。ずうっと。だから、すばらしいなと思って。いちばん最後に入ったのが、昨日調べてみたら、一二月一九日に宮古市義援金と一万五〇〇〇円が入ってる。これが二回目。それから、前年は二七年一二月。前年は二万六〇〇〇円。一万五〇〇〇円のが、二万六〇〇〇円なったね。その前の年の二六年度んなると、もっと多いはずだからな。支援金、三万八〇〇〇円。

少しずつ減ってますね。平成二五年の一二月だと、七万九〇〇〇円。だんだん徐々に集まんなくなっから、ね？　支給が少なくなるのね。それでもね、一世帯にその額だから。そして、たとえば私は親を亡くしたわけね。そんとき弔慰金、あれがそこの働き手でない人だと二五〇万。四人も亡くして一〇〇〇万もらった人あんのね。だから、そんなお金のことを罹災者でない人たちが語ったりしてたわけね。「いいねえ」とか言ったって。

いまはもう、こういうふうになって。気がついたのは昨日だけど、一万五〇〇〇円か、そんなのも入ってんのも気づかなかったんだ、いままで。もう慢性になって、もらってあたりまえのようになってね。でも正直にちゃんとあれですがね、見舞金を配ってますね、市のほうでね。それは皆さんから集まったお金だから。たぶん宮古だけじゃないですよね。ほかの土地でも全部これをやってるわけですよね？

■やむなく床屋を廃業

当時床屋さんが一二軒あったんだけど、私たちは商工会議所の会員じゃなかったわけ。津波の後に中小企業再生機構でカルチャーハウスをつくったわけね。ところが市役所が商工会議所に運営とか「だれを入れる」とかを丸投げしたんだな。そうすると商工会議所では会員がかわいいから、適正配置を考えてっから、カルチャーハウスの中には二軒しかつくれなかったわけ。俺は「おかしいなあ、公の金使うのに、なんでわれわれに連絡こないのかなあ」と思って、頭にきて。たしか宮古市の広報かなんかで必ず知らせるはずだからと思って待ってたら、それは全然こなくて。

そしたら、市役所で平成二三年の津波の策定（「宮古市東日本大震災復興計画（基本計画）案」）、その文書が回ってきたのを見たらもう、ちゃんとあれだっけな。市役所が「ああ、これは市民に教えないで、会議所に丸投げしたけど、会議所では会員がかわいいからわれわれに教えないな」というのがわかったの。「でもこれ、いまさら大騒ぎしたってどうにもならないなあ。よし、それよりは泣き寝入りで無視しよう」と思って。

これにあったんですよ。平成二三年一〇月、市の商工観光課で、「たろちゃんハウスの中に建物ができる」っつーのができて、載ってんの。われわれはこれを見るまで全然わからない。その前までにもう会員の人たちは、出店する人を募ってやってたの。あるときに商工会議所の事務局長の人とある会合で会って聞いたら、「ああ、すいませんでした。もうあのころは、混乱してるためにどうにもなりませんでした」って、その一言ですましたから、「あ、世の中ってこんなものかなあ」と思ったんだよね。それにちょうどもう年も年で、目が病気になったんで。だから一二軒あった床屋で、いま経営してんのは四軒かな？　あとの八軒は廃業した。

年もあるけど後継ぎがやってるとこもあるね。後継ぎがやるのは、Mさんの人がいま理容学校に入ったし。あと、北高の向こう側のKっていうとこなんですけども、そこの娘さんも今度入ったな。それからわれわれのよう

に、「もうどうなってもいいや」っていうような人たちは廃業したがね。でもその、「どうなってもいいや」っていうような人たちも、うちだけは建てたな、宮古市内に。田老から出て行ったね。

私たちは、「ボランティアで、避難している人たちの髪を刈ってくださいよ」って、避難センターのかたからね、「仕事やってください」ってやったわけ。で、その仕事をするときも指が荒れてるため、なかなかできなかったけども。お客さんっていうか、避難者のカットやってやったのね。もうグリーンピアのころから出て、いまも。

もう床屋はやめてしまったから。理容業はもう廃業したから、保健所に廃業届を出した。店舗をもってないで営業はできない。で、その店舗はちゃんと保健所の許可を得なきゃなんねえから。ところが仮設住宅にいたときは、「罹災した床屋さんが、理容所でなくて特別な場所、どこでもいいから仕事をやってもいい」っつう特例があったのね。そのころはちゃんと申告してだった、働いたお金を。で、実際法律があるわけだからね。「理容所で、お店の中でなければお金をとる行為はできない」とか。お金をとる行為ができる場所っていうのは、たとえば面積が何平米だったら、それに対する採光、光の窓がどのぐらいだとか、この辺が湿気のないような材質を使ってるとか、きびしいの、衛生関連があっから。最近はパーマ屋さんと床屋の法律がいっしょになったの。美容院でも男のカットできるし、男もパーマ屋さんをやるに、いいよね。

■田老でいちばんへたな漁師になる

俺はいちおう漁業という職業やってんのね。そうすると、働いたお金は申告しなきゃなんねえ。そして、ところが漁業でも、俺、腕がへたくそだから、素人漁業だから年間に仮に五万なら五万、収入をあげると、それを申告しなきゃなんない、年金といっしょに。その申告するような用紙というか、明細書はもう漁協で発行すっから。

（私は）漁業組合員なんですよ。で、この田老地区でいちばんへたくそって、もう有名なの。

漁業権もってんの、父親が漁業をやってたから。ほんとは漁業組合員になるには出資金一〇〇万円出さなきゃ

なんないのね。ところが俺は、親父のころから受け継いでるために、出資金のいまの残高が五八万六〇〇〇円か？　で、一〇〇万出資したことにして、出資金の残高を出資予約金っていうんだよね。それが毎年総会の前に「あなたの残高はこのぐらいですよ」と告知されて。

ほとんど専業の漁家なんかは、もう一〇〇万出してる。だってその出資金で漁業組合を運営するわけだからね、いろんな事業を。漁協では加工場を経営したり定置網を置いたりしてっから、それに投資するわけだから。そして組合をやめるときには、出資したものは戻ってくるわけ、倒産しないかぎりは。いまでも漁協の組合員です。やめさしてくれないの、出資金が流出するからね。だから八〇歳ぐらいのかたで、元漁協職員だったかたも、身体が痛くても漁に出なくても、やめはしない。漁協に入ってっから。そして出資金何千万でないと、もう認定組合って漁業組合として認められないの。認められなきゃ、近隣の組合と強制的に合併させられっから、「できるだけ地元でやりましょう」と。

そして漁業権って、田老町漁業協同組合のとこの海でしかとられないから。そこで海産物とかをとんなきゃなんねえの。お魚はいいんだけども、磯にくっついてる海藻類は、もう、ほかではとられないの、密漁になんの。（隣接している漁協は、北が小本浜漁協と南が宮古漁協で境界標が設置してあり、各漁協のナワ張り内のみで採捕できることにとり決められている）。

出資金を出してもらうために、動員協力してるような組合だから。俺がやっていいのは、書面ではこういうふうに書いてあるな。これは海藻類、天然物の。養殖でなく天然、この地盤に張りついたやつね。それから、延縄、一本釣り、これは「やってもいいですよ」って。実際はやんねえけど、こういう漁業権をもってんの。そして、これが船が許可の登録証。だけども漁協のものになってんですよね、船も、機械も、船外機も。で、漁協で配布したのは、船とか海で使う道具類。それらも、これ脱退するときには返却しなきゃなんねえ。

そして、ちゃんと水揚げに順位がついてくっから。「あなたは今回何番ですよ」。そして、有名なのは私です。「田老でいちばんとれないので有名」って、もう俺を知らない人はいないがら、漁業で。毎年最下位。いままで理容業やってるときには税務署で申告したのを、仕事をやめてから市役所の窓口で申告すんのね。そうするとあまりにも漁業の収入が少ないから、市役所もびっくりして、「あれ、間違ってますよ、記載事項が」。何万円とかだから（笑）。だって養殖漁家だと、一〇〇〇万円以上あげてるうちもあるから。ワカメと昆布を養殖すんのね。そのほか、市場に出したものにはみんな手数料とられっから、それを市場で申告するのね。それ出すんですよね、税務課に。

私の場合は、やめたいけども、協力してるために。少しでも漁業組合、やっぱり地域に住んでればね。だから漁協なんかでは貯金なんかを集めるんだよね。で、年金の口座を欲しがってっから、漁協組合員以外にも退職者を見つけてね。金融もやってるわけだからね。

■田老の基幹産業は漁業

田老の基幹産業って漁業なんですよ。漁業の組合員の漁業権、明治に策定した旧田老村の住民でなければ漁業権を得ることができなかったわけね。当時明治二二年ぐらいは、旧田老村と旧乙部村と旧摂待（せったい）村と旧末前村って四か村が合併して、旧田老村になったから。で、四か村のうち、漁業権をもてないのが旧末前村って北高の向こうのほう。そっちのほうは漁業権がないから。ところが、こういう津波のどさくさで、いち早くもう崎山って宮古のほうへ、民間会社がつくった土地を購入して住んだ人があるわけね。

というのは、「漁業権がなくなってもいい」っていうんでなくて、ほんとはだめなんだよね。でもそれを、この緊急というか、どさくさにまぎれて、こういう結果になったから、漁業者も人口を減らさないために、昔だったら「田老の人間は田老に住まなければ」って「漁業権は与えられませんよ」という、そういう定款ももう守れなくなった、このどさくさで。

で、正組合員と準組合員があって、いままでだったら旧田老町の区域に住んでなければ漁業権はもらえなかったのに、漁業組合から脱退すると資本金っていうか、出資金がなくなると組合（漁協）の力がなくなるから、田老地区以外に移住した人にもいまのとこあげてんの。崎山地区とか、盛岡のほうに住んでいる人にも。組合員をやめると出資金を払い戻さなきゃなんない。そうすると認定組合って、何千万以上の出資金がなければ、国でも漁業組合として認めなくなったから。で、それに達しない組合は、どんどん合併を推進させられんの。それは、津波の何年か前にそういう法律が出たようだっけから。それでもどさくさにまぎれたから、こういうふうにして旧田老地区以外に行った人たちも、いまのとこは漁業権があんのね。

■漁業従事者が減れば集落は崩壊する

だからそういうのをすると人口がどんどん減っていくわけだよね。で、後継者なんかも「育成」なんて騒いでるけど、こういう仕事に従事する人はもうほとんどなくなるね。そしていまも盛んにやってるのは、市役所で月額一〇万円ずつ二年間払って、その受講をする人に養殖ワカメを研修させる事業が始まってんの。「そこで仕事を覚えたら、漁業者になりなさい」って。でもそういうのも終了して、ほんとに従事する人はいないんだよね、過酷な仕事だから、漁業っていうのは。

過酷って言うのは、いま単身でどっかの会社に勤めて年間三五〇万円働けんのに、漁業者だと家族を動員してもそんぐらいしか働けないから。いまはもうそういう計算だけやっから。地域がどうなろうとか、そんなのはもう、もういまの時代はね、職業の選択の自由もあるし。昔は保守的だから、田老なんかでは、たとえばうちで漁業やってて子どもが別な職業につきたいってなっても、長男は泣く泣く漁業に従事したわけだから。それでこういう集落が維持できたわけだから。だけど、そういうのもどんどんもう崩壊してるのがこの目に見えんの。漁業者も老齢化になってきたし。やっぱり別な仕事に憧れるわけだから。憧れるというよりも、都市部に住みたいん

だもんね、若い人はね。いまは第一次産業は過酷なわりに収入が少ないような現状だから。

ここはワカメの産地なんだけども、従事者の平均年齢が高いながらも、いまのとこはその産業を維持してる。だけど将来となるともう、「そういう仕事は外人を連れてこなくちゃ成り立たない」って現場で言ってるっけ。

たとえば四国とか静岡あたりでもそうだけど、小型でとるマグロ船があんのね、二〇トン未満か。そういう船の乗組員はもう漁労で仕事、肉体労働する人は外人がきてる。で、船舶職員って船長とか機関長だけが日本人。日本人の子どもらは従事しねえから。日本の水産大学（東京水産大学）だってなくなったもんね。旧東京水産大学と旧東京商船大学がいっしょになって、東京海洋大学になって（二〇〇三年）。岩手県には水産高校が三校あったのが、いま、宮古だけになったから。前には、久慈と宮古と広田水産と、あとはどこがあった？　四つあったんですよ。だからそれだけ漁業の従事者がなくなる。そうすると、そこの人が、もう住む人がいなくなるね。

■風化する記憶

このように六年もたつと、もう風化してくるんだよね、どんな被害に遭っても。「地震だよー」ったって、逃げる気が起きなくなんの。たった六年前に体験したのに。月日がもう七年もたつと風化してくる、ほんとに。だってもう津波の当場は、一生懸命こういうのばっかりだもんね。いろんな文献とか、商売屋さんの写真集なんかでもどんどん出てね。そういうのも、全然見る気がしなかったから。

ま、見るっても立ち読み程度。「ああ、津波があったのかな」って。やっぱり、津波に遭ったのが六五歳だから。子どものとき遭った人と、働き盛りの人は考えそのものが別なんだもんね。とくにひとり暮らしの無責任のようなわれわれだと、ほんといい加減なわけだから、世の中から見れば。「生きてる価値がないよ」って言われてるようなもんだ。それは最近感じてきた。それ前まで、やっぱり現役か仕事をやめたのも、「ああ、よっぽどこたえるなあ」と思うよね。目標がなくなるっつうかね。

だって「津波はくるもの」と決まってるわけだから、いつかは。それを実際、この目で見ないとピンとこないよね。だからこそ、逃げないで一家で亡くなってるうちもあんの。ちゃんと避難の命令が、勧告か、あれが出るんですよ、放送で。「津波がきますから、逃げてください」って。その前に、「地震があったら、もう逃げろ」って、もう口酸っぱく言われてだったの。そして毎年三月三日には（昭和三陸津波を）体験した長老がきて、長々と毎年教えてるわけ。何十年も、中学生と小学生に。それでもそのときは真剣な顔で聞いてるけど、体験したことがないからピンとこないのね。こういうものなんだべね、いつの時代も。体験して風化して、体験して風化して。そのうち戦争も起きんのかな？　大丈夫なん？

■繰り返される歴史

昭和八年の津波から七八年目でまた津波がきて、（昭和八年には）わが家でもおじいさんが流されてんだけども。ああいうふうな警報が出ても「もう津波はこない」と判断して、「防浪堤もあるし、高さ三メートルだったら、もうあそこは越えないよ」って避難しなかったわけだよ。で、何回も津波訓練してました。毎年なんですよ。そりゃ仕事としてお役所はやるわけ。ノルマがあるから、「何人集まったよ」ってね。それで国の、そのお金を出してるところへ報告したりして。ほんとうに命からがらで逃げるようなのは、もう七八年もたつと忘れるよね、どんなに聞いたって。小学校義務教育のときはもう、毎年津波の講話があるわけ。そんなのは現実としてはもう、われわれは受け止めなかったわけだから。「この人たちは仕事でやってんだ」、もう津波も七八年も見てないわけだから。

チリ津波（↓巻末用語解説「チリ地震津波」）とかそういうのは時々きてましたけど、実際に（堤防を越えては）こないわけだから、上まで。犠牲者なかったんですよね。昭和三五年の津波もね。三五年のチリ津波んときは、俺、中学三年生でしたから。そんときわざわざ海に行って見てたから、こうして。川がどんどん引けていくものを。ここに田老川ってあるんだよなあ。ちょっと工事をして、改良してあんだよね。

明治二九年の津波のころは、情報はなかったんじゃないですかね？「津波がくるよ」っていうのは。「地震があってから、津波がくるよ」と。ところが明治二九年の津波というのは、地震が小さかったの。地震が小さいっていうのは、どういうもんだっけな？　海底で断層が、このヌラヌラしたところにズルズルと滑ってって、地震が起きなかったの。だから陥没は大きかったけども、そこに水がたまって跳ね返ったから、ここでは一五メートルの津波がきたわけね、明治二九年は。で、昭和八年が一〇メートルが？　今度のは明治ぐらいの高さがきたと思う。だからそういう資料なんかはちゃんとあるんだよね、お役所とかに行って調べれば。だから個人的にわれわれは、たとえばおじいさんとか血のつながらない先祖が「津波で流れた」と言ったって、恐怖とかそういうのはないんだもん。

だってどんどん防浪堤をつくるし。「津波を受けつけない都市宣言」なんて、あんないい加減なのやったりしてっから。だからこれは、絶えず繰り返すんだよね。どんなこういう啓蒙運動やったって、人間だから。昔よく老人が言ってるのは、「田老に生まれると、一生に一度は津波に遭遇するよ」って。たしかにそうだったね。明治二九年、昭和八年、こないだの大津波と。その間津波に遭わなかった年代の人もあるわけだな。昭和八年、九年に生まれて、こないだの津波の一年前に死ぬと、津波には遭わないと。

われわれは満七一歳だけども、その八年前には津波がきてるわけだからね。そしてそういう人たちの書いた当時の作文なんかを読むと、やっぱり天皇陛下、皇室が励ましに回ったのね。小学校のその当時三年生の作文を読んだら、「明日は宮様、三笠宮殿下だっけかな、それが田老のほうにきて、津波の罹災者を励ます会があるので、今日は早く寝て朝学校に張り切って行こう」って作文で書いてあったの。だからすべて天皇様が支配してた。

明治二九年は、あれだけの人が亡くなるということは、もう津波、「地震がなければ津波はない」と認識してたわけだから。こないだのような地震でも、あんなに大きくても、われわれなんかは「津波はこない」と思って

だったから。明治の津波の被害は、二七〇〇、二〇〇〇人くらいだったのかな？　生き残ったのが何十何人って。それはたぶん田老村のことだったっけな？　乙部村を入れないで。明治二九年はひとつの村んなってるわけだから、違うんだな、それが正しいんだな。こういう資料がちゃんとあるよね、学校とか公民館とかに行くと。明治何年は何人亡くなって、そのときの総人口がいくらでって、助かった人が何人とか。

で、昭和八年はたしか九〇〇人前後なんだよね、一〇〇〇まではいかなかったから。私も小学校、中学校、三〇歳ぐらいまでは津波は恐れでだったの。それから年月がたって、さらに三五年も重ねたらもう、あんな地震でも逃げる気が起きなかったわけ。だから風化していくんだよね、年月とともに。どんな恐怖に遭っても、人は。で、それだけ考えてたら、生きられない人もあるわけだもんね。

地震が起きて、船を沖に出して、流されないようにして、それで船が助かった人もある。そういう人はもう、古老から聞いてるわけね。「船を助けるには、津波がくる前に海の沖へ出てけばいいから」。岸だけが被害を受けるわけだもんね。沖はもう、水量が大きい波はくるけども。それで一晩、海洋上に泊まって帰ってきた人もある。当然船は助かった。でも、船を流した人は支援で船を新たにいただけるわけ。だから昔はそういう支援がない時代に、おじいさんたちから聞いた人はもう、危険を冒してまでも沖に出してやったからね。それで助かった人も、船を助けた人もあるし。

人それぞれだもんね、考えが。避難とか、津波から逃れるための。そうでないと、うるさく家族が教える人と、そういう騒がないうちがあるわけだからね。

■過酷な体験をした人は忘れない

田老は「津波防災まちづくりの町だ」って言われてきたけど、それは行政側が言ってるだけで、市民はそんなんなんかもう忘れてんの。問題にしないの。彼らが仕事としてとらえてる部分だけで、張り切ってるわけね。一

般の市民は「そんなのはもうこないよ」って決めてる。だってお役所では「この仕事をやってますよ」っていうことをＰＲしたいわけだから、県とか国に。だって給料もらってっから、税金を。だからもう。まあね、そういうのが両方なければ、世の中は成り立たないわけだからね。おかしな市民があって、あとはそれを主導するつうか、行政があってね。だからあと何十年経つと、また同じことを繰り返すと思う。いつまでも津波なんかにこだわっていなんだもん。「早く忘れたいだ」と思ってっから、みんな。

全国あっちこっちで津波とか避難とかって一生懸命学校のなかで教えたり、「どうやってこれを残していくか」ってやってるのは、子どもでないからわかんねえもんなあ。子どもんなると恐怖心があって、真剣に学んでると思うよね。たぶんわれわれは、「あと寿命が一〇年かな」と計算してるわけだから。「もうどうでもいいや」と思ってると思う。しかもわれわれには、子どもも孫もいないから、もう底なしなんだね。子や孫のいるわれわれの同年配だとやっぱり真剣にやってるね、こういうの。だから、われわれは昔の言葉だと「非国民」って言われるのよ。

うちの近所にいる、いっしょに避難所にいた人は、昭和八年の津波に自分が遭ったために、もうそういう放送を聞く前に、「この地震は大津波だ」って、もうひとりで山へずっと逃げてったっけな。そういう人は助かった。その人は親を亡くしたから、子どもだけで生活ができないから、親戚を頼って田野畑村に行って大きくしてもらったから。そういう過酷な体験した人は何歳になっても忘れないね。で、守るよね、この恐怖感を。そういう人、昭和八年のときに小学校だったからばっちり。だから今度の津波を小学校で体験した人は、その人と同じようにもう永久に忘れないで、地震がきてもすぐに対処する。だから、とくに体験しないことにはどうにもならない。体験をすることはすごくいいことだけども、悪いのを体験しないとまたあれだもんね、対処の方法がわかんなくなっから。

■震災前の津波対策

指定避難所はわが家の裏山、徒歩一〇分ぐらいのとこにあったの。ここに避難する道路があって、「こっちの人たちはこっち、こっちはここ」って、もう全部逃げる場所が決まってんの。それは文書で回ってくるから。「中町はなになに山、下町はなになに山」って、山の名前がついて。で、それはもう絶えず毎年訓練すんの、避難訓練。三月三日の朝六時から。（宮古）市と合併する前は（田老）町だから、町で練習すんだよね。町だから、もっともっと練習なんかも本気だったわけね。こう規模が小さいからね、「みんなでやりましょう」って。市になるとやっぱり、そういうだけに生きておくわけにもいかねえから。

そして私が小学校のころは、お隣の家で避難する場所（昭和八年の津波を教訓に二〇坪前後の避難所）を小学校の裏山（高台）にもってだったから。わが家のお袋は、お産があると夜中でも呼ばれて行くから。そうすると子どもらを高台に避難させとくと安心なんで、そこのおうちに頼んで、夜泊まりに行って朝帰ってきてだったの、冬場は地震が多かったから。それぞれの家で避難所を山にもってだったの、とくにお金のある家では、もう避難所は避難所でつくってあったから。わが家はお金がないから、隣のうちにお金があるので、「子どもらだけでも」って。

預けるってより、当時は、お隣の人が自発的に「さあ、行きましょう」って連れていってくれたから、お願いしなくても。そういう風潮の時代だからね。隣の子どもも自分の子と同じように取り扱って。ご近所さまも介入するような時代で、それがあたりまえだと思うから、とくに田舎は。堤防の外側に床屋やってるおじいちゃんがいて。その人の話聞いてたら、「いや、俺が生きてる間は津波はこないから大丈夫だ」って、本気でみんなそう言ってた。その人は、私より四歳上だから。その人は海岸のほうへバイクで行って、転倒して転んで死んでしまった、七〇歳前に。六八、九か。震災ではなく。その息子さんが、いま中学校の前にお店を開いて、ちょっとおしゃれなヘアサロンをやってる。そして娘さんもいま理容学校に入った、こないだ。Mさんって。三王に行くほうに

もなんか一軒お店あったけど、その人はもう廃業した。

いまこの地区では防災訓練とかはやってませんね。するとすれば「津波の記念日」っていうか、津波があった日に宮古市を中心に。合併する前だったら頻繁にやったと思うんだけども、もう宮古市になってしまったから。市に合併してからもう一〇年ぐらい経つよね？　もう、ガタンとあの練習とかそういうシステムも変わったから、津波に関しての。啓蒙運動とか、そういうのももう一〇分の一ぐらいになって。市役所に聞いたら、「田老にあわせると、ほかが大変だから」っていう話は聞いたことがあるけどね。田老では一大行事でやってだったの。もう一生懸命やってらったの。「そこにあわしちゃうと、ほかの地区が大変で、できなくなるから」っていうので、なんかね。もうとにかくものすごく必死になってやってだった。だけどそれを、合併してからやっぱり薄れたのはたしかだよね。まあ俺のような変なやつは薄れてもいいけど、子どもらのあの練習も昔までと違うなあと思ってね。それにもういまは高台にきてっから、練習しなくていいもん、ここのエリアは。

■田老地区のこれから

この旧田老町、田老地区は、津波後に人口が一〇〇〇人減ったようだっけから。津波の直前だと、四〇〇〇前後あったのが、いまは三〇〇〇前後かな？　こないだ選挙人名簿を発表したの見たら、二七〇〇人なったっけから。もう「こういうところは怖い」って言った人はほとんどだ。「田老に住むと、またこれを繰り返す」とか、「これを機会にこんな危険のとこから逃げよう」とか。だからここはもうどんどん衰退していくんだよね。で、いつかこの集落ってなくなんのね。何十年だか、何百年後は。いま。それの前ぶれかなあと思って。

いくら「津波が怖いよ」って言ったって、もう真剣に聞いてる人はいない、子どもらでも。子どもらはまあ純情だから聞いたふりをしてるけど。もう高校終わってどっかへ出て行ったら、「あんなとこは怖いな」って言ってると思うね。小学校六年生で体験した連中が、いまもう大学一年か。そういう人たちは、「作文なんか書きな

さい」っていうと、先生に言われたんで生徒として書いてるけど、本心ではもう「こんなとこは嫌ですよ」って言ってんの。だから、絶望的に生きてる人もあるし、ま、希望もってる人もあるな。俺はひとりもんだから絶望的に生きてるかもしれないけど、明るい気持ちで生きてる人もあると思うよね、罹災者のなかでも。

もういま、下にはほとんど人が住んでないから。国道から海側には民家住居は建てられないですよね。で、国道から山側だと、同じような津波を計算すると、大丈夫、助かるあれだ、ね？　だからもうそれを考えてっから、うちを建ててるうちもあるわけだから。だから恐怖心はないの。これがまた繰り返す原因だよね。つぎはもっとでかいのがくるかこないか、だれもわからないわけだからね。

五〇年後にまた下のほうに家、おりていくかもしれない。五〇年、一〇〇年。あ、もうそのころにはもう人口は減って、うちなんか住む人がいないかな。なぜ下に住んでだったかというと、漁業をするためだから。当時はトラックもなければ、全部人力だったから。とった海藻だっていま乾燥機で乾かすけど、砂浜に天日で干したわけ。各人が行ってね。で、この辺でとれるワカメ、いまは三陸ワカメは製品として商品になって店頭に出てるけども、当時は元藻、葉っぱだけをとって鳴門に送ってやって、鳴門がラベルを張って、鳴門ワカメ。元藻はこっちだけど、名前は鳴門でなきゃ売れなかったの。

そのころは、そういうコマーシャルとかそんなふうなテレビもないしラジオもないわけだから。鳴門はワカメの宝庫だから、日本では。あの渦潮、波の荒れるところにはいいワカメができんの。で、田老地区では「真崎ワカメ」って有名なのは外海だ。山田湾は湾が大きくて比較的波が穏やかだから、葉っぱの種類っていうか、できが違うのね。荒れた海のものはいいわけ。そのかわりカキとかそういうのは、今度は山田湾のような、あんなでっかいとこのほうがいいわけ。その海産物によってね。だから昔は、とったほとんどを漁協で集荷して、それを鳴門に売ってあったり。「それでは全然利益があがらないよ」ということで、自分たちで加工して、製品にして市

場に出したわけね。それで、ワカメの加工場なんかをつくったの。

「今度うちを建てなさいよ」って、数えるほどしか建てないんだもん、山側だって。五、六軒かな？　小学校の前のほうは、残ったうちをリフォームして住んでっからね。だから恐怖心はもってる。それに土地を市で買い上げたから。そして、その売ったお金でこの辺の土地を買ったわけだから。いま何軒住んでるのかな？　一、二、三、四。数えるほどしか新築では建てていない。もう増えもしないのかな、あんまり。

平成三一年までに建築の支援金がおりるわけだから。だからほんとは平成二九年、今年で終わりだったんだけど、「定住化構想」って人を住まわせたいから延ばしたけども、新たに住むような人はいない。で、ほとんどがこの土地買ったから。でも、ここは住みがたいのね、われわれも。人間関係も希薄になってるもの、もう全然変わったから。かえってそれですっきりした人もあるかもしれない。前はあまりにも隣近所がわかって、隣近所の財布の中身までわかるような親密さだったわけだからね。都市部はこういう風潮ではないわけだけだもんね、隣の人の財布の中身もわからないし。

（二〇一七年八月二一日）

●世帯T・G　話者一名（女性……八十歳代）

■震災前のくらし

自宅は田老診療所の前だったね。屋根の色は茶色だったと思います。地震のときは漁協の加工所にいだったね。当時、うちは五人家族。子どもたちは学校で、家に帰ってこないで学校のほうで避難させていたね。孫ふたりは小学校と中学校だったね。

おじいさん（夫）も私も、ふたりとも代々田老生まれ、田老育ちです。おじいさんと私が結婚したときに、最初に住み始めたのが震災のときに住んでいた家です。結婚前は田老の山のほうの重津部（おもつべ）つうところに住んでいました。結婚してそこに新居を構えて、ずっとそこに暮らしていました。結婚したのは戦後すぐの昭和二二年ぐらいかな。昭和二四年に長男が生まれたからね。重津部というところは一〇〇メートルぐらいの高さがある、津波もこないような山のほうだったのね。

職業は漁業関係で、この津波で流れたおじいさんもワカメの養殖をしていました。養殖始めたのもおじいさんの代からです。養殖っていっても、やっぱり船ももってでしたけどね。この津波で被災してからは、養殖は若い人がたはやっていません。もうおじいさんの代かぎりで。息子のほうも漁業が本業ではなくて、宮古のほうで勤めています。

加工場の仕事はけっこう長かったんです。結婚して、子どもたちが保育所に入れるようになってから働きましたから、まずね。だから三〇年ぐらいだと思います。加工場での仕事はワカメがいちばん多いですね。ワカメの選別、色の悪いのをとったりなんだりやるからさ。だから、けっこうワカメにかかりました。

前、住んでた家は、保険には入ってましただったね。地震保険はどうだったがね？　やっぱり漁協に働いてるから、漁協での保険に漁協で入れてたりするからね。それで、そんなのに入ってだったりね。

■三月一一日のこと

私は地震が起きたときはね、漁協のワカメで働いていて、堤防の外に、海のほうにいたったのね。そして大きな地震だったから、すぐ飛び出して逃げて、うちのほうに帰りましたの。私は自転車にも乗れねぇがら、加工場には歩いて通ってだったからね、そのときは走って帰ったの。そして家さきたらば、私の夫がひとりここにいたったがらね。みんな若い人は働いてだったから。おじいさんがひとりでいて、地震で棚から瀬戸物が落ちて壊れた

んですかね。それを立って見てだったもんね。うちの中でね。だから、「おじいさん、なにしてんの。この地震で津波もくるっぺし、家がもし壊れたら家の下敷きになるんだから外さ出ねばだめなんだよ」って私が騒ぎました。帰ってきてね。そして逃げました。

仕事場まで歩いたら一〇分はかかると思います。一〇分、一五分は。だから、地震の後すぐ出て家に戻ったけど、もう一〇分一五分ぐらいはかかってたと思いますね。

二、三日前にも津波で逃げたときがあったから、だいじなものばリュックさ入れて、うちに置いだったの。だから、うちに入ってすぐそのリュックを背負って私は逃げました。おじいさんは、隣のおじいさんといっしょになにが歩ってんだもんね。私より歩けないんだもん、歩きのあまり速いほうでないんだもんね。だから、私は高い山にあがったところの手すりさ行って、こうして（津波に）浸かって、ここらぐらいまで濡れて助かりましたの。そしたら、おじいさんはその隣のおじいさんとふたり、私から二メートル離れたか離れないか、一メートルなんぼぐらいだったね。そして私はその後ろから流れてくるのを見て、ふたりだったもん。だっておじいさんが、隣のおじいさんとね。だから私は手すりにとっついて、山にあがったところの手すりにとっついて、濡れて助かって。そのおじいさんがたは後ろでふたり流れていったわけ。

家からは、おじいさんが先に出て、そして隣のおじいさんとお話ししてだったの。私はいつも仕事場に歩いてるから、足は速いんだもんね。だからすぐ出たども私の後になったの、おじいさんが先に出ててもね。そして流れたの。私はリュック背負って、おじいさんのほうはもう手ぶら、身体ひとつで。

逃げたのは熊野神社っていうところです。私たちの部落の人などはそこさ、神社まではあがんなかったね、下のほうは道路の位置に津波が浸かったもんね。それで私は濡れて助かったわけね。まず登るのに、道路のところに手すりがあったのさ、そこでつかまったんだからね。つかまって、その後その山に登りました。熊野神社とい

うところの。道路の階段がありますからね、水に浸かったなか、その階段を登っていきました。後ろからどんどん波がきちゃったからね。

地震が起きたときは、加工場にも働いている人が何人もいっぱいいたんですが、みんないっせいに逃げましたね。みんな一回とりあえず家に帰って、なにかものをとって、だいたいみんな同じところに逃げたと思いますね。だから、私たちが逃げてるときには、周りにも何人も逃げてる人がいっぱいいましたね。まず自転車に乗れる人は自転車で通ってだったからね。私より逃げるのも早いんだね。私は歩いてだから。歩いてる人もけっこういましたね。加工場から一回自宅に寄って、こう走ってきて、リュック背負って、診療所の前通って、神社の階段のところに行ったので、地震が起きてから三〇分ぐらいだったと思います。間一髪だったんだね。

私は神社の登り口の段差あがったところの手すりにとっついだから、ずっとこっちの下のほうで水に浸かったんだと思います。当日寒かったから、ずぶ濡れのまま、よくね。三時二四分か五分ぐらい。たぶん五分だと思います、この辺。地震が起きてから四〇分。三時二〇分過ぎぐらいじゃないかな。あそこに津波がきたのはね。

■小学校の体育館で息子と再会

神社にあがったら、今度は山が火事だっぺ言われで。それで「山が焼けてくっから、どっちさか逃げてください」って言ったために、その神社からの線路（三陸鉄道）さ近かったわけね。あの、汽車が通るね。それでその線路を歩いて、まず最初は小学校（田老第一小学校）の体育館に行きました。

神社へ避難した人たちがいっしょに移動したんですね。そのころはまだ明るかったね。人数もけっこういっぱいだったですね。知り合いなんかもいっしょでしたし。そしたら、その体育館に息子が私を探してきましたったので、おじいさん以外の家族とはそこで会いました。一晩は私、小学校の体育館で寝たね。それこそ小学校の体育館でおにぎりもらって食べだったから。

息子は宮古市内で働いてました。孫ふたりはそのまま学校にとどまって大丈夫でした。学校は親が迎えにいくまで家に帰せなくてね。息子が小学校に行ったのもやっぱり孫が気になってね。いちおう、そこでおじいさん以外はみんな、なんとか無事っていうのがわかったんです。

■ふれあい荘に移動

その後、ふれあい荘に行きました。小学校の体育館にもけっこう人がいたからね。それが移動してくださいっつうことで、役場のかたに言われて、ふれあい荘のほうに行ったね。それでふれあい荘に泊まりました。それこそ何日かお世話になってきました。何日くらいだっけね？　もろ一週間までかわかんね。けっこう行くところがなかったから（笑）。ふれあい荘にいた期間は、一週間なってないんじゃないかと思うような気がするね。

ふれあい荘に行くときに、いとこのお家があったのでそこで着替えをもらって。服と靴を取り替えて行きました。寒かったんだもんね。上のほうはよかったけどね、この下だけね。それ着替えないと、夜中のうちに凍え死んじゃうからね。

■仮設住宅での生活

その後は家族全員でグリーンピアに行きましたね。グリーンピアにいたときは、べつになにも感じなかったです（笑）。ここにくるまでグリーンピアの仮設住宅にいました。仮設住宅に入ったのは、五月か六月あたりだったかね？　グリーンピアの仮設住宅は家族五人で一戸に住んでいました。四畳半の部屋がひとつ、六畳がふたつ。そのぐらいでした。比較的大きいところでしたね。まず人がいっぱいいたから、大きいところに入れてくれたんでないですかね。七年住んでたかね。

仮設住宅には七年もいて慣れてしもうて、いいと思いました（笑）。少しは狭かったね。でも、なんとなくあそこ、だだっ広いところにいっぱいバタバタって建ってるじゃないですか。それこそうちは人がいっぱいいたから、寝

るところも食べるところもいっしょな部屋があったりね。

■自宅の再建

ここにきたのは最近です。今年に入ってからきました。なかなか大工さんなどが忙しくて職場の仲間とかは、その後そんなに会わないからね。会えばアレだと思うね。皆やはりバラバラだね。若い人たちはまず働いてると思うね。私みたいに年とった人がたはね、家に入ったりしてるから。家ももう、みんなあっちこっちバラバラですね。田老の人たちも宮古のほうに行ったりね。

■夫のこと

うちでは早かったね、おじいさん見つかるの。何か月もしないで見つかったんだったんだね。おじいさんも津波の避難はしっかり頭にあったと思います。ただちょっと足が悪かったから、スピードが。早く避難できなかったのね。おじいさんはデイサービスとかそういうのは普段行ってなかったです。通常はもう、家にずっといました。

私は歩くのはこわくないんだ（笑）。加工場まで歩いて行ってたからね。だから、いまも午後はぐるっと散歩してきます。坂道ばっかしですがね、ぐるっと散歩してきます。津波前、私は一〇年ぐらい前、検診でひっかかって、手術で胃をみんなとりました。手術してから一〇年ぐらいになります。死ぬかと思ったども、死なない（笑）。手術の後は五年ぐらい休んだかな。そしてからまた加工場で働き始めました。

■津波に対する意識

昭和八年の津波（昭和三陸津波）の話を聞いたりはしてたけどね。昭和三五年の（チリ地震の）津波とか、あと四三年ですか？　十勝沖とかの津波もやっぱり経験はしているんですが、被害はあんまりなかったですね。そういうときはあまり逃げないんでないかね？　昔はね。→巻末用語解説「昭和三陸地震」「チリ地震津波」「十勝沖地震」

今回の津波は、まずね。地震が大きかったから、まずすぐに逃げようとは思いましたね。その二日ぐらい前に、やっぱりリュック背負って逃げたから。そのリュックをそのまま置いてたのね。それで、それをもって逃げたの。逃げるようになったのは最近だね。訓練とかそういうのでだね。孫たちもみんな学校でそういうのを習ってくるんです。私たちは年だから、まずそういうことはないけども、孫はまだこれからこんな津波がくるんだからね。わかっててねって言っておきます、私は。まず、津波、津波って、一生懸命考えてましたね。私も小っちゃいころ、散々聞いてたと思います。それでも、まさかこんな大きい津波がくるとは思わねぇんだもんね（笑）。

（二〇一八年八月二一日）

●世帯T・H　話者二名……夫（六十歳代）、妻（六十歳代）

■震災前のくらし

夫　私は、生まれも育ちも流出した自宅のところです（田老）。妻の実家は、田老の役場の近くなんですね。そこもなくなったんですけど。妻も生まれ育ちともに田老です。父、母、祖父、祖母も田老出身です。

■三月一一日のこと

夫　あの日は私は待機日だったんです。私はそのころ船に乗って仕事をしていました。たまたま地震発生時は自分の私有車に乗って移動していたんですよ。

それで一四時四六分に地震が発生したときは、最初は「あれ、ちょっとなんか揺れてるなあ」ぐらいで車を運転してたんですけど、ちょっとその揺れが大きくなりました。乗ってた船からだいたい一〇分ぐらいの場所にい

たもんで、すぐ船に戻りまして。船を避難させることができるかいう、体制の確認をしたんですよ。通常であれば一グループ七名で運用してたんですけど、たまたまそのときは七名のうち五名が集まってきたもんで、その五名でまずこれは運用できるなということで、すぐ船を。そうですね、地震発生から一五分も経たないうちに船を出航させまして、沖に避難させたんです。

宮古は湾の入口のところに岬がありまして、閉伊崎（へいざき）という場所なんですけど、そこの岬の付近に船を出して行こうとして、最初は湾内で避難しながら状況確認をしてました。津波の第一波の到達予想時間が、あのとき一五時二〇分だったですかね。それが近づいてきたもんで閉伊崎付近まで船を避難させました。そのとき、その周辺にやっぱり地元の漁船のかたとか、いろんな船が避難してきてましたんで。まあそのなかで皆さんと同じように避難しながら、津波の来襲を確認してたんです。

そのとき閉伊崎の岬の突端を見ていましたら、潮位変化もちょっと大きくなってきたもんで、「あ、これは津波がきてるんだなあ」ということで、その辺を見て、直後に湾の奥のほうとか周辺の島を見ましたら、その岬付近は潮位変化だけだったんですけど、それが今度は大きくこういう立ちあがるような波になってきましたんでね。「あ、これが第一波だなあ」と思って、見てましたね。

そのときは田老に住んでいましたんで、田老のほうを見ましたら津波が侵入していくのが見えて、「あ、これ、第一波は完全に入ったな」と思いました。田老は堤防が二重になってましたんで、「大丈夫じゃないかなあ」と思ってはいたんですけど。まあ自分らが考えたのとまた違っていて、ああいう状況になってましたからね。それが津波がくるまでの概略ですね。

田老も宮古もいっしょですけど、津波が押し寄せた後の状況は、ラジオとかテレビで確認しました。報道関係のヘリが飛んだり、自衛隊さんのヘリが飛んでましたからね。そのヘリから映した映像を地上波で流してました

から、それで自宅の周辺の状況を見てて。「うちの場所になんか屋根みたいなのが残ってあるな。なんかうち、残ってるんじゃないかなあ」と思って見てたんですね、上空からの映像で。でも、それはよそのうちの屋根が流れてきていたもので、自宅はありませんでした。そういう状況でしたね。

私が船を避難させて、その当日は、ものが湾口に流出してくるというのはまだそんなになかったんですよ。それで自分らもその周辺で北に南に移動しながら沿岸を航行して、状況確認はしてたんですけどね。

そのなかで連絡をとろうと思ってもなかなか携帯電話は、地元のＮＴＴさんの交換機が水に浸かったので使えない状況だったんです。それで少し船を陸から離しましたら、よそのところの交換機が使える状況だったもので、そこでまず家内とちょっと連絡をとってみたり。その後、関東にいる長男と連絡をとれたので「どうなっているんだ」と聞いてみたら、まず家内とはすぐ連絡がとれたっていうことで。あと、次男が市内で働いているんです。そっちのほうがちょっと連絡がとれない状況だったんですが、時間を置くことによって長男のほうと連絡がとれて、こういう三角に連絡するようなかっこうで安否の確認がとれたんですよね。

妻　私はそのころ、いまもそうですけど働いてまして、その日は久慈に出張だったんですよ。そのため昼ごろ自宅に寄って、義母に昼ご飯を準備して出かけました。

地震が発生した二時四六分は久慈にいました。久慈で帰る準備をするときでした。研修だったのでパソコンを片づけたりしていたら、携帯電話から緊急速報メールの音が鳴ったんですね。でも、相手のかたはなんの音かわからなくて。私が「あ、いまからおっきい地震がくるようですよ」って言ってバタバタして、とにかく階段おりて外へ逃げたんですよ。車のキーとかも研修室に置いてしまって、ただ身体だけで外に出ました。車のキーを握って外に出たら、もしかして自分は田老に向かったかなと思うんですよね。でも車のキーがなくて動けないと思ったので、久慈の皆とただただ会社の前で「おっきい地震だね」と話しながら立ってました。それが私にとっては

よかったんですね。ほんと車が走れる状態だったら、あの地震のなかでも田老に向かって、野田村あたりで被害に遭ってたと思います。

それで私はその日は久慈に泊まって、つぎの日、盛岡を回って帰ってきました。一晩車中に泊まったんですが、先にまず、外にトイレがあるようなところを探して。「ああ、ここにあった」って言って、ドライブインの前に停めました。やっぱり何台か車がいたんですけど、そこで一晩車にひとりで泊まって。

■義母との別れ

妻　地震が起きたとき、義母はひとりで家にいたんです。義母はデイサービスに行ってたんですよ。でも、たまたまその日はデイサービスが休みで、ひとりで留守番してたんですよ。

まず宮古に出勤してから、一回久慈に行くためにお昼を用意しに寄ったとき、すごいいつもと違う挨拶だったんですよ、義母が。部屋にいたんですけども、「今日も、いまから久慈に行ってきますから」って言ったら、「ああ、今日も久慈なの」と。いつもだったらテレビを見ながら「じゃあ、いってらっしゃい」と言うんですけど、その日は後ろを振り返って、ちゃんと「いってらっしゃい、気をつけて」って。すごく丁寧な挨拶をしたので、私も「ああ、ありがとうございます。じゃあ、いってきます」って言って、車に乗ってから「ずいぶん今日は丁寧な挨拶をふたりでしたなあ」と思ったんですよ。

もうそれが最後でしたからね。ほんとにいつもはテレビを見ながら、「ああ、じゃあまた」っていう感じなのに、違かったですね。そうでした。なにかが、やっぱり感じるものがあったんだかちょっとわからないですけど。でも、りっぱな挨拶をして別れました。

本人は、足が痛いといつも言ってましたけど、歩くにあたって速く歩くときもゆっくり歩くときもありましたから、避難しようと思えばできたと思うんですよ。ただ、近所の人の話だと、「逃げないと」とか「避難しないと」

と声をかけたら、「大丈夫だ」と義母が言ったってましたね。別の人からも「声はかけたんだけど、でも、大丈夫って言ってた」っていう話は聞きましたので。逃げる気はなかったんだと思います。近所のかたたちもけっこう亡くなっているんですよ。

ほんとに前後左右じゃないけど、周辺のかた、大勢亡くなってますよ。私の家はひとり、私の前の家もひとり、そこの前もひとり。あと、道路ひとつ隔ててそっちでもひとりとか。とにかくいっぱい。逃げなくても大丈夫だと思ってたんでしょうね。残念です。

■翌日のこと

夫　翌朝、朝一番から最初の遺体を発見したもんで、その遺体を収容しました。そのかたは船に積んでいたブルーシートにちょっとくるんで、とにかく仏さまですから、またがないようにして船の上に安置してましたね。

それからそういうのが多々あったんですけど、湾口には翌朝はものすごい瓦礫がありまして、その瓦礫の山が盛り上がった状態だったんです。その瓦礫の中に入っていければいいんですけど、入っていけないですからね。入っていったら、今度は自分のスクリューとか船底の突起物ですか、そういうのに全部ロープを巻いたり、瓦礫のなにかを引っかけてみたりという状況になりますので、ある程度までは行けるんですけど、それ以上は行けなかったですね。だから収容できる遺体を収容しました。極力収容したようなかっこうですけどね。見つけなかった遺体は、どういうふうな状況だったか、ちょっとわかりませんけどね。

漁船なんかも沖出ししてた船とかありました。皆さんも同じような状況で、近づけないんですね。だから複数人数で船を避難させたかたはいいんですよ。ひとりだけで避難させた人は二四時間、それが四八時間となっていけば体力的にもちませんからね、寝ないでひとりだと。昼はまだ周辺が見えるからいいんですけど、夜になると見えない漂流物がありますからね、それがいちばん怖いですよね。ほんとうに怖かったですね。

その間にも余震があって、警報もたびたび出ましたよね。だから、それも情報が入ってくるぶんはいいんですけど。ヘリから映した状況は地上波の放送で流れてましたよね。それを見て、ちょっときびしいなというのは確認できてましたね。もっときびしい状況にあっては、福島とかあっちのほうではああいう状況になってましたから、外に出ないほうがいいという報道発表は聞いてましたね。

船内では、テレビ、ラジオ、あと無線を聞いてましたね。船だから発電機とか電気は確保されているわけですよ。だからテレビは見られたし、ラジオもそのとおりです。そういうので情報はある程度までは把握できてましたね。そのときの状況を一〇〇パーセントの状態で流してもらえるっていうのは、テレビですね。ヘリテレの映像が実際の状況でしたからね。

妻　私は久慈で車に一晩泊まって帰ろうとしたら、野田村のあたりで消防団のかたに、「だめです、この先は行けません」って言われて。状況がわからないので、少し待てばいいのかなと思って、いったん戻ってまた行ったら、「もう通れませんよ」って言われて。「盛岡を回って帰るしかないですよ」って言われたので、それまで走ったことなかったんですけど、葛巻を回って盛岡を回って帰ってきたんです。

一二日の一一時ごろでしたかね、心を決めて、「じゃあ葛巻を回って帰ろう」と行ったら、どんどん松本ナンバーの自衛隊の車がすごいたくさんくるんですよ。一二日の一一時ごろなのに。それを見て「ああ、すごいことが起きたんだ」と思って。ねえ、自衛隊の車を見たら、なんか「ああー」って思ってきましたよね。あと携帯電話も使えないんですよ、充電器がなくて。で、葛巻で充電器を買ったんですけど、話ができないんですよ。電源が入っても、ちょっとしたらすぐ切れて。やっと盛岡の友だちに連絡がついて、一二日の夜は盛岡の友だちの家に泊まりました。盛岡も停電だったので、ほんとに暗いなか泊めてもらいました。

でもねえ、友だちの家ではウサギを飼っていて、ウサギがこたつの中にいるからって言われると、動物が苦手

なんで足も入れられない状態。なんか、おそるおそるしながら（笑）。そんなでしたね。

■船をおりる

夫　私は、結局乗っていた船をおりるにしても、どこに着けるかとか（考えなきゃならないし）、陸にあがっても町の中はあんな状況ですし。船をおりたのは五日目。前日にも戻ってきたんですが、係留しようかなと思いましたら、すぐまた余震がありまして。また警報が出たりして、途中まで戻ってきちゃ、また避難させてという繰り返しをやってました。ようやく陸に近づけて、陸にあがれたのが五日目ですね。私は魚市場の前で船をおりました。それなりの大きさの船が係留する場所が、あの辺ぐらいしか残ってませんでしたからね。

そこから家内が友だちのとこにお世話になってましたんで、そこまで歩きました。あれ何キロかなあ？　四、五キロ、もっとあるかな。距離感覚がちょっと曖昧ですけど、そこまで歩いていきまして、そこで身支度をして。家内の車は無事でしたから、とにかく車で田老の行けるところまで行って、そこに車を置いて歩いて、総合事務所に最初に行って状況確認したり。家内のほうの両親も被災して、総合事務所に避難してましたからね。そこで顔を見て確認して、ちょっと話をして、それから自分の家のほうに行ってみました。

■妻の友人宅で居候生活

妻　私は、一二日に盛岡の友だちの家に泊めてもらって一三日に帰ろうとしたら、近所のかたが、私が友だちからいろんなものをもらって車に積み込んでいるようすを見て、「なにかあったんですか」と声をかけてきて。「じつは田老で震災に遭ってって」と話したら、「じゃあ、ちょっとお待ちください」って自分の家からベンチコートとかもってきてくれて、冷凍してるおかずやご飯とかも「これどうぞ」と。その後、皆に見送られて不安な思いで宮古に向かいました。

宮古の千徳の三陸病院の近くに友だちがいるので、そこに寄ったら、「とても田老には帰せない」って言われ

ました。「行っても泊まるところがないから、うちにいて」と言われ、三月中、私はそこでお世話になりました。主人もそこにときどき泊めてもらいました。あのときは、千徳の友だちのお母さんが田老のふれあい荘に避難しているという話を聞いて、友だちが旦那さんと迎えにいって田老を見たら、とても住めそうにはないと思い、私に声をかけてくれたのでした。

夫　仕事の仲間は船のほうで待機してまして、交替で帰宅。私は家内の友人の家へ居候させてもらった。そこに行って一晩休ませてもらって、風呂に入る。翌日は田老に行って、まだ母親も発見されていないときは、そっちも探してみたり。あと家の周辺も見たりしたような状況でしたよね。

妻　友だちの家には私たちのほかに、同級生が子どもふたり連れてきました。友だちのお母さんも田老に住んでたんですね。やっぱり家がなくなったので、結局ふたりで住んでいるところに三世帯が合流して住まわせてもらった感じですね。ほんとにねえ、なかなかそんなに他人を泊めてくれる人っていないのに、泊めさせてもらいましたね。それが三月いっぱいです。

■家族の安否

夫　三月一一日から一〇日くらい経過した後に、皆さんの力によって母を発見してもらいましたね。発見してもその当日は、私、本人確認できなかったんです。仕事の関係でですね。翌朝いちばんに安置所で本人確認したら、まず間違いないということで。被災したんだなというのは、そのとき確信しましたね。

妻　息子はアパートを借りるまで、職場の上司の家に泊めてもらいました。私の父は脳梗塞で半身が不自由だったんですけど、地震後すぐ民生委員さんが迎えにいってくれて、役場まで車に乗せて、あげてくれて助かったんですよ。私たちが父と会ったのは一五日でした。

主人とふたりで役場に行ったときに父と母に会いました。友だちに、「父さんと母さんがいたらうちに連れて

きてね」と言われてたので、いっしょに友だち宅に帰ることにしました。それで中学生と役場の人たちが父を担架に乗せて、線路を歩いて駅まで連れてきてくれて、（駅から）車に乗せてその千徳の友だちのところに一晩泊めてもらいました。

翌日、弟が関東に住んでいるので、迎えにきてもらいました。父も母もまさか長い間行くとは思ってなかったみたいですけど、その後ずっと関東の弟宅に住んでますね。父は三年後亡くなってしまったんですけど、母はまだ向こうに住んでます。

■千徳の2DKアパートを確保する

夫　三月の間に、お世話になっていた家内の友だちが、先にアパートを決めたんですよ。こっちものんびりしている状況じゃないなあというので焦ってきて。

妻　不動産屋さんを何件か回りまして。最初にあたった宮古の不動産屋さんは、親切なかただったんですよ。ただ扱っている物件が、ちょっと水に浸かったような物件とかを扱ってましたからね。不動産屋さんも、被災した場所で使えそうな物件を斡旋してくれるわけですよ。そんな場所にねえ。そんなとこにはさすがに入れませんでしたね。「空いているようなところとか、入りたいところがあったら教えにきてください。自分たちがそこに行って交渉しますから」っていう不動産屋さんもありました。でも、いちばん最初に入居した人は、震災のもうその日に行ったんだか、つぎの日に行ったんだか、すぐ入れたよって言ってましたよね。早い人は早かったんだって思いました。私らは何日かしてから動き始めたから、遅い感じには言われましたね。ある不動産屋さんに、「早い人は地震のあと、そのまま毛布にくるまってきたんだよ」って言われました。だから、ああ皆が必死だったんだと思いましたね。

夫　不動産屋さんも、いい対応をしてくれるところと、そうじゃなく、にべもなくというところもありましたね。

妻　不動産屋さんに行ったり、大工さんのところに駆け込んだり、建設屋さんの看板を見て「なにかないですか」みたいな感じで。建ててる最中のとこも聞いて歩いたんですけど、もう決まりましたと言われたり。あのころは建ててる最中でも決まってましたね。なんとかしてと思うから、こっちもまだ工事中でも行って聞いたりしたんですけど、もう決まってますっていう感じで。皆さん必死でしたね。

それで、再度地震発生、さらに津波となれば、そんなとこに悠長に住んでる状況じゃないもんで。それよりは津波に関係ないようなところがいいんじゃないかということで、何件かほかをあたってみたんですけど見つからず、友人の知り合いの大工の棟梁さんのところにお願いに行ったんですよ。行きましたら、自分とこで何棟かアパートをもっているんだけど、そこは全部ふさがったと。自分のところにはないけど、ほかをちょっと探してあげると話をされ、その日は自分らが居候している先に戻ったわけですよ。そうしましたら、翌朝いちばんに電話をいただきまして、積水ハウスで建てたアパートが空き部屋あるみたいだよということで。

夫　自分は関係してないのに教えてくれて、ありがたかったです。そこをあたってみることにして、積水ハウスの営業のほうに最初連絡をとったのかな？　そうしたら、もう積水ハウスから手を離れてるので、大家さんのほうに話をしたほうがいいですよと言われて。大家さんのところに行きましたら、不動産屋さんに全部任していますんでいうことで、今度は不動産屋さんのところに行って「どうですか？」って言うたら、「いいですよ」と。それで即契約をしましたね。

それが三月の何日だったかちょっと忘れましたけど、四月一日からもう入居できたんです。とにかく、仮設住宅がどうのとか、住むところがどうのこうのという状況じゃなかったもんで、まあ家賃は少々高くてもいいから、ともかく住むところを確保するということで、四月一日からそこに入居したんです。

私も家内も次男もその当時、仕事は全員継続してました。四月一日からはアパートに親子三人で住んでいて、

それぞれが職場に出ていくという。家内は事務所が水に浸かり、使えなかったので、引っ越すまでというか新しい場所を決めるまでね、一か月だか二か月だかちょっと休みましたけど、私と次男は継続して働いてましたね。

妻　この地に引っ越してきたのは翌年の七月何日かちょっと忘れましたけど、ここの家をつくって越すまで、その千徳のアパートで暮らしていました。部屋数は六畳が二間とダイニング、バストイレ。

夫　一年二、三か月ぐらいですね。逆にそういうコンパクトなところで、動線もそれなりによかったわけです。だからまあ、さほど家を大きくつくんなくても住めるぞ、というのはありましたね。だからこの家は前のうちから比べれば十何坪コンパクトになったんですよね。それでじゅうぶんだなと思って。

妻　千徳のアパートに住んだときも、おっきい地震がきたんですね。でも、戸を開けて外に出ようとしたのは私と息子だけで。お父さんは仕事でいなかったんですけどね。こんな大きい地震がきても、近所の人ってだれも出てこないんです。えーって思いましたね。

夫　逃げなくていいんだって思いましたね、いままでなんだったんだろうって思いましたね。ずっと逃げてきたって思いましたね。

妻　そのアパートに住んだころは、震災に遭わなかったかたたちのなかにぽつんと入ったんですけど、偶然にもそのあと田老に住んでいたときの隣のかたが入ってきました。おたがいびっくりしました。そっちもやっぱり知り合いに頼んで探してもらったと言っていましたね。

夫　たまたま会う以外は、もう近所のかたがどこに行ったのかはわからないわけです。私らが入ったアパートは、転勤族のかたがほとんどでしたね。私らがお世話になったとこは、ある会社の支店長さんか次長さんかが入るようになってたところだったのかな。それをうまくはからってもらったんですね。

■みなし仮設に支援はなかった

妻　私も久慈から葛巻を回って盛岡まで行って、宮古の友だちのところにいたから、その友だちが「もう田老には帰せないから、黙ってここにいて」って言ってくれたので、田老には行かなかったんですよ。

結局、自分たちでアパートに入って、電化製品なんかもまず自分たちで用意したんですね。大きい電気屋さんなんかはもうものがなくなっているから、友だちの紹介で町の電気屋さん風なお店に行って、いろいろ買ったんですけど。（千徳のアパートがそのまま）みなし仮設になったので、いろんな支援の話もないし。半年以上たって皆さんが仮設に移ってから、冷蔵庫とか洗濯機とか日赤から「七点セット」をいただいた話を聞いて、手厚くされてるんだなと思いました。仮設とちがって、ほんとにみなし仮設は支援の話がまったくないんですよ。

夫　なにもなかったですね。だから最初はアパートの家賃も自分の手から出すっていうことでやってたわけです。あたりまえの話かなと思って。なにも考えずにそれでやってたんですけど。三か月ぐらいしてからですかね、みなし仮設扱いにするということで、払ったぶんは皆返してくれましたね。

「七点セット」もその後「欲しいですか」って。「もし必要だったらあげますよ」って連絡がきたんですよ。すでにものがそろっているんだけど、皆がもらったのならもらいたいなあと思って。じゃあくださいっていうことにしました。そしたら配送業者がもってきたはいいけども、届けた証拠に空箱をもって帰らなきゃいけないっていうわけですよ。ちょっと大変でしたね。申しわけないんですけど、もっと早い段階で話をもらえればね。買わないで待ってたのにね。でも人がもらったんだから自分ももらおうっていう気持ちもありましたね。

妻　箱から出して、箱はもって帰ると言われて、ちょっと大変でしたね。業者さんによっては黙って箱ごと置いていったところもあるそうです。いままで起きたことのないような災害が起きたわけですけども、少し取り決めというか、なんか最初から決まっていればねえ、よかったと思いますね。

■自宅を再建する

夫　津波のあと最初田老に行きまして、自分の住んでた家のところに行ってみたら、「ああ、ここにはもう住めない」と、その時点で自宅再建の判断をしましたね。

（さっきも言いましたが）まず私は仕事をしている。次男も仕事をしている。家内がその一か月、二か月ぐらいちょっと仕事のブランクはありましたね。その間に、どっかいい土地があるか探したり。要するに手分けをして動いてたんです。そしてこの場所を見つけたんですよ。建築ラッシュでけっこう工期が遅れたり、順番待ちとかっていうことは、私のほうはなかったんですね。とにかくとりかかりが早かったので、予定通りの工期で行きましたし、ものが不足することもありませんでしたね。

妻　私たちも思ってることなんですけど、他のかたたちから「いやあ、お宅たちは安いうちに建てれてよかったねえ」とすごく言われたりしましたね。それがいやみなんですよね。土地の造成後はもう高くなってるじゃないですか。だから「いくらで建てたの？」とか「いまだったらすごい高いけど。安いときに建ててよかったね」とか。

夫　あんまり役所（の支援）とかはあてにしなかったですね、全然（笑）。

妻　やっぱり最終的に人になんと言われようと、自分たちの生活ですからね。自分たちで守らなきゃ。

夫　この辺では、人が亡くなれば一年は家を新築したり改築したりしないという慣習みたいなもんかな、そういうものがありまして。私も震災翌年の三月一一日も過ぎて、よし一年経過したからということで、三月一六日に地鎮祭をやって着手したんです。だからそれから約四か月。ただ平屋はやっぱりなんかねえ。部屋がもうちょっとあってもよかったかなと思いながら（笑）。

妻　流れ的には皆さんよりはちょっと早かったかなと思うんですけどね。そのとき助成金とか補助とかいうのはまだ全然前面に出てきてなかったから。まあ自分たちができる範囲でやればいいかなって思い、土地を求めて家

をつくりました。

■地震保険は大きかった

夫　早い動きということで、家を建てた順番は保険をもらった順番じゃないかと言われましたね。要するに地震保険に加入していて、さらに家財とかそういうのも保険に入ってますよね。それをもらった順番で家が建ってくるんじゃないかっていうことは言われましたね。でも、たしかに前の家は地震保険に入っていました。あれは大きいですねえ。まあ、保険はだいじです。ちなみにここももうすべて、地震から火災あとは水害、ありとあらゆるものに保険をかけてます。動産にもちゃんと。

妻　家財保険に入ってたんですけど、職場のつきあいでいちばん安いプランに入ってましたんでね。これはちょっと大きな失敗だったと（笑）。今回は家財もちゃんとかけてます。うちは損保ジャパンだったからちゃんといただけたんですけど、共済では種類によって規定通り出たり出なかったりがあったみたいですね。

夫　損保ジャパンは被災して何日もたたないうちにアパートにきてくれて、すぐ支払いの申請をやりました。現地確認もいっさいなしで。確認しなくても全部流れてましたからね（笑）。最初はこっちから、まず電話は入れましたね。損保ジャパンだけじゃなく、保険業界は申請しないと動きません。これは鉄則です。黙って相手が動くのを待っていたら、なにもありません。

妻　やっぱりなにごとも先手ですよね、早めに自分から動くことですね。

■たまたま隣近所ごと移ってきた

夫　いまは三〇軒ほど建ってるんですけど、震災前は一軒しか建ってなかったんですよ。広いところに一軒だけがぽつんとあって。そのほかは震災後に埋まったんですね。

妻　とにかく一年、二年、三年ぐらいの間に、ここ全部建ち並んだというか。一区画だけまだ決まってないとこ

ろがあります。あとは皆さん決まりましたね。アパートでも田老の近所のかたが住んでいたんですけど、この土地を探したときにも、田老の隣近所のかたがここに土地を買ってたんですね。他のかたたちからは、「皆で相談したの？」って言われたんですけど、全然相談なく、隣と前の家もいっしょにきてましたね。皆さん、あちこち探したみたいですけど。

夫　震災で家をなくされたかたか、あとは新しい道路を建設のためというかたもきてますね。でも、そのうち三軒のかたたちは、去年ここを売ってどっかに行きましたね。急いで建てたと思うんですけど、いろいろ状況が変わったのか。三軒のうち二軒のお宅はもう新しいかたが入ってますね。一軒はそのままにして、まだ置いてますけども。

妻　震災前に住んでいた田老では、地域の活動はふつうに皆さんといっしょにやってました。生まれて育った場所でしたからね。皆さんとも知り合いでしたしね。

夫　皆で協力したり、してもらったり、そういう状況でやってました。

妻　現在は田老地区に住んでいるかたとのおつきあいはだいぶ少なくなりましたが、国道近くに住んでいるために、寄ってくれるかたたちもいるのでありがたいです。

夫　ここは宮古に行くのも、田老に行くのもちょうど中間の位置で便利ですよね、国道からすぐだし。もう一〇分以内にどっちにも行けますんで。

■自宅跡地の買取について

夫　最初、自宅跡地の買取単価設定が坪一万とかいう話が出てきて、「坪一万？　いくら水に浸かった場所でも坪一万はないんじゃないか」という思いだったんですけど。まあ実際、私らが住んでたところはもう建築ができない場所に指定されましたでしょ。えらいこっちゃなと思って（笑）。

具体的にまだ確定した話ではなかったですからね。最初に一〇〇万とか二〇〇万とかいう話はありましたけど、

そのあとは全然話がなかったんですね。だからまず、手持ちでできる範囲でやろうかっていうのが始まりでしたね。土地の金額が最初坪一万というのは噂ですね。結局あれは坪単価じゃなく平米単価の話だったんじゃないですか、たぶん。実際宅地の場合がそれぐらいで、雑種地とかになればまたどんとさがったんです。市から価格提示があって、結局その値段で売りました。

あのとき三区画該当しまして、私の名義になってたぶんはすぐ譲渡できたんですが、一箇所、私の父親が名義変更をしていない土地があったんですよ。それで一六名から白紙委任状をもらわなきゃいけなかったわけです。で、一四名までは白紙委任状をもらったんですよ、譲渡してもいいってことで。でも、結局残りの二名がもらえない。このもらえないかたが、ひとりは認知症で、本人がサインできないとだめですよね。もうひとりはこの人（認知症のかた）の息子で、住んでるところが関東エリアでして、こっちの状況の把握がしっかりできてなかったのかな。結局白紙委任状をもらえなくて。その一箇所の宙に浮いた状態で、市のほうに無料で貸しているという状況です。

妻　でも、土地の売買ができたのは、ここにきてから二年ぐらいしてからですね。結局震災から三年目で売ったということですね。

■これまでに経験した地震と津波

夫　昭和八年（一九三三年）の昭和三陸津波の話も聞いていたんですけど、私はチリ地震（一九六〇年）の津波のときは保育園児だったかな。避難したのは覚えているんですけど。その後の十勝沖地震（一九六八年）のときは、もう自分で見てましたからね。潮が引いていて、あのときは大きい津波がこなかったけど、潮位変化は起きましたね。あと宮城沖地震（一九七八年）のときは、国家試験を受けるにあたって二階で勉強していたときでしたから。えらい大きい地震だなと思いましたね。そのとき父親が船を出すということで、海に行ったんですよ。出すときに、私、ついていって船を出す手伝いをして、すぐ私は高いところにあがりましたけどね。だからまあ、現

実にそういうのを見てましたから。ただ、東日本大震災のときはまあ、あれぐらい大きい津波がくるとは思っていなかったですね。↓巻末用語解説「昭和三陸地震」「チリ地震津波」「十勝沖地震」「宮城沖地震」

私らが住んでいたとこは、昭和八年の津波ではちょっと水がきたぐらいの場所だと言われていたんですよ。パシャパシャぐらいだったみたいです。だから、津波がきてもさほど影響がないんじゃないかということだったんですね。でも違いましたね。私も自宅は残っていると思ってましたものね。

■「堤防があるから安心だ」とは思わなかった

妻　小さいころからつねづね、地震があるとよく山にあがったんですよ、親戚の家に逃げたり。私の父は漁師だったので、ちょっと地震があると父さんはすぐ船を出しに海に行くんです。だから私たちは母さんとかおばあさんとかで親戚の家に行くっていうのが、ずっとありましたね。それがもう小さいころだったんで。いつかは高いところに住みたいっていうのはあったんですね。堤防があったからという思いはないですね、それはねえ。だから、ほんと実現できたねって言われて、えーって思って。

田老の人たちってね、ずっと逃げる習慣があったんですよ。だから震災の何年か前も、やっぱり大きい地震のあったときは、家族を車に乗せて、お位牌も乗せて、道の駅が上のほうにあったんで、そこに逃げたりとかやってましたね。でも、いま住んでいる高台にきたら全然そういうことはなくなったので、すごく安心です。

夫　まず地震が発生しても、なにも津波のことは考えなくてもいいですしね。

妻　だからね、前から住んでいる人たちはもう、小さいころからそれがあたりまえのことのようにやってたんですけど。いまはほんとになんの心配もなくいれるんで、いいです。

夫　堤防があったから安心という思いはなかったですね。あってもこのとおり震災に遭ったわけですからね。

（二〇一八年八月二一日）

●世帯T・I　話者一名（女性……七十歳代）

■震災前のくらし

息子のTは漁協にずっと勤めていました。高校終わって四七歳で津波で亡くなったからね。二七年ぐらい勤めたのかね。ワカメの加工場、工場長やってましたったもんね。

消防団ももう長いことしていたようですがね。その前の日も大きな地震がありました。たまたまお昼食べに家にきてて、「母さんを避難させにきたから。俺は消防団なのでまだおりてく」って、九日の日にはそう言いまして。そしておうちにいったん帰ってきてて、またさがっていきましたっけ。だけども、やっぱり肝心のときにはそういう自分たちは逃げられなかったのかね、やっぱり。ここで何回言っても全然動きようがないっていうか、いつもであればシャキッとすんだけども、息子は消防団ではすごく上の人なんで、ああいうふうに動きをとんなかったのか、親の言うことが素直に聞けなかったのか、そこがわかんないですがね。いつもは「うんうん」「おうおう」で、親の言うことを素直に聞きましたったけども、そのときはちょっと聞けなかったようです。

震災前も住まいはここです。ここから田老加工場、平坦にさがって通って行ったところでお仕事していましたったもんね。

私も、生まれも育ちもここです。隣で生まれ、こっちで嫁ぎ、ここさきたわけで。主人の弟が婿さんに行ってて、私はそっからここに嫁にきてるわけ。行ったか来たかしてるわけ。ここは本家で向こうがカマド（分家）なわけで。行ったり来たりしたわけで。そういうこともありましたった。

海のほうもここいらも、だいたい似たような生活ですがね。ただ、人それぞれで年代の差もあると思います。

山の上に住んでいても、皆だいたいの海の仕事をしているんです。うちも、じいちゃん（夫）が七〇歳まで、私が六八歳まで、ワカメと昆布の養殖、漁家でしたったもん。小港（漁港）が港で、そこさ行ってお仕事しましたった。そいで沼の浜ってキャンプ場があったとこに乾燥場がありまして、だけれどもみな津波で跡形もないです、いまは。

昔からそれで生活していましたった。じいちゃんがあったときは田んぼをしたども。消毒だなんだってばお昼食べる間もないんですもん。作業がずっとあって、乾燥しに港にさがんねばなんねえしね。ふたりの作業だから、息子が朝間、干すときは手伝うども、日中の作業はじいちゃんと私でするので、人を頼めば人件費とられっから家族労働でやりたいもんだなと思ってやりましたったもんね。漁業があって、皆さんとそれでも触れあって、けっこう楽しんでやってきました。

この家は建坪が七五坪と夫から聞いています。大きいですよね。ふつうの一軒家の倍。ここのうちも、私が嫁にきたときは九人だか一〇人家族でした。実家は一四人いましたった。二夫婦だったもんね。それが、たったひとりっこになりましたもん、私。いっしょじゃない生活をずっとしてたみたいでしょ。ほんとはここに仕切りがありましたったの、でも去年リフォームしました。そこに二階からの非常階段もつけましたしね。

孫は三人いますがね。上と下が男で真ん中が女の子でね。息子にはまだ子どもがなかったもんで。娘は大野村、久慈のほうです。あっちに就職していきましたったので、たまたま向こうの人と知り合って、いっしょになりました。

■三月一一日のこと

なかなか忘れたいなと思っても、やっぱりここで生きてるもんだから、それって忘れることはできないです。

息子は三月一〇日の日に、たまたまK商店っていうとこのアワビの蓄養場、加工場ですか、そこの飲み会が田老観光ホテルでありましてね。そこで飲んだらしいんです。全然私には、職場のことをおうちの中さもってくる

わけでもないし、そういうことがあったということも私は知りませんでした。一〇日にそういう宴会がありまして、そうして震災は一一日でしたもんね。

一一日の朝になって、息子がここにきて座りましたった。私が「昨夜はこんな大きな波が二つだか三つ重なってきたっけ」って、「加工場がいちばん危ないよ」って、そう言ったの。しっかりしてようって。そうしたら二日酔いなんだか間が抜けたって言うんだか、全然口をきかないで、「母さんそれってなんだべな」って言うわけで。「あや、山のような津波が二、三枚続けてきたって夢に見えた」って私は言いました。「いちばん先に加工場が危ないよ」って言いましたもんね。ほんでも黙って、黙って、いつもとやっぱり違いましたった。

「これっ」てまた（息子の）肩を叩いて、そんとき「えっ」て振り向きましたった。「しっかりせえよ、しっかりして元気出せよ」って。そうしても、それにも全然反応がありませんでした。ここにいて、私と並んでて、変だなと思って、その日気に病んでいましたもんね。そうして大きな揺れがありましてね、上下の大きな揺れが。

そのとき夫がたまたま酸素（吸入）をしてたのね。そして「じいちゃん早く出はって、家が大揺れだから家が潰れるよ、早く」って言ったども、「うん」ってなんとかかんとか。夫は重症でした。酸素を吸って五年だか何年でしたもんね。そうやってふたり抜けて、そうして、もう隣のおじちゃんが、「こんなに大きな揺れでは津波がくる」って言って。こっちの前のほうから消防署の鐘が鳴る音がしましたった。そすれば「ゴー」という恐ろしい音がしたったもんね。それが津波の音だったようでした。そして隣のばあちゃんが、「加工場はどうしたの」って言ったんで、「さぁ、わかんないけども、だけ田老はなんか全滅のようだ」って聞かされましたった。そう言われたときに、腰が抜けて動けなくなりました、私はね。全滅だとすれば、加工場が先にやられたのかなと思いました。そこのおじちゃんが、「田老は全滅だぞ」って。ほんでは、「加工場はI加工場もなにもだめだ」って言ったったもんね、「ほんじゃそうか」って。

■翌日からのこと

自宅は揺れることは揺れましたども、ここは海から見れば高いところだから、安全地帯でした。でも旦那は酸素を吸っていたので、電気が消えたもんだから、自家発電機がなくては酸素が吸えなくて、だからグリーンピアさんに行きましたったの。そしたらば、こういう声もありましたった。人の口って恐ろしいなと思ったの。「なんでおうちがあるくせに、ここさきたんだべ」って。そういうふうにまるで嫌がらせ。だども、Aさんにお願いしてグリーンピアさんの、こう傍らのようなとこに置いてもらって、そこで三日四日お世話になりました。

そしてここの、田老出身の東京の大きな病院で仕事してるお医者さまがきて、ほんでそのお医者さまに助けられて、田老総合事務所にさがりました。雪が降って、まるで寒ございました。それで、旦那がまるで震えてねえ。なかなか被災してる人たちに毛布、布団を運ばなければなんねべしね、なかなかうちのじいちゃんまでは届かないようなそんな状態でしたった。でも、おかげさまで羽毛布団だかあれを最後に貸してもらって、それのおかげで命をもらいましたがね。血圧があがったりさがったり、ほんとショック。息子も亡くなったし、ショック。まるで死人のようになりましたった、じいちゃんがね。だめだよそんな、元気出さねえば息子が浮かばれねえけ、がんばれがんばれってここらをこうやって叩いたり、揺さぶったりして私も大変でしたった。

一瞬の出来事だったからね。でも、あれってよくないな。「なんで家があるのにきたのか」って、そう言われたのがいちばん悲しい思いでした。水は、水源地が高いから電気はなくても流れてきましたった。だけども、やっぱり酸素を使うには電気がなくては助けることができなくて。そんだども今度は乙部のほうから火事が出たって。それからここはずっとこう焼けてきたんだもの。ここは和野っていう部落なんだども、道路をまたいでは、こいで火事があったったからね。火事もあって雪も降ったから、ほんと凍え死ぬようでした。津波に遭ったり、火事

に焼けたりだったもんね、大変でしたっけ。避難はしたけど山のほうが焼けたから、そこで焼け死んだ人もいたもんな。大変でしたわ、ほんとに。

娘はあっちの種市のほうで保健師していたったからね。なかなかあっちも海岸だから、津波のあれで娘もなかなかこれなくて。でも総合事務所にさがってから、夫とふたりしてきてくださいましたった。衣類とかもってね。皆みんな大変でした。

総合事務所には半月ぐらいいました。でもね、自衛隊さんがちゃんとお支度をして、ご馳走をつくってくださいましたった。助かりましたった。たいしたもんですっけ、自衛隊って。おにぎりをつくってくれたりね、たいしたもんでしたった。

主人はずーっと酸素吸入はしてなきゃいけないんです。五年、私がおうちで看ました。平成二一年から酸素を使ったったからね。ほんとに悪くなったのは震災が起きた平成二三年からでしたもんね。総合事務所では問題なく大丈夫でした。そのとき連れてきてくれた先生が、たまに診察にきてくださいましたった。先生まだ、ちょっといてちょうだいね。「いやいや、お前たちのそばにばっかりいられねえど、おらだっておっきい病院に勤めているからな。ただ、こんな病人を面倒みてきたっけつうことで、ご夫婦の写真は撮らせてけろよ」って、写真を撮って帰りましたっけ。

半月くらい経って自宅に戻ったときは、もう電気も大丈夫でしたね。家で療養ができました。割合と電気も、ここ早くつきましたったもんね。そういうふうに言うと、被災した人たちに申しわけないけども、そういうことでしたった。

■三月一一日の息子の行動

地震が起きて、漁協のほうでは早く避難をしろっていう指示が出たようですけどもね。なかなか自分は責任者

だったから、（息子は）そうそう簡単には逃げなかったようです。「逃げろ逃げろ」っても、自分に責任があるもんだから、なかなか逃げないでそこらを見回りしていたようでした。一時は加工場職員の皆さんを誘導して、三王閣の駐車場に避難したようです。そうして職員のうちの若い人が確認したようです。皆避難して、ここの三王閣の駐車場にいましたっていうのは聞きました。

その後に三メートルの津波がくるっていう放送がありましたった。そのとき三メートルの津波がくるといったのに、うちの息子がその駐車場からさがったようです。たまたま放送で間違ったもんね、三メートルって放送しなければよかったの。あれで皆さん油断したようですもんね。三メートルであれば、まあふつうの波の高さぐらいだとしか感じなかったと思いますわね。だからさがったと思います。

そうしてるうちに、ある程度はそこの三王閣の入口の水門を閉めていたみたいですがね、本気になって。だって、いまであれば電気でこう閉じるようだども、そんときは手でするもんでしたもんね、なかなか閉じらんなくて。たまたまうちの息子は三〇分団の団員でしたもんね。ここらがよくわかんないども、分団長のつぎの人が軽トラでさがって、漁協の角っこんとこで三〇分団の分団長さんと行き会って、「おい逃げぺす」ってその分団長さんが言ったもんらしいです。

そうしたらば、その作業をしている人が、「えー、ほんだら俺は行って海岸を一回りしてくっけ」って海のほうささがったもんらしいのね。そして、たまたま、その分団長のつぎをした人が、こう沖さ向かった矢先に、津波が、おっきい津波が一瞬でこうぶつかったらしいの。そこで、その人は波にのまれてしまって。そしておらの息子がたは、その三王閣のとこの水門で振り向いたらば、「先輩が流れた」つうもんで。そして、そこの水門を閉めていたのはKさんとおらの息子とふたりだったようですわね。

そして「あーこれは大変だ」つうもので、その流れた人を助けねばつうもんで、おらの息子はそこに跳ねこん

だらしいのね、波がきたのに。そいでKさんという人は上げ潮に飛び込んだらしいの。だから、その人は死んでも遺体はあがったわけさ。うちの息子と分団長のつぎの人は、のまれて沖さ行ったわけだがね。そういうように聞きましたね。親の言うことを聞けなかったのかなと思いました。その消防の分団長の二番目の人も、やっぱりとられるぐらいだからこなくてもいいようなもんだったぺども、とられにきたようなもんだもんね。そういうふうに間が抜けるというか、そんなような生まれ方したのか、それはわかんないですがね。

そしてその夜、「母さん、母さん」ってまた呼びました。それもその津波の夜に九時半と一〇時に無言電話がありましたった。あー、息子が亡くなったという電話を親に知らせたのかなと思って受話器とったども、やっぱりその通りでしたった。二回とも、九時半にも一〇時にも、なんの反応もない電話でしたった。無言の電話。たぶん親が待ってたと思うから、電話をよこしたと思う。またそれがふつうの電話の鳴り方でないわけ。ぽろぽろぽろんと微かに聞こえましたった。たぶん息子だったなと思いましたった。

それからあっちの海のほう見て、息子の名前を呼びましたった。流れた先は田老港のほうなんだもんね。反応があるわけもないし、行ってみたいと思ったって、まだ残骸があるから通られなくて。そして、いろいろ聞いたりなんかせば、「母さん、俺は五〇までしか」と、そういうように言いましたったもんね。だっけにそこまでが寿命なのかなと、このごろはそう思っています。

■家の側に骨堂をつくる

港に行った日がちょうど地震から一週間目。だからそんときはあらかた整地がされてきれいでちゃんとしてありましたった。そのとき一生懸命息子の名前を呼びましたったども全然だめでしたった。そんなもんですがね、覚えていたことは。そうしてその夜から、私が寝てたら枕さこうかぶさってて「母さん、無念だな」ってそう言って涙流しましたっけ。「母はもっと無念だよ」ってそこで泣きました。毎晩のように一〇日ぐらい続けてきましたっ

た、魂がね。

私は霊感が強いのね。霊はずーっと三年くらいはきましたった、こっちの御勝手のほうから。「母さん」って。「おお、きたかきたか」って、そうやってね。そうやって、にこっと笑っては、こう、いなくなって。震災後にそこに墓もってきました、私、骨堂つくりましたもんね。向こうのほうに熊が出るとかなんとかで怖くって。少し距離があるもんだから、杉の中を歩くもんで怖いっていうか寂しいっていうかでね。名前がTっていう息子でね「T、今度はな、おうちの側さ骨堂をもってきたっけ。泊まりにこいよ」って言いました。声かけましたがね。そうすれば、じいちゃんと私の間に寝ていましたった。こう起きて、夢でね。「どうだ、頭を触らせてみろ」って、私が手やったらすでにいなくなりましたった。そういうことは何回もありましたったね。そのくらいだね、私が記憶として残っているのは。

■前向きに生きて息子を供養したい

私はいろいろ病みました。食事ができなくて、食欲がなくて。それで、いろいろ宮古警察に、死亡届などいろいろな届をしなくてはなんないので。私がしっかりしなければ、これまたどうにもなんないので、前に進まないので。しっかりはしたけども、ストレスっていうか食欲がないもんで、身体がふらふらするような感じでしたけども。ストレスからきたって、このできものが出て。それが化膿してつゆが出てね、G皮膚科さんに二か月くらい通いました。そのとき栄養失調って言われまして、恥ずかしくて恥ずかしくてね。いまどき栄養失調だなんてあるべがと思ったども、全然食欲がないもんだから、あらーって。こんなに痩せてフラフラって、どこさ足をついて歩いてるのかって全然わかんないくらいでしたった。ほんとに大変でしたった。あれを思うと寒気がしたり恐ろしい。元気があったんで、いまがあるわけだがね。前向きに生きたいな、前向きに生きたいな、元気で前向きに生きていて息子を供養したい、供養したいと思ってきました。

■息子の思い出

加工場とか消防団とかっていうと、ほんと休みの日もいろいろ活動だなんだで引っ張り出されますね。休むということはほとんどなかった。それに、課長だかのために売り込みの出張、外に売り歩いて、週のうちに月火しかおうちにいませんでしたった。買いにくるだろうって、待ってるだけじゃ商売になんねえんだもんね。会社のセールス、真崎ワカメを売り込みに歩きましたった。

ものすごく忙しかったんです。この前、田老漁協のワカメの加工場が売った、名古屋の社長さんが墓参りにきてったみたいです。漁協から連絡がありましたった、きてくれたって。前もって連絡があればなんとか海産物ぐらいの土産をお返ししたいなあと思っただども、なんの音沙汰もなくてきたようですので。

息子はほとんど田老からは出たことがなかったんです。青年の船でいっしょになった、花巻の人だっていう好きな女性はいたようでしたった。だども花巻の病院のひとり娘で、ほんでもひとり息子で婿にくれるんならもらいますねって。あれーとんでもないことを言うんだねーって、「一男一女だんで、それってできないです」ってそう言いましたった。そしたらだれか、「花巻さ婿に行っていれば、津波に流れないものを」って、悪口しゃべったとかなんとがってねえ。でも、家取りを婿にあげるってことは、ちょっと考えられねえもんです。その女性が花巻から、一周忌まで拝みにきてくださいましたった。ありがたく思いましたった。

世の中ってほんとに大変だね。ほんとほんと。あんまり気にしないで生きることを考えねば。気にしては、とてもじゃないが身がもたないからね。そう思っています。前さ進むには、あんまり気にしないで。

■友だちに支えられて

友だちに支えられて、友だちがいっぱいいますもの高台に。そうだね、一週間のうちに五回くらいはお茶飲みに行きますかね。なにか予定が入ったときは、特別にいるようにしてもらわねば、ほとんど私は留守ですがね。

一日置きのようだから、週四回五回はふつう家を空けますからね。風が吹かないかぎりは出かけますがね。田老の平坦なところにも友だちがいますし、皆さんおかげさまで誘ってくださって。陽気にわいわいして、笑ったりしゃべったりカラオケをしたりね、けっこう楽しんでいます。息子も陽気な息子でしたったからね。それなんで、お前が歌も好きだったので母さんも友に誘われて歌を歌うのに行ってんがよって、今日も行ってきますねって仏さまに向かってしゃべっていきますがね。

百姓は、野菜こうするぐらい、じゃがいもこうするが、ひとりでばなんぼも食べないども、お友だちがいるから、その人たちにお裾分けするんです。五月になればつつじの花が咲きます。そのときは皆さんを誘って、木の下でジュース飲んだりお茶を飲んだりけっこう楽しんでいますね。

やっぱりずっと生まれてからいっしょにおっきくなってきた。支えてくれるお友だちは、ずっと娘がどうの、息子がどうの成長してくるというお母さんのつきあい、ずーっとありますもんね。学校参観とかなんとかお誘いがありまして行っても、そのメンバーで行くようにしましたったからね。まだその人がたともおつきあいがあって、なにかのときはお誘いがありますもんね。高台にその人が家建てたらきています。けっこう楽しくやっていますもんね。

■田老の復興について

今年七回忌終わりましたもんね。おうちのある人がたは、まあまああれだが、おうちこれから建てるという人や、高台に建てた人たちも大変だったようですっけ。建てるまではいろいろ、その前には、被災した人たちはグリーンピアさんの仮設、樫内仮設二か所にだったからね。やっぱりそのなかでもいろいろな問題もあって。やっぱり、これまでにくるには、落ち着くまでにはほんとに大変でしたもんね。

一歩一歩、宮古市は必ず復興しますって言ったども、皆さんは田老から出た市長さんだってどうのこうのって

悪口はけっこう言いますっけ。でも、だって田老は、あそこの山を切り崩したのだって、地権者の人たちが簡単にOKしたので素早く整地されました。田老は、三王団地のところは地主さんが早く提供してくださったの。そのために早く土地をならしたようでね。そうしなければ田老の町は復興しねえんだもの。他はなかなかそのハンコを押す人がいないらしくて、なかなかおうち建てる場所がないらしいです。山田だか大槌だかの向こうのほうでは、おうちがそろって建つとこはないでしょ。まだ整地されていないと思いますね、向こうは。そのためにかなり違ったようですね。

■いまの暮らし

孫といっしょに住んでいましたが、去年の一〇月ごろから私ひとり暮らしです。「ばあや、なんだよおしゃべりすんな」って怒るんだども、孫にもいい人が出たようで、それで宮古のほうに出向いていきます。

これも、おたがいに気を使わないで、いい生活だと思っています。やっぱり年代の差があっから、男がきても女がきても、いい年ごろになればこういうふうな変わり方すると思いますので、ひとりのほうは気楽でいいと思いますがね。つぎに末っ子がくるって言ったようだども、「いい、まだ元気でいるうちはまだいいけえ、ひとりで生きるにいいだけ生きるし。施設さ行って、ここが空いたときにきて、あと見てもらえばそれでいい」って言うことにしてはいます。でもまだ週のほとんど出かけてるから元気ですよね。そのほうが楽しいですもんね。だから孫がきても会う時間がなかったりします。でも、いるかどうだって、やっぱり確認の電話が入ります。なんか急用な用がないかぎり、「いいよ、こなくても」って言うわけで。

まだ三代前の相続やっていませんでしたった。それからね、私が孫を呼ばってやってもらいました。いま書類を送ってもらう手続きを宮城県でひとりやっていますが、その兄貴の人がたまたま外国に出張で行くので、あんまり日本にいないような人なので、ちょっとこの人に連絡がつきがたいと。それでもうひとりは東京でタクシー

運転手をやってて、この人の姉が行ってくるとかって相談で、交通費は私が出しまして、行ってくださいってお願いしてありますがね。もうひとりは山口、いとこの人だけれども、この人はこないだの日曜日に行ってきましたが、なんかちょっと行方がわからないようですっけね。

この人たちに振り回されています。五〜六人はまぁまぁスムーズにいきましたった。まぁまぁ苦情もきましたったがね、親がないために娘のような人のところに行くと、「なんで私がこなければなんねえんですかね」と言うんで、「いやいやそれは親が亡くなってるので、顔も知らなくて申しわけないけども、印鑑証明と実印をいただいたぶんは気持ちとして私もお礼はしますからね」って。お礼するって言うと、「ありがとうございました」って早速電話がくるんですっけ。渋がっているわりに都会の人ってなかなかむずかしいね。ここらの人は「はいはい、わかりました」って、早速です。でも疑い深いっていうかね、おれおれ詐欺のようなあれだと思うようですっけ。だからなかなかね、わかんなくて。一昨年からやってますが、あとふたりがまだですがね、むずかしいとこです。

そのために孫を呼びましたったの。野田で社協にいたったのにね。でも、早くこの用を決めねばと思いますがね、なかなか大変なものを背負っています。これが早く用事が決まれば俺もスカッとするんだべなど思うどもね。

死んだ人たちには申しわけないども、お前さんたちは、なんで女子さこんなの渡してというかあれして、人に苦労かけてばかりいるんだぁべって。怒ったときは、仏さまには悪口も供養のようですので、そういうふうに考えています。女が背負っていくのは大変ですがね。いろいろ息子が、ほんとはお前がやんだったべが、わけわからん母さんがやるためにまるで苦労してんだがや、これでって、息子にくどくど言うときもあります。

（二〇一七年三月二九日）

●世帯T・J　話者一名（男性……六十歳代）

■震災前のくらし

私は、田老にきてからずっと田老に住んでいます。親父は最初は岩泉にいて、岩泉からグリーンピア三陸みやこのある田老町小堀内向新田という地区にきて、そしてそれから海のほうのある町内に住所を移動しました。自宅は保育所の目の前だったんですよ。ここに戻ってきて、昭和四六年ぐらいに家を建てました。結婚する前ですね。この家の場所がいま、この道路おりてったとこの真ん中なんですよ。その前は同じ町内の借家に住んでいましたね。かみさんは岩泉の出身です。

親父がここに引っ越してきたのは、私が昭和二四年生まれだから、終戦の一年ぐらい前なのかな？　親父がここにきたときからもう漁業していました。ワカメだけの養殖から始まったんですね。そのころは天然ワカメ、天然昆布などが順調だったんですけど、だんだん人数が多くなってきたら分け前が減ってきて、養殖を、ワカメと昆布二本しないと、ということになってね。親父が始めたころはサッパ船（木船）の真ん中のコマに、ぎっしりとアワビがとれたんですよ。現在は資源が枯渇してるんですよ。

私は宮古の駅前のデパートに勤めていたんですけども、平成四年にやめて。平成九年ごろから漁業を始めたね。親父が養殖辞めるっていうから、私も仕事がないから、それから。定年になる前にこっちで漁業を継ぎましたね。デパートと全然違う。あのころはエレベーターもエスカレーターも近くになかったもんね。だから三鉄（三陸鉄道）に乗って皆がきて。だから店に、商品がすぐなくなってね。三鉄も満員で。買い物するところそこしかなかったんで、とくに若い人たち。

母ももう年だから、だいぶ足腰弱っていて。海のほうは俺と息子とかみさんの三人でやって、というふうにし

て、年寄りふたりは家にいたんだけどね。

■三月一一日のこと

三月一一日どうだったかなと思いながら、記憶がはっきりしなくて。海から帰ってきて、そしていっしょにいたのが養殖組合の仲間ひとりだったかな。すごい揺れだったんで、これ大きいな、津波がくんのかな、津波がくるって頭になかったんでね、油断はあったと思うんですけどね。それから避難というわけじゃないけども、皆山のほうにあがるんですよ。俺はそんなに津波がくるって頭になかったんで。そうしてるうちに。で、息子には、「俺は海さ行ってっから地震がきたらば避難せえよ」とは言ったんですけども。避難するようには言っておいたんですけど、息子は車の免許がねえんで、その対応がまずかったなと思ってんですけどね。まさか堤防が皆壊れるとは思わなくて、まさか壊滅状態になるなんて。

近所の家では、津波がくるから逃げようとしたが、逃げたらお袋さんがカギかけて出てこなかった。だからそうやってとられて、さまざまです。私はつねに大きいトランジスタラジオもって歩いてったから、海でもそれで聞いてたら、気仙沼で人がなんぼ流れたとか。あとで映像見ると、ああこれだったら必死で皆、どこに逃げたんだろうと思いましたね。

田老自体が皆して警報が聞こえなかったという話ですからね。私も聞かなかったような気がするんですよ。無線からもなにも聞かなかった気がするね。そんな話してたね。皆、気が動転してっから、そうなってくんだかわかんないですね。聞かなかった気がするなんていうのは、インプットされて聞かなかったっていうことになってるかもわかんないし。どこに住んでたらいいんだかね、いまね、川のそばは崩れてくるし、海はだめだし、山の下もだめだし。

合併するのも恐ろしいもんでね。責任者がいるんですよね、選挙で決まった責任者が。合併して、役職だけい

いのもらって。本庁のほうからの指示がないと、かってにできないんですよ。だから金縛りになってなにもできなかったんですね。その対応をきっちりしとく、個々の総合事務所で警報とか出せればいいけどね。またそれで事故があれば役所が悪いって言って。

■妻との再会

つぎの日、皆して田老に帰っていったら、帰られねえんです。電話も無線も通じねえ状態になって、ハァこりゃだめだなと思って、遠回りしてきたんですけども、形がなくて、コンクリートの塊だったもんね、なぜか。なぜかコンクリートの塊があって、この上に玄関脇に置いた軽トラックが。家族を探したけども、呼べど叫べど全然。たまたまその日は姉さんのうちで葬儀があって、かみさんはその手伝いに行ってました。かみさんは内陸にいたから大丈夫でしたね。震災があって、そのあとつぎの日に皆、グリーンピアに集合かかって、四日目に会いました。

■避難所での生活

グリーンピアのアリーナに三、四日ぐらい、全員。避難所設けたからそっちにいました。グリーンピアには仮設が建つまでいました。六月から仮設が建ちましたね。お荷物だったグリーンピアが完全に役に立ってたもんね。あれも県に行ってみたり市に行ってみたり、震災後に個人の管理になったんですよ。あのとき、あの日、Aさんがあそこの専務やってたのかな。グリーンピアがなかったらどこにいたんだべね。ほかにないですからね、大人数収容できるような施設。

いまの市長が、ほかの同じ避難所行っても、田老は早い田老は早いって言われるって。いやそうでねえ、田老は何回も経験してっから、土地の争いがなくて、市で企画したらおまかせコースで、ハンコ押して協力してくださいって言えば協力してもらえて、スムーズに進んだために国からおりてくる金も早いから。

■父は見つかり、母と息子は見つからなかった

二日目だかに捜索してからは、消防団のほうから、父がちょうど浜の沖のほうで見つかったって連絡がありました。父がデイサービスに通ってるときに、うちのかみさんがシャツに名前書いたらしいんですよ。それで確認とれて。そして父と対面したらば、ここの頬骨の出てっとこだけ、蚊に刺されたくらいの傷だったんですけども。ほとんど傷んでなかったんですよ。だったらあとふたり（母と息子が）どうかなと思ったんだけども、影も形も出てこないですね。

このうしろの山越えたとこに沢尻っていう浜があるんですけども、夢で船があって、それに沿って息子がいっしょに通ってて探しに行ってくるって。そのときにはいなかったんですけどもね、だから探しに行くって言ったときに、一週間ぐらいだったかな。そのままさよならしてった。ふたりして昆布拾いした場所なんですよ。でもどこも壊滅状態だからね。

問題になってるけども、死体安置所回っても全部は確認できねえのね。「どういう特徴ですか」って聞き取りされてしゃべっても、「あっそういう人はいません」って言われて。でもあとで近所の人が写真で見て、絶対この人はすぐ家の前の人だかなんてしゃべったっけ。お母さんこの人、あっ違う違う、いや違わねえとしゃべって。そうしたらば、やっぱり目の前の近所の人だったもんね。だから皆の目で見れば確認は早いと思うんで、安置所は警察官が立ち会ってるから、規律に反することはできねえっていうから。そんなの、こんなに災害が起きてっとね、生死に関わらず探してんだから、なんとかできりゃ。なにも、目新しいとこはないんだがね。

■父、母、息子のこと

息子は車の免許がなかったから、避難しろよって言っても手段がなかったね。歩くっていっても、親父は足も一歩一歩っていうか、一足一足しか歩けなくて。その日がデイサービスじゃねえ日だったんですよ。つぎの日だっ

たんだけどね。それがいいことなのか悪いことなのか。

いままでチリ地震津波（→巻末用語解説）で田老は大丈夫だったっていうのがあったから。チリ地震の日はひとつも津波がこなかったんですよ、実際。だから皆慢心してんだね。私の話のほかに、先輩ふたりなんだけども、車を家の前に用意して、津波がくるからってお袋さんに逃げようと言ったらば、俺はいいからお前は逃げろ、だってね。

年寄りを残して、そして三人とも連れていかれてね。だから普段から言ってても、障害もったり年とってくれば意固地になってしまって、迷惑かけたくないのか。たまたまその日は、かみさんが姉さんのうちで葬儀があって、その手伝いに行った。だから家には老夫婦と息子しかいなかったんです。津波はどのくらいの速度できてんだかね、堤防壊してまできて。だからずっと月命日、欠かさず墓参りして。なにもないからどうしようもねえんだもんね。父、母、息子の三人は家にいて、父は足がおぼつかなくて、それの世話をしているうちに三人の命をとられたね。

■亡くなった消防団の友人たち

三月九日にも地震がきたんですよ。友人で消防団のKもいっしょに三月九日のときはラジオ聞いていて、警報が出たときは沖にいて。終わってから入ってきて、大丈夫だった。漁協の海中育成してるサケの稚魚が流れた施設を、皆して寄せ合わせて、つぎの日はできあがったのかね。そして一一日は消防団員になったばっかしに、いまの漁協の前で消防活動して、ずぶ濡れになって逃げたらしいんだけども、とられたらしいんですね。だから最後まで海と戦ってった。

一一日はべつべつで。そろそろ一一日だから、ワカメの収穫に入る準備で、皆、船には準備はできてたったと思うんですけどね。俺は消防団じゃないんです、入ってねえす。

皆、町内に仕事がないから離れていってるんですよ。入ってても、昼間はいないんです。だから実際、この辺だと漁協に勤めてる人が多いから、なんとか動くとは思うんですけどね。即活動できる人はあんまりいないと思いますね。だからKさんとか、田老町漁協ワカメ加工場が職場ですぐ海に行けた人たちが、震災のときも行ったんですね。

あのときはM工場長は障害者を三人ぐらい雇ってたんですよ。必ず雇いなさいっていうのあるから。たぶんその子は、でも避難させるのがあったと思うんですけど、そして最後に本人が避難したと思うんですよね。

そこでお菓子屋さん再開したTさんも消防団の分団長だよ。前から思ってたけども、地震の場合は消防自動車が海辺に行くんですよね、避難せえ避難せえって。なんでパトカーや消防自動車が行くかのも不思議だった、それだけでも津波にとられてくもんね。

Kさんたち、漁協のとこの防潮堤の上で、水門とこで避難し遅れた車を誘導してる最中だったって聞いたよ。そして中学校のほうにまっすぐ逃げなかったらしいんだっけな、堤防沿いにこっちの国道のほうに出るようにきたんだっけかな、ローソンがあるほうに。この堤防をこう、こっちに走ったらしい。

■漁業の仕事を再開する

漁業の仕事を再開したのはつぎの年からだね。津波の年は、瓦礫の片づけが終わんないとか、沖にセットしてあった養殖の施設も壊れたので、積んできてそれを処理したり、砂浜に打ち上がったのを処理したり、組合のほうでいち早く立ち上がってやってもらって。施設は最初、市のほうでやってもらって、そのうち国のほうで出すものになって、船から施設から全部やってもらって産業復興してましたね。

やっぱり収入がないと漁協職員も路頭に迷うから、漁協のほうでも応援してくれだった。取引先とかね、励ましの葉書がきたりしたみたいですね。じゃ、これやんなきゃなんねえっつうことになって、皆声がけして、なん

とか進むことができたんですね。

組合員自体はあんまり津波にとられたりなんかしねえが、組合のほうでも、住むとこがねえから（田老地区の）外にいっても組合員としてるんですけども。それも期限が来年までなんです。もう外に出てって家を建ててっからね、定住してっから。基本的にそれはありえないんですけどもね。合併して同じ宮古市でも、漁業権が地区地区にあるからね。漁業権がむずかしくて、田老の漁業権っていうわけにはいかなくなる。出てってる人はけっこう年がいってますからね。だから、来年からは離れざるをえないっていう人も出てきますね。そういう猶予期間があるために、盛岡に行った人も戻ってきますからね。すごい根性あると思ったけども。

船や養殖設備やら津波でもっていかれても、新たに設置することに対する負担はないですね。養殖するのに船外機四〇馬力でではちょっとむりだからって七〇馬力にしたら、その差額を払わなきゃなんなかったんですけども。内海なら四〇馬力でもいいんだけども、外海だからもうちょっと大きい馬力ないと。田老は四〇馬力っていうのが上限があったもんね、どういうわけなんだかね。差額は二、三〇万だったですけど。

でもそれがないとやってけねえ、金のもとがねえと。そして昆布の加工場っていうのは、干し場も作業場もつくってもらったから、それもいつまでなのか。年額一三万五〇〇〇円ぐらいかかるんです。それぐらい家賃としてとられるんです。養殖やって、昆布やって、その施設さ入った人が払うのね。ひとりが。組合員は漁協に払うことになってる、漁協がまとめてどっかに払ってる。

ふつうは減価償却でそれなりにさがってもいいはずだけど、家賃はさがらないね。その税金の流れでも、金がよくわからないんだけども、漁協でも悩んでるようですけど。船外機の船もそうなんだけども、五年経ったらば、組合の登録から外れて個人に譲るような話だったんですよ。そして盛岡に役員研修会に行ったときに、その話を質問したら、「いまそれは調整中で、決まったら各漁協にお話ししますから」と言われました。

結局ね、あれは漁協の固定資産になってんのかな。そこらもまだはっきりしねえんだっけね。漁協の持ち物にはなってるんですよ。船も自分らは使ってるけども、所有者は組合。使用者は組合員。そして保険料も漁業者。ふつうリースったらもってる人が使用料とってるはずなのに。皆、答えはわかるんだけどね。

最初買ってくれたのは、国が買ってくれてることになってるんですけどね。保険料がですね。それは大きい漁船建造した人たちの、その保険料が毎年、一年一年だから、皆してブーブー言ってんだけども。

海とか農業は定年がないじゃないですか、身体が元気なうちは。田老は漁業目ざして人が入ってくることはないですね。だから一所懸命後継者後継者って言うけども。厚生年金だったら後継者が出てくるかもわかんねえけどね。国民健康保険だから、個人事業主だからね、ちょっと考えて。俺は会社勤めしてたから、厚生年金のほうはいっぱいで国保は微々たるもんだからね。それでも海の漁がいっぺえ獲れるならいいんですけども、ちょっと。

これからは天然の昆布の時期ですね。まだ海がよくないみたいで。一一月までおもだったものはねえな。一一月になればアワビが獲れますね。でもアワビは、いまは磯焼けで全然。ワカメ、昆布の、昆布はないんだな。どうなのか。磯焼けって白くなるんですよ、岩場が。草が生えなくなって。原因はやっぱりこの温暖化だろうね。南洋の魚の図鑑見ないと（わからない魚がとれたりする）。北洋じゃ出てこないような魚ですね。魚自体はカラフルできれいなんだけどね。市場でも図鑑見るくらい種類が増えてきて。

■高台での生活

ここ（三王団地）は津波は大丈夫だと思うけど、火事が起きたらどうすんのかなと思って。山火事とかですね。何年かに一回ありますよね、春先に。田老じゃないです、釜石とか。

この場所は決まったのもけっこう早いですよ。一軒だけ私有地で。そこぐらいで。あれは皆、住民も被災してっから協力してね。とくにそこで、ああだこうだっていう話なくて、皆かなりスムーズにいきましたね。だって住

むとこがねえんだもんね。でも、それをどこの沿岸も被災地でも同じだけども、なかなかそのやり方についてうまくいかないところ、このぐらい人口で広さあったらもっともめてますよね。

なんでスムーズにいったのか、皆してしゃべってんだども、でもこれをつくってもらったために道路ができたりして、自分の土地がすぐ近くにあれば木材を切り出すのも早いし、やっぱり協力があってよかったのかな。皆が協力したんだ。だって合併したから役場に年とった人がいねえから、だからここからきても雇われてきたら一個人の家。しがらみがねえから、なんとかお願いしますって言われたら、協力してもらってっから、じゃおたがいっていう感じで、なにもトラブルの話はほんとに一軒もなかったはずですよ。

ここも市のほうの計画のなかに、高台で皆が移転するっていうふうになって。ただ、高台移転する場所は、ここにするかそっちの樫内っつうとこあるんだけども、そこにするかどっちがいいと思うなんて。だって田老は漁業で成り立ってるし、あっちは免許のねえ母さんとか、こっちがいちばんいいよっていうことになって、それも早く決まりましたね。そしてあっちは水の問題もあるんです。こっちはその施設もあったから。そのぐらい海で生活してきたから、皆。

ここの生活は徐々に慣れてきましたね。この前もここで盆踊りやったんですけど。ただ雨だったんで、ここの中に集まって。皆おりてきてから初めての会合だったからね、飲んで食べて、かえって雨でよかったなって。盆踊りやりたかったけども、そしたらその日で夏休みが終わりましたって。つぎから別な日にしてくださいって言われて、それまでだなって思って反省点もあって。この場所もっと広ければよかったけどね、そして自由に出入りができるとよかったね、いちいちカギかけなくてもね。カギを借りに行かなきゃいけないのはめんどくさいですね。遠くまで行かないといけないし。自治会長とか預かれないんですよね。俺も不在が多いからね、海に行ってっから。そして管理者にここは委託されてねえんですよ、まだ市のものなんです。委託管理がどうなってっか

だかね、市のほうでなにか考えてんだか。

海までちょっと遠くなったけど、グリーンピアから通ってた思いすれば。高いとこに移るのがいいのはわかるけど、でも港と遠くなると仕事の関係で成り立たないんだってよく聞くけど、ここはいい距離なんじゃないですか。ちょっとおりられるぐらいの距離なら許容範囲。海も見えるしね。海が見えるのはだいじ。心安らぐからね。車で二、三分で行ってしまう。ここに引っ越したのは、去年六月かな。

■田老地区の津波対策

田老は「防災の町」宣言してるからね。あの堤防だって私たちの小さいころはけっこう高かったんだけどもね。つくるときに埋め立てがけっこうされた。そのころ三鉄が工事が始まって、トンネルができてその岩石を埋め立てしたんですよね。だから願ったりかなったり。堤防広くなってって。第二堤のこっちですね。

遠隔操作のカメラもついてたし、そしたら、それもこれもなにも稼働しなくて。人のせいにはしたくないけどもね、設備が整ってると安心が先に立つからね。うちの近くの避難場所に逃げた部落の人たちも、逃げるときに津波が足元まできて、火はうしろに入って、生きた心地はしなかったって言ってましたね。火事が飛び火して、でもなんとかうまく消えてって。ただ雪降りだったからすごく寒かったんですよね。だから前からしゃべってってけども、避難場所として指定したらば、昼だけ地震災害が起きるわけじゃねえんすからね。

（二〇一七年八月二一日）

●世帯T・K　話者一名……女性（七十歳代）

■震災前のくらし

住んでいた家は公民館の入口。歯医者さんか、市長さんの家があったんだね。その隣なんですよね。屋根は塗りなおして塗りなおして、青。おっきい家でした。あのね、裏のほうは古くなってだめになったら、取り壊して、そして裏の表のほうね、それがいちばん最初のおうちでした。そして少しずつこう足して足していって、後ろに、最後に老後になったときには、ここに住むって言ってね、うんとおっきいつうわけでないけど、でも部屋は八つぐらい。でも、ふたり、ほれ最後だけ。でも、孫たちがきたときはいいの。走り回る、すごく。二階から下からね。この家は結婚するにあたって、うちの人が、よその人が売るっていうとこを買い受けたんですよ、土地と家とね。また新しかったんですよ。

主人は田老生まれで田老育ち。私もね、実家はちょっとあがったところで田老の町中ではなかったけど、ちょっと部落のほうのね、田老のうちでした。結婚で新しく家を買って、そこにずっと住んでいたんです。金婚式が今年だから、夏ごろかな秋ごろかなって楽しみにやっていたときに津波がきたのね。だから結婚して五〇年だね。

主人は最初は遠洋漁業に乗っていたんだけど、船を好きだって、一トン未満の船に機械がついた船ね、それを家にもって。船に行ったり、沖漁しに行ったりしていました。自分で船もってね。そして船はそのまま置いて、そしてまた二か月ぐらいのマスの漁船に乗るんですよ。そしてまたお金を得てくれば、それで資材を買って、全然貯まるっていうような商売じゃなかったのね。姉と弟も田老に住んでだった。

■三月一一日のこと

震災のときは、ほれ、ここの堤防を信じていたからね。ここの階段のつぎのところの階段なんです、いつもあ

がったりおりたりしてね。あそこの階段っていうか石段っていうかそっちを越えれば、すぐ下のとこに浜道具とかいろんなのをする小屋があったんですよ。そこにしょっちゅう行ってたのね。そこに行くのが楽しみでね。若いころは浜のほうがおもで、小屋にはあんまり行かなかったけど、年とってからは小屋のほうに行って、友だちがくるの待って、それを楽しみにして、楽しんで、そうやってね、過ごしていたの。

三・一一のときには、主人はその堤防の上にあがったらしいんですよ。私は宮古の病院に行ったからね。宮古の病院にさえ行かなければ、もしかしたらば、呼びかけて、主人といっしょに逃げられたか、それともいっしょにだめになったかのうちですがね。まあこれも、それこそそういうふうに私を残そうと思って、神さまが守ってくれたのかな。たいしたあれでなかったけれども病院に行かせてもらったのがね、わからないんだけどね。ひとりでもいなきゃ孫もいるしね。孫はいま母子家庭だからね、今度大学に入るね、娘の孫がね。

ほんとうに大変でした。（地震の直後、）けっこう宮古の駅にも田老の人たちがバスでくるって並んでだったんですよ。でも、そしたらば、ほれ私はね、先に家のことが心配だから、早く早くタクシーに乗って、田老に帰っぺすかってしたんだけど、だれも乗る気がしないの。私だけ慌ててるの。まずいちおう私はタクシーに乗ったわけ。そしたらば皆さんが、「なにいまバスが行くんだもの、おりておりて」って言うからおりたの。いったんおりて、運がよかったかもしれないですよ。そのまま行けば、たぶん途中で津波にのまれたかもしれないんですよ。「おりておりて」って言ったかたが、たぶん助けてくれたと思ってね、そう思ってるんだけど。

そしてバスがもう走らないからって、やっぱりタクシーに乗って帰りたかったんで。しゅーんって一台タクシーがきたので、そのタクシーに何人か乗れるぐらい乗って、そしてこう行ったらばもう、この下のほうから津波が押し寄せてきて、台所用品なんかが流れてきた。全然そのとき津波だと思わなかったの。頭が真っ白くなってね、流れてきたのはなんだかのーって思って、ぼけーっとして見てて。運転手さんが「あ、津波だ！」って言ってね。

そして津波だって言ったから、じゃあ、高いほうにあがって、走ってくれるからって。

あがるところがあるんですよ。宮古のね、お寺さんの方向。お墓の、そっちあがってくれたから、その後津波は見ないで。一回は宮古の町にいるうちに、もうきたのね。津波、水がそこまで、そこを走って。で、上にあがってもらって、そしてきたんですよ。あとの田老の残った人たちは、ここらへんまで水に濡れて、そして合同庁舎のほうに行って泊まったらしいんですけどね。そして、途中まで春日井のねっていうとこまできて、泊めていただいてね。そのときは、四人いっしょに泊まりました。

娘と孫は大丈夫でした。娘の家は、ずっと遠い向こうのほうの端っこのほうの家なんだ。娘もいったん小学校に行こうと思って、書類なんかをもって、そして（私の）家に寄ったんだそうです。そしたら、声かけてもだれもいないから、あー逃げたんだなーと思って小学校に行ったんだって。小学校に行って、もう全然家に戻る気はなくて、（孫と）いっしょにいようと思って、その晩、その小学校でね、夜を明かしたらしいんです。

■翌日からのこと

私の避難所はお寺さんでした。つぎの朝やっとたどり着いたんですよ。私はね、いちばん年をとってたから、つぎの朝ね、いっしょに出かけたけども。だれもね「これなんだな。命てんでんこっていうのはなあ」と思って。電気はトンネルにもついてないし、暗いし、暗いところの歩道を歩く、たまーに車通るんですよ。そうすれば危ないから、歩道にあがれば凍っててね。滑って、すんごい遠いような思いして。やっとやっと出てきて、田老の町を眺めたらば、もうなんとも言いようがない。それでもう頭が真っ白になって、全然孫のことも娘のことも相手のことも、全然考えられなかったのね。無事でだかとか、どうしてたかっていうの全然いっさい考えられなかった。自分のような気がしない、なにか呆然としてね。

私、不思議なんだよね。なんで娘と孫と相手を考えないうちに、きょうだいを考えたのかなって。それが全然

頭になかったのね。なんのため、なんだかわからないんだよね。どうしてだろなあと思ったりしてね。お寺のほうに、線路があがって、お寺のほうに行かねば行かれないよって。でも親切にね、あそこのほうに見えたら声かけたけどね。

その人たちも歩いている人たちもみんな、あの戦争のときにあのね、原爆にあれされたような格好して、ぐだーっとしたような格好で歩いているんですよ、みなさんが。ほんとうに戦争なんだろうか、津波なんだろうかっていうような感じで、わかんないような。見れば、あ、この人はだれそれだなっていうような人がね、着物もそれなりにね、濡れたりとか、泥んこになったり、そして家もないしね、着替えもないんですよね、そして歩いているんですよ。私はほれ、津波に遭わないから、ふつうの格好だけ。それから「あがれ、あがれ」そう言ってくれてね。そしてやっとの思いで、四つんばいでね、線路にあがって。それから歩いて、そしたらその線路の上にはいろんな障害物があって、屋根もだれか通るために、こう外して。屋根は（線路に）かかってました。そして、そこの線路伝いに、お寺さんに行って。

■線路を歩いて寺（避難所）へ

そしたら姉とね弟と待っててくれてたの。「あーいたったふぅだー」とかってね。そうやって待ってね、いてくれたったの。名前がないから、そこの避難所についたかたは名前をどこに書きなさいって言われてね。私はね、紙が回ってきたのの端っこにね、ちょっとだけ書け、印をしたのね。こういう状態で、宮古のあれから、やっとたどり着いたんですよ。

これ書いたのは、全部ほれあちこちのあれさ送ってね、やってるんだそうです。で、私の名前もないから、あ、だめだかとも思ってたってね。でもまあ、喜ばれて嬉しかったです。そして、孫も娘も小学校にいるっていうことを聞いてね。でも相手（夫）がね、あれがないんだよね。

お寺の樫内に一晩泊まって、そしたらばね、今度は火事がね。つぎの日、今度は上が燃えてくるんですよ、上から。そしたら何回も地震がして、津波もまたくるから逃げろ、逃げろってね言われて、何回もお墓の上のほうにも逃げてっていったんですよ。そしたらば午後か夕方になって、「あーここからはいられないから、火事もきて火がつくから、早くどこかに逃げろ逃げろ」ってみなさんで言って。そしたら、じゃあ北高（県立宮古北高等学校）のほうがいいって、そして北高のほうに行ったんですよ。そしたら北高はもうね、入口まで人がいっぱいで入られないんですよ。私たちは後から行ったから入られなくて、そして今度はふれあい荘まで行ったんですよ。

でも運よく私ね、ちょうどそのときには遅くてひとりだったのね。姉たちはどっちに行ったのか、まず先に行ったかどうなんだが、そのときははぐれたわよね。そして行ったときは、姉たちはもう着いてたの。そっちのほうは二日経ってたからね。マイクロバスがちょうどあえば乗せてくれたんだ。（ふれあい荘に）マイクロバスで行ったんだ。私はね、「いやー行きたいけどな、暗くなって歩って行けないな」って。「じゃあ、送ってゆくから」って、あの北高の先生が送ってくれました。

そして（ふれあい荘に）行って、姉たちといっしょにそこにね二〇日ぐらいはいたのかな。あそこが避難所には指定されていなかったから、だれも避難しているかたはいないんじゃないかなあと思って。あそこには物資が、食事が届かなかったんですよ。そしたらば、そこにある食事を、そこにいる人たちに分けて食べさせてくれたんですよ、私たちに。それでも、あとは底が尽きるから、どこかに行ってくださいって言われたんですよね。行くところがある人とは言わない。みんなどこかに行ってくださいって言われて、「いや、どこに行ったらいいんだべな」と思ったりしてね。

そう思って、だったらば、家があって、みんな壊れないで下だけ泥んこが入ったとか、水道が出ないとか、電気が点かない人は二階もあるんで二階のほうに住んでもいいから、家が残っている人たちはそっちに行きなさ

いって言われて。

私たちにはまあ、どこも家もなくなったからって置いてくれたんですよ。それから今度はここにも避難しているかたがいるっていうことで、自衛隊の人たちが物資を、物資って食べ物を運んできてくれて、やっとねそこ（ふれあい荘）に少し落ち着いて二〇日ぐらいはそこにいたんですよ。

■夫を探す

私は宮古に行ってたからね。そのほんとうの津波はテレビだけで見て、あえてビデオなんかは見たくないからね、見ないんだけど。テレビで映すときに見たりして、そうやってんだけど、まだやっぱりね。あのときの、いろんなすごい震災の風景がねえ、あの安置所に並んでる、最後にはね、人だと思えなかったですよ。いっぱい何人も並んでいるから。箱がなくて、お棺がなくて、そしてただお棺も何個か並んで、そのこっちのほうには今度はナイロンの黒いチャックつきの袋に入ったのに並べられてね、何体も。二〇、三〇、四〇も並べて。そして今度それもない場合は、ただね、そのまま寝せて。その風景を見ながら、すごくね、毎日通って、（夫を）探して歩いたからね。その避難所からね。

ほんとうに、あの、テレビにときどきなにか映るとか、それに関連しない、時代劇で人殺したのが映るとか、そういうのはそれ以後、震災以後、いっさい見られない。見たくないのね。死体置き場のあれ見てからね。二〇日ぐらいは通いましたよ。北高に安置所が最初にありましてね、そして、北高には長く置かれないからねっていうことで、この公民館のほうに移ったんですよ。体育館のほうにね、田老の。

なにが起きたか全然わかんなかったんですよね。何日かして、やっと家の屋根を探して、あまり遠くないところだったんですよ。館ヶ森（たてもり）っていう山があるから、行ったらそこに屋根だけが見えたから、まあそこの中にいるのかなと思って、自衛隊さんにお願いしてね。そこを先にやってくださいって言ったら、素直にすぐやって、二

日、三日ぐらいかかってやってみてくれました。でもね、そこにはいなかったんですよ。家の中にはね。そのときはもしかして、家の中にいたのかなと思って。

■夫の遺体が見つかる

そして田老のほうに遺体安置所がきてから、私のうちでは見つけられたわけね。見つかってよかったですけどね。そのときはね、全然ね、最初は全然わかんなかったのね、二一日目ではね。全然うちの人だと思わなくて、顔はこんなんだし、黒いし、見せられてもね。そして綺麗に、自衛隊のかたがね、綺麗にしてくれて、そしてやっぱ黒いチャックに入れられて置いてあったのね。それを開けて見せられて、すっかりね、全然傷が少しだけあって、すっかりそのままでした。それまではね、一〇日ぐらいまでは、でもどこかで会うかなーと思って、くるんですよね、町のほうにね。何日か後に帰ってきて会ったという人たちの話も聞くので、毎日ね、どこで会えるのかなー、どこからひょっこり出てくるかなーと思ってね。安心したのと同時に、もうがっかりしたんですよね。もうね、死体が見つかったときはね。それからのね、苦しいんですよね、いろいろと。それで、火葬のときも四、五日ね、待たなきゃできないような状態でね、でも息子も娘もそばにいたかったからね、いいけど。

■夫が逃げなかった理由

主人は堤防の上にね、いたんだそうです。堤防の上でね、最初は一〇人も一五人もいたんだそうです。でもほれ、友だちとかいろんなかたが、「あー逃げねば、津波がきて、ここはだめだよ」って逃げてね。「早く逃げるべー」とかってうちの人にも呼びかけてくれたんだって。だからうちの人は、友だちの言うことには、ここにいれば大丈夫だ、ここまでくる津波はこないんだとかっていたんだそうです。堤防を信じてね。でも、ほれ、そんな津波に遭ってないから、そういうふうに水が引いたったらどのぐらいの津波がくるっていうのもね、認識しなかったんじゃないですか。私は宮古にいたからね、助かったんですよ。孫とね、娘がね、早く逃げたかったからね、そ

れだけでもよかったです。

堤防にだけあがって、今度最後にね、今度言われて、あーだめかな、（主人は）つねに言ってたったから、「堤防にあがれば、津波はなあに避けられる」とかって、つねに言ってたからね。で、皆さんもそう思ったんじゃないんですか。堤防があるから、なに大丈夫だ、ゆっくり逃げても、っていうような感じでね。

■グリーンピア（アリーナ）での生活

グリーンピアのアリーナっていうとこね、そこにみなさん全員集まってくださいって言われて、今度はそこに行ったんですよ。まずね、なにもないから、どこに行くっても手提げね。それを提げて行けばいいからね。そこに行って、田老の町の人たちが全部そこでみんなで生活をしたんです。あそこは大きいからね、いったん何日かね。そしたらあまり狭いからっつうことで、それからホテルに行く人とアリーナに残る人と分けてくれたんですよ。だれがやってくれたかわかんないけど、私はひとりだから、四人組で、独り者が四人、同じ部屋に住むっていうようにね。

家族があれば家族同士、年寄りの人いるかたはホテルのほうに入れてもらってというように。つまり元気な人たちは、こっちのアリーナのほうに残ってとかね、まあ、こう分けて、生活が始まったんですよ。そしたら今度は洗濯をするときにね、洗濯機が何台かで田老町全体の人たちが洗濯しなきゃならないから。どこかに行ったかたもあるけど、一割ぐらいも減ったのかね、田老町の全体の人たちがね。その洗濯物をするときも、ほんとうに大変でした。我先とやりたいからね、喧嘩が始まるんですよ。知っている人知らない人関係なく、意地が出てくるんですよね。だから私のとこは、ほんとうのほんとうの最後に夕方ね、行って、皆さんが終わったころ洗って、一日越しでやったんだけども。スケートをやるスケートリンク場があるんですよ。そこに太い綱を張ってもらってね、そこに洗濯物を干してね、みなさんね。

娘はやっぱり離婚するにあたってね、ちょっとノイローゼ気味になったから、これは他所の人と生活させては迷惑をかけるなと思って、お願いをしてみたんですよ。すみませんけど、娘と孫と私といっしょに住まわせて、いっしょの部屋にしてくれませんかってお願いしたら、「あーいいですよ」って。簡単にね、許可が出て、それでおかげさまでいっしょにね、同じ部屋になったんですよ。

■避難民の間で分断もあった

グリーンピアのホテルの中で生活してね。そしたらやっぱり、このアリーナにいる人たちは拒むんですよ。でもホテルのほうには物資があんまり行かなかったのね。衣類なんかでも日用品でも、アリーナのほうに貰いに行きなさいって言うわけね。アリーナのほうに行けば、今度はあそこに住んでいる人たちが、ここからとってだめだよって。ティッシュが欲しくてもってこようと思っても、意地悪な人がだめって言うんですよ。ホテルのりっぱなところに住んでて、アリーナからもってくってね。だからね、そういうのが嫌で。アリーナには棚にいっぱいあるんですよ、ここからもってきなさいって。でも、それが嫌で争いたくないかたは、自分で買ってくるんですよ。それをだれに言って、どんなふうに解決してもらうかっていうのも、そういうことは全然贅沢な話で。ほんとうね、あんな思い、まさかね。グリーンピアのホテルでの生活は一か月まではいなかったかな。

グリーンピアに仮設住宅ができるまでだから、そこに一か月はいたのかな。そこに入ってれば、まずホテル住まいだから気持ちはいよいよかったけど、やっぱりほれ、二分してだからね。それこそあそこのアリーナとね、ホテルって二つに分かれてたから。皆さんの気持ちが分かれていくっていうか、そういうような感じがしてね、よくなかった場合もあるんですよね。ホテルに行かないで、体育館のほうで同じような生活をしてもらえば、そういうこともなかったかと思うんだけどもね。でも割合としては、私もホテルにいて気を使っているよりは、アリーナにいたかったんですよね。そうすればね、自由に新聞紙なんかもいただくによかったしね。ホッカ

イロなんかも、まだ寒かったし、そんなのもいっぱい積んであるんですよ。ティッシュから石鹸から、洗濯石鹸から。なんにも私たちのほうにはあんまりこなかったから、置き場所がアリーナだったから、貰いに行くと、そういうふうに意地悪な人は言われるし。だからホテルにいる人たちは、物資がきてもね、自由にね、使われなかったですよ。

でも、友だちがね、「たくさんもらっておいてあげるからって、私が行けば」って、渡してくれるのね。でも娘は「いい、そんなことまでして。買ってくるから」って、宮古から買ってきてね。田老には店屋さんもないしね。行って買ってきて使ったりね。そこらへんがやっぱりね、大変でしたね、いっぱい物資はあるのにね。

食べるものは腹いっぱいは食べたけど、贅沢な話で言っていいか悪いかわからないですけど、どうしよう。同じもんばっかりで偏るんだね。肉とご飯だけ。野菜もあるんだそうですけど、自衛隊の人たちもやっぱり忙しいから、野菜までは料理をしないんですよ。だからご飯の上にお肉がぽっと。アリーナにいる人たちは、ずっと自衛隊の炊き出しをしてもらったのをもって。私たちのほうはホテルの人たちがもってくれて、ちゃんと並んでるんですよ。やっぱりそこらへんが贅沢だと思ったんじゃないですか、こっちの人たちは。やっぱりどっちもどっちね、なかなかそこまで目が行き届かないんですよね、係の人たちもね。

■仮設住宅での生活

仮設住宅は娘と孫とは違うの。だってね世帯が違うから、ひとりでだから。最初は入ったら一部屋だけなのね。娘たち（の世帯）は三人いたからね、部屋がふたつなのね、台所の他にね。仮設住宅はグリーンピアです。三か所に分かれてね。テニスコートと、大平のとこと、私のところがいちばん広かったからね、球場かなにかだったかな。グリーンピアが始まったころは、あそこでゴルフの全国大会かなんだかあったの。あれ（仮設住宅）が壊れればけっこう広い。でも、あそこはまだ当分残すらしいですね。作業する人たちとかなんかが泊まるとこにね。

あとね、店舗の二棟もまだ当分残すんだそうです。その隣にサポートセンターってあるんですよね。

（いまのところに移ってからも）私はあそこで一週間に一回体操に行ってね、皆さんと会って、楽しくやってくるんです。自分で行くの、バスで行くの。バス賃がかかってもね、一週間一回の楽しみがあるから。昔の町であれば、外に出ればだれかが立ち話をしてるんですよね、あっちもこっちもグループつくってね。そこにはまり込んで話をしてればね、一日があっという間に暮れていったり。やっぱりそのころのほうがよかったですね。

■土地の移転と家の再建

親戚の人から友だちからみんな失ってしまって、家もなくなる。そして高台に行こうと思って、下のほうの土地はもう離したんですよ、息子に相談もあまりしなくて自分だけでね。そうしたら息子は、こっちにきても仕事がないし、こっちのほうにはこないから、家は建てないよって言われて、仕方ないね。これから私も老いてゆくし、言うこと聞いていないとどうにもなんですね。上のほう、（家を建てる場所を）決めてたけど、いいところだったのね。それだから喜んでいたけども、もう断ってしまったんですよ。せっかくね、相手の人（夫）がそれこそ一生懸命になって働いてね、家と屋敷ともったのに、私が皆失くしてしまったような感じなわけね。なんか申しわけないような気がしてね。まだ（震災から）一年目じゃ、そんなじっくり考える余裕なんてなかったの。それよりも、早く皆さん落ち着くとこに、いっしょにいて落ち着こうと思ってね。ほとんどのかたがこの土地を離したから、私もと思って。上に行けばたしかだと思って、自分自身で決めてしまったの。息子に問い合わせないで。そしたらそういう結果になってね、全然なにもなくなって、ほんとうにいまとなればね、悔しいし寂しいです。土地だけでもな、あればよかったなと思って、いま後悔してます。

高台に移転して土地を買うとかっていう話は、なにか先に少しずつ延びていくゆくような感じでね。私もどこからかお金見つけて、そしてから家を建てたいなと思ってるんだけど、それまで延びてくれれば。やっぱり自分

としては、親は先になくなる。息子のほうについていくほうがいい。それ考えたから、もう家は建てないようにって言われて。やっぱりね、家をあそこに建てるっていう人は、若い人たちが、一生懸命働いている人とか財産がもともとあった人たちだけですもんね。田老の人たちってね、ここに住んでるから財産はあるんですよね、けっこうね。けっこう土地をもってたり、山ももってたりね。もってないかたは若い人たちが残って、一生懸命、浜からとってきて、そういう人たちは家を建てられるんですよね。うちの姉もまだ年金も少しね、若い人たちもいっしょに行くから、姉も高台に建ててるんです。

やっぱりね、若い人たちがいっしょにいないとだめなんですよね。いればね、なんとかかんとか家を建てるんですけどね、そこに落ち着くからね。私のように年寄りがひとりでいればね、後が続かないからね。だから家を建てられないしね、それが残念ですよね。

前の家はね、二車線道路の前だったの、それがね国道なの、だからね、すごくいいところだったのね。それでね、皆さんがまだ移転が決まらないうちに、売ってくれないかって、商売やる人からね、みんなに声をかけられたの。そして、「市にやってしまったもん」って言ったらば、がっかりしてね。そうしているうちに、牛乳屋さんだったのね。あっちこっちの販売機や店やさんとかに卸して歩く店やさん。最初はやっぱりね、見るのが嫌だったね。いまはしかたなく通ってるんだけど、自分の家があったよなと思ってね。ちょうど裏のほうにはベランダがあって、そこに洗濯物干してあったなって思って。ほんとうに、どんなに津波がきて危ないって言っても、下のほうはいいね。三王団地のほうは、なんか住み心地は、歩くに大変。私のような人はバスでおりて、姉のとこまで行くに、そこあがっていくだけでもほんとうに坂ですもんね。だから、やっぱりどんなに津波がきても、きたときに逃げればいいんだもの、下がいいなと思ってね。でも建てられないです。

三王団地は、皆さんがほんとうにりっぱな大きなお家ね。最初は家建てるのに少し補助あるからね。津波がき

たつぎの年までは、家を建てるっていっても、こんなに高くなくて。それがどんどん値上がりしてね、いまでは倍までではないけどすごく高くなったから、とってもひとりではね、子どもらの後押しがないと建てられないね。

■現在の生活

いま住んでいる災害公営住宅、私は２Ｋなの、申し込みが遅れてしまって。遅れるっていうよりも、高台のほうに住む予定だったけどね、引っ越しのときにけがをしてしまったの。背中の骨を折ってしまったの。そのためにね、向こうのほうにはバスが三か月通らないと言われたから、もうこっちのほうに申し込みして、やっとやっと入れてもらったんです。

ここに移ってからは二年ですがね、二年とちょっとだけ。ここがね、一階から五階まで２Ｋなんですよ。押入れもね、ちっちゃい押し入れがひとつだけなんですよ。だからね、みんな入りきれないのね。いままでは広いとこに。掃除が大変だって言うけど、ちっちゃいとこよりは案外と掃除はらくなんですよね。掃除機だって自由に動かすにいいし。ここはちっちゃいから、掃除機っていうのはあまり使わないの。ほうきで掃いて、ローラーでとって、それで終わりだからね、なんかやるところもないし。

二年たってもあんまりホッとした感じはしてません。いまでもね、どこかに行きたい感じがします。姉のうちに行けば、いいなって、広くてなーって、そう言って帰ってくんのね。持ち家だから広いわけ。ああ、家っていうのはいいなあって思ってね。生まれ育ったところも大きかったしね。いままで住んでたとこも大きかったし。ここはベランダでも、だれにも声をかけられない。そっちもバタンとすれば、だれとも会話ができない。ほんとうに困ったもんだね。

おかげさまで、ここまでなんとかかんとかね。家族みんな失って、ひとりで生活している人たちなんて、ほんとうになんのために生きているのかなって思いますよ。私はまずね、相手はなくなったけども、孫と子どももあ

るし、たまにくるけど息子もあるからね。でもひとり暮らしは初めてなのね。そのために、ほんとうに寂しいのね。だからあえて友だちをつくって、友だちとの交流もたなきゃ。でもその友だちっていうのは、主人のように一日中家にいるわけじゃないですからね、何時間か経てば帰ってしまうからね。だからね、冬がいちばん大変です。外に出られないぶん、皆さんと会われないから。

子どもらはね、それこそ花巻に行くべしって、一回連れてかれたけども、すぐに戻ってきた。全然だめで。だってね、働きにみんなが出かけたり、学校に行ったりすれば、だれもいないんだもんね。どこ見たってね、だれもいないんだもんね。田老にいれば、だれかに会うにもいいし、だれかと散歩するにもいいし。一晩で逃げてきたから。もういいって。

■震災前といまの避難訓練

私が住んでいたのは川向部落だったんですよ。それで川向部落はそれこそ一致、それこそ団結、なんでもかんでも大いにこう、いいこと悪いことでもみんないっしょになってやる部落だったの。そのときに津波訓練をやるってね、一年に一回は必ずやるんですよ、三月三日以外にもね。震災で津波がくる前、一年前ぐらいまでもなんないかな、その津波訓練をしたときに、自治会長さんが「必ず今回はおっきいおっきい、赤沼山にあがっても流れるようなおっきい津波がくるから、皆さんもっともっと山のほうにあがっていきなさいね」ってね、言ってくれたのね。自治会長さんがね。そのときの自治会長さんっていうかたは、震災前はね、いまは役所になったけど、役場で働いているかただったんですよ。Tさんっていうかたで。

訓練でなくても、二、三回は津波警報が出て、避難したことはあるんですよ。そして、そのときに赤沼山に行ってはだめだから、もっともっと高いところにあがりなさいって言ってね。そしたら、そのかたは何か月後に病気で亡くなってしまったの。で、あの人の遺言だったんだなと思って、ほんとうにこの津波がくるのかね。

田老で生まれ育った人でも、そういうふうに思う人と、堤防で大丈夫って言う人とやっぱりいろいろだったんですよね。人の考えはべつべつでね。震災前も避難訓練が必ず三月三日だったけど、今度は三月一一日にね、避難訓練があるんですよ。でもね、だれも逃げないんですよ、ここで。だれもってね、一〇人逃げるか逃げない、一〇人まで逃げないかな、五人ぐらいかな。私は二回ね、ここにきてから二回、三月一一日を迎えているから、今回も逃げましたけどね。

避難訓練しましたけどもね、皆さんはね、大丈夫だって逃げないんですよ。そんなに簡単に津波って忘れられるもんかなって思ってね。不思議なんですよ、私はね。大丈夫だって言うんですけど、私は全然そうは思わないのね。大丈夫だってことはね。

■心の復興は進まない

ほんとうに皆さんが復興、復興って言うんだけど、私としてはまだ心の中は全然進んでないです。そのままです。皆さんがどういう気持ちでいるのかわかんないですけど、やっぱりうちの人がそういうふうな（津波で亡くなった）立場なので。そういうふうなかたでない人は、少しずつ進んでいるんじゃないですかね、復興に向けて。自分の住処をもってっていう人ならばね。私はそういうことはまだ考えられないですね。

田老の町も、少し残ったとこを眺めれば田老かなと思うけど、こっちを向けば全然田老の感じがしないんですもんね。震災前の田老はシャッター街って言ったけど、でもまだまだよかったの。外はまあこの目で見れば日増しにね、道の駅なんかはね、けっこう復興はしているんですけど、私自身は止まってんじゃないかな？　全然前にも進まない。

なんか失礼な話だけど、皆さんにいっぱいいっぱいお世話になって。でもね、いまちょっと休んでんだけど、自分の趣味のようなのが農園。そんなのやってたのね。球場があって、少し行ったところにおっきい畑借りてやっ

てたのね。この人（夫）といっしょにね。そのときのような環境があれば、畑でもあって、自然に忘れ去るかな、ならないかなー、まだね。それに夢中になっていけばねと思うんだけど、まだこのままでは。なにかキッカケがあって、あ、これはいいと思うのにあたったときにね、そう思い始めるかね。まだいまのとこは家もこんなに窮屈で、心の中もまだね、あれだし。なんか復興っていうのはね。

いつまでもね、あのときのあれが思い出されたり、ひとりでいればね。だからね、見なくてもテレビは起きればかける。居眠りしてでもかける、ずっとかけてる。でもいま、野球あるから野球見るとか。この間まで相撲もね、よかった。相撲見るとかで、そういう夢中になったときは忘れるんだよね。

友だちと会話してるとか、散歩してるときとか、あと、この「さをり」っていうのはね、これを編んでると、時が忘れ去るの。こういうのを編んでるときは、夢中になっから集中するからいいなと思うとも、まだ家に帰ってくれば、まだ前戻りする、後戻りする。これは震災後に始めたの。前は、編み物をやってたから、やっぱりこういう系統をやるのが好きでね。いろんなの自分で考えてね、ここさ三王岩を入れてみたりとかね。そんなことが続けばまずはいいんだけどね。だから「さをり」のなにかがあれば、宮古でもどこでも出かけていくのね。この前は、なあど（シートピアなあど）であってね、それの後にはアリーナの三階にあってね、行ってみて。

まだまだ出品する段階まで行っていません。夢中になってできるようであればいいんだけどね。だからあと一部屋もあれば、ここに機械を買ってやりたいんだけど、けっこう機械も場所とる、四分の一ぐらいは。だからだめなのね。やっぱり息子とか孫とか泊まりにきたときに、泊まられないからね。だから元のうちでこんなのがあればなあ、どこに置いてもよかったなと思って。機械はいつも出して広げておいたからね。一部屋はその部屋っていうようにね、なんぼも部屋があったからね。こういうのに集中していればね。でもね、徐々に徐々にね。美容院さんだが、髪切ったかたも、六年経ってやっと髪切ったとかテレビで映ってましたがね。

でも思い切って、慣れたってことはいいことだね。私が終わらないうちに、その日がくればいいんだけど、どうなるんだが。でも、ほれ、家族でもいいです。孫とか子とかいっしょに住んで、そうすれば自然にね。ひとりだから、ひとりでこれがあるから、やっぱり思い出すんだもんね。つぎにね。どんなにこれこうやって蓋閉めたったてね、また明日開けねばなんねえ。どうもしようがない。出てくるわけでもねえしね。

■子どもや孫に伝えること

こっちのほうでも取材がきて、だめって断っても、新聞にも載って。テレビでは生放送ってすごいんですわね。すごい道具もってきてね、堤防の外からも内側からも両方から映してね。どこのテレビかな、生放送だから私は見ていないんですけどね、ドローンとかそんなのも飛ばしてね、すごかったですよ。でも映るのはほんのわずかですもんね。

この三月のことです。そのたびにくるんですよ。この前やったからだめですよって言ったんですけども、そのたびそのたびね。そういうのいくら放送しても、なかなか。一部の声とか一部の姿しか伝わってこなくて、今回の六年前の震災っていうのはやっぱり私たちにとって大変な出来事でしたし、その復興、復興って言っているけれども、なかなかそこにくるまでもね。風景の復興はできたんだけども、心の復興は全然前に進んでいないの、私としてはね、まだ。相手（夫）もね、いなくなったことだしね。

私は戦前生まれだから。終戦が六歳だったからね。田老鉱山っていう鉱山があったんですよ。若い人たちはね、知らないようですけど。そこは鉱石がとれるところだから、そこを狙われたんですよ。私の生まれ里のほうの、庭から爆弾が落ちるのが見えて、火が燃えるのが見えるんですよ。B29がくるって、そう言って逃げてね、山の陰に逃げたり。そんなこともしたんですけど、でもあのころは子どもだったからさ、直接怖いとも思わなかったし。戦争は続くからあれだけど、津波はそれだけで終わりだけど、やっぱりどっちがいいのかなって考えたり

ね。でもやっぱり戦争よりはよかったのかなって。でもほら何回忌だ、ほらなんだってあれば、いっぱい取材の人がくるじゃないですか。その度に思い出すような気がしてね。あれだけは忘れられない。Tさんの言った言葉だけは子どもらには教えたけど、何回も何回も教えていこうかなと思ってね。津波がきたらばね、おっきい地震がしたら、必ず逃げないとだめだよって教えておくかなーと思ってんのね。田老には孫たちもみんないなくなってしまったけどもね、いまね、その孫は近内（ちかない）のほうにいるんですよ。ふたりは卒業して、ふたりが残ってだったの。そのひとりの三番目のほうが宮古高校に入るから、向こうに行ったんですよ、そのためにね。それだけは教えておかないとだめだな。皆さんに孫がいなくても、別の子どもたちだけでも、たぶんどのくらいの人数のかたが知ってかなと思ってね。

私はあのね、後まで伝えたいのは、つぎにきたときには、もっとおっきい地震がきたときには、比叡神社ってあるんですね、そこまで逃げなさいって言ってきているんですね。比叡神社っていうところはね、やっぱりその新聞にあって。あそこの高台っていうのが、一〇〇〇何年前ですけどもね、やっぱり一〇〇〇年に一回っていうのは嘘ではないんだなってみてます。それで今度津波がきたらば、比叡神社まで逃げなさいって言っておきたいけど、皆さんにね。でもほれ、一〇〇〇年後だからね、どうなってくかわからないからね、この町も。でも一〇〇〇年後でも、今日伝えとかなきゃ、その先は続いていかないですよ。

あそこさあがってみて海を見れば、二〇何メーターでしたっけが、それ以上はあるな、あそこは大丈夫だなと思って、この新聞を見てね、自分でそこまで逃げてくれればいいかなと思ってたりするんでね。

■これから

ほんとうにね、やっぱりいつかは人生って一回大変なことは必ずあるのかなと思って。子どもたちが何事もなくて、孫たちが無事に生活していければいいなと思って、それをね祈ってるんだけどね。どういうことになって

しまうんだがね、この世の中も。今度は孫がひとつの楽しみですね。でも離れて行くからね、寂しいの。盛岡の医大、医学部。受かったんだけど、県立ではなく私立。だからお金が高いんだ。それですべり止め、そこを受けて受かったんだけども、そこに行ったらって言ったの、近いしって言ったっけ。なにを目ざすったけな。保健師さんとか、なにかそういうのが。

孫がね、いるのがね、娘と息子、それは高校ね。だから、だんだんにつぎも行くべからね。いや行ってしまえばお母さんもついていくかな、そうすれば私はひとりっこ残される。そしたら、こいって言われる。娘はいるけどね。私は行くとこは、あそこのふれあい荘だ。入れてもらうのにいいもんであればね。やっぱりあそこに行けば、知っている友だちも行くと思うから。

（二〇一七年三月二八日）

●世帯T・L　話者二名……夫（七十歳代）、妻（七十歳代）

■震災以前の生活

夫　私は女一人男五人の六人きょうだいで、四男で四番目なんです。四男である私は縁あっておじいちゃんおばあちゃんと、結婚後も三〇年近く、ふたりが亡くなるまでいっしょに暮らしてましたので、いつも（一族の）中心が私の家だったわけです。人がうらやむほど兄弟仲がよく、時折集まって一杯飲みながら、昔話を懐かしく思い語り、楽しいときを過ごしてきました。

私たちの自宅は比較的避難場所が近いとこだったんです。高台でね。以前呉服屋をやっていたんです、二店舗構えて。長男である兄と私が後を継いで営んでいましたが、震災前に廃業していました。店員たちにもそれ相当

の生活費やなにかやっておけるうちにやめようということで。いま考えるとよかったなと思ってます。平成一六年（二〇〇四年）に閉店して、残りの人生を旅行したり見物したり楽しもうと、時間に追われない生活をしていました。ところが七年後に今回の大震災にあい、全財産を失ってしまいました。

昭和八年（一九三三年）三月三日の昭和三陸地震（↓巻末用語解説）の津波のとき、両親は岩手県九戸郡八木村、いまは合併して洋野町で事業をやっていたようです。震災で全部失い、ちょうど田老鉱山が発見されて事業を始めるころだったらしいんです。そこで、田老にこないかということで移住して、終戦まで。親子二代で大震災を経験しました。奇しくも私は昭和八年三月三日の後の五月一日に生まれています。

妻　私は田老生まれの田老育ちで、田老から出たことないの。六人きょうだいで男はたったひとり。それで私は二番目。あとは皆、田老にいない。私だけ田老にいるの。弟も就職で横浜に行ってね。定年になって宮古にきて、この家をつくり直すって言ったら、おばあちゃんが「じいちゃんが建てたうちだから、自分が生きてるうちは壊すな」って言われて。それで弟は八木沢にうち建てて。その弟も去年、ちょっと肺がんで急に悪くなって亡くなって。震災後、身内がつぎつぎと亡くなって何年も年賀状出せなかった。だけど来年はなにもなければよいなと思ってました。だんだん欠けていきます。

■震災当時のこと

妻　田老では、昭和三陸地震の津波記念日三月三日は毎年避難訓練を行い、いつも参加していました。ちょうど訓練した二日くらいあとにけっこうおっきな地震があったんですよね。うちの実家では九二、三になる私の母親がひとりで住んでいました。押し車で歩ったけど、ヘルパーさんがきて、宮古にいる弟が夜になればきて、泊まって、朝帰って行くと。そのあと昼と夕方、また私が見たったんです。それで、その何日か前の地震のときに、私ちょっと危険を感じやすい体質っていうか、「なにか津波がくる。いつものちょこちょこ揺れる地震とは違うよ」っ

て話したんです。

震災の当日も母親にお昼食べさせに行って、おやつ置いて帰ってきて、私たちお昼食べて、ほっとしたとこに二時四十何分の地震でしょ。だからおばあちゃん（母）は助けに行けないわけ。当然歩けないから、車はあったけど。だからそのときに、私もこんな身体じゃなけりゃ、もう逃げたんだけど。おっきい地震だったもんでね。おばあちゃんが「九二歳まで生きたし、いろいろ面倒みてもらったから、かまわないで自分たちは絶対逃げて助かれ」って。その当日言ってて、それがそのままになってしまった。

私たちはとにかく逃げたの。お店していた関係で、住まいが二階だったんです。だから揺れが特別またひどいの。冷蔵庫の扉も開く。食器戸棚、突っ張り棒でガッチリしたから倒れないけど、瀬戸物がどんどん落ちて。そんな格好なもんだから、お父さん（夫）とふたりでとにかく逃げたけど。中学校なんです、ここまで津波きてっから、ここまで車で押して。今度は公民館。ここまでふたりで歩けないから、抱っこするか、それもできない。ここにあがった途端に津波がばあちゃんちに着いたから、もう私たちが助けてって共倒れになったらなにもならないからって、それで涙飲んで助けに行かなかったの。いまでも悔やまれるっていうか、引っかかります。

自宅は流出しました。この辺に宮古信用金庫があったんです。この近くにいて。高台から見ていたら、ゆっくりゆっくり私の家が回転して、北のほうへ静かに沈んでいきました。この防潮堤が決壊したんです。だから波がこっちからきて、あがっていって、あがって、こっちに戻ってきたんです。ここの、それこそ万里の長城といった防潮堤。そして波が行って、こう回って、渦巻いて、こっちのうちを壊しながらどんどん渦巻いてくんです。これが総合事務所でお寺さんがあるんです。その辺に全部瓦礫を押し上げていったんです。この辺はいくらか助かったうちがあったけど、ただ瓦礫がぶつかって、戸が開けられなくて。防潮堤で津波がこないと思って、逃げないかたがけっこうあったの。すごい圧力ですね、津波の圧力っていうものは。想像を絶するもんです。

地震の後は、ちょっとスリッパ履いて片づけたりとかあったけど、やっぱり私の気持ちが半端でない。いざっていうときに持ち出すものをいつも目が届くとこに貼ってあったんです。一〇個のお水とかお薬、携帯、ラジオとか。でも、いざというときそれを見ない、見る余裕ない。ただ頭に残ってるぶんだけをもって。だいじなものっていうのは、いつも見てると記憶に残ってる部分があるんです。だけどラジオはもって逃げなかったけども。

気持ちもやっぱり動転してましたね。二階が私たちの居住区だったんです。店舗やってたもんで、柱がそんなに多くなかったから揺れがすごいんです。私はもうグラグラ飛んで歩いてるんです、地震で。だからふつうのジグザグよりは震度っていうか、あれはよけい体感しました。

なにか危険を感じたの。何日か前の地震のときに、なにか不安があったから、リュックに貴重品とお薬と電池、印鑑もだね。リュックから出さないで、そのままにしといたんです。それも功を奏してね。お父さんのリュックには、いっつも肌着とか靴下とか軍手とかホッカイロ入れてんの。それをもって逃げたから、まずそれはそれで。

それで高台から津波くるのをこうして見て。波が押し寄せてきて、近くにきたらもう真っ黒くなってね。ああいうふうにじっと見てると、津波なんていうのは遅く感じられるんです。ビデオをゆっくり回したようにね。ゆっくりこう、いまも不思議です。

■盛岡の娘宅で生活

妻　地震から四日後には、娘たち夫婦が盛岡から、なんとかガソリン調達して迎えにきてくれました。姉の娘、兄の息子たちと避難している場所をようやく見つけて。いまいっしょに行かないとガソリンが逼迫してましたから、あといつ迎えにこれるかって。それでみんないっしょに盛岡に行ったの。私どもと長兄夫婦は、私の娘のところに落ち着きました。あのころ新幹線も再開のめどがたたなくて。四月末に、普通（列車）で長兄夫婦は秋田経由で空路東京の娘のところに向かいました。

私たちは盛岡に引っ越して、娘の旦那が、こっちにいっしょに暮らそうって。たまたま長男でないかただったもんで、年とったらいっしょに暮らそうっていうことで、津波の前の年にうち建てたんです、盛岡の本宮に。いっしょに住むようにね。それでそっちに住むって、娘の旦那が住所も変えて、盛岡市民になって、全部手続きとってくれて。それで近くに宮澤寺ってお寺さんがあるから、お母さんが年とっても、年の順序だべっから、車を押して、お花あげに行くにいいから。田老の墓はずっと坂で、私たちも拝みに行けないから、もうそっちは土で返して、（墓は）こっちにつくろうっていうことで。いちおう、その日は盛岡に住むつもりで、ずっと。それで、仮設住宅に引っ越すまで住所は盛岡の住所で、ずっとそれでいたったの。

震災後に娘んとこにいたったときに、盛岡で復興支援センターっていうのができまして、七月一七日。開設したてのときに第一号で飛んできました。そこでいろんなかたと話し合ったりして、企業のタオルなんかの物資が届いて、復興雑巾って言うの、それを一生懸命縫いました。こっちにきてからもどんどん縫って、一〇〇〇枚つくった。復興支援センターに雑巾納めんのに、ちゃんと企画を通らないと、やっぱりいくらでも販売するっていうことだから、出身地と名前を書いて、バンド付けて。そうするとどこのいろんなブティックとか、それこそスーパーとかあちこちに置いていただいて、買い求めたかたから復興支援センターにはがきが入るんです。それで、九州とか、いろんなかたと文通が始まったんです。静岡とか千葉とか東京の町田、宇都宮、九州のかたたちと。クラフトテープの籠づくりも始めました。田老出身のかたがわざわざきて、材料のテープや小道具を格安で分けてくださり、二〇名ほどで会をつくり五年ほど続けました。私は手先仕事が好きで面白くなり、応用していろんな型のものをたくさんつくりました。

■仮設住宅でのくらし

夫　自宅が完成するまでは仮設住宅に住んでいました。震災になったときは、娘が盛岡におりまして、二世帯住

宅つくっておいてくれたんです。娘と旦那が迎えにきてくれて、盛岡の方に半年ばかりおりましたんです。ただ、やっぱり盛岡にいても知り合いもないし、田舎育ちなもんでね。なにか懐かしいというか、田老が好きでね。仮設住宅でもいいや、行くかいやって、八月末に仮設住宅に入ったんです。

妻　高齢だから、いつどうなるかわかんないって、娘たちの世話になって。でも宮古に住所がないから、宮古市の健康診断が受けらんなかったです。だから盛岡のクリニックに行って。お世話になった先生んとこで、全部言って、毎年検査受けたったけど。だけどなんでこっちに引っ越してきたかって、やっぱり土地の問題とか、乗用車と軽自動車も二台流してるし、いろんな手続きの関係でそのたんびくると、お役所仕事ですので、市役所だ、今度は合同庁舎、あっちこっちって動いてっと、バスで帰んなきゃなんなくなるわけ。国道一〇六号をバスで何回も往復して。そんなので仮設住宅の申し込みは遅くなって申し込んだんです。グリーンピア三陸みやこのグランドの仮設住宅は遅かったから入れなくって、八月末に音部地区のテニスコートんとこの仮設住宅。全然面識のない、別の地区の人だけど、皆お顔知ってるもんで、そういった点ではこっちの仮設に入っても、なんの問題もなかったです。皆さんによくしてもらって。仮設に入居してからは、市の説明会に何度も出席したり、大学の先生の講演会、県会議員との話や要望等、またはボランティアのかたがたのいろんな支援、ときにはストレス解消の運動とか、毎日なにかがありました。

■三王団地に自宅を再建する

妻　ここ（三王団地）には、平成二八年（二〇一六年）の四月二九日に引っ越しました。最初、市の公営住宅は建つけど、戸建ては建たないっていう話で。お父さんが、ほとんどのかたが戸建てで住んでるから、田老のかたはアパートとか住んだことないもんでどうかなって。最初は戸建てを建てるようなようすあったけど、その予定はないっていうことでどうするって。盛岡に戻るか、こっちの高台にちっちゃいうち建てるか。ただ先がないか

らどうするって、やっぱり悩みました。

夫　やっぱりうち建てるっていうと、半端じゃないもんね。何年生きれるかわかんないけど。人生計画ががらっと変わりましたね。

妻　自由業だから、国民年金だから二人で元気でいれば、生活は成り立つけどね。やっぱり年とると他の心配も出てくるもんでね。ここは山だったんです、何人かの持ち主がいて、その人たちを説得して、ここに高台団地をつくって、それで集団移転でそっちに住みたいっていう申し込みをして。

夫　抽選して、場所は私が希望したところはちょっと無理だったけど、抽選でここは当たったんです。新居が完成して平成二八年四月末に引越しました。荷物も少ないので二日で整理することができました。

妻　前のときより土地はずっと小さい、六〇坪です。だっておっきい土地で草も取んなきゃって、お父さん庭にはいっさい手をつけないの。一年後に三王団地に自治会ができて、わが家は二丁目の五班。二三世帯で、一か月ごとに班長さんが代わります。いまは慣れてきましたので、自治会研修センターではお茶っこ会をつくり、お世話役をしています。高齢者の集いで月二回、いわて生協さんの支援と社協さんの協力で、将棋や小物づくり、数字合わせ、まちがい探し、認知予防の指・足の運動、お茶、おやつを食べながら雑談し、大変にぎやかな会です。近所は皆仕事をもっていますので、人と会うことがあまりないです。自分で機会を見つけて出かけるようにしています。

■終わりに

夫　奇跡っていうかなんていうか。その当時は親父、駅長を退職してからじゃなかったかな。昭和八年三月三日の津波の体験談を、吉村さんですか、インタビューして、本が出てんですよ（『三陸海岸大津波』吉村昭・著）。その津波のときに子ども、兄弟もだれも津波で亡くなんなくて、皆助かって。

妻　私、実家の父親に、いざってなにかのときには、服を脱いだら脱いだ順序に重ねて、上から着るようにちゃんと戻る。そして両手にものをもって逃げてはダメだって。手は空けて、なにかにしがみつけても、もってると流したくないと、命奪われっからね。とにかく両手にものもたないで、津波に最初遭ったら、なにかにしがみついて助かるんだって言われてだったんだ。やっぱり小さいころはやったのね。それが地震が起きると思い出しますっけ。三つ子の魂じゃないけどね。父の言葉は、もう地震がするとやっぱり思い出しますっけ。持ち出すものを一〇項目書いとったのはそんなに前からではないです。やっぱりけっこう何年か前から地震しましたったもんね、この大震災がくる前ね。

夫　沿岸に住むということは、「地震がきたら高台に逃げる」、なにはさておいても逃げることですね。そのことに尽きる。自分自身を守ることです。これは田老に限ったことではありません。全国各地でつぎつぎと災害が生ずるなかで、命を守るたいせつさを深刻に受けとめてほしいと思います。

（二〇一七年八月二二日）

●世帯T・M　話者二名……夫（七十歳代）、妻（七十歳代）

■三月一一日のこと

夫　地震が起きたときは、元の道の駅、上のほうにいたんです。うちは牛乳屋をやってまして、そこで商品を自販機に入れていたときに地震に遭いました。地震で揺れたときちょうど自販機に商品を入れて、鍵を閉めたらば、電気が切れたんです。

妻　三月一一日は、孫の誕生日だったんです。それでケーキをつくろうと思って、スポンジは買っておいて、帰っ

たらつくろうかなって思ってたときで。それから伝票書かなきゃなかったから、渡さなきゃなかったから、伝票書いて渡して。元のうちが古かったから、たぶん壊れてるだろうななんて、いったんさがってきたんです。でも見たらべつに壊れてはいなくて。二階開けてなかったのに「二階が開いてたな」って夫が言って、二階にあがっていって閉めたりして。なかなか二階からおりてこなかったんで、いちおう（避難用に）少し準備してるものがあったから、それにお金を入れてみたり、ごはんをラップにしたのを入れてみたり、チョコがあったのを入れてみたりして逃げたから、それでまず助かりました。塩はつねにリュックに入れてたから、ごはんに塩ちょっとつけて食べるのによかった。塩のことはよその人から聞いてたんです。そのときには、防災無線とかの「避難してください」なんていうのは全然聞こえなかったんだか、どうだったのかね。言ったかもしれないけど、耳には入んなかったかもしれないです。

夫　二階からさがってきて、二回目の地震があったんですよね。それでまた、そのまま逃げればいいのに、またうちの中を見たんです。びっくりして。私が締めに行ったらば、海のほうですね、沖のほうでゴーって音がしたんです。津波かなと思って。津波がくるときは、沖のほうで、俺、音がするって聞いてたんです。そんでゴーっと音がしたために、「津波がくるな」と思って、それから一階におりたんです。ただ、津波がくるっていっても、堤防があるから堤防を越えるっていう頭は全然なかったんです。だから、一晩行って、車の中で過ごせば帰ってくるんでないかなという考えだったんです。

妻　毛布と布団をこうやって抱えて車に積みました。寒かったからね、一晩ぐらい大丈夫かなと思って布団も積み込んで。車にとりあえず積んでもう行かなきゃって、昔の道の駅の防災センターに行きました。そこはテレビがついてたから。トイレも使えたし。だからつぎの日まで、「シートピアなあど」のあたりがすっかり水があがっていくのもテレビで見てたし。道の駅の駅長さんが、冷凍になったおにぎりなんかを出してくれて、売店にあっ

たチョコなんかも出してきてくれて、皆で分けて食べました。

そこは人が集まってぎゅうぎゅうぐらいだったね。野原の人たちから聞いたら、野原も全滅だって。その晩は車の中では寝ずに、四畳半ぐらいの畳があるので、そこで皆で座って寝ました。ダンボールを敷いて、横になっている人もいました。

■堤防越えてくるとはだれも思わなかった

妻　三月一一日のときの地震の揺れ方、おかしかったったんです。二日前の地震のときはものが転んだんです、ガーッと全部。仏壇のものも、ちゃぶ台だとか、こういうのが皆倒れたんですけども、一一日のときは仏壇のはそんなに落ちなかったんです。お位牌だけが転がってて。あとから大きいわりに地震の揺れ方、違ってたのかなと思ったんです。

あのとき、お位牌だけがコロンと畳に転がってて、リュックに入れようかなと思ったんですけど、「いや、また帰ってくるや」と思ってやめたんです。そしたら、こんなことになって。何日か後に、近所の人がそのお位牌を見つけてきてくれて。替えなきゃダメなような状態になって結局は買い替えたんですけど。あのとき拾ってればなと思ったりはしたんです。

夫　津波が堤防越えてくるって思わなかったです。私もそのとき、お金も札だけはもったんです。小銭もあったんですけども、泥棒が入るかと思って小銭は残しておいたんです。俺、なにかのときに聞いてたんですよね。泥棒が入っても少しぐらい残しておくもんだ。そこで、なにやられるかわかんねえがらって。それで半分ぐらい残してたんです。そういう記憶ありましたね（笑）。

道の駅からうちに戻って、いろいろもって避難だから、津波がくるのとギリギリぐらいの時間だったんじゃないですか、後から考えると。「ホッチョ（地名）」って言うんですけど、ちょっとあがって高いところ。そこにガー

ドレールに寄りかかって見てる人たちがけっこういて、車をそっちに入れて。「ここで見ていようか」って言ったけども、もしかして足元が崩れるかもしれないし、上から崩れてくるかもしれないし、やっぱり道の駅に行こうっていうことで、あがったんです。

妻　後から考えたら、あがって行ったときにはちょうど人がワーッときたから、そのとき津波の一回目がきたんでないかなという気がするんです。だから後から聞くと、あんまり時間に余裕はなかったと思います。だって人に言うと「あれから戻ったの？」ってよく言われたんで。たぶん揺れの大きさも、外にいたから、中にいた人とはまた感じ方が違ったんじゃないかね。

■自宅は全壊流出

妻　自宅、事業所ともに全壊被害っていうか流出ですよね。なにもなかったです。ほんとうにきれいさっぱり。ほんとうに土台だけで、なにもなかったです。テレビも買ったばっかりだったね。冷蔵庫も買ったばっかり（笑）。冷蔵庫が高いところに打ち上げられてたったから、「あれうちの冷蔵庫じゃない」って。それを開けて中身を見て、「やっぱりうちのだ」と。

高台に移った人たちは、元の土地を買い取ってもらって、そのお金で移ったと思います。ですから相手は役所ですね。市で、あっち側の代替地としてここを提供するっていうことになったんです。買い取ってではないけども。売りたい人、売りたくない人があったんですね。売りたい人は売って、売りたくない人は換地とか。

■翌日のこと……グリーンピアに移動

夫　つぎの日かな。グリーンピアに行ったほうが絶対いいからって、ここは食料もなくなるからって言われて、グリーンピアのほうに皆で行きました。道の駅には一晩だね、泊まったの。だからグリーンピアに翌日から行ったときには、まだここら辺のようすは全然見てなかった。

グリーンピアに最初に避難したときは、遅かったから寝起きがホテルの廊下でした。部屋の中は先に行った人たちがいっぱいいて。うちらは後から行ったから、廊下に寝るような感じでした。

■娘と再会

妻　地震のすぐあと、うちの裏で娘とたまたまいっしょになって、子どもを学校に迎えにいったらいいかねという話から、娘が迎えにいったんです。それが帰ってくるかどうかわかんなかったから、ちょこっと待ったんですがこないので、逃げなきゃっていうことで、娘がくるのを待たないで逃げたんです。だからつぎの日まで、おたがいに心配で。娘は親を心配して、あそこで待ってだったけど逃げたかなって。つぎの日、線路歩いて小学校におりて、体育館を探していなくて、お寺にあがっていなくて、役場を回っていなくて。そしたら、たまたま知ってる人が、「旦那さんの実家に行ったよ」って言うのを聞いて安心して。

グリーンピアに行ったときには、娘の家族は別でした。娘は家が残って、旦那さんの家も残って、ちょっと奥のほうなんで残ってたんで。娘のほうは大丈夫。山のほう越えて、道の駅にきて、そのとき初めて対面したんです。

■グリーンピアでの生活（アリーナに移動）

妻　それから、（グリーンピアの）アリーナのほうに引っ越すっていうことで、全員そっちに住めるという感じで、そこでまた不安でしたね。とにかくなにももたず、身体ひとつですもんね。そうしてるうちに、ダンボールで区切らさせてもらって、それでなんとなく気持ちが違いました。さえぎられるっても、高さは腰くらいなもんですけど。周りの人は知ってる人でしたね。

物資、いろいろいただいて、すごくありがたいなって思いました。食事は自衛隊がきてました。はじめのころは、だれがつくったんだろうね。広い中で、グリーンピアのかたがマイクをもって、「それでは、前のほうのかたから」って、半分ずつ分けてくれて、前の人決めて並んでいただいて。後ろのかたたちにって、交代交代にちゃんといつ

も放送してくれて。グリーンピア（のホテル）が三月の末までだったので、それまでそこにいて。それから、アリーナに引っ越したんじゃなかったかな。

仮設住宅ができたのは五月か六月ごろでなかったかね。グリーンピアの仮設に、つぎに入りました。六月だと思います。ふたりで一戸に入りました。

■仕事を再開する

夫　仕事（牛乳販売店）を再開するかどうかは、早めに結論出さなきゃでしたからね。やめて他にお願いするかどうか。そのへんも考えたんですけど。お客さまは個人で、あとは道の駅さまだったんでね。そういう関係があったために、冷蔵庫だのがなくても、とりあえずできるものは納品するかなと思っていたし。

妻　冷蔵庫がなかったので、娘の旦那さんの実家が奥のほうにありますけど、そこの外に自販機の中をくり抜いたやつを設置させてもらって。会社のほうでよくしてくれて。それに仕入れたものを、上手くすれば入るんです。グリーンピアから戻ってくれば夜中の一二時。だから出るときに「不審者と思われませんかね」ってちゃんと念を押してから出て、大丈夫ですって。そうやって歩きました、最初。

仕入れは盛岡からです。常温保存できる品が先でした。冷蔵物の仕入れは七月ごろから。道もまだ大変で、こっちから行って大平地区で待ち合わせして。パトカーがグルグルしているころで。パトカーが通ると、「不審者と思われてないかな」とかってそんな心配して（笑）。

常温の商品を、そこで受け渡しをして。冷蔵庫が必要になったときは、さらに北高（県立宮古北高等学校）の向こうまで行って、「だいたい宮古に入ったら電話をください」って言って。そうすれば、こっちから行くのとだいたい同じくらいに着くんで、そうやって連絡をしてもらって。会社には迷惑をかけましたけども。

宅配は、冷蔵庫が設置されてから、「再開しますので、よろしくお願いします」って、残ってるとこに歩いて

回りました。「やります、よろしくお願いします」って。くり抜いた部分に皆入らないから、配達する部分を車に発泡スチロールに入れて積んできて、うちの家庭の冷蔵庫を空状態にして、それに入れて。保冷剤は冷凍に入れて、宅配に使う保冷剤入れて、そういうふうにしてなんとかふたりで回しました。

七月八月は夏場で大変でしたね。暑い時期はやっぱり気を使います。それが毎日ですもんね。もともとのお客さんは「再開します」って言ったら、たいていは皆さん「じゃあお願いします」って引き続きのかたが多かったですね。ただ、被災して地元にいない人もいて。あとは途中から内陸に行った人も（いるから顧客は）すごい減りました。宅配でいくと半分は減ったね。高齢者が亡くなれば、若い人たちはスーパーに行って買ってくるような感じだから。あとは、施設に納めてたのは道の駅とか、北高ですかね。そういうのがあったために、いま、やるかやらないかはっきりしないと、と思いましたんで。

■再建の場所を決める

夫　再建の場所をここに決めたのは、夜中に配送車が入るんで、周りに迷惑をかけるっていうのも頭にあって。周りがあるかないかはわかんなかったですけども。高台よりはいいかなと思って。けっこう早い段階で決めました。あと冬場、グリーンピアだと坂をあがってくるときに配送車が一回か二回登りきれなかったんです。そういう心配もしたんです。いまは国道の向こうがにぎやかになりましたけど、決めたときはなにもなかったですもんね。嵩上げも、ねえ。しばらくそのまんまで。

配送する側からは、とくにそういういろんな、いつからどうやったらいいんじゃないかとか、そういうアドバイスはないんですよ。自分で決めて、連絡をして、仕入れるっていう、そういう状況なんです。コンビニみたいな、フランチャイズの上のところから、ああだこうだっていろいろと言われてという感じではないんです。そういうのはいっさいないです。向こうからもけっこう心配して連絡くれたり、上の人も仙台からきてくれたし。あっち

のいちばん偉い人がきて、「心配するな」って。「もし心配事が出たら、いつでも相談に乗る」とは言ってくれました。

このへんには同業者は震災前は三軒あったけど、いまは二軒になりました。現在地に店が再開したのは二年ぐらい前です、平成二八年の三月に引っ越してきて。盛岡から配送してもらうんですが、商品の量が少しなので、もってきてもらうのが気の毒で。それが五年間。雪が降ると気の毒でね。一回二回、坂をあがれないときがあって、そのつぎから雪が降ると国道から電話よこすんです。「ちょっとさがってくの、怖いからきてくれ」って。こっちも大変なんです、あがっていくのが（笑）。国道まで行って、荷物の入れ替えをしたりして。

五年かかったんですよね。まず、全体、土を盛って高くする工事をして。再開するときは、建物、倉庫っていうか設備っていうか、そういうのは補助が出ます、商売の人たちはたぶん希望すれば。会社のほうからもありました。

■グループ補助金制度を使う

夫　中小企業の、再開に向けたさまざまな支援みたいな、そういう制度。個人事業主さん向けですよね。ああいうのはけっこう助かりました。いろんな設備とか、そういう機械類とか。私らの場合だと四分の三の支援。だから自己資金四分の一ぐらいで。そのかわり、四分の三の補助を受けるためには単独ではだめで、活動っていうか、ほかの個人事業主さんとグループを組んで活動することではじめて補助の対象になる。だからうちのほかに、この近くの田老の商売のかたがたとグループを組んだんです。それこそ電気屋さん、ガス屋さん、酒屋さん。そういう、さまざまな業種の人とグループになって。

ただ、補助をもらうために勉強しなければならなくて、それがいちばん。この年になってまだ勉強やんなきゃないのかやと思ったりして（笑）。補助の種類について、いろんな情報があったんです。こういうグループ補助

もあれば、二分の一の補助もあれば、いろんなのがあったんですけども。グループ補助のほうが、四分の三っていうのがありがたい。ただ、けっこうハードルが高いからね。いろんな勉強して、一年間活動をやって、「一年俺はこういうのやりました」というのを報告しなきゃならないんです。宿題が出るわけです。宿題みたいのが(笑)。

補助金でたとえば冷凍庫のようなものを再建するとき、その大きさが前のものと同じか、同等以下じゃなきゃダメらしくて。それを証明するのがなければダメなんですよ。だから、取次先からちゃんと証明書類もらって、こういうのは何台かかりましたと。うちの場合、冷凍庫はプレハブでなかったから、モルタルかちゃんと使われたものだったがために、県から「プレハブでないんですか」ってきたので、「昔からですから、モルタルですよ」って。そしたら「何坪ですか」って。

倉庫が何坪と冷凍庫が何坪あったと、ちゃんと証明があったためによかったんです。そこのとこに一〇坪の倉庫を建てたんですけどね。そういう意味では、問題なくクリアできたんです。でも書類も、基本的には全部流されちゃってますから。あちこち行ってかき集めてこなきゃいけなかったっていうのも、相当時間のかかるものなんですよね、あれは。でも事業所に写しが残ってたもんで。その紙に書いてあったもんで。

■経営はむずかしくなってきた

妻　それで再開したかたは、それぞれもうお店をしてましたね。子どもや孫に継がせる予定もないです。人口が減ってて、とてもじゃないけど、商売これからはどうなるかなっていうふうになりますね。昔から牛乳をとってくれてる人が、やめたり亡くなってしまえば終わりですもんね。

私が嫁にきたころは、アルバイトが、生徒が自転車で配達してましたね。牛乳配達と新聞配達はアルバイト。いまはちょっと見かけないけど。夏休み、冬休みになると生徒「アルバイトありませんか」ってきたときありましたけど、「うちの者だけでじゅうぶんです」っていう感じです(笑)。

あと、グリーンピアに納めてますんでまあまあいいんですけど。毎日ではないけども、日付ものだからしょっちゅう行きます。慣れと数が少ないのと、身体がらくになる一方です。いまはふたりで歩いて、運転して、私が置いて歩くような感じ。これが自分で運転して配達してってなると、ちょっとしんどいですね。

■地震保険には入っていた

妻　地震保険は入ってました。それがなければ、いまこうしてる場合じゃなかったです（笑）。保険は家と事業所の両方入ってたけども、地震保険は家だけです。家だけで、（二〇一一年）一月のときに保険を一〇〇〇万さげたんです。それから五〇〇万減りましたかね、そこで、地震保険（笑）。

保険屋さんに、「家も古いし、こんなに査定はなりませんよ」って言われてさげたんです。そして、「こういうわけで、査定がならないって言われたんだ」って言ったら、「そんなことはないですよ」って。大丈夫ですからって言われたんです。そこで片方の保険屋が、商工会議所でも保険業務をやってますと。商工会議所は、地震保険でなかったんです。なかったんですけど、「ごめん、対象外で」って言ったために。民間のほうの一〇〇〇万、切ったんです。民間のほうで心配ないから、かけててもいいですから、そのぐらいの価値があるから大丈夫ですって言われたけども、商工会議所のほうに言われたし、悪いけど、そっちのほう切るからって、一〇〇〇万切ったんです。

後の祭りだったんですね。いままで、会議所におつきあいで一〇〇〇万入ったったもんだから、右っかわのほう一〇〇〇万切ったんです。けっこう直前に入って、ふたつもらったとかっていう、いろんな人がいるんです。なんとなく、どさくさっぽいのも（笑）。片方やめて片方入るつもりで、ほんとうは二個できないんですけど、なんだか両方からもらえたっていう（笑）。そういうラッキーな人がいたり、いろんなことがあります。でも、それにしてもよかったですよね。減ったにしてもね。

■過去の津波被害

夫　私の母のお姑さんが昭和八年の津波（→巻末用語解説「昭和三陸地震」）に遭って、ひとり残された人なんで、泥の中から助け出されたんで。両親が亡くなったんです、ひとりだけ残ったんです。ひとり残されたとき、まだちっちゃい子どもでした。七つ。小学校一年生って言ったっけかね。それで、親戚の家で育ててもらったんですよね。だから、津波への備えについては口を酸っぱくして。私の母が嫁にきた、最初きたころは「なにをもってかにを風呂敷に包んで」とか言われたんだそうです。うちでは明治の津波（→巻末用語解説「明治三陸地震」）のときも亡くなってんです。全滅してるんです。昔の本家のほうは造り酒屋をやってたんです。

その明治の津波のとき、ちょうど五月の端午の節句だったかね、そのときは源兵衛平（げんべえだいら）、一山稼いだもんだから、牛いるもんだから、そこへ煮しめだの赤飯とかもって、ふたりが行ったんだそうです。そこの源兵衛平まで歩いていって、一晩泊まったんでしょうね。帰ってきたらば、田老が津波で全滅だって言われた。まさかと思って、高い山にあがって見たら、田老の町が全然なかった。それぞれ、本家も田老のほうも全部亡くなって、ふたりだけ残ったの。そして兄貴が本家に行って、本家を継いだんです。そういう歴史があるんです。明治のときも、昭和のときも。たまたま兄弟が山に行っていて、ふたりとも残って。そんなわけで、ほんとうは二回ともやられてるんです。

妻　夫の母親のお姑さんが津波に遭ってひとり残された人なんで、最初私がお嫁にきたころは、なにをもってかにをもってって、風呂敷に包んだ覚えがあるんで。とりあえずリュックには、なにかかにかは入れてました。塩は、近所の人から、集金に行ったときに、塩をもってればいいよって言うのを聞いていたもんで、塩はリュックの中に。ちょっとしたとになめてもいいし、喉のうがいをしてもいいし、人がいっぱいギュウギュウになると、喉やられるからって。

夫　昭和四三年の十勝沖地震（↓巻末用語解説）のときは中学校まで逃げたね、私が二十歳のころ。逃げました。地震があって、まさか津波はこないだろうと思ってたらば、山のほうから「おーい！逃げろ」って言われたんで、逃げた記憶あります。晩ですかね。ダンボール敷いて。船が傾いたりしてました。東日本大震災の三月一一日の二日前にも地震があって。あのときは逃げなかった。

■津波の経験、教わったことは皆それぞれ

妻　私がここにお嫁にきて、お姑さんからさんざん津波の防災のことを教わって、そういう風に言われていたので逃げた。でも別のかたは田老にお嫁にきたんだけど、お姑さんが「ここは大丈夫だから、あそこの田老観光ホテルの後ろまで逃げれば「丈夫だから」って、まったく逆のあれもあって。同じ、津波経験のある地区だからって、皆いっしょじゃなくて、

皆それぞれ経験したこととか教わったこととか、違ってるんですよね。

場所によっても、同じ平坦でも、荒谷（ありや）地区のほう、向こうのほうは案外、昭和八年の地震のときも津波がこなかったらしいんです。だから向こうの人が、ここまでこないという先入観があった人がどうもいたみたいですね。それこそ昭和八年のときだと警報もなかったわけだからね。そういう状態で、荒谷のほうの人は、こないという頭があったのでは。堤防ができたから、ましてやいま、こない頭があった人があるんじゃないですか、おそらく。

（二〇一八年八月二〇日）

●世帯T・N　話者一名（女性……七十歳代）

■震災前のくらし

わが家では、うちの旦那ね、植木が大好きでさ。二〇坪のベランダにね、一〇〇くらいあったったね。盆栽からなにからいろいろ。こんなのからあんなのから、いっぱいありました。それも震災で、盗まれたり流されたりしてなくなっちゃったね。

私たちはお金がなくても、楽しみで一年に一回、上野の東京都美術館で盆栽の国風展（国風盆栽展）があるのね。そこに見に行くの。旅費が往復で一人一万五〇〇〇円でね。たったの一万五〇〇〇円で、二人で三万円、往復。それに行って。それが楽しみだったね。

わが家は、役場から出まして、左に行きまして、そして国道四五号線に出るところの角に昔の川戸旅館があって、その隣。国道四五号線で、Tお菓子屋さんがここ。皆さんの家はその年に解体されたけど、私たちの家は一年おいて、つぎの年に解体された。

私が嫁にきたときは平屋の家だったけど、おばあちゃんが昭和四五年に病気したので、子どもたちがうるさくて私たちといっしょに住むのは大変だからって、二階をつくって。やっぱりね、助役したぐらいのおじいさんだからきびしくてさ。二階で洗濯こうして干したら、あれ、いつもくるお客さんでないんだけど、お客さんが二階の茶の間に座ったとき、外を見てパンツが見えたら恥ずかしいから、そっちのほうに干せとか、あっちのほうに干せとか、ほんとうに大変だったね。

私が嫁にきたときはね、お店屋さんだったの。家があった場所で食料品をやってたのね。おじいさんは役場で助役さんをやって、旦那は商売やってたの。そして息子が昭和五二年に生まれました。息子が五歳か六歳のとき

に火事になって、それからお店をやめました。だからお父さん（夫）はダスキンの会社に二〇年くらいお勤めしてたのかな。そして、いくらも足しにならないんだけれど、この母さん（話者）がいたずらにその辺をこうしてレンタルをして歩いた。

わが家は二階をあげたのは昭和四六年。私が嫁にきたときに一階はあったの。ところが私が嫁にきて、おばあさんが病気になったから、おばあちゃんをらくさせようっていうことで二階をあげました。それが昭和四七年ごろですね。

■三月一一日のこと

私の家はね、こんな家のようでなくてもね、ある程度ね、鉄筋の家だったので。それだから津波になったときに、お父さんがね、まあ親が建てた家がりっぱなために過信したって言えば変だけども、「大丈夫、逃げなくてもいい」って言ったの。そして第一回目の地震がきたとき、お父さんはわりと古いものが大好きだったから、この柱時計が壊れるともったいないからって、柱時計をおろして、「おまえはこの茶箪笥を押さえてろ」って、そんなのんきな母さんたちだったの、私たちは。そして全然逃げなかったの。

でも、お父さん。あんまり一回目でも逃げない。みんなが逃げてるって。だから、それだったら逃げましょうって言って外に出たとき、お父さんが三年くらい前に脳梗塞やって、ちょこっと入院しちゃったから病院さ行くに困んないようにと思って、免許証だけをポシェットさ入れて、それだけで出たの。そして、お部屋の玄関から二軒くらい庭を歩いたところが、国道四五号線のつぎの道路なのね。私たちは道路の角の家だったのね。

家を出たらば、消防の人がきて「今日の津波は四メーターだからな」って言ったんです。それ聞いたらうちのお父さん、「なに、四メーターなら大丈夫だ。この防波堤も一〇メーターはあるし」って。明治二九年の津波（↓巻末用語解説「明治三陸地震」）のときは一五メーターだったから。昭和八年の津波（↓巻末用語解説「昭和三

陸地震」）は八メーター。なんでって（なぜわかるかって言えば）、私は観光船のキップ売り場で働いていて、それは自分の家の隣のそばにあった。そして、三王岩に行くところに、ちゃんと岩に書かれているでしょ。何メーター何メーターって。それ見て、私わかってたし。

わが家のお父さんは、「大丈夫だ」って。四メーターだって言われたために、「家に入ろう」って言って、家に入ったんです。私はご覧の通り、歩くのが大変なので。この後ろに役場と続いて赤沼山があるのね。皆さんには、「あそこにさえ行ければ一〇〇メーターもあるから、行ったほうがよかっただろう」って言われたけども、私が歩いてるうちに波がくるでしょ。それ、逆に、私は家にいたんで助かったと思います。そして、二回目のときも家は出たんです。出て、父さんが「なに、大丈夫だ、なに」って言ったら、三回目のときは大きかったもんね。

正直言って、よその家のあれがこんなに揺れても、わが家は揺れないの。地盤がちゃんとしてるから。そしたら私たちのうちは赤沼山の岩盤の上に建ってる家なんだって。そのために土台がちゃんとしてて、揺れが少なかった。私、店屋を最初してたけど、店屋しても醤油びんも何びんも壊したことがないの。そしてわが家からちょこっと出たところの四五号線のそばに赤沼商店があった。その家で醤油壊したとかなんとか、私の家のものはなにもそんなのはなかったから。

そして三回目の地震のときに、一〇分くらいやんだかね。一〇分か一五分。そしたらお父さん、「ほらやっぱり津波な（こない）。地震が落ち着いだから家にさ入るべ」って言って、三回目のとき戻ったの。戻って玄関の戸をこう開けようとしたら、そのとき、いっしょに波がきたの。そしたらよその人たちに言われたの。三回目の津波のときは防波堤を波が越えてだったの。私、見てないの、それ。それだから、玄関入ったとき瓦礫となんといっしょだったの、わが家は。そして、お父さんはどっかに行ってしまったの。私はこの通り体重があっから、台所の柱にこうしてぶつかって止まり、そして泥水、天井までは水がきましたけどね、そして目が開かなかったから。

そんな状態、私は。

それでもね、お父さんと「命てんでんこだからな」って言ってだったから、「お父さんあとから探すからね」、私悪いと思ったけれど、あとで二階にあがってゆくって。そして目の中さも、それこそ泥水が入ったけども、まだうちのようすをわかってるので、私逃げやすかったの。そして台所の柱に引っかかって、階段まで二間くらいあったかな。そこのところ廊下を歩いて、階段を手さぐりであがって、三つくらいあがったらば流されで。結局、強い波だから。そして三回目でようやく上まであがってきました。そしたら私の家は、平屋の家に二階をつくったために、よその二階より高いの。二階の廊下くらいまで水がきたね。わが家は二階までの階段が一三段あったから。そこまであって、その廊下に行ったらば、廊下までアルバムがあがってきたり。電気釜があがって、どこの人の電気釜だって思ったら自分の家の電気釜。そんなのあがってきましたった。そして階段のところを見たら、泥水が温泉のブツブツというような感じ。あんな感じね。水がね、ブクブクブクブクでね。それなんで、こんな水の中には入られないなと思って、私は家の中をぐるぐる回って二階のものは家の中のものが全然流れないでそのままだったの。息子のところにもっていったけど、一メーターくらいの昔の子ども用の兜。それが全然流されないでちゃんとあったし。そして息子の部屋に行って、ああ布団もちゃんとあるな。ああ、なにもあるなって、みんな探してちゃんと見てたの。玄関先にある水石があったでしょ。あんなのとかこんなのからでね、笑われる話するけどもね、わが家の二階に三〇〇ぐらい石があったの。それでも家が大丈夫だったの。そんな感じ。私の父さん（夫）が水石は好きだし、なんだいろんなことやる人だったから。書道書かせれば、書道も上手に書く人だった。絵も描くし。

二階になんとか必死にのぼって私は助かったの。そしてね、みなさんは逃げていったけども、私は五時半まで二階にひとりでいたの。その階段のところから水がなくなるまで待って、そしてから階段おりましたが、下にお

りていったらば、消防の人が「だれかいないか」って騒いでたので、ここにいますって言ったならば、ロープもってきて、「ロープで結んであげるからこのままあがれ」って言われたんです。裏の玄関のところからこう歩いてゆけるようにね。だけどこの体重でなかなか歩かれないから、私が自分で足踏み踏みあがっていくから、潰して赤沼山さあがっていきました。そしたら消防の人たちが無線で、「T・Nさんが救出」ってなったために、濡れてたでしょ、近所の人が「洗いざらした下着だけれども着てください」って。それを貰って、おかげで風邪引きませんでした。だからまあねえ。皆さんのおかげだ。

■翌日からのこと

津波に遭ったときにね、私は死亡した人数に入っていましたが、三日目から生存のほうに入れてもらいました。役場の三階に二〇日くらいいました。ちょうど家から出ていって、役場の三階がよかったから。電気もテレビもみんなついてたし、食べるのもそれなりだったし、それで役場にいました。私は、「お父さんが見つかるまでここにいる」って言ったならば、息子が、「母さんをひとりだけ置いていくのは心配だから」って、それで（息子の家に）行きましたけども。行ったりきたり。車がないっていうのは不便だね。花巻の土沢から一番の汽車に乗ってきて盛岡まできて、こっちさこうおりてくるのに時間がずれてね。一日二本か三本しかない一〇六号のバスに乗ってきてね。最高、車がいい。だってそばから乗っていけばいいもの。時間を待って、ここでこうして待ってなくてもいいもんね。自分の好きにね。好きな時間にね。行きたいとこ行けて。

■夫の遺体が見つかる

おかしな話をするけどね、うちのお父さんはね、二月二〇日に、いまのこの遺影になってる写真を私に撮らせたの。二階の盆栽の前で。そしてその写真ができてきたよって見せたらば、ああそうかってしゃべった。この写真見たら、（夫は）三日おきに仏さんに行き会ってたの。（そのとき夫が言ったのは、）夕べは父さんと何十年ぶ

りに話したかな。そしてまた三日くらい経てば、お袋がきて話したかな。そのつぎは私の娘が七つで亡くなってるから、その娘がきて行き会ったよ。そのつぎは、宮古のおまえ（話者）の親が、父さんがきたよ、おばあさんがきた、弟とふたりにもよって、みんなに行き会ったの。仏さんに呼ばれたのでないかな。そんな感じ。私は（そのとき）仏さまに、まだ父さんは呼ばないでと拝みました。

そして、テレビのニュースでニュージーランドだっけ、どこだかあれ地震でやられたがね。そしたらば（夫は）、「あのなあ地震でやられたべ。そしてビルが倒れたりして、人を探すに大変だろうから、俺は一〇日間までには出てくるから、あちこち探すな」って、うちの旦那は予言者みたいな感じでそういうふうに言いました。私が好きな盆栽を守ってから、水石守ってからな。あちこち探すなよって言われました、私。そしたらば、ほんとうに一〇日目に出てきました、うちの父さんは。私たちの寝部屋の明かり窓があるんですが、その明かり窓のとこから出てきたみたいにね、そこのところにいました。

だから予言者と言えば予言者だけども、皆に薄情だって言われた。お父さんを皆が探して歩くのに。だって私はお父さん信じてたもん。父さんが、「一〇日までには出てくるから、あちこち探すなよ。そのかわりな、どこだり歩くなよ」って言われたもん。

だけど一〇日目の日にね、役場から見つけましたって電話がきて。花巻からきたらば、「北高（県立宮古北高等学校）に死体がありますから検死してください」って。行ったらK先生が、「おまわりさんいいですよ。このかたは受付もなにもしなくてもいいから、そばにやってください」って言ったらね。いやだね、あの真っ黒い袋に入ってるのね。そうするとチャック開けたらば、「父さん、朝だよ起きてください」って言ったらば、「はい」って起きるような優しい顔だった。みんなが行ったんで安心したんだね。仏さんが顔変わるっていうのは、それでわかるって言うね。

嫁さんの親さまが、切なくて、苦しくて亡くなってたのね。そのかたは権現さまみたいにおっかない顔をしてだったのね。私は、息子たちが北上からくるより先に行ったから、山田にね。そしたらそんな顔して、娘が二時間経ってきたらば、「父さん、朝だよ起きてください」って言ったら、「はい」って言うように、優しい顔した。顔が変わるっていうのを初めて見たね。仏さんの顔。

薄情な母さんだで、探して歩かないの、私は。お父さんを信じてね。宮古の弟の嫁さんにはさ、金魚のうんちみたいな姉さんだって、どこに行くにも（夫婦）ふたりって（言われて）。あのな、そうじゃないの。うちにいて、お父さんがまだこないって心配するよりは、いっしょに行ったほうがいいって。山に行って川を歩いて、そうそうね、水石見つけるのも面白いんだよ。川の中からね。うそみたいだけど、このぐらいしか見えないの。それを砂をこうこうよけて、こんな石を見っけてくるの。好きだね。私はくるくるぱーなので、そんなことばっかりして歩いた。おにぎりしょって、麦茶をわかしてね、そしてもって歩って。だから、私は田老の皆より道路を覚えてると思う。あっちもこっちも山もどこも。

■仮設住宅での生活

グリーンピアの避難所は、途中から行ったために、青砂里のTたちは、この私たちが言う乙部青砂里（とべあおざり）って言うけど、三王閣さ行く途中ね、そっちのほうの人たちがいるほうに私は入ったの。私たちの部落の人たちは、体育館のこっちのほうだったの。それなのに私は後から行ったからね、部屋がないよ。樫内（の仮設住宅）ができるまで待ってと言われ。なに、雨風しのげればいいからって。うちから布団もなにももっていったもの、仮設に。そしたらば、いただきものなので文句は言えないけども、よその人たちは敷布団もらって、寝ようと思ってぺたーってなったって、そんな布団だったって。私たちはマットだったもの。マット布団だったもの。私は濡れたけども、全部洗濯し直したし、二階にそのままものがあったし。

■災害公営住宅での生活

いちばんいいのはね、ここ（五階建ての市営住宅）の玄関開ければお父さんの墓が見えるから。向こうに行けないときは、「父さん、ここから拝むからね」ってね。墓が前だし、お寺が前だし、お寺の脇側がわが家の墓だから。だから見えるから、ここから。そんな感覚が、驚いたがね。

ここに入ったのは（二〇一五年）一一月だから、一年とちょっと前です。なぜここがよかったっていうのはね、役場はすぐそばだし、お寺がすぐそばだし。車に乗れなくなれば、ここの駐車場のところに、今度は三鉄（三陸鉄道）の駅ができますから。そうすると最高にらくなんです。そんな感じで私は、こう。皆さんが三王団地がいいって言ったけど、三王団地からおりてゆくのに大変だそうです。お買い物するってもなにするっても。まあ、バスがあるって言ったって、役場にくるのにも遠いでしょ。お寺っても遠いし。だって、この辺はみんな砂浜だったんだもんね。防波堤のそっちほうがね。そして、嫁にきたときは皆さん、昆布、砂浜にこうして干してだったからね。ほんとうに俺、昔の人。まだ若いって言いたいけど。それはもう、先を考えて自分で考えて決めたんです。息子たちに世話にならなくてもいいかなと思ってね。

ここのアパートにね、お金持ちのお母さんたちがいるからしらないけども、働かない四〇代の人が三、四人いるの。親がこれ（お金）をもってるうちはいいけども、親が亡くなったらどうするのかね。人の家のことだけど。なにして働いてるのかわからないけど、私たちみたいな年代なれば働きたいっても、もう働けない。私はひと月五〇〇〇円くらいもらうのかな。ダスキンのレンタルやってるから。車が動くうちはやってる。こうやって回って交換してる。だから田老の人に笑われて。私は宮古からきた人なのに、どこも知ってるねって。はい、いちおうはわかりますって。

■灯籠泥棒、盆栽盗人

泥棒野郎はすごいもんね。お父さんたちのお仲間だっていう人は、花輪から入って、南川目に行って、山を越

えれば豊間根（とよまね）に出るのね。豊間根に出て、山田の盆栽屋さんがね、真柏を飾るこんなの出して。東京で展示会するときに、こんなのに入れるより、ちゃんとしてりっぱな鉢さ入れるのが見栄えがいいのね。それを入れる鉢がね、五〇万の鉢だとかさ一〇〇万の鉢だとかと言えば見栄えがいいんだもん。それをね盗もうと思って、言い方が悪いけど、盗もうと思って寄せてたんだって。それを自分の車に積もうと思ったら、そこの家の旦那がきてて、よかった俺が集めてあげるからってしゃべって。五分一〇分のところでトラック屋さん、あれだって言ったっけ。あたりまえのことだもんね。そんなことあって。盗む人ってすごいね。

私がね、息子たちと家に行ってね、二階の流台はしりのところに、お父さんが山野草、こんなのに入れておいたの。それを花巻にもってこようと思って、そこからもってきておろして、つぎのとりに行ったらば。灯籠も盗んでく人は盗んでいくのね。すごいよ、あの泥さんたちは、トラックもってきて。わが家に傘が大きな、こんな大きな灯篭がふたつあったの。それをもってきましたし、それからこんな大きな庭石もふたつもっていったし、地震の後に。私たちが留守だから。留守からもっていくの、泥ちゃんがたは。自衛隊がちょっと動かしたとか、そんなんじゃない。

わが家にはね、それこそちっちゃい庭だったけど、この部屋とこの部屋くっついたくらいの庭だったけど、石臼がふたつあったったのね。なかなかそれとれなかったのね。石臼がとれなくてどうしようって言って、工事する人に出してくださいって言っても出せなかったのね。そして、どうやって出すかなって。息子が欲しいって言ったけれど、これ、とれないよって言ってたの。そしたらお父さんの葬儀を七月一七日にすることにしたんで、墓掃除に私はグリーンピアから毎日通ったの。そして、あるときお昼だなって思って家の前さ行ったらね、その石臼が、こんな石臼がふたつね、道路に出てたの。それなんで、働いてたあんちゃんさ、「おめさんが出してくれたんですか」って言ったら、いいやあのね、午前中にどこの人だか知らないけど、大きなトラックがきて、取り

出していって、お昼食べてきてから積むって言ったっけってわけさ。ああいいとこさきた。それから、お寺さ行って、和尚さん、私、お願いがあるって。なにしたった。俺の家の石臼がふたつ出てたんだけどね、あの石臼なんとかしてくれませんか。そうしたらば、K石屋さん頼んで、おい、K石屋、石臼がふたつ出るからそれもってきてけろって言って、本堂さ頼んだのさ、お寺さ、ふたつ。あとから、おまえさん怒られないようにって、そのあんちゃんにしゃべってきた。案外怒られたかもね。まさか私がくるとも思わなかったんでね。その盗んでいく人はさ。

だってね、庭に、このテーブルくらいのちっちゃい池だったけど、ちょうど一メーターくらいの岩があったったのね。その岩に苔がなったり、いろんなのがこうこうくっついてだったのよ。そうしたら泥ちゃんはね、ここからすぽっと切ってもっていったの。そんな感じでなんでももてるものはみんなもっていくの。いちばん困ったのは二階から盆栽盗んでいった人。津波から三日くらい経ったときに、矢巾のおじちゃんがきて、お父さんがだいじにしてたんだけども、おらなんともしねえから、もう欲しいからあげるよって、あげたの。そしたら五月一五日の日に、Tさん（田老復興まちづくり協議会会長）が「めんこいテレビ」で放送があって、津波のことのなにか話をするのに、空き家には入られないから、奥さん家を貸してくださいって、奥さんもきてくださいねって言ってたの。そして私行ったの。そしてね、そのアナウンサーの人に、泥棒ってすごいのね。ここの池のとこにあったこれ一メーターくらいの岩も見事に切っていったってよって言ったの。これがこの灯籠も盗んでたって。どうせ人が留守だからって思って人がいないから、かってにみんな盗んでいくよって言ってるの。盗んだ、盗んだ、盗まれた、盗まれたって私言ったのね。そしたら、つぎの日のね、五月一六日の日に花巻の息子のとこに電話がきたったの。盆栽屋さんから。それで、なにしたって聞いたら、私が「盗まれた、盗まれた」って言ったんで、驚いたんじゃないの。

そしたらその盆栽屋さんが、私が預かってますって言って。おかしな話をするなって言ったの。いくらおバカさんでも、「これを預かってくださいって言ったのが、預かったんでしょう（預かったってことでしょう）」って言ったの。いない家からかってにもっていたのは、なんぼ親しい仲でも、それは泥でねえすか。泥棒、泥棒って私が言ったって。そしたらば、やっぱりなんともできなあったんじゃないの、それで一六日の日にね、前の日にテレビで七時四五分だかのテレビあるね、岩手ニュースを。それからあと五時なんぼとかって三回やるがね、寝るまでにね、同じのを。それで映ったのを見たんで、「俺泥棒でねえ」ってきたった。そして、泥棒でねえって言われたって。それだから、私が預かってたから届けますって。

その人は、ここの地域の人じゃない。もともと知ってた人。わが家にきてね、お父さんに、この盆栽を欲しいって言った、お父さんが苦労して一メーターくらいだった真柏をね、ちょうど技術で手をこう入れて、まっすぐして、ちょうど芯が真ん中にくるようにつくってたの。そしたら、その盆栽屋さんは山梨の人かな、山形だったか、山梨か。そのかたがね、お父さんに二〇万で欲しいって言ったの。お父さん二〇万じゃ売らないって言ってるの。そしたらね、それももっていったんじゃないの。そしてね、どうしましょうかって言うんで、私はね、いま花巻にいるから、花巻の土沢の信号機のとこにきてから電話かけてちょうだい。あそこからだったら五分あれば息子の家に着くからなんだけれどね、やっぱりこれなかったようで、こなかったの。そして葬儀をするっていうあたり、七月に入ってからグリーンピアの仮設にきたんだよ。そして「盆栽をもってきたよ」って言ったんだけどね、私が欲しい盆栽をもってこないの。七本か八本しかもってこなかった。天蓋づくりにした真柏とりっぱな真柏とあと桜となんとかって、もってきたったの。それで、この真柏を一〇万で売ってくれって言ったの。私、一〇万なら嫌だったの。知っている人にあげたほうがいいって言ったの。そうしたらば、じゃあ二〇万出すからって。ほんとうはもっと欲しいんだけども、まあ仕方がない。それで二〇万で売りますって。二〇万で売って、そ

の二〇万でお父さんの葬儀やったときに、子どもたちに食事を振る舞ったり、泊めたりして、そのお金に使いました。いいんだぁ、お父さん、お前さんの銭に使ったからって。

桜の木と、なんとかってもってきたんだけどもね。どうやっておろしたのって聞いたの。そしたら裏二階の窓から、この盆栽の鉢をこことここに紐をつけて、上からこう押さえ、それがこんな大きな鉢だよ。それを上から押さえて、そして静かにおろして、下で受け取って、そしてもっていったって言うんで。この桜の木を助けるんだったら、その隣にあった、あなたが欲しいって言った真柏どうなったのって。なかったって。ないわけはないの。桜をもって、桜と真柏、並んでいたのを私は覚えてるんだもの。

だから絶対にないわけがないの。桜をもってこないのであればほんとうになかったのかなって思うけども。真柏はとうとうもってこなかった。なにしてもいいということはない。二階のベランダのおりるところの玄関があるでしょう。二階のベランダに軒下をちゃんとつくって、お父さんだいじだから、棚をつくってそこに置いていたの。そこにあった桜が助かって、真柏が助からないってことはないでしょうから。だれが考えたってそんなインチキ。

もともと知ってる盆栽屋さんなの。弟のうちからね、弟が亡くなって手入れしないからって、一〇本で一六〇〇万で売ってた、買ってたってから、盆栽。真柏。盆栽、高い高い。家が建つよ。皆さんが一億円の家だとか三億円の家だとかってかってな噂話をするけどね。高いのは高いんだよ。あのね、盆栽とか水石とかそういうね、いろんなのはね、お金の価値がわかんないのよ。欲しい人はなんぼ高くても買ってるし、興味がない人は二束三文。食べられるもんじゃないしね。上はきりないですよね。盆栽。

■心ない言葉

私ねえ、お父さん亡くしたって笑われて、いちばん嫌だったのはね、一〇日目のときにね、郵便配達の人が信号機のところに近寄ってきてね、「こら、母さん、おまえはおやじが死んだって五〇〇万儲けただろう」って

言ったの。おまえさん、ずいぶんおかしいねって。「おまえさん、言葉の暴力ではないか」って言ったの。私はね、お父さんが生きてれば、ひと月二五万も年金もらってだったんだよと。それが二か月で五〇万だから、なに五〇〇万もらったったってね。旦那が生きてれば、それ以上もらってんだ。おかしい話するなって。

それから一か月くらい経ってからね、宮古の郵便局の局長さんと行き会ったのね。局長さんに、「申しわけないけどさ、あなたに直接関係ないけどさ、あの郵便局のお宅のほうの配達さんからこんなこと言われたよ」って言ったら、「俺は関係ない」って言ってたね、局長さんが。「関係ないってことはないでしょう」って言ったの。「私たち平民から見れば、配達さんも内勤さんもおんなじ郵政省の人と思います」って。それでも関係ねえって言った。いい、関係なくてもいい。それなら私は、新聞さんにも出たことあるし、ＮＨＫのアナウンサーも知り合いがいる。これ、携帯の中に入ってんだけど。それから「めんこいテレビ」の人も知り合いがいるし、テレビさんにも出たことがあって、テレビに話すかなって、しゃべったの。そしたら、あら驚いたんでしょう、局長さんは、私のことをバカだと思って言ったんだろうけど、あなたはそんなかってなこと言ったのかもしれないけど、人がどんな思いしているかっていうことも関係ないだとか、金持ちになったんでしょうとか、そんなのがあたりまえの言葉ですかって言ったの。

あの、あらためて人中で「えんえんえん」って泣いてはいないといっても、私だって、泣きたいときもありますって言ったの。こうやって気が強いように話をするけど、なにも気が強いわけじゃないよって。だけども、関係ないっていうのは何事だって怒ったの。そしたらあれ、新聞かなにかに出されっと思ったのでないかしら、局長さんが逆に。そしてそれから謝ったの。私は、お宅から謝ってもらいたくない。そんなことではなく、悪かったねって一言しゃべってもらいたかったの。それなのに関係ないって言ったの。

人がやったことに、俺は関係ないって言ったって、あなたは偉い人でないのって言ったの。親分だもんね。郵

便局のなかの局長さんとなるとさ、ただの人でないでしょうって。そんなことを言えばきりがないけどね。皆さんすごい言葉の暴力って。こうして、痛めつけるだけが暴力でない。だから、この前の新聞にも書かれていましたよね。福島のある子どもに同級生のお父さまが、たばこ吹かして、やったとかどうのこうのと（注：福島から千葉に避難・転校した女子生徒に同級生の母親が煙草の煙を吹きかけて「福島へ帰れ」と言った、という報道があった）。自分の立場を変えてみたらいいことじゃないの。そうでないかね？　私がおかしい？

■田老の過去の災害

うちの私の舅さんは、息子のようだが（仏様の写真を見て）若いけども、左の写真がおじいさんなの。あのおじいさん、田老町の助役さんやった人。K町長さんの時代にね。そしたら、この前パーマ屋に行って読んできたら、宮古のなんとか誌っていうこのくらいのものに書いてあった。この防波堤は、昭和八年の津波があって、昭和九年からつくった防波堤なんです。K町長さんと、うちのおじいさんは三二歳から助役したのかな。だから昔の人はえらい。だって、うちのおじいさんはね、役所に入ったときは小遣いさんで入ったそうです。小遣いさんで入ってね、町長さんに認められて助役になって、役所の助役を三十何年やったのかな。

津波から一〇日経ったときに宮古で会ったよ。そのおバカさんがね、田老の人だちはバカだねって言ってたの。どうして？って聞いたら、田老の人たちはあんなりっぱな防波堤があるので、防波堤にばかり頼って、津波でみんな流れたもんねって。そんなこと言うのならば、私、あなたを田老に連れてゆく。みんなに殺されるよって言った。人をバカにするのもいい加減にしてって言った。昭和八年の津波が最近で、その前の津波は明治二九年だもんね。その明治二九年のときも、けっこうやられたんでないかね。

そして昭和八年の津波以後、これではだめだっていうもので、この町を碁盤の目に見立てて。それはなんでかって言うと、昔の道路はね、このうちがないときは、みんな四五号線があって、一号線、二号線、三号線って、あ

と縦になってたの。碁盤の目になって。私が嫁にきたときはね、それこそさ、三陸鉄道（当時は国鉄宮古線）田老トンネルの開通したのは昭和四七年だからね。

わが家の実家（宮古市）はね、アイオン台風（昭和二三年）のときは川から水があがってきて、染谷坂をあがって、うちの前を水が流れていったんで、うちの前で全然そんなんなかった。家を建てたのが昭和元年だから、三〇〇〇円でつくったりっぱな蔵があった。だから、お父さん（夫）は驚いていたもんね。扉の中にまた扉があって、ガラス戸があってってね、そうするとその蔵の中で寝泊りできるようにね。そんな蔵があったのね。昔は池だったけど、これを商売の関係で蔵にしたんだって。そんな大きな蔵があって、ええ、こんな扉の蔵見たことがないっていう感じ。そんな蔵ももうみんな流れました。今度の津波で。いまなにかが建ってましたっけ、土が盛られて。

田老に嫁いできたときは、舅さんが、わが家のうちは岩盤の上に建ってるから大丈夫だって。よそさまはこんなに揺れても、わが家揺れなかったから。そして鉄筋のちゃんとした平屋のうちだったけど、それに木造のうちを建ててね。下が鉄筋で上が木造だったの。私が嫁にきたときは、茶の間の天井が丸っこいような丸屋根っていうか、こんなような天井だったね。平らな天井でなくね。

■災害を経験して思うこと

まあ、地震とか津波がまたくるかね、いつ。この前の訓練では私逃げませんが。だってさ、ここから逃げたって失礼だけど、どこにも逃げようがないでしょう。それから津波もこないんだもの、三階だもの。もともとここの下が高いからね。そうとう盛ってるんで。もともと一〇メートルの堤防があそこに見えるからね。

最初は八メートルだったかな、あの防波堤が。それ足して一〇メートルになってっていう。ここは（昭和三陸津波の）三月三日でなくて、鮭ツアーのときにマラソンするんだもんね、この防波堤の上をね、津波の前はね。ぐるっと回って、防波堤の下のところを通って、防波堤をぐるっと回ってそれがあったったのね。それがいまな

いもんね。だってこの防波堤は、青砂里のほうにあった防波堤は、押し波でやられなくて、引き波でやられたんだもんね。昔の津波はね、ここから見える向こうの釜屋っていうんだけど、釜屋のほうにいま防波堤があるでしょう。水門があるでしょう。あそこのところにきて、大平にきて、大平から蕎麦屋がある小林のとこにあがってきて、町に水が入ったんだそうですね。

それが水門あちこちにつくったりなんかしたし、昔と違ってテトラがあちこちに入ってるから、波が変わったんだそうです。昔の津波は大平からあがったんだそうです。だからそれも、テレビでね、大学の先生が悪いのつくったの、それから津波を教えなかったとかどうのこうのと言うけれども、それはむりだもんね。私はえらくないけどさ、一足す二が三って、三の通りに行くったって、自然はそうは行かないと思いますよ。だから、大槌で教えなかったために、逃げるの遅れた。それで上の人が悪いとかって言うけども、私たちのとこ、うちのとこからちょっと出はったとこに、そこにいま見えてる信号機のところの水門ね、あそこの水門があったでしょう。あの水門を閉じないとみんながやられるもんね。だから、やられるのはしょうがない、そうだったら仕方がないけども、それじゃ閉めに行った人をどうするって言ったらば、どうにもされないもんね。だからあれ、むりな話。上の人たちもそうだし。だから言えば悪いけどね、語り部の人たちはこう言いなさいっていうのはわかるけど、私から見れば語り部の人はりっぱな話ばかりするなと思う。実際にできてなくて、行政とかなんとかで聞かれたらこう話しなさいね、こうしなさいねとは言ってるけども、実際はあんなもんじゃないもんね。

こうやって流れた人たち見れば、いったん津波には流れませんでしたけども、船が心配だって出ていってそのまま流れた人もあれば、だからそれいろいろ。だからTさん家のお父さんも津波では助かったんだってね。津波で助かったって言えば変な話だけど、そして船が心配だからって船を見に行って流されたって。そんな人たちがいっぱいいるもの。だれが悪いということはない。これ自然だものね。あなたの教え方が悪いって、それは嘘だ

と思うわ。だって自然だもの。いちいちさ、一足す二が三の通りに自然が行くのであれば、だれも困んない。それこそ安倍首相がどうみたいって奥さんがしたって、あんなのとはまた意味が違うもんな。昭江夫人みたいに行かなくてもいいのに行っててなぁ。おら、おかしいかもしれないけどさ、あちらに子どもさんがないでしょ。子どもさんがいなくて、子どもの話するのもおかしいもんね。私から言わせればさ。そうじゃない？　実際に体験した人が言うんだば、あたりまえのことだなと思ったけど、自分には子どももいないってさ、理想論って言えば失礼だけどさ、ああとかこうとか、うちの家内がやらないとかやったとか言っても、あれもむりな話だよ。私はそう思う。

だからね、津波がどうのこうのって言ったって自然だもん、これは。自然が悪い。大学の先生が教えないのが悪いとかどうのこうのは、それはむり。そんなこと言ってだけど。だってさ、あなたたちがこうすればよかったんでしょって言ってみたって、その通りにはいかないもの。自然だもの。そう。ああやれこうやれって話は簡単ですよ。だけども実際にはそうはいかない。

あの鍬ヶ崎の人たちはね、漁に出るために邪魔だからって防波堤をつくるのを反対してたのさ。それが今回っていったら、この辺と同じような防波堤だけど、あののぞき穴みたいなのが見えてて、あれなにするんだろうって思う。海が見えなくて避難しなかったっていう声があるから、じゃあ海を見えるようにしましょうっていうので、小窓つけてるんでしょ。あの小窓がなにするってね。役所の言い訳だよね。

あそこで海見てるほうが危ないような気がするんだけどね。この辺でもそうなんだもの。海に行って、連れてかれた人がたくさんいだんだもの。即逃げればいいの。うちのおばさんは、昭和八年の津波のときにダメだって言われたんだって。もう全然動かなかったんだって。だけども、もしかしてって、このお寺さんがあるところの坂のところで、みんなが焚き火してたんだって。もしかしてって、ここに置こうって可哀そうにって置いたらば、

暖かさでひとりでむやむやって動いてきたんだって。それで生きたんだって。それで八五くらいまで生きたかな。だからその人の生命力と思う。

小堀内の人たちはふつうに考えればできることでないけども、その場所の人たちは消防自動車流すとだめだと思って、小堀内の海岸に行ったそうです。そして、そばではないけどもけっこう離れてたとこにだけども、そこまで水がきたって言ったでしょう。そしたら消防車をつかむぞって追っかけてって、死んだっていう人たちが四人か五人あるもんね。だってさ、普通の車も引っ張れないのに、消防引っ張るってよって行くってのは。

■嫁にきたときのこと

私、宮古から嫁にきたの。宮古から一時間一〇分くらいかかってきた。そうすれば、ここの四五号線を宮古に（南に）おりまして、おりたところをちょっと左に行ったとこが私の実家だった。いま津波でなんにもなくなったけど。そして、田老からおりていって、宮古におりたところのあそこはみんな山だったの。全部山で、あそこのところが四五号線といって開通になったんだけど。そう。私はなんにもどこも自慢することはないげど、舅さんからよく記憶してるなってしゃべられるけど、いちおう記憶はしてるね。三陸鉄道が開通になったのは四九年でしょう（注・前身の国鉄宮古線開通が昭和四七年、三陸鉄道の開通［第三セクター転換］は昭和五九年）。そのころトンネルに鉄道に、ここら辺もいっきに便利になったね。このおじいさんの奥さん（姑）が、子宮がんで盛岡の日赤病院に行くときは四時間かかったもんね。それがいま、私の運転で一時間半ちょっとで行けるからね。

私はね、免許とって五〇年ちょっとになるかな。今月の三一日の日に高齢者の講習に行くことになってたから。免許とってね、五〇年も越えてるんだよ。五五、六年になるのかな。無事故。

私が嫁にきたとき、三王岩に行くとこは砂浜だったのよ。防波堤のこういったところだげがあって。船に乗るためには、渡し板を使って船に乗るような感じだったもんね。あの灯台があるあたりかね。

お父さんと見合いして嫁になったんだけど、真崎まで歩くのに一時間もかかるけど、短く感じたね。いま歩けって言われたって歩けるもんでないけどね。あのころはよかったです。うちの親はきびしい人でね、嫁になれば嫌だって毎日顔をあわせるんだから、そんなに会わなくても。せっかくのデートでお父さん（夫）が訪ねてきてもさ、うちのバス停で待っていると、兄貴が「さもさも男恋しさにバス停に立って。格好悪いから引っ込めて」言われたりして、そんな時代だったわね。私のうちで商売（酒店）やってたから。ちょうどそのころから渡船さ乗って、三〇円出して行けば藤原海岸で泳いだのね。藤原海岸が、磯鶏（そけい）の近江屋のあたりまで砂浜。全部砂浜だったんですよ。だからほんとうに古い人なんですよ。今の市民文化会館のとこがね、磯鶏小学校だったもんね。

私、正直な話、貧乏な生活はしたけども、嫁にくるまでご飯支度したことはないからね。そして初めてご飯支度したらね、おじいさん（舅）がね、これぐらいの大きなお盆にね、おばあちゃんが亡くなってから二階へもっていったらね、ご飯を食べて、おつゆをシュッと飲んでみて、「あ、今日のはいい、食わなくてもいい」と、お盆のままだよ。これ少し長いテーブルをふーっと流してよこすと、こっちのほうにいて、それをもって泣いていたら、なにしたのって言ったので、おじいさんがな、今日は食べないってしゃべったの。それならば食べてもらわなくてもいいって、嫁はそういけないもんね。

私は貧乏のうちで育ったけど、私が育つときには姉さんや子守三人がいて、姉さんがやって店の番頭さんもいてね。それから女中さんもいたりってやっていたけど、そのかたたちが年とったらば、姉たちが年ごろになって、姉たちがいろいろやって。そして、その家によって違うのね。私たちは朝起きればね、ほうきもったり、ちりとりをもったり、なにかかにかやってからご飯を食べたのね。田老の家はそうでなかったもんね。おばあちゃんがみんなやってたけども、嫁がきたら嫁がやらねばならないの。いちばん困ったのは、ごはん食うのは困ったね。私、実家にいたときは茶碗で二杯もご飯食ってきたのね。田老の人たちはあまり食べないんです。そうするとね、

一回目はおかわりをするけれど、初めは知らないで、おかわりって出したんですね。だれも食べないんですもの。そうすると出せなくなってね。私はそれが困ったね。なにも困んない。その家のやり方。だれも食うなとは言わないんだけど、だれもおかわりしないのにさ。

皆さんがちっちゃい茶わんで一膳食べてるのがふつうだったんじゃないの。私が実家にいたときはそれより一回り大きい茶わんでおかわりしてたのがふつうだったし。一〇時の一服もあれば、夕方の午後の三時のおやつと、二回あったったから。それがなくてほんとうに困ったね。だれも食うなって言わないんだども。

田老の家でね、どっからかお菓子をいただくでしょ。そうすると、とりあえずはお昼の時間にご飯を食って、りんごを出したり、お菓子が出るんだけれども、残ったのはしまっちゃうの。そうするとね、茶の間があって真ん中の部屋があって、私の部屋が奥なの。私は毎日思うの。このばあさま、いつ食べさせてくれるんだろって。

習慣が違うんだね。私、知らなかったんだけれども、私の家で「ちぴたれ」って言って、なんのことだと思ったの。そしたらね、風呂さ入って首まで沈みなさいっていうこと。田老の人たちは「ちぴたれ」って言うけどね。それ宮古で言わないんだけれど。私のうちではお客さんが帰るときは、「どうもおおきにおおきに」ってしゃべるのね。「ありがとう」って言うじゃない。まあ商売屋だったけどもね。だから習慣っていうのは面白いよ。

■夫の思い出

昔の人はね、だれも信じない。スマートだったの私は。それがそれこそなんぼも太らなかったけど、おじいさん（舅）が亡くなった時点からタガが緩んで、気を使う人がいないのでこんなに太っちゃったの。朝起きたいとき起きて、寝たいとき寝てさ。それこそ自由気ままでね。でも、うちのお父さん（夫）はきびしいことはきびしいども、いっしょになにするっても行動したからね。盛岡まで運転するのはお父さん。盛岡の町さ入れば、お前がここから運転しろって。もう少し行ってね、右のほうに行けば、右に曲がるんだっけ、右は医大とか、左の盛

岡駅とか面倒くさいから、お前。あそこ一〇六号のあそこにあったでしょ、なにかっていう病院が。

女は得だもんね。初めての道路に行って間違っていってもさ、一方通行だよ。ああ、すみません。初めできたもんだから、そう言うしさ。めったにパンクすることはないけど、パンクすれば、すみません。いつもね、旦那からばかり、あの車のタイヤ交換してもらうから。やれないからやってくださいって、それが女の特権だ。こんなババアでも（笑）。

わが家は津波になったけどね、ものが残ってんですよ。二階があったからね。これは助かったアルバムから好きなのとったの。いろんなもの、これは舅さんだとか、嫁さんだとかって。どこも歩いたんだよ、あちこち。こんなにいろんなのが、こんな写真がね、一〇冊くらいある。全部残った。これは見せられないようなおかしい写真だけども。

お父さんはずっと細いまま。昔ほら、ＮＨＫの歌で、「あなたが選ぶのど自慢」っていうのがあったでしょ。そしてあの舞台にあがって丸いテーブルに、五人六人載ってて、歌ったりするの。上手。そのときの写真をこうして撮ったんです。お父さんが出たの。私はこの写真見たことあるって言ったっけ。なんでやって。だって、お前さんテレビに出たでしょ。テレビで「あなたが歌うのど自慢」の審査員の名だった。お前よく覚えてたなぁとかって。いや、そのときから私、縁があったんだねってしゃべって笑ったけどさ。

■生活の楽しみ

田老のＨ先生が、「お母さん今回どこに行ってきた？」って言うので、今日、今回は雪があって、雪が心配だからどこにも出られないけどね。去年は一泊二日で四五〇キロ走ってきた。

グリーンピアの仮設から出て、末広町に行って、末広町の弟のうちから土産を買って、そして一〇六号で盛岡に行って、雫石（しずくいし）に行って、雫石のお友だちのところで遊んで。そして今度はそれから、四六号線戻ってきて。途

中に県道一六号線を右行って入っていくところがあるのね。そこを入っていく、ずっとね。そこ、一六号線を入っていってすぐで。そしてそこの昔は農道（県道一三号線）があったけど、いまりっぱな道路だもんね、花巻まで行く道路。あそこを通りまして矢巾に行って。矢巾のお友だちに寄って、花巻に行って、花巻の息子のところに寄って。北上の息子長男ところに泊まって。

つぎの日は、今度は「母さん、ここまできたもの。水沢まで孫の文化祭行こう」って。うん、それなら水沢まで行くかって言って。水沢から今度は高速さ乗って雫石さきて、今度雫石から家さ帰って。寝るために早く行くからって言って一時ちょっとくらい出てきたのね。そしたら土曜日で、まあみごとに混んでね、盛岡。上田のＮＨＫのとこまで出んに一時間半かかったった。そして途中まで走ってきたら、ここから一〇六号線までおりるよりって、北山から岩泉さ入るところが今度出たでしょう、隧道が。あそこを通って葛巻を通って、そして岩泉まで回ってぐるっと。

昔はトンネルを通ったんだけど、早坂をトンネル通らなくてもいま隧道ができたから、手前のとこ。釜津さおりれば茂市に出るなっていうのはわかってたけど、それよりはこの新しいトンネルをくぐっていって、三つトンネルを通って、ふと見たらば宮古・茂市って書いてるんで、岩泉さ回るより早いかなと思ったけども、なんにも早くない。大川と浅内と茂市のトンネル。トンネルを通って和井内に出て茂市、一〇六号に出て、そしてから帰ってきて。家に帰ってきたら午後七時だった。好きだよね、この母さんね。

人の車に乗るよりは自分で運転して、疲れれば途中で休んでもくるし。人の車に乗って、乗り降りして大変な思いをするよりは、自分で簡単にあがったりおりたりもできるから。だっていま孫さ電話かけたら、「おばあちゃん、ようやく車が決まったよ」って言って。私がお金を出す話をするとだめだからと言うので、お母さんがお金出すって大変なんだから、四月一日からお勤めするっていうからな。給料もらったら毎月、お母さんに五万円ず

つありがとうって言って出せよって言ったら、「はい」って。癖のつけようだもんね。孫は素直で優しいです。

私、思ったんです。あのね、ごちそうつくればもっていくけど。金がないけど。だからいまこれライスカレーつくったの、お皿もってきたって隣の家へ。昨日、一昨日はね、海苔巻きとおいなりさんつくって、もっていってね。おかしいがね。Tさんとこもっていって、それから後、他の人のところもっていって、私が食べて。

おバカさんだけれども、いちおう調理師の免許を一回でもらえたって。自動車の免許も一発でとれたった。そうするとお父さんが、「ええっ」て言う。お父さんたちは一回落ちれば、盛岡の一本木という自動車学校に行く。私は宮古の警察署の二階で試験を受けて、私たちの時代はね、宮古高校の川の反対側にあるラサ工業の公道を三日走って終わりだったからね。

こないだの岩泉がやられたときは、けっこう一〇六号線さんにも水が出たんです（山津波）。この母さん、のんきなお母さんでさ、その岩泉の川津波のときにね、私は岩泉に行ってきたのさ。全然知らないで。小堀内のおばあさんを田老病院に連れていって。いつも通りに終われば、水沢でラーメン食べるっていうのがいつも決まったコースなのね。そしたら電気が止まってるの知らないの。家でテレビも見ないし、新聞も見ないで出ていったから。

電気が切れてるために水沢のラーメン屋さんは休みだ。うーん、それならば小本駅がおいしいっていうから行くかって、行ったの。小本のトンネルが電気がつかないの。それも知らないで行ったの。そしたら小本駅のところにおまわりさんがいて、お母さんたちにどこさ行くって言ったら、おばあちゃんを乗せてたんで、おばあちゃん送っていくと思ったんでない。道の駅までしか行かれませんよって、ああそうですかって言ったの。そしたら、道路の真ん中に車が逆さになったり、あちこちにこう。そんなところを通ってきたの。

そんなまねして、よくお前さんたちは行ってきたがね。知らないって恐ろしい。真っ暗い小本トンネルくぐっ

て行ってきたもん。なんでここらに河原になににもないが、木の根っこばかりがなんだろうっていうような感じで行ってきたもん。それほら、道の駅の裏の老人ホームが流されて人が亡くなったって。あの絵も見てきたもの。昨日通ってきたら、ちゃんと道路が直ってるっていうだけで、周りはそのままだもんね。家にも住んでないようだった。中身がみんな盗られて、建物だけがこうなって、中のものがないっけ。久慈まで行ってきた。

仙台の町も車で私行ったことあるよ。仙台の空港の左側のほうは津波でやられてるからね、それも道路変わったね。泉インターとかなんとかってね。母さんはなんできたって。今日は二七八号線。母さん、そこはどこだぁって。うん、こんなどごだぁ。よくわかって走ってきたねっていうような感覚。私は頭のカーナビだって、いつも先生がしゃべっていた。カーナビがないもん、私には。間違えば戻ればいいことだし。母さん、どこをきたの。うん、二三八号線で。花巻から釜石までくるの、その道路でしょとか、よくわかってるねって、そんな感覚。私の運転で歩きます。ただ、いつになったらやめなきゃいけないかな。七〇歳のときに更新が一回あって、七五歳で今度更新があるね。家でこうしてるよりはさ、出ていって、今日はなにしたの、ああしたの、こうしたのって、それも面白いですよね。そんないたずらぼっちしてます。

去年は山田。大沢の臥龍梅、見に行った。そしてね、山田の道の駅でご飯食うのは大変だから、いい釜石に行くべって、釜石に行って。ここまできたら風の丘に行くべって、風の丘に行って、遠野まで行って、遠野の道の駅に行って。そして今度は、遠野から川井に出るのは山の中だから危ないからだの、一〇六号、盛岡に出て、ぐるっと回って行って。バカなことばかりしてます。好きなことばっかしてやってます。いまもしょっちゅう出かけてますよ。

最近もほぼ三日間も出かけたって。岩泉に二回行って、土曜日に行って金土行ってきて。その前その真ん中の日曜日は（マリンコープ）ＤＯＲＡに行って、買い物におつきあいして。今日は休んでようと思ってたら、午前中は農協の人がきたの。それで、Ａさんと昨日行き会ったの。「Ｔ・Ｎさん、あのね、くるからお相手をして」っ

て。「私、好きなことをする」って、「それでいい、それでいい」って言ったんだもんね。

私はいたずらぼっちばっかり大好きで、綿入れつくったり、こんなの縫ってみたり。ここにきてはあんまりなにもやってないけど、グリーンピアにいたときは、こんな袖なし一〇枚つくったしね。それから、こういう袖がついたのもね、五枚くらい縫ったしね、手編みの毛糸も一〇枚くらいつくったし。

■これからのこと

私はきょうだいいっぱいいたんですけど、生きてるのはね。九人きょうだいだけど三人亡くなって。だって、私もお袋と同じ長生きしようかなと思ったりしてる。お袋は九七歳で亡くなったから。九六歳まで自分で下着を洗ってたからね。

老人ホームに入るには、自分の貯金通帳からなにから移しておかなければならないのかな？　この間だれか言ってだっけ。たとえば私が入るとすれば、私の貯金通帳の残高とか、私の息子が、同居してる息子の通帳との残高とか、それをみんなコピーして出すんだって。へえ変なのって言ったの、私。そんなのないだろうって言ったの。それを実際にそうやるんだって。郵便局と信用金庫と漁業の預金高のコピーを。旦那を（老人ホームに）入れるために、旦那と自分のをコピーしてもらって、それでっていう通知だったよ。へぇって言ったよ。なんだかわかんないけどいろんな人たちがあるよ。

どのくらい財産があるか見てるっていうことなのかね。この間は妹が言ってた。一億円近くあったお金を、わが姪っ子、甥っ子にあげたくなくて、面倒もみてもらえないからっていうことで。そしてワンコがいるために、どこかにかってに入られない。そうしたならば、宮古のどこの病院って言ったっけ。そこまで名前聞かなかったけど、その病院に頼んだそうです。そしたら犬の餌代と、世話代で七万円。そして、おじいさんのおむつ買ったりなんかして、ひと月一〇万くらい支払って。そしたら一年だら一二〇万でしょ。出でも一五〇万。そしてね、甥っ

子がね、おじいちゃんが見えないって心配になって行ったらば五〇〇万がなくなってたと。そしたらその管理する人がパチンコしたり自動車を買ったりしてるんだと。甥っ子、姪っ子がどうだと思って取り返しておいて、他人にやってね、他人に使われたんだ。そんな人もいたって。私は、ないのがいいなと思って。いろんな人がある。はい。息子に、あてにすんなよ。そのかわり、おばあちゃんが死んだときの葬式屋で一〇〇万円あればいいだろってしゃべっている、私は。後はなくてもいい。この母さんバカだからさ。大きい孫たちに、保険、ふたつかけてる。

子どもたちにはもう頼らず、自分でやってるんだろうけど。孫は可愛いから、孫にね、自動車買うんだ。だって去年の一〇月ね、嫁さんに、「車代五〇万は貰えない、だったら、いつ払うの」って言ったら、「ふーん、払えないの」って。だったら孫が車買うのに大変だろうから、いくらか援助するよって言ったの。そしたら、前の払ってないのに、まだって。いい、サラ金から借りたり、銀行から借りたりしたら利息はつくから、ある意味ね、これは祝い金としてもらう銭だからって。そしてね、五〇万やることにした。その用事に午前中、きて行ったの、あのお客さんが。バカだね、俺もね。見れなくなったら見てもらえるかなと思ったり。

いちばん大きい孫は二三。その人たちはお父さんが二一で、母さんが二〇で結婚したし、旦那の子どもがそれぐらい。今日、長男の子どもは、今度初めて四月一日にお勤めだっつーから。世の中でかってな話をするんだよ。保健婦さんがね、「これ母さん」って、「はい、どうかしたんですか」って言った、「息子や嫁の教育をしなさい」って。「なんで?」って言ったら、「年子でもつとお母さんの腹が休む暇がないから、ちゃんと言わないと」。あのね、いくら嫁さんだって、息子だってね。いまはまだ産まないでひっこめろよ。いまちょうどだが、ちょうどいま産めよって言ったって、そんなわけにいかないって言ったの。機械のようにね。一〇年経っても子どもをもてないっていう人もおるしね、もちたくてもね。だからいいのそれで、大変でも。まあ、仕方がないもんね。

（二〇一七年三月二八日）

●用語解説

明治三陸地震　明治二九（一八九六）年六月一五日午後八時頃に発生した地震で、震源は三陸沖、地震の規模はM8・2～8・5と推定されている。この地震にともなう大規模な津波により、三陸沿岸を中心に甚大な被害が発生した。死者約二万二〇〇〇人、流出・全半壊家屋一万戸以上の被害が生じ、わが国の津波災害史上最大の死者数を出した。緩やかな、長く続く地震の揺れが特徴で、現在の震度にすると震度2～震度3程度の小さなものであったが、地震の揺れのわりにひじょうに大きな津波が引き起こされ、人的被害の拡大につながった。

昭和三陸地震　昭和八（一九三三）年三月三日に発生した地震で、地震の規模はM8・1、震源は三陸沖。岩手県宮古市で震度5を観測するなど、広い範囲で揺れを観測した。地震による構造物などの被害は少なかったが、地震後三〇分から六〇分の間に津波が北海道と三陸沿岸を襲い、甚大な被害が生じた。この津波による死者・行方不明者は三〇六四人、とくに岩手県田老町（現岩手県宮古市田老町）では人口の四割強にあたる町民の犠牲者が出た。

チリ地震津波　昭和三五（一九六〇）年五月二三日午前四時過ぎ（日本時間）、南米のチリ南部で発生したM9・5の超巨大地震により、日本の太平洋沿岸で津波被害が生じた災害である。地球の真裏で起きた地震により約一日をかけて太平洋を伝播した津波は、北海道から沖縄に至る太平洋岸全域に被害をもたらし、全国で一三九名の死者が発生した。とりわけ被害が大きかったのは三陸リアス海岸エリアであった。はるか遠くで起きた地震のため日本では強い震動を体感することがないにもかかわらず、不意打ちで襲ってくる津波を遠地津波とよび、三陸海岸で津波高は八メートルを越えた。これを契機にして太平洋津波システムに日本も組み入れられ、遠地津波に備える体制がつくられた。

十勝沖地震　昭和四三（一九六八）年五月一六日午前九時四八分頃に発生した、青森県東方沖を震源とする地震。地震の規模はM7・9で、北海道、青森県、岩手県で震度5の揺れを観測した。五二人が死亡、三三〇人が重軽傷を負ったが、とくに青森県に建物被害と人的被害が集中した。コンクリート造の建築物に大きな被害が発生したため、日本の建築物の耐震基準が大きく見直される契機となった。また東北地方や北海道の太平洋側に津波が襲来し、五メートル前後の津波が押し寄せたが、昭和三陸地震やチリ地震の津波の経験をいかした防潮堤施設等の整備もあり、被害はさほど大きくはなかった。

宮城県沖地震　昭和五三（一九七八）年六月一二日一七時一四分に発生した宮城県沖を震源とする地震。地震の規模はM7・4、仙台市などで最大震度5を観測した。被害の特徴のひとつがブロック塀倒壊の多発で、この地震による死者二八人のうち一八人が犠牲となった。また電気、ガス、水道などのライフラインが大きな被害を受け、一か月にわたり市民生活に大きな影響を与えたことから、都市型災害という言葉が使われるようになった。この地震では家屋倒壊の被害が大きかったため、昭和四三年の十勝沖地震時に引き続き、建築基準法改正により建築物の耐震基準の強化が図られた。

●調査・記録作成者プロフィール

重川希志依（しげかわ・きしえ）

常葉大学大学院環境防災研究科教授。専門分野は防災教育。1995年に発生した阪神・淡路大震災以降、災害エスノグラフィー手法による被災地調査を続ける。専門分野は防災教育。著書に『防災の決め手「災害エスノグラフィー」』(共著・NHK出版)、『新しい人間、新しい社会–復興の物語を再創造する–』(共著・京都大学出版会)などがある。

田中　聡（たなか・さとし）

常葉大学大学院環境防災研究科教授。専門分野は都市防災学。1995年に発生した阪神・淡路大震災以降、さまざまな被災地において災害対応についてエスノグラフィー手法による調査研究を実施。著書に『防災の決め手「災害エスノグラフィー」』(共著・NHK出版)、『災害フィールドワーク論　FENICS　100万人のフィールドワーカーシリーズ5』（共著・古今書院）など。

阿部郁男（あべ・いくお）

常葉大学大学院環境防災研究科教授。専門分野は津波防災。スーパーコンピュータ用システムの研究開発に従事し、2002年からリアルタイム津波予測システムの研究に取り組む。また、東日本大震災発生以前より東北地方でのGPS波浪計による沖合津波観測網の構築に携わり、現在も避難に役立てる情報についての研究を行っている。

●協力・資料提供ほか

・赤沼正清様（元宮古市社会福祉協議会会長）、釜石市危機管理監消防課の皆様に多大なご協力をいただきました。
・宮古市危機管理課、釜石市危機管理監消防課に貴重な資料を提供していただきました。

●参考資料

・宮古市東日本大震災津波浸水図
・東日本大震災　復興支援地図（昭文社）

●取材データ

■釜石市消防団の活動

対象者：消防団Ａさん、Ｂさん
日　時：2016年8月17日 9時～
場　所：岩手県釜石市
実施者：重川希志依、田中聡

対象者：消防団Ｃさん
日　時：2016年8月16日
場　所：岩手県釜石市
実施者：重川希志依、田中聡、阿部郁男

対象者：消防団Ｄさん、Ｅさん
日　時：2016年8月16日
場　所：岩手県釜石市
実施者：重川希志依、田中聡

■田老地区　津波犠牲者のご家族

対象者：世帯Ｔ・Ａ
日　時：2017年3月30日9時30分～11時30分
場　所：Ｔ・Ａさんご自宅
実施者：重川希志依、田中聡、阿部郁男

対象者：世帯Ｔ・Ｂ
日　時：2017年3月29日9時30分～11時30分
場　所：Ｔ・Ｂさんご自宅
実施者：重川希志依、田中聡、阿部郁男

対象者：世帯Ｔ・Ｃ
日　時：2018年8月21日15時15分～17時
場　所：Ｔ・Ｃさんご自宅
実施者：重川希志依、田中聡、阿部郁男

対象者：世帯Ｔ・Ｄ
日　時：2017年3月30日13時30分～15時
場　所：Ｔ・Ｄさんご自宅
実施者：重川希志依、田中聡、阿部郁男

対象者：世帯Ｔ・Ｅ
日　時：2017年3月27日14時～16時
場　所：Ｔ・Ｅさんご自宅
実施者：重川希志依、田中聡、阿部郁男

対象者：世帯Ｔ・Ｆ
日　時：2017年8月21日13時30分～15時30分
場　所：Ｔ・Ｆさんご自宅
実施者：重川希志依、田中聡、阿部郁男

対象者：世帯Ｔ・Ｇ
日　時：2018年8月21日13時45分～14時30分
場　所：Ｔ・Ｇさんご自宅
実施者：重川希志依、田中聡、阿部郁男

対象者：世帯Ｔ・Ｈ
日　時：2018年8月21日9時20分～11時10分
場　所：Ｔ・Ｈさんご自宅
実施者：重川希志依、田中聡、阿部郁男

対象者：世帯Ｔ・Ｉ
日　時：2017年3月29日13時30分～15時
場　所：Ｔ・Ｉさんご自宅
実施者：重川希志依、田中聡、阿部郁男

対象者：世帯Ｔ・Ｊ
日　時：2017年8月21日10時～11時30分
場　所：田老地区三王団地集会所
実施者：重川希志依、田中聡、阿部郁男

対象者：世帯Ｔ・Ｋ
日　時：2017年3月28日9時～11時
場　所：Ｔ・Ｋさんご自宅
実施者：重川希志依、田中聡、阿部郁男

対象者：世帯Ｔ・Ｌ
日　時：2017年8月22日9時30分～11時30分
場　所：Ｔ・Ｌさんご自宅
実施者：重川希志依、田中聡、阿部郁男

対象者：世帯Ｔ・Ｍ
日　時：2018年8月20日14時～15時30分
場　所：Ｔ・Ｍさんご自宅
実施者：重川希志依、田中聡、阿部郁男

対象者：世帯Ｔ・Ｎ
日　時：2017年3月28日13時30分～15時30分
場　所：Ｔ・Ｎさんご自宅
実施者：重川希志依、田中聡、阿部郁男

災害エスノグラフィーシリーズ 32
東日本大震災　津波災害と闘った人々の記録

発行日　2021年 3月 1日　初版第 1 刷
編　者　重川希志依・田中　聡・阿部郁男
発行者　重川希志依
発行所　常葉大学附属社会災害研究センター
〒422-8581　静岡県静岡市駿河区弥生町6-1
電話　054-297-6144

インタビューアー　重川希志依・田中　聡・阿部郁男
編集協力　樋口健一
印刷・製本　有限会社　レイ・プリンティング
©Kishie SHIGEKAWA, Satoshi TANAKA, Ikuo ABE, 2021
ISBN 978-4-908792-30-4

○本書の一部は、以下の助成を受けて作成された。

・2016～2018年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）挑戦的萌芽研究「津波による犠牲者はなぜ発生したのか？質的調査に基くメカニズムの解明（研究代表者：常葉大学 重川希志依）」
・2020年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究(B)(一般)「科学的エビデンスが支える効果的で持続的な災害伝承（研究代表者：東北大学 佐藤翔輔）」